



Title	モンゴル語の派生接尾辞-tu、-tai、-tanに関する研究
Author(s)	村木, 健路
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88122
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

モンゴル語の派生接尾辞 -tu,-tai,-tan に関する研究

言語文化研究科言語社会専攻

村木健路

日本語要旨

本稿は、モンゴル語の派生接尾辞 *-tu*, *-tai*, *-tan* に関する研究である。考察は、以下の順に進める。

- ・当該の派生接尾辞に関する史料を紹介する。(1 章)
- ・「意味」という観点から問題点を整理する。(2 章)
- ・現代モンゴル語における問題点を共時的観点から整理する。(3 章)
- ・13 世紀の『元朝秘史』における *-tu*, *-tai*, *-tan* の間の性と数の呼応の実態を小沢に対する疑義を交えながら検証する。(4 章)
- ・13 世紀の『知恵の鍵』を通して、『元朝秘史』に先行する史料の検証を行う。(5 章)
- ・17 世紀の Лувсанданзан『アルタン・トブチ』と『元朝秘史』との比較考察を試みる。(6 章)
- ・14 世紀の『ムカディマツト・アル・アダブ』を通して、地域による違いを検証する。(7 章)
- ・13 世紀のパスパ文字史料を通して、書かれた文字による違いを検証する。(8 章)
- ・17 世紀の『アルタン・ハーン伝』、18 世紀の『宝徳蔵般若経』と Мэргэн гэгээн『アルタン・トブチ』を通して、13 世紀のモンゴル語から現代モンゴル語への変遷について検証する。(9 章)
- ・モンゴル系周辺言語の概況に触れる。(10 章)

以上の研究を通して、性と数の呼応という現象がモンゴル語の歴史の中で、あるいはモンゴル系周辺言語等と比較して特殊な出来事だったのかどうかを明らかにしつつ、この派生接尾辞の使用頻度および役割の変遷を通時的観点から示す。また、現代であれば共同格の形態は概ね *-tai* であり、これは派生接尾辞の *-tai* と同じ形態であるが、元来の形態は *-luya* であるので共同格の問題についても合わせて触れる。

1. 先行研究

この章では、当該の派生接尾辞に関する史料を紹介する。

2. モンゴル語における派生接尾辞の位置付けと当該の派生接尾辞の意味

この章では、モンゴル語における派生接尾辞の位置付けと当該の派生接尾辞の意味について考察する。

塩谷 (2006) によれば、モンゴル語の語形式は語と語尾から成るとして、語に属する名詞類、動詞類、不変化詞類の相互間で「派生による語形成方法が見られるという特徴」がモン

ゴル語にあるとする。本稿で取り上げる -tu, -tai, -tan は、名詞類から名詞類を作る「出名名詞接尾辞」の一種である。

当該の派生接尾辞の原義は「所属・所有」である。ただし、条件によっては「動作の結果継続」や「性質・状態」を表すこともある。ここで言う条件とは文脈を必要とするものである。単語と単語の組み合わせだけでは、どの意味かを判定できない場合もある。「意味」の問題をめぐって、原義が一つである点、条件次第でそれが変化するという点は、時代に関係なく共通している。通時的変遷が見られるのは、「意味」ではなく「役割」である。

3. 現代モンゴル語における -т と -тай の差異および -тан の状況

当該の派生接尾辞は、「役割」の点では時代ごとに異なる特徴が見られるのであるが、この章では、まず現代モンゴル語における -т と -тай の「役割」の差異および -тан の「役割」について考察する。

現代モンゴル語の -т と -тай は、自由交替可能な例もあるが、原則として -т は前後の名詞を結び付ける力が強く、定型表現を形成することに特化していて、それ以外の場合が -тай であるという「役割」の差異がある。ただし、この「役割」の差異は現代語にのみ当てはまる特徴であって、時代が変われば「役割」の差異も、その内容が異なる。

また、現代モンゴル語では一部の古典的描写を除けば、共同格の形態は -тай である。これに関して、表示する意味が当該の派生接尾辞と近いことから、派生接尾辞の -тай を共同格の一種であるとする見解がある。しかし、再帰所有語尾の接続の可否やその他の指標により、派生接尾辞の -тай と共同格の -тай は本稿では厳密に区別する。

-тан は、現代語では集合名詞を形成する「役割」に特化している。

さらに、文法的な特徴としては、現代モンゴル語では -т は述語の位置には来ない。中世モンゴル語ではそれが見られるので、これは現代語にのみ当てはまる特徴である。

4. 『元朝秘史』における性と数の呼応

中世モンゴル語東方言を代表する 13 世紀の『元朝秘史』では、小沢の言うように -tu, -tai, -tan の間に性と数の呼応が見られる。すなわち、被限定詞もしくは主語の位置に来るのが男性であれば -tu、女性であれば -tai、複数であれば -tan という形態で現れるということなのである。筆者も検証したところ、「人」に関しては、95%この原則が守られている。

むしろ、問題にしなければならないのは、「人以外」に関してこの派生接尾辞がどのような現れ方をするかである。これについては、「人以外」は文法的に女性扱いされていたとする小沢説に疑義を挟まざるを得ない。小沢の言う通りであるならば、「人以外」は -tai で現れるはずであるが、その多くが -tu で現れるからである。筆者は、「人以外」については、-tu と -tai の間に「役割」の差異がない「自由交替可能な状態」であったと見る。ただし、

「人以外」であっても単数と複数の違いは派生接尾辞の現れ方に如実に反映されていて、複数であれば *-tan* の形態で現れている。

また、なぜ当該の派生接尾辞に性と数の呼応という現象が生じたのかも重要な問題である。『元朝秘史』のモンゴル語では、小沢（1979）によると優位者か劣位者かで動詞語尾に違いがあったとされている。さらに、同じく小沢によると男性か女性か複数かによる動詞語尾変化の体系も立証されている。そのようなことが出来る背後にあったのが、国の統一ではなかったかと筆者は推測する。すなわち、国を整える過程において言葉も身分関係や男女で使い分けようという流れが起こり、そうした風潮の中から、男性であれば *-tu*、女性であれば *-tai* ということが、いわゆる「男言葉、女言葉」のようなものではなく、文法的拘束事項として定まったのではあるまいか。

なお、共同格の形態は *-luya* のみである。現代モンゴル語の *-tai* では全く現れない。

5. 『知恵の鍵』における当該の派生接尾辞

この章では、『元朝秘史』に先行する史料の状況を考察する。『知恵の鍵』は、チンギス・ハーンによって書かれたとされている。

『元朝秘史』に先行する史料はそもそも少なく、当該の派生接尾辞に関して得られるデータも僅かなので、明確にその体系を確立させるのは難しいのであるが、その僅かなデータから推測するなら、「人」「人以外」に関わらず、*-tu* と *-tai* の間に「役割」の差がない「自由交替可能」な状態であったと見られるのである。重要なのは、この「自由交替可能な状態」が『元朝秘史』の「人以外」に受け継がれているということである。視点を変えると、「自由交替可能な状態」で存在していた *-tu* と *-tai* に対して、『元朝秘史』モンゴル語で「*-tu* は男性、*-tai* は女性」という「役割」が新たに付されたと言えるのである。

なお、共同格の形態は『元朝秘史』同様 *-luya* のみである。

6. Лy.『アルタン・トブチ』における当該の派生接尾辞と共同格

17世紀のЛy.『アルタン・トブチ』は、かなりの部分で『元朝秘史』を踏襲しているので、この章では両者の比較考察を行う。

『元朝秘史』で顕著に見られる当該の派生接尾辞の性と数による呼応は、小沢は「15～16世紀の蒙古語では消失」したとしている。しかし、Лy.『アルタン・トブチ』からは、必ずしも呼応の「消失」というデータは得られず、むしろまだそれが「保持」されていたと見るほうが適切である。Лy.『アルタン・トブチ』が『元朝秘史』の体系を継承することに専念していて、17世紀当時の体系を全く無視して書かれたからであるという見方もできなくはないが、筆者はここに書き言葉と話し言葉の乖離時期を想定したい。すなわち、話し言葉の体系では小沢の言うように呼応は「消失」した可能性が高いが、書き言葉の体系ではそれが一定

期間「保持」されていたという見方もできるのではないか。ただし、当時の話し言葉の実情が分かる史料はないので、推定の域は出ない。

なお、共同格の形態は *-luya* であるが、現代語の共同格と同じ *-tai* が僅かに見られる。

7. 『ムカディマツト・アル・アダブ』における当該の派生接尾辞と共同格

この章では、中世モンゴル語西方言の状況を見る。

中世モンゴル語西方言においては、当該の派生接尾辞は *-tu* と *-tan* の二項の体系であって、*-tai* の形態は現れないという特徴がある。つまり、単数か複数かの別は派生接尾辞の形態に反映されるが、男女の別は反映されないのである。これについては、最も古い状態であると筆者が推定する *-tu* と *-tai* が「役割」の差がない「自由交替可能な状態」から、「役割」に差異がないのなら、二つあるのは経済的ではないという力が働いて *-tai* が消失したと判断する。

なお、共同格の形態は *-luya* のみである。

8. パスパ文字史料における当該の派生接尾辞と共同格

この章では、中世モンゴル語東方言であっても、『元朝秘史』や Лы. 『アルタン・トブチ』とは異なる文字、すなわちパスパ文字で書かれた史料の状況を見る。

パスパ文字史料では、当該の派生接尾辞は *-tu* と *-tan* の二項の体系であって、*-tai* の形態は現れない。単数か複数かの別は派生接尾辞の形態に反映されている。これは、一見したところ西方言と同じ特徴であるように感じられる。しかし、*-tai* が現れない事情は全く異なる。『元朝秘史』と同時代かつ同地域である以上、*-tai* が存在していたことは間違いないのであって、意図的に *-tai* を避けて *-tu* のみを使用したと考えられる。

なお、共同格はいずれの形態も現れないので、状況を確認することができない。

9. その他の史料における当該の派生接尾辞と共同格

この章では、『元朝秘史』のモンゴル語から現代語への変遷を検証するために、17~18 世紀の史料を見る。

『アルタン・ハーン伝』

ダユン・キヤ (Dayun kiya) によって書かれたとされる 17 世紀のこの史料では、いくつかの点で現代語に通じる特徴が見られる。

すなわち、性と数の呼応が書き言葉であっても大きく後退しているのである。また、*-tu*

における<述語用法>が大幅に減少していること、-tai においては<述語用法>が増加していること、-tan においては「複数」との呼応関係が弱化している。

ただし、共同格の形態は -luya のみである。

『宝徳蔵般若経』

樋口によれば、必ずしも 18 世紀当時のモンゴル語の実情を反映しておらず、むしろ「仏教蒙古語という方言」として扱ってもいいという前提のもとに、この史料の状況を見る。

仏典では、「人」は男性か女性か区別できない「人」一般についての描写が多いので、データを取って呼応の有無を判定することはできない。また、使用頻度の点では -tu が断然多い。-tai は、ごく僅かに過ぎない。このことから考えられるのは、仏典のように抽象的な事柄を記録するに際しては、-tu のほうが好まれる期間が中世と現代の間にあったのではないかということである。

なお、共同格の形態は -luya のみである。

Мэргэн гэгээн 『アルタン・トブチ』

18 世紀の Мэргэн гэгээн 『アルタン・トブチ』は、17 世紀の Лү 『アルタン・トブチ』とは、同じ題名でも内容が異なる。語彙の異同という次元ではない。したがって、比較考察としてではなく、18 世紀を代表する文献の一つとして、この史料の状況を見る。

Мэргэн гэгээн 『アルタン・トブチ』では、「人」は男女とも現れる。そこからデータを取ると、性による呼応は消失している。その他、概ね『アルタン・ハーン伝』と同様の特徴を有しているが、使用頻度の点で -tai が増加傾向にある点は、この史料に顕著に見られる特徴であり、これも現代語に近づく流れである。

なお、共同格の形態は -luya であるが、現代語の共同格と同じ -tai が僅かに見られる。

10. モンゴル系周辺言語の概況

この章では、モンゴル系周辺言語について、ブリヤート語、カルムイク語、オイラト語、ダグル語、シラ・ユグル語、モンゴオル語互助方言、モンゴオル語民和方言、ドゥンシャン語、カンジャ語、バオアン語を通してその概況を見る。

当該の派生接尾辞に関しては、-tu と -tai の両方を持つのがもっとも多く 5 言語、次いで -tu のみ持つのが 4 言語、-tai のみ持つのが 1 言語であることから、-tu のほうが保持される傾向が強いことが分かる。

共同格に関しては、-la 系列（この章では、-luya を含めてこう呼ぶことにしている）のみ持つのがもっとも多く 5 言語、次いで -la 系列と -tai 系列の両方を持つのが 4 言語、-tai 系

列のみ持つのが1言語であることから、-la 系列のほうが保持される傾向が強いことが分かる。共同格に関して言うなら、ほぼ -tai で現れる現代モンゴル語ハルハ方言は、むしろ少数派であると言える。

11. 結論

以上の考察から、当該の派生接尾辞に関して、

- (1) 『元朝秘史』における「人以外」での現れ方
- (2) 『元朝秘史』以前の状況、『元朝秘史』で性の呼応が発生した要因
- (3) 『元朝秘史』以降の「頻度」の推移
- (4) 『元朝秘史』以降の「役割」の推移
- (5) 現代モンゴル語における「役割」の差異
- (6) モンゴル系周辺言語の概況

などの事柄が明らかになった。これらの詳細については、本文の「結論」に記している。

モンゴル語要旨

Монгол хэлний үг бүтээх -tu,-tai,-tan дагаврын талаарх судалгаа

Би энэ өгүүлэлдээ монгол хэлний -tu,-tai,-tan үг бүтээх дагаврын талаар судална. Тус үг бүтээх дагавар нь *Монголын нууц товчоо*нд хүйс ба тоогоор ялгаж байсан ч энэ үзэгдэл монгол хэлний түүхэн явцын дотор, аль эсвэл өөр Хятад дахь монгол салангид хэлнүүдтэй харьцуулахад өвөрмөц явдал байсныг илэрхийлээд тус тус дагаврын хэрэглэгддэг давталт болон үүргийн өөрчлөлтийн тухай нарийн тодорхой заахыг зорилоо. Харин орчин цагийн монгол хэлэнд хамтрахын тийн ялгалын хэлбэр нь -tai бөгөөд -tai дагавартай адил хэлбэртэй боловч, уг нь -luγa гэж өөр хэлбэртэй байсан болохоор хамтрахын тийн ялгалын асуудал ч дурдах хэрэгтэй.

Нэр үгээс нэр үг бүтээх дагвар -tu,-tai,-tan аль алид харьяалах эзэмших гэдэг цөм утгатай нь цуваа цагийн талаар үзэвч ерөөсөө өөрчлөлтгүй байна. Энэ өгүүлэлдээ юуны өмнө орчин цагийн монгол хэлний талаар нягтлан үзсэн юм. Үүрэг бол орчин цагийн монгол хэлэнд хэлбэр бүр ялгаатай мөн. Өөрөөр хэлбэл -tu бол тодотгуулагчтай нэн хүчтэй залгах учраас тогтмол үг хэллэг бүрэлдүүлэх онцгой үүрэгтэй бөгөөд -tai бол -tu-гаас өөр олон үүрэгтэй болохоор хэрэглэгддэг давталт нь -tu-гаас -tai бол маш идэвхтэй бий. Бас энэ -tu

нь орчин цагийн монгол хэлэнд өгүүбрийн өгүүлэхүүн болохгүй гэж -tai-гаас өөр хэлзүйн онцлогтой. Тэгээд -tan бол хам жинхэнэ нэр бүрэлдүүлэх үүрэгтэй юм.

Зарим багш -tai үг бүтээх дагврыг үг бүтээх дагврын нэг төрөл гэж заагаад жаахан маргаантай магадгүй боловч миний бодлоор бол хэлбэрээ адилхан болвч өөр өөр бүтээвэр гэж үзэх нь зохиж байна.

Тус үг бүтээх дагавар нь дундад зууны *Монголын нууц товчоо*нд хүйс ба тоогоор ялгаж байсны тухай манай улсын Озава багш нэгэнт дэлгэрэнгүй судалсан байна. Түүний судалгаагаас үзэхэд тодотгуулагч аль эсвэл өгүүлэгдэхүүн нь ганц эрэгтэй хүн бол -tu, ганц эмэгтэй хүн бол -tai, олон хүн бол -tan болох гэсэн журамтай байсан гэнэ. Би ч гаргасан дагврыг тоолон лавлаад 95% нь ийм журмаар үзэгдсэн гэж ойлгосон билээ. Тийм учраас үүний тухай асуудалгүй шиг санагдана. Гэвч миний тоолсон 95% гэдэг тоо нь тодотгуулагч аль эсвэл өгүүлэгдэхүүн нь зөвхөн хүн байх бөгөөд хүнээс өөр юм байхад тус үг бүтээх дагавар ямар шинжтэй байсны тухай илүү судлах хэрэгтэй юм.

Үнэнээр бол Озава багш нь хүн бус юмны шинжийн тухай жаахан тайлбарласан ч тэр тайлбар буруу гэж бодогдоно. Хүнээс өөр нь голдоо эм шиг үзэгдсэн гэж бичсэн байна. Гэвч миний уншсанаас үндэслэн тодотгуулагч аль эсвэл өгүүлэгдэхүүн нь хүнээс өөр юм байхад ийм зохицох журамгүй байсан билээ. Өөрөөр хэлвэл -tu, -tai нь үүрэг хамаагүй болон чөлөөтэй солилцож болох шинжтэй байсан гэж үзэх нь дээр. Хэрэглэгддэг давталтын тухай ч Озавагийн санаатай эсрэг дүн авсан юм бөгөөд *Монголын нууц товчоо*нд хүнээс өөр нь -tai-гаас -tu олон гаргах нь тодорхой мөн.

-tu, -tai нь чөлөөтэй солилцож болох шинжтэй байсны талаар миний бодлоор бол *Монголын нууц товчоо*ны өмнө байдалтай төстэй гэж санагдана. Үүний материал маш цөөн учраас батлах нь хэцүү. Харин Оюун түлхүүр уншихад үүнд хүйсийн ялгаа үзэгдэхгүй байна. Чөлөөтэй солилцож болох шинжтэй -tu, -tai байсны дараа *Монголын нууц товчоо*ны үе ганц эрэгтэй хүн бол -tu, ганц эмэгтэй хүн бол -tai гэдэг үүрэг шинээр нэмэгдсэн гэж би таамаглаж байна. Яагаад ийм шиг жаахан төвөгтэй хэлзүйн журам үүссэний тухай бодоход шинээр улс байгуулах явцтай нягт холбоотой байсан шиг санагдана. Учир нь Озава тайлбарлаж байснаас үндэслэн тэр үед ярих хүнийг өөрөөс хүндэтгэх хүн аль эсвэл хүндэтгэхгүй хүн нь үйлийн нөхцөлөө өөрчилсэн гэнэ. Энэ үзэгдэлтэй чухал хамаатай байсан байхаа.

Бас Озава тус журам нь 15~16 -р зууны монгол хэлээр үгүй болсон гэж хэлсэн ч жишээн нь *Монголын нууц товчоо*той ихэнх нь төстэй бичигдсэн 17 -р зууны Лусанданзан *Алтан товч* уншвал үгүй болсон гэж үзэж болохгүй харин ч хэвээр хадгалаж байсан маягтай юм. Энэ номоос авсан дүнгээс нь Озавагийн саналыг дэмжиж болохгүй. Гэтэл ярианы хэлэнд л гээчихсэн магадгүй боловч үүийг нотлож болох материал байхгүй байхаа.

Монголын нууц товчоо гэдэг нь дундад зууны зүүн аялгуу бөгөөд харин

Монгольский Словарь Мукадимат-ал-Адаб гэдэг нь баруун аялгуу бөгөөд энэ толь дээр тус үг бүтээх дагавар нь -tai хэлбэрээр гаргахгүй гэдэг чухал онцлогтой үзэгдэнэ. Хүйсийн ялгаа байгаагүй боловч ганц хүн ганц юм бол -tu, олон хүн олон юм бол -tan гэж ялгаа л байсан билээ. Уг нь баруун аялгуу ч чөлөөтөө солилцож болох шинжтэй -tu,-tai байсны дараа зөвхөн -tai хэлбэр л гээчихсэн гэж би таамаглана.

*Монголын нууц товчоо*той адил 13 -р зуунд бичигдсэн дөрвөлжин бичиг дээр тус үг бүтээх дагвар нь -tai хэлбэрээр гаргахгүй гэдэг нь *Монгольский Словарь Мукадимат-ал-Адаб*тай төстэй онцлогтой үзэгдэх боловч шалтгаан нь ялгаатай гэж бодгдоно. Учир нь 13 -р зууны зүүн аялгуугаар -tai хэлбэр заавал байсан нь тодорхой бөгөөд дөрвөлжин бичигээр юм бичих үед зориуд -tai бус -tu хэрэглэх ёс заншилтай байсан байхаа.

18 -р зуунээс хойш хүйсээр ялгаа ерөөсөө үгүй болсон ч хэрэглэгддэг давталтыг үзэхэд -tai-гаас -tu нь олонтой байдал үргэлжлэнэ. Гэвч -tu өгүүлбрийн өгүүлэхүүн болох нь багасах хандлагатай бас -tan тоогоор зохицох үүрэгтэй хамаагүй болох хандлагатай

Хятад дахь монгол салангид хэлнүүд өөрөөр хэлвэл Буриад, Халимаг, Ойрад, Дагуур, Зүүн ёгор, Монгор Хужу аялгуу, Монгор Минохо аялгуу, Дуншаан, Канжа,Баоан зэрэг 10 хэлнүүдийг үзэхэд янз бүрийн байдалтай. Тус үг бүтээх дагварын талаар -tu,-tai хоёулаа байх нь 10-аас 5, зөвхөн -tu л байх нь 4, зөвхөн -tai л байх нь 1 юм.Тэгээд хамтрахын тийн ялгалын талаар зөвхөн -la л байх нь 10-аас 5,-la,-tai хоёулаа байх нь 4, зөвхөн -tai л байх нь 1 юм. Үүнийг үзвэл хамтрахын тийн ялгалын тухай гэвэл голдуу -tai л болсон орчин цагийн монгол хэлний халхын аялгуу бол маш өвөрмөц байдалтай гэж мэдэгдэнэ.

Бид энэ өгүүлэлдээ тус үг бүтээх дагварын талаар янз бүр илэрхийлсэн билээ. Үүнд

- (1) *Монголын нууц товчоо*нд хүн бус юмны шинж
- (2) *Монголын нууц товчоо*ны өмнөх байдал,
*Монголын нууц товчоо*нд хүйсийн ялгаа үүссэн учир
- (3) Хэрэглэгддэг давталт нь өөрчлөгдөх явц
- (4) Үүрэг нь өөрчлөгдөх явц
- (5) Орчин цагийн монгол хэлэн дэх үүргийн ялгаа
- (6) Хятад дахь монгол салангид хэлнүүдийн байдал

目次

はじめに	1
1. 先行研究	2
2. モンゴル語における派生接尾辞の位置付けと当該の派生接尾辞の意味	3
2.1 モンゴル語における派生接尾辞の位置付け	3
2.2 当該の派生接尾辞の意味	4
2.2.1 「否定」の意味をめぐって欠性接尾辞 -гүй との関連性	10
2.2.2 「所有」の意味をめぐって「存在」を表す байна との関連性	12
2.2.3 「所属」の意味をめぐって属格 -ын との関連性	14
3. 現代モンゴル語における -т と -тай の差異および -тан の状況	18
3.1 派生接尾辞 -т と派生接尾辞 -тай の差異	19
3.2 派生接尾辞 -тай と共同格 -тай の差異	23
3.3 派生接尾辞 -тан の状況	27
4. 『元朝秘史』における性と数の呼応	29
4.1 中世モンゴル語の動詞語尾（終止語尾）と形動詞語尾（連体語尾）	29
4.2 小沢の見解とそれに対する疑義	33
4.3 性と数に関する再考	42
4.3.1 「人」	42
4.3.2 「人以外」	44
4.4 『元朝秘史』における当該の派生接尾辞と共同格	49
	＜索引 1＞ 52
5. 『知恵の鍵』における当該の派生接尾辞と共同格	68
	＜索引 2＞ 73
6. Лү. 『アルタン・トブチ』における性と数の呼応	76
6.1 Лү. 『アルタン・トブチ』と『元朝秘史』との比較考察	76
6.1.1 「人」	80
6.1.2 「人以外」	85
6.2 Лү. 『アルタン・トブチ』における当該の派生接尾辞と共同格	88
	＜索引 3＞ 92
7. 『ムカディマット・アル・アダブ』における当該の派生接尾辞と共同格	105
8. パスバ文字史料における当該の派生接尾辞と共同格	110
	＜索引 4＞ 114

9. その他の史料における当該の派生接尾辞と共同格	116
9.1 『アルタン・ハーン伝』	116
	<索引 5> 121
9.2 『宝徳蔵般若経』	139
	<索引 6> 146
9.3 Мэргэн гэгээн『アルタン・トブチ』	151
	<索引 7> 155
10. モンゴル系周辺言語の概況	162
10.1 ブリヤート語	162
10.2 カルムイク語	162
10.3 オイラト語	164
10.4 ダグル語	165
10.5 シラ・ユグル語	166
10.6 モンゴル語互助方言	166
10.7 モンゴル語民和方言	167
10.8 ドウンシャン語	168
10.9 カンジャ語	169
10.10 バオアン語	169
11. 結論	171
おわりに	173
註	174
参考文献	177

附録 『元朝秘史』全編における当該の派生接尾辞一覧	179
巻1	179
巻2	189
巻3	192
巻4	197
巻5	201
巻6	203
巻7	205
巻8	209
巻9	213
巻10	217
巻11	220
巻12	224

はじめに

モンゴル語の派生接尾辞 -tu,-tai,-tan に関して、本稿では以下の順に述べて行く。考察する順序は、あえて時代順とはしていない。

- ・モンゴル語における派生接尾辞の位置付けを示した上で、意味という点からの問題をまず整理する。(2章)

- ・現代モンゴル語における -т と -тай の差異および -тан の状況を確認することで、共時的観点からの問題を整理する。(3章)

- ・13世紀の『元朝秘史』で顕著に見られる性と数の呼応の実態を、小沢に対する疑義を交えながら精査する。(4章)

- ・13世紀の『知恵の鍵』を通して、『元朝秘史』に先行する史料の状況を見る。(5章)

- ・17世紀の Лувсанданзан 『アルタン・トブチ』は、『元朝秘史』と記述が重複する部分が多いので、主に比較考察という観点から取り上げる。(6章)

- ・以上は、中世モンゴル語東方言による史料なので、次いで西方言の状況を見るために14世紀の『ムカディマット・アル・アダブ』を取り上げる。(7章)

- ・ウイグル式モンゴル文字とは異なる文字で書かれた文献の状況を見るために、13世紀のパスパ文字による史料を取り上げる。(8章)

- ・13世紀のモンゴル語と現代モンゴル語との時代的空白を埋めるために、17～18世紀の文献から『アルタン・ハーン伝』、『宝徳蔵般若経』、Мэргэн гэгээн 『アルタン・トブチ』を取り上げる。(9章)

- ・モンゴル系周辺言語の概況に触れる。(10章)

以上の研究を通して、派生接尾辞 -tu,-tai,-tan をめぐる性と数の呼応という現象がモンゴル語の歴史の中で、あるいはモンゴル系周辺言語と比較して特殊なことだったのかどうかを明らかにしつつ、この派生接尾辞の使用頻度および役割の変遷を通時的観点からも示す。また、現代モンゴル語であれば共同格は概ね -tai であり、これは派生接尾辞の -tai と同じ形態であるが、元来の形態は -luya であるので共同格の問題についても合わせて触れる。

【本稿における表記の仕方について】

1) 当該の派生接尾辞は、母音調和による異形態を持つ。

キリル文字では、-тай, -той, -тэй の3つの形態で現れるが、本文での説明の際には -тай の形態で代表させるものとする。また、-тан, -тон, -тэн, -төн の4つの相違については、-тан の形態で代表させるものとする。同様に、ラテン文字転写での -tu,-tü と -tai,-tei および -tan,-ten の相違については、本文での説明の際にはそれぞれ -tu と -tai および -tan の形態で代表させるものとする。

2) 共同格など派生接尾辞以外を扱うときも、母音調和による異形態がある場合は、本文での説明の際に

いずれか一つの形態を代表させて表記する。

3) 各史料の例文の表記方法は、日本語訳も含めて概ねそれぞれの文献に書かれている通り提示するが、筆者により若干変更を加える場合もある。

5) 題目のように、現代モンゴル語とそれ以外の時代をまとめて総括的に述べるときには、-tu,-tai,-tan とラテン文字で代表させる。

1. 先行研究

現代モンゴル語（ハルハ方言）の派生接尾辞の全体像は、塩谷（2006）が『モンゴル語ハルハ方言における派生接尾辞の研究』で詳しく述べている。モンゴル語の文法体系の中の一つとしてこの派生接尾辞にも言及しているのが小沢である。『モンゴル語四週間』（1963）は主に現代モンゴル語について、『蒙古語文語文法講義』（1967）は主に中世モンゴル語について述べている。語学の入門書でも文法事項の一つとして取り上げられているが、そのうち山越（2012）が『詳しくわかるモンゴル語文法』や、谷（2011）が授業用に作成したプリントで述べている派生接尾辞と共同格の見解は、本稿における筆者の見解とは異なるため本文中であえて紹介している。また、モンゴル語母語話者でも多くの学者が自国の言語の文法体系を研究しているが、当該の派生接尾辞について共同格との違いに触れていることから、本稿では Ш.Лувсанвандан（1968）の *Орчин цагийн монгол хэлний бүтэц монгол хэлний үг нөхцөл хоёр нь* を紹介している。

『元朝秘史』の文献に関しては、日本では那珂通世（1907）の『成吉思汗実録』、村上正二（1970～76）の『モンゴル秘史1～3』、小林高四郎（1954）の『元朝秘史の研究』、外国ではドイツのヘーニシュ、ロシアのコージン、フランスのペリオ、ベルギーのモスタルト、モンゴル国では Ц.Дамдинсүрэн らが、小沢自身が「先行研究」として挙げている人たちである。しかし、『元朝秘史』の全貌という点においても、当該の派生接尾辞をめぐる研究においても、小沢がこれらの「先行研究」を凌駕していると考えられるので、本稿ではそれより古い研究に関しては特に取り上げないで、小沢の『元朝秘史全釈（上・中・下）』、『元朝秘史全釈続攷（上・中・下）』（1984～89）並びに『中世蒙古語諸形態の研究』（1979）に依拠することにする。また、『元朝秘史』の語彙に関しては、栗林（2001）も詳細に編纂している。当該の派生接尾辞の問題と無関係ではないと思われる中世モンゴル語の未来形動詞語尾については、橋本（1972）が言及した論文がある。

Лувсанданзан『アルタン・トブチ』に関しても、小沢（1979、1984）による「ロー・アルタン・トブチに関する翻訳二題」などの研究がある。モンゴル国では、Ш.Чоймаа（2006）などの研究がある。Мэргэн гэгээн『アルタン・トブチ』に関しては、本稿では Д.Бүрнээ（2014）らによるテキストに依拠する。

中世モンゴル語西方言の状況を知ることができる史料として貴重な『ムカディマツト・ア

ル・アダブ』の編纂に関しては、N.Poppe (1938) の業績によるところが大きい。

パスパ文字で書かれた史料の状況に関しても、N.Poppe (1957) が *The Mongolian Monuments in hP'ags-pa Script* を編纂している。

18 世紀の『アルタン・ハーン伝』に関しては、吉田順一 (1988) が全訳と詳細な考察を行っている。同時代の仏典におけるモンゴル語に関しては、樋口康一 (1990) が『宝徳蔵般若経』の全訳と詳細な考察を行っている。

本稿は、文学的見地から述べるものではないが、文学史上の位置付けも適宜付している。その際、参考になっているのが Ц. Буянзая (2013) による文学史である。また、現代モンゴル語に関しては様々な分野から引用してそれらを比較しても顕著な違いは見られないので、むしろ一つの文学作品を目安として据えて進めたほうがよいと考え、Б.Сарантуя (2013) の小説をそれに当てている。これは、『元朝秘史』と時代が重複するところがある歴史小説であるが現代語に訳したものではなく、したがって『元朝秘史』の文章との比較考察を目的とするものではない。

モンゴル系周辺言語の概況については、塩谷 (1992) が「中国領内の蒙古系孤立的諸言語における接尾辞一覧・蒙古文語索引」で述べている。また、N.Poppe (1955) の *Introduction to Mongolian Comparative Studies* や、『言語学大辞典』(1988) から、これらの言語の状況が知られる。言語別に見ても、辞書や語彙集の類が出版されている。ブリヤート語は、N.Poppe (1960) による文法書がある。カルムイク語は Ramstedt.G.J (1935) が辞書を出している。オイラト文語はオチルバト・サンボードルジ、橋本勝 (2005) が概説書を出している。ダグル (達斡爾) 語は恩和巴圖 (1984)、Samuel E.Martin (1960)、シラ・ユグル (東部裕固) 語は保朝魯 (1985、1991)、モンゴオル (土族) 語互助方言は照那斯図 (1981)、哈斯巴特爾 (1986) が、それぞれ語彙集の類を出している。民和方言については、塩谷・何菊紅 (2018) が文法書を出している。ドゥンシャン (東郷) 語は、布和 (1983,1988) が語彙集を出している。カンジャ (康家) 語は斯欽朝克圖 (1999) による研究がある。バオアン (保安) 語は布和 (1982)、陳乃雄 (1987) がそれぞれ語彙集を出している。

2. モンゴル語における派生接尾辞の位置付けと当該の派生接尾辞の意味

この章では、まずモンゴル語における派生接尾辞全体の位置付けを確認する。それから、当該の派生接尾辞 -tu,-tai,-tan に関して、意味という観点から考察する。2 章と 3 章では主に現代語の例を用いるが、このように本稿で現代語または現代モンゴル語と言うときにはモンゴル語ハルハ方言を指すものとする。また、2 章と 3 章で現代モンゴル語の用例として採っているのは、一部を除いて前述した Б.Сарантуя (2013) の *Сорхугтани* という小説からである。

2.1 モンゴル語における派生接尾辞の位置付け

モンゴル語の派生接尾辞については、語形式の内部構造と合わせて塩谷（2006）¹⁾ が詳細に記している。それによると、モンゴル語の語形式は、

語	（独立形式）	名詞類、動詞類、不変化詞類
語尾	（従属形式）	名詞類語尾、動詞類語尾

から成ると記している。さらに、塩谷によると名詞類、動詞類、不変化詞類の相互間で「派生による語形成方法が見られるという特徴」がモンゴル語にあるとした上で、派生接尾辞を以下のように5種類に区分している。

1. 名詞類から名詞類を作る 出名名詞接尾辞（5 2）
2. 動詞類から名詞類を作る 出動名詞接尾辞（5 5）
3. 名詞類から動詞類を作る 出名動詞接尾辞（1 7）
4. 動詞類から動詞類を作る 出動動詞接尾辞（1 4）
5. 不変化詞類から動詞類を作る 出小動詞接尾辞（1 4）

（計 152）

（ ）内の数字は、塩谷による当該の接尾辞の数である

本稿でこれから扱う -tu, -tai, -tan は、1 の名詞類から名詞類を作る出名名詞接尾辞の一種（形態としては三形態）である。

2.2 当該の派生接尾辞の意味

派生接尾辞における「意味」とは、ある語幹から新たな語幹を派生する際に関与する形態素の表示する意味のことを指す。一方、語尾における「意味」とは文法的意味のことを指す。形式の上では両方とも語の後ろに接続するが、有する「意味」のあり方の点では、派生接尾辞と語尾とは異なるのである。したがって、ここで行う意味考察というのは、三形態それぞれが表示する意味の差異のことを言っているのではない。これらを同一の意味を有する三つの異なる形態素と見なした上で、この派生接尾辞が原義を一にしながら条件により意味が拡張されるという「一義性と多義性」を備えていることを詳しく見るのである。その後、-тай の「否定」の意味を表す欠性接尾辞 -гүй との関連性、「存在」を表す動詞 байна との関連性、属格 -ын との関連性を扱う。

小沢（1963）²⁾ は、現代語の -тай については「…をもつ、…を有する、…にある」の意味を示す形容詞を作るとする一方で、「意味の広い接尾辞で適宜に訳さなければならない」と記している。また、-т については「-тай と大体同じ意味を表す」と記している。中世モンゴル語に関しても小沢（1997）³⁾ は、-tai を《（～をもつ（もの）、～を有する（もの））》を意味する実詞を作るとする一方で、「非常に用途の広い接尾辞」と記している。ここから、小沢が形態的には異なる二つの派生接尾辞の間の意味の差異を認めていないこと、中世モ

ソゴル語と現代語の間の意味の推移を認めていないことが分かる。塩谷（2006）⁴⁾ は、現代語の *-тай* は「所属・所有を表し、《～のある、～を持つ》という意味の形容詞を形成する」、*-т* は「所属・所有を表し、《～のある、～を持つ》という意味の形容詞を形成する」と同じ説明を施しており、やはり形態の異なる二つの派生接尾辞の間に意味の差異は認めていないことが分かる。両者の見解から、この派生接尾辞の意味そのもの、すなわち抽出される原義という点では共時的に見て、*-tu, -tai, -tan* 相互の間に差異はなく、かつ通時的な変遷もないことが知られる。共時的にも差異があるのは、意味ではなく役割なのである。ちなみに、役割には通時的にも顕著な差異が見られるのであるが、それは4章以降で詳しく述べることになる。

さて、小沢と塩谷の両者で意味の見解に違いが見られるのは、小沢が「意味の広さ」に着目しているのに対して（ただし、どのように広いのか具体的な分析は試みていない）、塩谷はその点には特に言及していない点である。一見したところでは、意味を広く多義的に捉えようとする小沢と、狭く一義的に捉えようとする塩谷とでは正反対の見方であるようにも感じられるが、両見解とも当該の派生接尾辞の本質と判断することができるのである。すなわち、原義は塩谷の言う通り《～のある、～を持つ》の一義性に縮約されるが、小沢の言う通り状況に応じて訳し分けなければならない多義性も有しているのである。2章では一義性と多義性の両方を兼ね備えているという立場からこの派生接尾辞の意味を考察する。

小沢は、*-тай* の用法として以下のような例を挙げている。

нөлөө	影響	→	нөлөөтэй	影響のある
шим	液汁	→	шимтэй	汁気のある
дээл	衣服	→	дээлтэй	衣服を着た
аяга	碗	→	аягатай цай	碗に入った茶
морь	馬	→	морьтой хүн	馬に乗った人

一方で、塩谷が *-тай* の用法として挙げているのは以下のような例である。

ашигтай	利益のある、有益な（<ашиг 利益）
аюултай	危険な（<аюул 危険）
эрдэмтэй	知識、学識のある（<эрдэм 知識、学識）
ухаантай	賢明な（<ухаан 知性）
гунигтай	悲しい（<гуниг 悲しみ）
зоригтой	勇敢な（<зориг 勇氣）
амттай	おいしい（<амт 味）
хүчтэй	力のある、強力な（<хүч 力）
сонирхолтой	面白い（<сонирхол 興味）
дуртай	好きな（<дур 好み）
завтай	暇な（<зав 暇）

ここで、小沢が「適宜に訳さなければならない」と指摘しながらも、詳細には述べていな

いその「訳し方」について検証する。私見によれば、当該の派生接尾辞を日本語に訳出する際には、次の三つの段階があるように感じられる。

- | | | |
|-----|--------------------|---------|
| I | ～のある、～を持つ（原義） | 所属・所有 |
| II | 形容詞一語で訳したほうが分かりやすい | 性質・状態 |
| III | 動詞を介在させたほうが分かりやすい | 動作の結果継続 |

もちろん、これらの段階は厳密に分けられるものではなく、どちらとも取れる場合もあることを前提に述べると、たとえば、上で *дээлтэй* や *морьтой* の例はIIIの動作の結果継続であるから「衣服を着た」や「馬に乗った」のように、動詞を介在させたほうが分かりやすい。*нөлөөтэй* や *эрдэмтэй* はIの所属・所有であるから、「影響のある」や「知識、学識のある」のように、原義の「～のある」を用いて訳したほうが分かりやすい。*зоригтой*（勇敢な）や *амттай*（おいしい）はIIの性質・状態であるから、動詞を介在させたほうが分かりやすい。これを見ると、派生接尾辞の前にある語が形容詞的であれば、*-тай* はその前の形容詞にあたかも吸収されてしまい「語幹＋派生接尾辞」を形容詞一語と訳すほうが、日本語としては自然となるのである。一方、派生接尾辞の前にある語が名詞的であれば、*-тай* の意味は原義であるところの《～のある、～を持つ》と訳すほうが自然となる。それが、文脈によっては動詞を介在させたほうが自然な訳となることもあるのである。なお、モンゴル語は名詞と形容詞の形態上の区別がない言語であって、上記の語の分類においても塩谷は「名詞類」という区分としている。筆者が「形容詞的」と言ったのはモンゴル語の形態的な次元での名詞・形容詞の区分ではなく、日本語感覚によるあくまで意味的な次元で便宜上区分して用いたものである。

小沢は、*морьтой хүн* は常に「馬に乗った人」と訳すべきであって、これを「馬を持っている人」と訳すのは間違いであるという趣旨のことを述べている⁵⁾ が、*морьтой хүн* はいかなる文脈でも「馬に乗った人」という定訳化に対しては異議を挟まざるを得ない。確かにモンゴル語で *морьтой хүн* と言うとき、文脈上その大部分は「馬に乗った人」を表している（*унах*「乗る」～*унасан*「乗った」という動作の結果継続）が、むしろ「馬を持っている」とする（馬に対する動作のない、単なる馬の所有）ほうが適訳である場合もある。たとえば、

- | | |
|----------------------|---------------------|
| Ганц дээлт барилдаач | 一着だけの服を持つ者は相撲を取りたがる |
| Ганц морьт уралдаач | 一頭だけの馬を持つ者は競馬に出たがる |

ということわざ⁶⁾に見られる *морьт*（=*морьтой*）がそうである。同じことは、ことわざ二行目の *дээлт*（=*дээлтэй*）に関しても言えるのであって、「服を着た」を表している（*өмсөх*「着る」～*өмссөн*「着た」という動作の結果継続）のではなく、「服を持つ」とする（服に対する動作のない、単なる所有）ほうがふさわしい。上の例では *дээлт*, *морьт* の後に、それぞれ *хүн*（人）という被限定詞が省略されていると解釈するのであるが、訳し分けは単語どうしの結び付きだけ取り出して機械的に決定できるものではない。どちらの訳が適切か判

断するためには前後の文脈を必要とする。文脈に応じて、まさに「適宜に訳さなければならない」わけである。

以上、意味次元での考察をして来たわけであるが、日本語でどう訳すのがふさわしいかというのは、実は単に日本語側の問題とも言える側面もあるのかもしれない。「(今日の前にはないけれども、家では) 馬を持っている」のと、「(今まさに) 馬に乗っている」のとでは、日本語の意識では明らかに状況が異なっていると認識するから、表現を使い分けるのであるが、モンゴル語の認識では両者が同じだから、同一表現に帰着させていると言えるところがある。

〔モンゴル語〕		〔日本語〕
		馬に乗っている
морьтой	<	
		馬を持っている

「(今日の前にはないけれども、家では) 服を持っている」と「(今まさに) 服を着ている」の関係も同じである。

〔モンゴル語〕		〔日本語〕
		服を着ている
дээлтэй	<	
		服を持っている

言語の背景が違えば、それを同一状況と認識するか否か違ってくるのは当然であり、一義性と多義性と言っても言語の違いによる現象の捉え方の違い、すなわち認知の仕方の相違に帰せられる側面があろう。しかし、単に日本語への訳し方の問題としてこれを処理できないのは、ここに本稿の主題にとって重要な要素が含まれていると考えられるからである。

詳しくは4章で取り上げるが、中世モンゴル語においては動詞語尾でも性と数の呼応が守られていることが小沢によって確認されている。また、形動詞語尾においても、一種の法則が見られることが橋本によって述べられている。このことから、性と数の呼応は元来動詞に接続するとき生じた現象であった蓋然性がある。当該の派生接尾辞は、原義は名詞的な要素に接続することによる所属・所有であるに違いないが、文脈によってはそこに「動詞性」が生じる。морь (馬) は、名詞単独それ一語では「動詞性」を帯びることができないが、モンゴル語では унах (乗る) といった動詞を介在させなくても、派生接尾辞に動詞相当の役割を担わせることができるのである。派生接尾辞は、名詞 (類) と名詞 (類) を結ぶのが本来の文法的機能であるが、意味的には動詞の役割も担う場合があると言えるのである。したがって、まず動詞の領域で発生した性と数の呼応が、意味的に「動詞性」を有するこの派生

接尾辞にも波及したという一つの推測が成り立つのではなかろうか。

単語どうしの結び付きを取り出ただけでは必ずしも定訳化できないのであって、どの訳が適切か決定するためには文脈を必要とするということに関連して、以下では転義の問題についても触れておく。派生接尾辞が接続している語の第一義が名詞的であっても、その語が複数の意味に分かれているときには、どの意味に対して付いているかによって、上記のⅠになるか、Ⅱになるか違いが生じる場合がある。たとえば、モンゴル語の辞書⁷⁾で **толгой** を引くと（日本語訳は筆者による）

- хүн амьтны биеийн эрүү гавал хоёроос бүтэх хүзүүн дээр тогтох эрхтэн
（人間、動物の体の顎と頭蓋骨から成る首の上に据えられている器官）
- тэргүүн, удирдагч（かしら、指導者）
- хүний бодох сэтгэх чадвар（人間の思考能力）

などの意味が載っている。

これを、Д.Бадамдорж（2015）⁸⁾ の **утгын давхраа**（筆者訳「意味層」）で捉えるならば、**толгой** の意味層の **цөм утга**（筆者訳「核の意味」）を為しているのは「器官」の意味である。**толгой** が体の一番上にあることから転じたのが次の「指導者」の意味である。そして、**толгой** の機能に着目して転じたのがその次の「思考能力」の意味である。このとき、より名詞的である「器官」の意味に接続している

арван хоёр толгойт мангас

という例であれば、

12の頭があるマンガス

もしくは

12の頭を持つマンガス

のように、頭が所属する、もしくは、頭を所有するというⅠで訳するのが自然であるが、より形容詞的である「思考能力」の意味に接続している例⁹⁾であれば、

Отгоны охин толгойтой хүүхэд дээ.

という

オトゴンの娘は賢い子なのだ。

のように、一語として性質・状態のⅡで訳するのが自然である。著者は、ここを「頭の良い」と訳しており、もちろんこれも違和感の全くない日本語である。日本語で「頭の良い」と言うときの「頭」は、（頭の形状の良し悪しを話題にすることは、ほぼないであろうから）具体的で形状を有した名詞的な「頭」ではなく、抽象的で形状を有していない形容詞的な「頭」（思考能力）が意識されていることは言うまでもあるまい。

同様のことが **нэр** でも言える。**нэр** の意味は同辞書では、

- хүн амьтанд оноож өгсөн дуудах үг（人、動物に割り当てられた呼び名）
- алдар дуурсгал（有名、名声）

とある。意味層の核を為している前者の「呼び名」の意味では名詞的であるが、外縁にある

後者の「有名、名声」の意味では形容詞的である。それぞれ例を挙げる。名詞的である意味に接続している

Ашидгөмөр, Алчига нэртэй хоёр тогооч, хоёр зуун ерэн улс өгье.

という例であれば、

アシドウトゥムル、アルチガという名を持つ2人の料理人と、290人の民を与えよう。
のように、所属のIで訳するのが自然であるが、形容詞的である意味に接続している

Нэртэй аварга арслангууд байсан.

という例であれば、

有名な横綱や大関たちがいた。

のように、一語として性質・状態のIIで訳するのが自然である。もっとも、日本語では「名のある」というときの「名」の意味は、「割り当てられた呼び名」ではなく、「有名、名声」となることのほうが多いが、これはあくまで日本語の問題である。

ついでに、нэр をめぐって興味深い事実を付け加えておく。中世モンゴル語による『元朝秘史』でも nere (捏⁵列) は頻出するが、「有名な」(II) と形容詞一語で訳するのが適切な箇所は皆無であり、すべて「名を持つ」(I) として現れるのである。ここでは、その例を一つだけ挙げておく。

札答⁵列歹因 可温 土古兀歹 捏⁵列秃 不列額 (1-40)

Jadaradai-yin kü'ün Tügü'üdei neretü büle'ë.

ジャダラダイの子は、トゥグデイという名を持つのであった。

そもそも、『元朝秘史』ではこの nere (捏⁵列) に限らず、当該の派生接尾辞に関しては形容詞一語で訳出するのがふさわしい例は、現代語と比べるとかなり少ない。派生接尾辞の原義は、中世であっても「～のある、～を持つ」という「所属・所有」であって、意味という観点からは時代による推移はないことは、この節の冒頭で述べた通りであり、私見による

- | | | |
|-----|--------------------|---------|
| I | ～のある、～を持つ (原義) | 所属・所有 |
| II | 形容詞一語で訳したほうが分かりやすい | 性質・状態 |
| III | 動詞を介在させたほうが分かりやすい | 動作の結果継続 |

という仕組みも現代語と共通である。しかし、どういう種類の語の意味に接続するか、その頻度という点では中世モンゴル語と現代モンゴル語との間にやや違いがあるように感じられる。すなわち、この派生接尾辞は時代が下がるにつれて具体的な語（より名詞的な意味）だけでなく抽象的な語（より形容詞的な意味）へと、多様に接続するようになったという変遷があったことが伺えるのである。

また、現代語では次のような例文¹⁰⁾ も見受けられる。

Нүгэлтэй сайхан гэр байна. とてもすてきな家がある。

この例では、「語幹+派生接尾辞」を同じ一語でも副詞的に訳するのが日本語としてはふさわ

しい。(これを、*II*と示すことにする)なぜ、名詞的である *нүгэл* (罪) に当該の派生接尾辞が付いた *нүгэлтэй* が「ひどく」という副詞的な意味に転じたのかを考えると、「罪」に対しては「ひどく悪い」という印象を誰もが持つ。この「ひどく悪い」から「悪い」という実質的内容を伴った形容詞的部分が捨象され、「ひどく」という副詞的部分だけが残ったのである。よって、上の例文を *сайхан* を省いて、

* *нүгэлтэй гэр*

とは言いにくい。文法的な問題ではなく、組み合わせとして共起しにくいからである。「罪のある家」とは、どういう状況か想像できない。むろん、*нүгэлтэй* であればすべて「ひどく」と副詞的に定訳化されるわけではない。

буруу нүгэлт явдал 誤った罪のある行い

のように、*нүгэл* の意味層の核である「罪」が保持されている例もある。つまり、

・ *нүгэл* の核の意味は「罪」である。

当該の派生接尾辞を伴うとき、

- ① 核の意味が保持されている場合には「罪のある」(*I*)
- ② 核の意味から受ける印象から実質的内容を伴った形容詞的部分が捨象された場合には、「ひどく」(*II* → *II*)

という仕組みになっているのである。このような現象は、現代モンゴル語では他にも

бузар 汚さ > *бузартай*

- ① 汚さのある (汚い)
- ② ひどく

などで見られる。これは、日本語でも「ゆゆし」という語などでこれと同じことが見られ、決してモンゴル語独特の現象ではない。しかし、中世モンゴル語文献『元朝秘史』などでは *II* → *II* への移行は顕著に見られないことから、モンゴル語ではもっと後の時代になって生じた現象ではないかと考えられる。

2.2.1 「否定」の意味をめぐる欠性接尾辞 *-гүй* との関連性

次に、意味としては *-тай* の否定となる *-гүй* について考察を行う。

小沢は、現代語に関する解説のところでは、動詞の否定形としての用法があることに触れているだけで派生接尾辞としての用法には言及していない。文語に関する解説のところ¹¹⁾では、「《……がない》と存在を否定する」とした上で、以下のような例を挙げている。

usutai gajar 《水がある処、土地》

usu ügei gajar 《水がない処、土地》

neretei kümün 《名のある人》

nere ügei kümün 《名のない人》

一方で、塩谷¹²⁾は「*үгүй (ügei)* 《ない》という語が、先行する名詞語幹と結合力を増す

ことによって一種の接尾辞化したもので、共時的には、現代モンゴル語における欠性接尾辞と言ってもさしつかえない」と捉えた上で、以下のような例を挙げている。

хэрэггүй 必要のない、不必要な (<хэрэг 必要)
ашиггүй 利益のない、無益な (<ашиг 利益)
аюулгүй 危険のない、安全な (<аюул 危険)
чадалгүй 力のない、無力な (<чадал 力)
зориггүй 勇気のない、臆病な (<зориг 勇気)
дургүй 好きでない、嫌いな (<дур 好み)
завгүй 暇のない、忙しい (<зав 暇)

-тай と -гүй は相反する意味を持っているのであるから、「描写の経済性」を度外視するなら、原則として -тай が接続している句や文は -гүй と入れ替えて否定することができる。その場合、原義である I の逆はもちろん

I' ~のない、~を持たない (原義) 非所属・非所有

を表すことになるから、具体的な名詞的語である「水」では、「水がある」に対して「水がない」(非所属)と訳せる。一方、抽象的な語である「危険」では、「危険のない」(非所属)以外に「安全な」(性質・状態)という別な基礎語彙を当てて形容詞一語でも訳すことも可能であり、このとき -гүй は

II' 形容詞一語で訳したほうが分かりやすい (-тай とは反対の) 性質・状態と表せる。

さて、ここで筆者の言う「描写の経済性」とはどういうことを指しているのか説明しておく必要がある。

まず、「所属・所有」の例から見る。

хацар дээрээ мэнгэтэй охин 頬にほくろのある少女
живэр сахалтай тэр 口髭のある彼

のように、「非本来的」なものが身体に付着していることを -тай を用いて描写することは何ら不自然ではないが、わざわざそれが「ない」ことを描写する

хацар дээрээ мэнгэгүй охин 頬にほくろのない少女
живэр сахалгүй тэр 口髭のない彼

は、言う必要性が極めて低く描写としては不経済なのである。

また、「性質・状態」については、前述の аюултай に対する аюулгүй は、-тай と -гүй のどちらでも生産的に描写されるが、たとえば гунигтай (悲しい) に対する гуниггүй (悲しくない) はあまり用いられない。ここにも描写の経済性が働いているのであって、гуниггүй と言ってもいいのかもしれないが、異なる基礎語彙で баяртай (嬉しい) としたほうが自然である。гунигтай の対義語が厳密に баяртай であるのかどうかという問題には深く立ち入らないが、モンゴル語の対義語は、同一語幹における -тай か -гүй によって表す場合と、基礎語彙の違いによって表す場合とがある。

さらに、「動作の結果継続」では、-гүй は

Ⅲ' 動詞を介在させたほうが分かりやすい 動作（が行われていない）の結果継続と説明できるが、

морьтой хүн 馬に乗っている人

に対して、そもそもその「動作が行われていない」ことを描写するのに

морьгүй хүн 馬に乗っていない人

と表現することは考えにくい。「乗っていない」ことを描写する場合には、欠性接尾辞ではなく動詞の否定 унахгүй によって表すほうが自然である。「描写の経済性」とはそう表現することが自然かそうでないかということである。むろん、文法的条件はここには関与しない。

なお、先行する名詞の実質的内容が捨象され派生接尾辞を伴い副詞化する例は

ая 快適さ > аягүй

① 快適さのない（不快な）

② ひどく

のように、-тай だけではなく -гүй でも見られる現象である。しかし、ここでの аятай は

① 快適さのある（快適な）

に限られていて、

② ひどく

には派生しない。

このように、派生接尾辞が接続する名詞の実質的内容を捨象し副詞化させる働きは、-тай に共通しているが、нүгэл や бузар のように、悪いイメージの語に対しては -тай、ая のように良いイメージの語に対しては -гүй が付くときに生じる傾向があるように思われる。

2.2.2 「所有」の意味をめぐって「存在」を表す байна との関連性

当該の派生接尾辞の原義は「～のある、～を持つ」であるが、モンゴル語には「～がある」「～がいる」という「存在」を表す байна という語がある。ここでは、派生接尾辞を用いた文と байна を用いた文との対応関係について触れる。モンゴル語では、所有は当該の派生接尾辞によって表すのが一般的であって、所有者を与位格として代わりに「物」を主語に立てる言い方（日本語で言うなら、「～（人）には～（もの）がある」）という構文は多用されない。この構文が現れるときには相応の文脈を伴っているときであると判断できる。小説の中からその例を示す。

Их Монгол улсын төрийн Хасбуу тамга надад байна.

（主語）（与位格）

大モンゴル国の 碧玉の印璽が 私には あるのだ。

碧玉の印璽は王位継承者のみが所持できる。次期ハーンに誰になるのかという争いが続く中、これを持っている私こそが王座に就くのにふさわしいと主張している場面である。その特殊性を際立たせるために「物」(Хасбуу тамга 碧玉の印璽)を主語にいわば「格上げ」して、「人」は与位格(надад 私には)に下げられていると解釈できる。なお、ここでは「物」と漢字で表記しているが、漢字表記による「物」は、本稿では具体的な形状を有していて視覚的に捉えられる「物」のみを指すことにする。一方、ひらがなで「もの」と表記する場合には抽象的概念を表す語も含んだ「もの」全般を指すことにする。モンゴル語の一般的な所有構文に従うのであれば、「物」の所有は次のように派生接尾辞 -тай を用いて描写されるべきところである。この場合、文中における碧玉の印璽の力点が弱まるのである。

Би Их Монгол улсын төрийн Хасбуу тамгатай.
 (主語) (述語)
 私は 大モンゴル国の碧玉の印璽を持っている。

ただし、上の例で「物」の位置に「人」が来る場合にはやや様相が異なる。

Би эхтэй. ~ Надад эх байна.
 (主語) (述語) (与位格) (主語)
 私は 母がある。 私には 母が ある。

という二つの文のニュアンスの差は、「物」に比べると小さいように感じられる。それは、「人」の場合には両者が対等であって、所有するというニュアンスがそもそも稀薄だからではあるまいか。所有ではないので存在を表す文に変えても、意味の力点が大きく移動しないという心理がモンゴル語にはあるのではないか。ちなみに、この状況を描写するとき、モンゴル語にはドイツ語のように haben (～を持つ) という動詞を用いる Ich habe eine Mutter. を逐語訳したような表現はない。

一方で、抽象的概念を主語とするような

Надад хүсэл мөрөөдөл байна.
 (与位格) (主語)
 私には 希望が ある。

という文で、抽象的概念(хүсэл мөрөөдөл 希望)を主語に立てた「私には希望がある」という下の日本語訳のほうは全く違和感がないが、モンゴル語ではこのような言い方はあまりしないようである。主語を「人」として抽象的概念に派生接尾辞を付して述語とする

Би хүсэл мөрөөдөлтэй.
 (主語) (述語)
 私は 希望を持っている。

のような文型のほうがモンゴル語らしい表現なのである。

以上のことから、モンゴル語における

「人 _____ -派生接尾辞」
 (主語) (述語)

という派生接尾辞を付した典型的な所有の文を、

「人 _____ байна。」
 (与位格) (主語)

に言い換えられるどうかは、

- ・ _____ に入る語が、「人」であれば、意味の力点をほとんど変えないまま言い換えられる。
- ・ _____ に入る語が、具体的な形状を有する「物」であれば、言い換えられるが意味の力点が「人」から「物」に移動する。
- ・ _____ に入る語が、「抽象的概念」等であれば、かなり言い換えにくい。

というモンゴル語独自の階層があると考えられるのである。ただし、これらのことは文法的に拘束されるものではない。

2.2.3 「所属」の意味をめぐって属格 -ын との関連性

次に、所属をめぐる属格との関連性を考察する。形状を有する「物」に派生接尾辞が接続して限定詞となり、かつそのとき被限定詞になっているのも形状を有する「物」であるとき、意志が介在しないのだから当然「所有」より「所属」のニュアンスが濃くなる。このとき、双方の「物」のあり方によって、派生接尾辞と属格の関連性をめぐって、次のような二つの異なる状況が見られる。

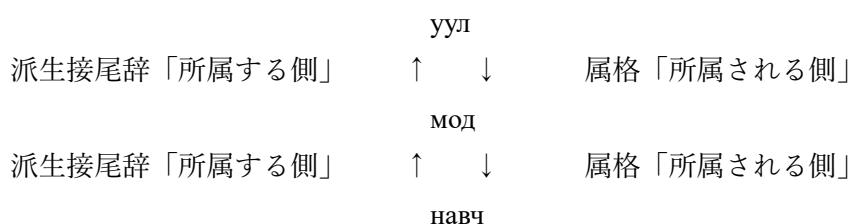
物
 ↑
 物 物 ⇔ 物

この矢印が示しているのは所属する方向である。所属する側（矢印の尾の側）に当該の派生接尾辞が接続するのである。通常、所属というのはどちらがどちらに所属しているわけだから、左のように「物」の片側にしか派生接尾辞を付けられないはずであるが、モンゴル語では右のように「物」の両方にそれを付けられる場合がある。

まず、片側にしか派生接尾辞を付けられない上記左の例を挙げる。

Сарны гэрэлд модтой уулын өвөр бараадан
月の光に木の生い茂る 山の斜面が 薄っすらと浮かび上がり、

この модтой уул で、限定詞となって派生接尾辞が接続している мод (木) は、被限定詞 уул (山) の構成要素であって、木が山に所属しているのは明白である。この場合、逆方向に矢印を付けて *уултай мод (*山のある木) とは言えない。ちなみに、所属するか、所属されるかはあくまで相対的であるから、たとえば мод の構成要素である навч (葉) に対しては、навчтай мод (葉のある木) のように言えるわけである。そして、このとき派生接尾辞が付いているのとは逆の語に属格を付けても同一の事柄を描写できるという特徴がある。すなわち、уулын мод (山の木) や модны навч (木の葉) と言えるのである。これは、属格が表示する原義も当該の派生接尾辞が表示する原義も「所属」だからである。異なるのは、派生接尾辞が「所属する側」に付くのにに対して、属格が「所属される側」に付くという点である。つまり、モンゴル語では派生接尾辞と属格は同じ意味を含みながら、次のような逆の関係性になっているのである。



もちろん、同一の事柄と言っても、どちらの表現を用いるかによって自ずと伝えたい力点は変わる。また、属格に付随する派生接尾辞とは異なるニュアンスとして、多くの選択肢の中のそれというニュアンス、前出の мэнгэтэй охин に対する охины мэнгэ (少女のほくろ) なら、(他の誰でもない)「少女の」というニュアンスが付加される。

派生接尾辞と属格とは上の図のようになっているのであるから、*уултай мод とは言えない。これは、属格を付けるべき方向に派生接尾辞を付けているからである。同様に、*модны уул とは言えない。これは、派生接尾辞を付けるべき方向に属格を付けているからである。しかし、派生接尾辞と属格との関連性をめぐっては、次のように原則に当てはまらない例も見受けられる。

Алтан шар өнгөтэй дээлэн дээр цагаан өнгийн ангийн үстэй малгай тавьсан нь
黄金色をしたデールの上に、 白い色の獣の毛で飾られた帽子を置いたのが

содон харагдана.

際立って見える。

この例文で注目しなければならないのは、өнгө(色)の後に続く語が дээл(デール)と ангийн үс (獣の毛) というように、いずれも形状を有する「物」という点では同種であるににもかかわらず、

алтан шар өнгөтэй дээл 派生接尾辞

цагаан өнгийн ангийн үс 属格

の二種類が用いられている点である。しかも、両表現のニュアンスの差はここではほとんどない。つまり、上の二つは

алтан шар өнгийн дээл 属格

цагаан өнгөтэй ангийн үс 派生接尾辞

と入れ換えられるのである。なぜあえて別な言い方をしているのかということを考えると、同一文内における単語の重複を避けるためではなかろうか。派生接尾辞を属格に入れ換えられることもある語としては、他に хэлбэр (形) や нас (年齢) などが挙げられる。前述の модтой уул の場合は、山における木の有無に描写の焦点が置かれているが、派生接尾辞によって前後の語が関連付けられている点は同じでも、нас の場合には必ずしも нас の有無に描写の焦点が置かれているわけではなく、どの程度の нас を有しているのか、何歳なのかが重視されているのである。言い換えれば、хэлбэр や нас といった語は具体的な下位概念を包括する抽象的な上位概念に相当する語であって、下位概念である程度や量のほうに力点があるのである。このときには、たとえば「十歳の人」と言うのに

арван настай хүн 派生接尾辞

арван насны хүн 属格

という両方の言い方が可能なのである。後述する『元朝秘史』に、harbantai を「十歳」の意味で用いている箇所があるが、それは нас (nasu) という語に力点が置かれていないからである。前述の модтой уул では、мод を省略したら描写として成立しない。

ただし、-тай が接続していれば逆の意味を -гүй で表せるという原則に反して、程度や量のほうに力点がある хорин настай хүн のタイプの表現ではそれができない。つまり、

*хорин насгүй хүн

とは言えないのである。なお、単に

настай хүн

と言った場合の нас は、意味層の核を為す「年齢」の意味ではなく「高齢な」という意味に対して、派生接尾辞が接続していると考えられる。この場合は、нас そのものに力点が置かれているのである。

次に前図の右の例に該当する例を挙げる。現代小説で、устай хавчиг (水の入った木の器) という表現が確認される。一方、小沢の辞書¹³⁾ には、хавчигтай ус (木の器に入った水) と

いう用例が載っている。つまり、どちらでも言えることを示唆している。このように、「物」と「物」が、「器」と「中身」の関係にあるときには、いずれの側にもこの派生接尾辞が付けられるのである。**-тай** をどちらにも接続できる反面、属格は両方とも付けられない。また、否定の **-гүй** は「中身」の側には付けられるが、「器」の側には付けられないのも特徴的である。**усгүй хавчиг** は「水の入っていない木の器」を意味するが、**хавчиггүй ус** とは言えないのである。さて、**устай хавчиг** と言っても、**хавчигтай ус** と言っても指し示されている客観的真実には変わらない。言い換えれば、水の量の多い少ない、あるいは器の大きい小さいは、どちらに **-тай** を付けるかの判断に決定的な影響を及ぼすものではない。同じ事実を見ても、発話者によってどちらに **-тай** を付けるか異なるかもしれないである。前述の **уул, мод, навч** における「所属する」「所属される」の関係は自明であり、逆の側に派生接尾辞がつけられることはあり得ないが、**ус** と **хавчиг** の例では何が派生接尾辞の基準になっているかということ、発話者が「器」と「中身」のいずれに意味の力点を置くかによると考えられる。つまり、あくまで発話者の主観により、意味の力点が軽いと判断した側にこの派生接尾辞が付けられるのである。「器」と「中身」のどちらの側に **-тай** が付くのか、発話者主観ということに関連して両派生接尾辞の興味深い交替が確認できる例文がある。

Фатима болор лонхтой усан үзмийн дарсыг алтан хундаганд хийн Дөргөнө
хатанд барихад тэрбээр тамшаалан амсах зуур исгэлэн амт нь аманд дүүрэн
бага зэрэг ярвайн залгиж байгаа харагдана. Тэр усан үзмийн дарстай хундагыг
Фатиманд өгөнгөө

ファティマは、水晶の瓶に入ったぶどう酒を金杯に移し、トラキナ王妃に献上したところ、王妃はちょっと口を付けただけで酸っぱい味が口中に満ち、少し顔をしかめているのが見られた。そのぶどう酒の入った杯をファティマに返すと、

この文の前半では、**болор лонхтой усан үзмийн дарс**（水晶の瓶に入ったぶどう酒）と「器」に **-тай** が付いているのに対して、後半では、**усан үзмийн дарстай хундага**（ぶどう酒の入った杯）と「中身」にそれが付いているのが分かる。文脈を辿ってみると、最初王妃に献上したかったのは金杯よりもぶどう酒である。つまり、この段階では意味の力点が「中身」に置かれているから **-тай** は「器」の側に付いている。ところが、そのぶどう酒はあまりおいしくなく返されることになった。返す段階では意味の力点が「器」に移っているから **-тай** は「中身」の側に付いているのである。もっとも、「器」と「中身」の関係では、双方どちらに **-тай** が接続されるとはいえ、頻度の点から捉えた場合「器」側に付くことのほうが多い。それは、通常の描写では入れている「器」より入っている「中身」のほうに意味の力点が置かれるからであろう。また、このような

物 ⇔ 物

に相当する例は『元朝秘史』やそれ以外の文献でも確認できることから、現代語に限られた用法でないことが知られる。

3. 現代モンゴル語における -т と -тай の差異および -тан の状況

後述する『元朝秘史』では、特に被限定詞もしくは主語の位置に来るのが「人」のときには、-tu は男性、-tai は女性という生物上の性による弁別が明瞭である。しかし、現代モンゴル語の -т と -тай の間には、そのような性差に基づく弁別は完全に消失している。その代わり、中世モンゴル語にはなかった弁別が見られる。そこで、時代的には順序が逆になるが、現代語の -т と -тай の役割の差異を先に確認しておきたい。

現代語の -т と -тай の差異をめぐっては、たとえば谷 (2011) ¹⁴⁾ は

-т ↔ 派生接尾辞

-тай ↔ 共同格

というように、接尾辞であるか格であるかは形態によって完全に1対1に対応していると解釈しているようである。そして、自らが派生接尾辞と見なす -т には「～付きの」「～のある～」という意味をあて、以下のような用例を挙げている。(日本語訳も、谷による)

нэр	名前	>	нэрт	有名な(名・名声のある)
өнгө	色	>	өнгөт	色付きの、カラーの
зураг	絵	>	зурагт	絵付きの、テレビ
тоо	数	>	тоот	数付きの、～番の

これらの -т が派生接尾辞であることに関しては問題ないのであるが、実際には -тай にも派生接尾辞としての用法があることは明白である。つまり、「現代モンゴル語の共同格の形態は -тай である」と言うのは妥当であるが、「-тай の形態であれば、すべて共同格である」とは言えないのであって、

-т → 派生接尾辞

-тай → 派生接尾辞、共同格

と見るべきである。すなわち、対応としては

	派生接尾辞	共同格
-т	+	—
-тай	+	+

→ 2

↓

1

となっているのであるから、+どうし(現れるものどうし)の差異として、

1. 派生接尾辞 -т と派生接尾辞-тай の差異

2. 派生接尾辞 -тай と共同格 -тай の差異

という二つの側面から差異を見ておく必要があるのである。。

さらに、-тан の状況についてもこの章で見しておく。

3.1 派生接尾辞 -т と派生接尾辞 -тай の差異

当該の派生接尾辞に関して、表示する意味という観点からは、-т と -тай の間（-тан も意味は同じである）に差異はない。したがって、これから述べる差異とは意味のことを指しているのではない。用法や役割に関してはいくつかの点では両形態の間に差異が見られるので、それについて整理するのである。。

第一に用法の点では、-тай が限定詞としても、述語として用いることができるのに対して、-т は現代語では「原則として限定詞に限られており、述語としては全く用いられないという特徴をもつ」(塩谷)¹⁵⁾のである。まず、-тай が限定詞としても、述語として用いることができるのを確認する。限定詞として用いられている例には、次のような文がある。

Эхтэй хүн үхдэггүй.
(限定詞)
母のある 子は 死なないのだ。

一方、-тай が述語として用いられている例には、次のような文がある。

Хүлэгү найман настай.
(述語)
フレグは（八つの歳を持つ）八歳である。

次に、限定詞として用いられている -т の例を挙げる。

Чи надад өөрийн нутгийн хамгийн сайн наймаачин, итгэлт хүнийг олж өг.
(限定詞)
お前は、私に自分の土地のもっとも優れた商人、信頼のおける 人物を探し出してくれ。

このように、-т は限定詞としては用いられるが、現代モンゴル語では述語の位置に -т は現れないのである。参考までに、『元朝秘史』では -tu が述語の位置にも現れることを、4 章で示す例文を挙げて紹介しておく。

帖_{ᠲᠦᠳᠡ}列 札荅_{ᠵᠠᠳᠠᠷᠠᠳᠠᠢ}刺歹因 可温 土古尤歹 捏_{ᠨᠡᠷᠡᠳᠦ}列秃 不列額 (1-40)

tede Jadaradai-yin kö'ün Tügü'üdei neretü büle'ē.

(述語)

そのチャダラダイの子は、トウグウデイという名を持つのであった。

上のような文末を現代モンゴル語の文で нэрт билээ. とは言えない。現代語で表すなら、нэртэй билээ. となるべきところである。

第二に役割の点では、現代語では -т でしか言えない例が様々見られる事実は見逃せない。たとえば、

яст_{ᠶᠠᠰᠤᠲᠤ} мэлхий 骨のある蛙→亀

という語がある。「骨のある蛙」は逐語訳となるが、言語上は（母語話者がそのように分析的に捉えることはないのかもしれないが）二つの語から一つの新しい概念が得られている。このように、限定詞 яс と被限定詞 мэлхий の結合度が強まり一語のように固定されてしまうと、-тай では言えなくなる。仮に、ястай мэлхий と表現したら、限定詞と被限定詞の間の結合度が弱まり、逐語訳のようにあたかも蛙における骨の有無が意識されるかのようにになってしまうのである。言い換えれば、-т でしか言えないときには意味としては反対に当たる《～のない》を表す -гүй との対称は意識されていないと言えるのである。同様に、

өргөст_{ӨРГӨСᠲᠤ} хэмх トゲのある瓜→きゅうり

では、-т によって限定詞と被限定詞の結合度が強まり一語となっているわけで、өргөстэй хэмх では、瓜におけるトゲの有無を意識しているかのような描写となる。

日本語では助詞「の」の問題がこれとよく似ているので、参考までに付しておく

鶏の頭

と言ったら、鶏における頭が意識されているが、助詞「の」を省いて音読みで

鶏頭

と言ったら、全く別な概念（ここでは植物名）が抽出される。

цаст_{ЦАСТ} уул 雪のある山→雪山

という語では、必ずしも新しい概念が得られているわけではないが、所謂「雪山」を想定するのであれば、結合度の強い -т でなければならない。цастай уул では、前例同様山における雪の有無に焦点が移ってしまう。もちろん、そこに意味の力点を置く（昨日までは雪がなかったのに、今朝見たら雪景色だったといった文脈）のであれば -тай で言っても全く違和感はない。ただし、цаст уул と言ったら場合には、その対極に цасгүй уул は意識されていないのである。また、

хүчит_{ХҮЧИТ} бөх と хүчтэй_{ХҮЧТЭЙ} бөх

なども両方言える例であるが、ニュアンスはかなり異なると言ってよい。すなわち、前者は所謂「強豪力士」という定型表現であるが、後者はその力士が強いかそうでないかを問題にした上で「強い力士」と言っているのである。したがって、この例でも хүчит бөх の

対極に хүчгүй бөх は意識されていないのである。さらに一つ例を挙げておくと、

хувьсгалт улс 革命国家

の例に見られる抽象的用語も、派生接尾辞の前後の結合度が強いため -тай では言えない。

要するに、定型表現となった語は -т によってのみ表される傾向にある。塩谷は

галт тэрэг 汽車

хайрт хүү 愛息

зэвсэгт хүчин 軍事力

などを -т の例として挙げている。

このことから分かる現代モンゴル語の -т と -тай の用法に関する第二の差異は、

-т は前後の名詞を結び付ける力が強い

-тай は、-т に比べるとその結合度が弱い

とまとめられる。言い換えれば、当該の派生接尾辞とは反対の《～のない》という意味を持つ -гүй との対比が、

-т では意識されていないのに対して

-тай ではそれが意識されている

と言えるのである。さらに、当該の派生接尾辞には「動詞的」意味が内包されていると説明したが、その動詞性は

-т では意識されておらず

-тай では意識されている

と言えるのである。

さて、あくまで日本語の認識を介在させたらどうなるかという前提のもとで、筆者は現代語としての -тай の訳し方に三つの段階を提唱したのであるが、これにもう一つ -т を加えるとしたら、

IV 後の語と合わせて熟語として訳したほうが分かりやすい … 定型表現と定義付けられよう。ただし、これには -тай との互換性がない完全な定型表現と、-тай との互換性を残す不完全な定型表現の二つの段階があるように感じられる。もちろん、厳密に二分できる性質の区分ではないが、上例で言うと

яст мэлхий, хувьсгалт улс, галт тэрэг, зэвсэгт хүчин

は前者に、

цаст уул, хүчит бөх, хайрт хүү

は後者に該当すると言えるだろう。

2章と3章で引用した小説からも他にも例を挙げて補足すると、前者の例としては、

хаант улс 王国

эзэнт түрэн 王国

морьт цэрэг 騎馬

後者の例としては、

гунигт тавилан 悲運

уй гашуут мэдээ 悲報

хадаг уул 岩山

などを挙げることができる

しかし、一方ではそのような役割の差異がほとんどなく -т と -тай 双方自由に交替可能であるかのように用いられている例も同小説上で若干見受けられる。

a) Чи надад өөрийн нутгийн хамгийн сайн наймаачин,

お前は、私に 自分の土地のもっとも優れた商人、

итгэлт хүнийг олж өг.

信頼のおける 人物を探し出してくれ。

b) Цаашлаад хааны санд ирэх олз омгийг нэмэгдүүлэхэд

将来、ハーンの国庫に入る 歳入が増えるときには、

өөрийн итгэлтэй хүн хэрэгтэй.

自分の信用のおける人間が必要だ。

両者を比べると、当該の派生接尾辞の前後には、итгэл (信用)、хүн (人) という共通する単語が入っている。つまり、名詞の条件は変わらないのに派生接尾辞は -т と -тай とに使い分けられているのである。しかし、小説の場面を考慮しても a) は結合度が強く、b) はそれが弱いとは言えない。前章で、өнгө に付くのがなぜ派生接尾辞と属格を使い分けているのかに触れたが、前例と作者が同じであることから、ここでも同様の説明が可能であろう。すなわち、小説上で 10 行程度の間隔で（先に現れるのは、b の文である。言葉を発しているのは同一人物である）一方の派生接尾辞が繰り返されるのを避けようとする作者の語感によると見るのが妥当かと思われる。したがって、上の例で итгэлт хүн と итгэлтэй хүн とを入れ替えてもニュアンスに変化を来たすことはないと言ってよい。同じことは、

ёст хүн, ёстой хүн 道理のある人

についても言える。

さらに、現代語で -т が述語とならない理由としてもう一つ考えられるのが音声的安定感の問題ではあるまいか。たとえば、Д.Нацагдорж (1906～1937) の Миний нутаг で

Салхины үзүүрт найгасан соргог нарийн ногоотой

Саруул талд яралзсан сонин яанзын зэрэглээтэй

Сайн эрс цугласан байц бэрх газартай

Сүлд тахилга улирсан сүмбэр их овоотой

風先に揺れる繊細な新緑あり

広く明るい草原にきらめく珍しき形の蜃気楼あり

義侠の徒の集える地勢険しき地あり

古くから祭祀の行われた須彌のような大きなオボーあり

(日本語訳は岡田和行による)

これらの文末が -т では、声に出して読んだ際リズムの上で安定性に欠ける気がする。派生接尾辞 -тай が述語とならないのには、文末に来ると音節数が不足しているように感じられるのも理由の一つではあるまいか。

3.2 派生接尾辞 -тай と共同格 -тай と差異

共同格 -тай と派生接尾辞 -тай は、形態が同じである。それに加えて、意味の点でも共同格の《～と、～と共に》が、派生接尾辞の《～のある、～を持つ》と似通っている状況があり得るためか、共時的には同一形態素であると理解する立場が一部にはある。この節ではひとまず共時的問題に絞って考えることにする。

前述した谷は、-тай を派生接尾辞とは見ずに共同格の意味の中の一用法と見ており、「形容詞格としての共同格」という独自の用語により説明を試みている。谷の解釈によると、以下の例に現れる -тай はいずれも共同格であるとしている。(日本語訳も、谷による)

Доржтой уулзлаа.	ドルジと会った。
хоёр морьтой хүн	二頭の馬を持つ人
хөх өнгөтэйгээс	青い色のより
Би одоо хичээлтэй.	私は今授業がある。

谷は、所有の意味を表示するのは、派生接尾辞ではなく共同格であると考えているようであるが、筆者の見解では上例で共同格は最初の例だけで、筆者が下線を施した後の三つの例は派生接尾辞である。

しかし、次のような例に現れる -тай は、共同格とも派生接尾辞とも言っていない。

Би кино үзэх дуртай. 私は映画を見るのが好きだ。

Би чамд хайртай. 私は君を愛している。

дуртай にせよ、хайртай にせよ、感情を表す語は日本語では形容詞一語という意識が強いことが分析的説明をしていない理由かもしれないが、筆者の見解ではこれらの語も「名詞(類) + 派生接尾辞」と見なす。そのように分析した上で、

II 形容詞一語で訳したほうが分かりやすい … 性質・状態とするのである。

谷とほぼ同じ立場なのが山越(2012)¹⁶⁾である。山越は、共同格 -тай には二種類の用法があると解釈していて、その第一は、『～と一緒に』『～とともに』という、共同で何かを

行方相手に対して」とあり、これはまさに共同格の典型であって疑義はない。挙げられている例は以下の通りである。(日本語訳も、山越による)

Би Дулмаатай хамт сургуульд сурдаг. 私はドルマーと一緒に学校で勉強しています。

Надтай бөх барилдаач. ぼくと相撲を取って。

Чи хэнтэй үүлзах вэ? 君は誰と会うの。

疑問に思われるのは、用法の第二として挙げている「主体となる人、物が持っている物、その人や物に備わっている性質」とある点である。例として、

Морьтой хүн ирсэн. 馬に乗った人が来た。

Улаан өнгөтэй цэцэг. 赤い色の花。

Би хоёр эгчтэй.

私には二人の姉がいる。

Би Батад хайртай. 私はバトを愛しています。

を掲げているが、筆者の見解では上の四例はすべて派生接尾辞である。

共時的観点からのみ捉えている谷と山越に共通するのは、共同格と派生接尾辞の間の意味の近さ（「人一人」、「人—もの」、「もの—もの」の間の接近性）に惑わされている点である。共同格か派生接尾辞かを区別するためには、表示する意味とは別に客観的な指標が必要なのではなかろうか。

Ш.Лувсанвандан (1968)¹⁷⁾ は、再帰所有語尾の接続の可否をその指標として提示している。

Би Зоригтой барилдлаа. 俺はゾリグと相撲を取った。

という例文では、-тай が共同格なので後に再帰所有語尾 -aa を接続させて

Би Зоригтойгоо барилдлаа。俺は（自分の対戦相手である）ゾリグと相撲を取った。
とすることもできるが、Зориг が人名ではなく「勇敢」という意味であったら、

Би зоригтой барилдлаа。俺は勇敢に（勇氣を持って）戦った。
とは言えても、

* Би зоригтойгоо барилдлаа.

とはできないという主旨のことを述べている。

興味深いのは、モンゴルの学者が *-тай* に関して共同格と派生接尾辞の差異に言及している事実である。あえて注意喚起しているのは、外国人学習者のみならず、モンゴル語母語話者の間にも両者を同一形態素と捉える立場があることを示していると言えるのではないか。筆者も、少なくとも共時的観点からは共同格 *-тай* は派生接尾辞 *-тай* とは別な形態素と見なすのであるが、Ш.Лувсанвандан が説明している再帰所有語尾の接続の可否以外にも、両形態素を区別する指標を提示できるので、それについて簡潔に述べておく。

一つは、派生接尾辞 **-тай** の付いた語は形容詞であるから文の述語を形成できるが、共同格 **-тай** の付いた語は述語にはなれない点である。話し言葉で意図的に後の動詞を省いて言うことはあるかもしれないが、その場合は完全な文ではない。また、共同格であればこれは後に必ず動詞を要求する。これは、共同格が名詞と動詞を結び付ける役割を有しているからであり、同時にこのことは、派生接尾辞には含まれている動詞の意味が、共同格自体にはな

いことを示しているのではあるまいか。派生接尾辞は名詞と名詞を結び付けることができるのに対して、共同格にはその役割はないのである。さらに、派生接尾辞 *-тай* は具体的な人名（固有名詞）の後には付けられないが、共同格 *-тай* は付けられるのである。したがって、この考えに基づくなら *Ш.Лувсанвандан* の例における

Би Зоригтойгоо барилдлаа. 俺はゾリグと相撲を取った。
 の *-тай* は、固有名詞の後に付いているという観点からも共同格なのである。人名の後に接続している *-тай* が派生接尾辞であることはないのである。

共同格と派生接尾辞の差異をまとめると以下のようなになる。

共同格	（区別するための指標）	派生接尾辞
+	再帰所有語尾の接続	—
—	文の述語	+
—	名詞と名詞を結び付ける	+
+	人名の後	—

派生接尾辞としての *-тай* が意味の類似性・接近性から、元々あった共同格 *-тай* から分かれて生じたかのように捉えること自体にも問題がある。というのも、時代的に先に存在していたのは派生接尾辞としての *-tai* であって、共同格としての *-tai* は『元朝秘史』では確認されないからである。『元朝秘史』に現れる共同格の形態は *-luya* のみである。

つまり、*-tai* は通時的にはあくまで、

『元朝秘史』	→	現代語
派生接尾辞のみ		派生接尾辞 共同格

という経緯を辿っているのである。したがって、むしろ派生接尾辞 *-тай* から共同格 *-тай* が生じたと見なければならぬのである。

共同格をめぐるのは小説に次のような興味深い例がある。

Хатан минь чи санаачлан түүн лүгээ адил харш босго.

妃よ、御身が指揮して、あれと同じ宮殿を建てろのだ。

この章で引用している小説は、現代の作家が現代語で書いたものであるが舞台となっているのは中世である。上の文は、*Тулуй*（トゥルイ）が発した言葉である。中世モンゴル語には共同格としての *-tai* は存在していない。中世モンゴル語の共同格の形態は *-luya* であるから、ここでは会話文であることを作者が考慮して当時の形態に準じて *Тулуй* に *түүн*

лүгээと言わせていると考えられる。そのようなことを全く問題にしないで現代語の形態に従うなら、түүн лүгээではなく түүнтэйと書かれるはずである。ほかに、

Батхаан бид хоёр угтаа нэг хүний хоёр нүд лугаа адил гэж санана.
バトゥハーンと私は元々一人の人間の二つの目と同じだと思う。

という文の лугаа も会話文中に現れている。ここも、通常の現代語なら хоёр нүдтэйと書かれるところである。一方で、同作者は地の文では

Энэ амьдралд түүнтэй ахиад хэзээ ч уулзахгүй.
今世では二度とあの人にはもう会えない。

のように -тай の形態を用いている。中世の出来事を現代語で書くにあたって、小説上共同格を会話文なら -луҮа/-lüge、地の文なら -tai と使い分けているのは、共同格の形態としての -луҮа が現代のモンゴル人の頭から完全に消滅したわけではないことを示していると言えよう。

この節の最後に、-гүй についてももう一度触れておく。2.2.1 で述べた -тай とは反対の「～のない」という意味を持つ -гүй についても、谷は「欠如格」、すなわち共同格 -тай の逆の意味を表示する「格」と位置付けており、たとえば、

Би олон найзтай. 私はたくさんの友人を持っている。
における共同格 -тай（本稿の見解では派生接尾辞）に対応する欠如格として

Би найзгүй. 私には友人がいない。
の例を挙げている。

これに対して、前述したように塩谷は「欠性接尾辞」、すなわち接尾辞の一種と見なしている。-гүй は、

- 再帰所有語尾の接続（－）
- 文の述語（＋）
- 名詞と名詞を結び付ける（＋）
- 人名の後（－）

という上図の右側で示した派生接尾辞としての -тай の特徴をすべて備えていることから、格ではなく派生接尾辞と見るのが妥当であると考ええる。

一方、-тай に関しては谷に近い立場を取る山越は -гүй については派生接尾辞であると見なしており、以下のような例を挙げている。

гэрэл	光	→	гэрэлгүй	暗い、顔色の悪い
хэрэг	必要性	→	хэрэггүй	必要ない
амт	味	→	амтгүй	味のない、まずい

筆者も「格」としての -гүй は認めないという立場に立つ。派生接尾辞 -тай に対しては逆の意味を表示する派生接尾辞 -гүй があるが、共同格 -тай の逆の意味を表示する「格」は存在しないのである。

3.3 派生接尾辞 -тан の状況

ここでは、現代語における -тан の状況について触れる。

小沢は、-tu,-tai,-tan を一括してその意味を「《～をもつ、～を有する》」であると解説している。その上で、現代語の -тан について「集合名詞としての意味が強く、本来の複数形としての意味は薄い」としている¹⁸⁾。塩谷は、「《～を有するもの（～のあるもの、～をもつもの）》という意味の集合名詞を形成する」¹⁹⁾としている。つまり、筆者も示す通り表示する意味という観点からは -т,-тай と変わらないのである。-тан の例として、塩谷は以下の語を挙げている。

эрдэмтэн 学者 （<эрдэм 知識、学識）
ажилтан 頭脳労働者 （<ажил 仕事）,
оюутан 学生 （<оюун 知性）
настан 高齢者 （<нас 年齢）

中世モンゴル語に見られる複数の被限定詞もしくは主語に対する呼応としての -tan の機能については4章で述べるのが、現代モンゴル語ではその呼応の役割が失われている。さらに、複数の概念さえも稀薄になって集合名詞化され、あたかもそれが単数名詞であるかのようにつまじえられ、そのため複数であることを表示するには、

эрдэмтэд 学者たち （<эрдэмтэн 学者）
ажилтнууд 頭脳労働者たち （<ажилтан 頭脳労働者）
оюутнууд 学生たち （<оюутан 学生）
настнууд 高齢者たち （<настан 高齢者）

のように、当該の派生接尾辞の後に -нууд などの別な複数形成接尾辞を重ねて接続させて、複数の概念を明らかにする必要性が生じたのである。現代語で見られる多様な複数形成接尾辞のうち -с は後述する『元朝秘史』にも現れる。その一方、-нууд は『元朝秘史』には見られない。つまり、現代語の複数形成接尾辞の中には中世からあったものとそうでないものがあるのである。

また、中世を題材とする現代語の小説には、

морьтон цэргүүд 騎馬隊

のように、中世モンゴル語さながら複数の被限定詞に対して派生接尾辞を呼応させている箇所もあるが、この連語は『元朝秘史』にも見られる表現であって作者自身それを念頭に置いてこういう言い方を選んだと考えられる。同様の例としては、

хишигтэн цэргүүд 宿直兵

өстөн дайснууд 恨みのある敵ども

が挙げられるが、これらも中世のことを現代語で書くに際して中世モンゴル語の呼応体系を意識して書いたと想像できる。複数を意味する被限定詞もしくは主語があるから派生接尾辞の形態を *-тан* で書くということは、現代語の体系にはないので、上例は規則に拘束されたものではなく、『元朝秘史』風の古めかしい感じを出すためのいわば文学上の配慮と言ってよいだろう。しかし、すべてそのような配慮を施しているわけではなく、別な箇所では

Ашидгөмөр, Алчига нэртэй хоёр тогооч
アシドウトゥムル、アルチガという名を持つ二人の料理人

のように、「二人」という複数を示す被限定詞に対しても、現代語でもっとも生産的な *-тай* の形態を用いている。仮に中世モンゴル語の原則をこの例文にも適用するなら、*нэртэн* となるべきところであらう。また、さらに別な箇所では、

Хааны үгийг зөрчих эрхтэн үгэндээ Монголын тал нутагт байхгүй.
ハーンの言葉に背く勇者は、本当にモンゴルの 大地にはいない。

のように、*-тан* は対応する被限定詞を持たずそれ自体が集合名詞化されているが、これがまさしく現代語の *-тан* の役割である。

ついでに述べておくと、上のようにごく一部の箇所で『元朝秘史』時代の数の呼応を意識して書いたと考えられるこの作者の小説からも、性による呼応の別を意識していると思われる痕跡は全く見られない。たとえば、

дунд зэргийн нуруутай хөрслөг бор залуу
(中背を持つ) 中背の 肌つやのいい浅黒い若者

の例では、*залуу* (「若者」が文脈から「男性」であることは明白である) に対して *-тай* を用いている。もちろん、これが現代語の *-тай* の役割に適った表現であるが、仮にここでも『元朝秘史』の原則にこだわるなら *нуруут* となるべきところである。

なお、塩谷によれば *-тан* は通時的には

$-tai + -n \rightarrow -tan$
(N→N) (pl.) (N→N)

のように、*-tai* の複数形として形成された²⁰⁾ としている。言い換えれば、*-tu* の複数形とは見ていないのである。

最後に、現代モンゴル語の派生接尾辞 -т, -тай, -тан について改めてまとめておく。

原義	役割
«～のある、～を持つ»	(派生接尾辞の前後の語の関係)
-т	結合度 強
-тай	結合度 弱
-тан	結合させる役割は稀薄 集合名詞形成の役割に特化

4. 『元朝秘史』における性と数の呼応

『元朝秘史』は中世モンゴル語東方言を代表する 13 世紀の文献であり、元々はウィグル式モンゴル文字によって書かれたと推測されるがそれは現存しない。現存するのは漢字音訳されたものであり、小沢はそれをもとに詳細な研究を行っている。Ц.Буянзая (2013) ²¹⁾ は、『元朝秘史』の文学史的意義として、「人間の内面世界をつぶさに描いている点で、まれな著作である」とし、派生接尾辞 -tu, -tai, -tan について、『元朝秘史』では性と数の呼応が見られることにも触れているが、文学史のテキストなのでそれ以上のことは詳しく述べられていない。-tu, -tai, -tan の問題に関しては、詳しくは小沢によって確立されたと見られる。しかし、性による呼応の区別を考えると、性を有する「人」の場合は明快であるとしても、「人以外」の解釈の仕方については小沢の見解に疑問が残るように思われる。この章では、そうした若干の疑義を示しながら、それに対する筆者なりの解釈を試みながら『元朝秘史』における性と数の実態を検証して行きたい。

4.1 中世モンゴル語の動詞語尾（終止語尾）と形動詞語尾（連体語尾）

派生接尾辞の問題に入る前に、動詞語尾（終止語尾）と形動詞語尾（連体語尾）という二つの関連事項について触れる。

小沢 (1979) ²²⁾ によれば、

- ・動詞の語尾体系
- ・実詞の性、数の一致
- ・動詞の使役形接辞 -lɣa/-lge の不在

の三点を、「古代蒙古語からの遺産と目される特徴」であって、「15～16 世紀の蒙古語では消失」と記している。このうち、三つ目の「動詞の使役形接辞」をめぐる問題は本稿における考察とは全く関連性がないので除外するが、「動詞の語尾体系」の問題は「実詞の性、数の一致」と必ずしもかけ離れていない。小沢による中世蒙古語の動詞語尾の体系のうち、

ここで必用なところだけを取り出して簡潔に示す。

男性単数形	女性単数形	複数形	
-mu/-mü	-mi	-mui/-müi	
-yu/-yü	-yi	-yui/-yüi	現在
-u	-i	-ui/-üi	
-ba/-be	-bi	-bai/-bei	過去、完了

この動詞語尾に関して、小沢は次のような見解を示している。

- ① 主語が女性である時にその述語動詞の語尾は女性になるという原則の他に
- ② 主語が女性でなくてもその述語動詞の目的語が女性である時も女性語尾である。
- ③ 主語及び目的語に女性及び女性に関する限定詞がある場合にもそれ等に対する述語動詞の語尾も女性をとることがある。

ここで、①は原則であるから当然であるとしても、②や③のことに着目しているのは、次節以降で派生接尾辞の性の呼応について考えるときにも、重要な事柄を含んでいる。

一つは、動詞語尾にも性の呼応があったとされる点である。2章で述べたように、性と数の呼応はまず動詞の領域において出現し、それが動詞的意味を持つことがあるこの派生接尾辞に及んだ可能性があるからである。すなわち、次のように

動詞語尾における性の呼応

↓

(動詞的意味を持つことがある) 当該の派生接尾辞の性の呼応

へと波及したと考えられるのである。このようなことを問題視するのは、塩谷が提示した152個の派生接尾辞の中で性と数に関する呼応が見られるのは、当該の -tu,-tai,-tan に限られるからである。

もう一つは、被限定詞もしくは主語の位置に性を持たない「もの」が来る場合の呼応のあり方をどのように捉えるかが、当該の派生接尾辞をめぐって避けられない問題であるが、ここにそれを解く鍵があるからである。派生接尾辞に関して、この考えが当てはまる例は該当する箇所では述べるが、動詞語尾に関して小沢が指摘している例をここに挙げておく。

中合敦訥	必荅訥	古 ^舌 兒別速回	札撒 ^黒	中忽 ^舌 兒察	孛勒畢 (7-189)
qadun-nu	bidan-u	Gürbesü-yin	jasag	qurča	bolbi.
妃の		グルベスの	規律は	厳しく	なった。

上例で、主語は性別のない jasag (規律) であるが、動詞語尾は -bi という過去の女性の単

数形が現れている。これは、主語に関わっているのが女性（グルベス）なので、動詞語尾も女性の -bi になるというのが小沢の見解なのである。よって、この文と対を成す例文は実際にはないのであるが、仮に規律を作ったのが男性だったら bolba、複数の人間で作ったのなら bolbai.となることが予想されるわけである。さらに、音声の側面から見て当該の派生接尾辞と対応する箇所があるのは、注目すべきではなかろうか。すなわち、

男性単数形（現在）の動詞語尾に共通の音声としての -u/-ü

女性単数形（現在）の動詞語尾に共通の音声としての -i

が抽出されるわけであるが、当該の派生接尾辞でも

男性に対して呼応する -tu/-tü から -u/-ü の音声

女性に対して呼応する -tai から -i の音声

が抽出されるのである。動詞語尾（終止語尾）と派生接尾辞という文法的には異質のものでありながら、音声面においては一部そのような共通性が見出せるのである。ただし、派生接尾辞における

複数に対して呼応する -tan

から抽出される -n の音声は、動詞語尾の中には現在にも、過去、完了にも現れない。複数に対応する動詞語尾から抽出される音声は、

現在であれば -ui/-üi

過去、完了であれば -ai/-ei

のように、あたかも男性と女性を合わせたような音声が見れるのである。

一方、橋本（1972）²³⁾ は中世モンゴル語の形動詞語尾について考察を行い、それらが

-qu/-gu

-qui/-kui

-qun/-kun

の三つの形式で表されるとした。動詞語尾や当該の派生接尾辞の例と照らし合わせて音声面から辿るなら、一見して

-qu/-gu からは、-u の音声抽出されるから男性

-qui/-kui からは、-i の音声抽出されるから女性

さらに、動詞語尾には現れないが、派生接尾辞には現れることから、

-qun/-kun からは、-n の音声抽出されるから複数

という仕組みになっているように感じられる。しかし、橋本はそうに短絡的に捉えていない。-qun/-gun が複数を限定する語尾であることに全き疑問視していないが、-qui/-gui に関しては単数を限定するものであるとしながらも、それが「女性」に特化した語尾であるとは見ていないのである。以下、橋本が挙げている例文と説明を示す。

巴撒 也孫 中豁那^黒 亦啞延 兀該 阿周 捏^舌列 兀該 客^舌兒 兀窟迭恢

(2-80)

basa yesun qonoq ideyen ügei aju nere ügei ker üküdeküi.
 また 九 日間 食べ物がなく 生きて 名もなく どうして 死ねよう。

主語は文脈から「男性」であると知られる。しかし、「男性」であるのに -kui が現れていることから、-qui/-gui が「女性」に特化した語尾であるとする見解に異を唱えているのである。また、-qu/-gu に関しても同様に「男性」に特化した語尾であるという従来の説に異を唱え、以下のような「複数」に対する -qu の例を挙げている。

兀禄 兀馬^舌児塔^中忽 兀格思 鳴訖列^勒都列額（8－201）
 ulu umartaqu üges ügüleidüle'e
 忘れない 言葉を 語り合って、

つまり、橋本の見解によれば、

-qu/-gu 揺れが大きい
 -qui/-kui 単数
 -qun/-kun 複数

となっているのであって、

qu/-gu 男性
 -qui/-kui 女性

という短絡的な弁別をすべきではないと主張しているのである。そして、橋本は「揺れが大きい」-qu/-gu に関して「超数」という概念を当て、「中世東部モンゴル語に於てかかる数の概念を潜在的に保有する一時期があったと推測される」としていている。この弁別はこれから述べる派生接尾辞の体系とは必ずしも合致していないのであるが、動詞語尾や形動詞語尾にも -u,-i,-n の間に音声的側面からの弁別があったことは見逃せない事実である。

以上のことを、派生接尾辞に現れる音声を軸に据えて、動詞語尾と形動詞語尾の状況をまとめると次のようになる。

派生接尾辞	動詞語尾 (終止語尾)	形動詞語尾 (連体語尾)
-u/-ü 男性	+	△
-i 女性	+	△
-n 複数	－	+

＋は、派生接尾辞と同じ音声で現れ、果たす役割も派生接尾辞同じであることを示している。

－は、派生接尾辞で現れる音声自体がそこに現れないことを示している。

△は、派生接尾辞でもその音声で現れるが、果たす役割は必ずしも同じではないことを示している。

4.2 小沢の見解とそれに対する疑義

まず、栗林（2001）²⁴⁾ も参考にしながら、当該の派生接尾辞が『元朝秘史』で現れる総数を示す。

-tu	233 回
-tai	62 回
-tan	201 回
計	496 回

ちなみに、kešigtentü（宿直兵を持ち）という例では、kešig という語幹に -tan と -tu 二つの派生接尾辞が接続しており、それぞれ -tan 1 回、-tu 1 回として数えて、上の表では計 496 回としている。496 回の派生接尾辞はすべて《索引》に挙げているが、kešigtentü という見出し語は -tu の項目にも -tan の項目にも掲げた。

三形態全体での比率は上の表の通りであるが、-tu : -tai の二形態の比率に関して言えば、82 : 18 である。ちなみに、（これをもって現代モンゴル語の状況を代表させるという意図はなく、あくまで参考程度として 2 章、3 章で例文を提示する際に使用した）小説全体（二形態の合計は 1476 回）における -tu : -tai の比率を示すと 24 : 76 であり、頻度がほぼ逆になっていることが分かる。

小沢の掲げる性と数の呼応とは被限定詞の位置に男性、女性、複数のどれが来るかによって、その前の限定詞を形成している実詞に接続する派生接尾辞の形態に以下のような違いが生じる現象のことである。

限定詞		被限定詞
実詞-tu	←	男性
実詞-tai	←	女性
実詞-tan	←	複数

本稿では、これを＜限定用法＞と呼ぶことにする。

当該の派生接尾辞は文の述語の位置にもしばしば現れるが、その場合は主語に男性、女性、複数のどれが来るかによって、述語を形成する実詞に接続する派生接尾辞の形態に同様の違いが生じるわけである。

<u>主語</u>		<u>述語</u>	
男性	→	実詞-tu	(現代語では現れない文)
女性	→	実詞-tai	
複数	→	実詞-tan	

本稿では、これを＜述語用法＞と呼ぶことにする。

言語系統が全く異なるので、以下に述べることはほんの参照程度に過ぎないが、たとえば名詞ごとに性が定まっているドイツ語における形容詞の語尾変化は、

- ・名詞が文の述語になっているときには、形容詞に語尾が付かない。
- ・形容詞が名詞の前にあるときには、語尾が変化する。

という特徴がある。前者は本稿で言う＜述語用法＞、後者が＜限定用法＞に相当する。ドイツ語では＜限定用法＞でのみ性と数に呼応して形容詞の語尾が変わるのである。＜述語用法＞ではその拘束がないのである。＜述語用法＞であっても呼応がある点はドイツ語とは異なる中世モンゴル語の特徴である。

さて、当該に派生接尾辞をめぐっては、一文中に被限定詞と主語の両方を伴う例も見られる。ここでは、分かりやすくするために『元朝秘史』の実際の例からではなく、筆者による例文を用いて説明する。たとえば

tere aqa-派生接尾辞 kü'ün.
 彼、彼女は 兄がいる 人です。

という文で、派生接尾辞が被限定詞 kü'ün と主語 tere のどちらに対する呼応なのかは、二つが指しているのが同じである以上、それを明確にする必要がないことを確認しておきたい。言い換えるなら、被限定詞か主語か呼応の優先順位というものは、そもそも存在しないのだ。ちなみに、『元朝秘史』時代のモンゴル語では、派生接尾辞はこの人物が男性であれば -tu、女性であれば -tai で現れるのが原則である。実際には主語と被限定詞の両方を伴って現れる例はそれほど多くはなく、

aqatai kü'ün ～ 兄のいる人(女性)は～
 という＜限定用法＞か、

tere aqatai 彼女には兄がいる。
 という＜述語用法＞か、いずれか一方の形式で現れることが多いが、

tere aqatai kü'ün. 彼女は兄がいる人です。
 に相当する文も『元朝秘史』でないわけではない。そのような、派生接尾辞の前後に主語と被限定詞の両方を伴って現れる文に関しては、本稿では回数の重複を避けるために便宜上＜限定用法＞に区分することにする。

また、次のような場合には被限定詞の位置に来る語が省略されていると見なして、本稿で

は<限定用法>に区分する。

孛端察^{𐰺𐰍} 阿（ト）鄰額蔑迭扯 脱列^{𐰺𐰠}先 杷^{𐰺𐰠}林失亦^{𐰺𐰠}刺秃 中合必亦
 Bodončar-un abulin eme-deče töregsen Barim-siyiratu Qabiči
 ボドンチャルの 最初の妻から 生まれた バリム・シイラト カビチという

捏^{𐰺𐰠}列秃 不列顏（1-43）

neretü büle'ē.

名を持つ者がいた。

上例では、neretü の後に被限定詞 kü'ün（人）といった語が省略されていると解釈できる。

また、『元朝秘史』では当該の派生接尾辞の後に格語尾が接続される例も多く見受けられるが、本稿ではこれも被限定詞の省略の一種と考え<限定用法>と見なす。

額^{𐰺𐰠}児迭 兀都^{𐰺𐰠}児 客額速 朶羅安 納速秃^{𐰺𐰠}耳 蔑^{𐰺𐰠}児乞^{𐰺𐰠}楊 亦^{𐰺𐰠}児堅
 erde üdür ke'ēsü dolo'an nasutu-yi Merkid irgen
 昔は と言えば 七 歳であるのを メルキドの 人衆が

倒兀里周 斡^{𐰺𐰠}抽（5-152）

dau'ülju odču

略奪して行って、

上例は、nasutu の後に被限定詞 kü'ün（人）が省略され、「七歳である人を」のように<限定用法>として解釈できる。これらのことも踏まえて、<限定用法>と<述語用法>に分けたのが次の表である。

	-tu	-tai	-tan	計
限定用法	149	48	140	337
述語用法	84	14	61	159
計	233	62	201	496

（<限定用法><述語用法>ごとの内訳）

割合を示すと<限定用法>が約 68%、<述語用法>が約 32%である。このとき、<限定用法>における被限定詞、<述語用法>における主語の位置に来るのが「人」であれば、その性もしくは数と派生接尾辞の形態が呼応するという一方で、特に大きな問題はないと予想

される。以下、実際の例を挙げながら確認する。

まず、派生接尾辞が接続している語が nere (名前) の場合から呼応が守られているかどうかを見る。

帖_舌列 札荅_舌刺歹因 可温 土古尤歹 捏_舌列_禿 不列額 (1-40)

tere Jadaradai-yin kö'ün Tügü'üdei neretü büle'ē. <述語用法>

そのチャダラダイの子は、トゥグウデイという名を持つのであった。

男性だから -tu

巴兒_中忽真_中豁阿察 脱_舌列_亮先 阿蘭_中豁阿 捏_舌列_台 幹勤 帖_舌列 (1-8)

Bargujin-go'ā-ča töregsen Alan-go'ā neretei ökin tere.

<限定用法>

バルグチン・ゴアから生まれたアラン・ゴア という名を持つ娘が彼女である。

女性だから -tai

阿蘭_中豁阿 朶奔蔑兒干途兒 亦_舌列_周 中豁牙兒 可温 脱_舌列_兀勒畢

Alan-go'ā Dobun-mergen-dur ireju qoyar kö'ün töreülbi.

アラン・ゴアは、ドブン・メルゲンのところに来て、二人の子を産んだ。

不古訥台 別_勒古訥台 捏_舌列_田 不列額 (1-10)

Bügünütei Belgünütei nereten büle'ē.

<述語用法>

ブグヌテイ、ベルグヌテイという 名を持っていた。

複数だから -tan

以上の例では、男性 -tu、女性 -tai、複数 -tan という呼応の違いが鮮明に現れている。ついでに言うと、töreülbi (産んだ) の -bi は女性単数過去を表示する動詞語尾であり、この点に関しても呼応が守られているのである。しかし、nere (名前) をめぐっては、性の点での呼応の原則が守られていない例が一つだけ見られる。

中合臣訥 可温 那牙吉歹 捏_舌列_台 不列額 (1-46)

Qačín-nu kö'ü Noyagidai neretei büle'ē.

<述語用法>

カチンの子は ノヤギダイという名を持っていた。

男性なのに -tai

このノヤギダイは男性である。なぜ、男性なのに -tai を用いているのか。これについて、小沢は当該箇所ではノヤギダイが「女性的な性格」だったからではないかという註釈を施して

いる²⁵⁾が、その根拠はそれほど確かであるとは言い難い。上の例文のすぐ後に、原文では

noyamsig aburitu tula (ノヤンのような性格もちなので：小沢訳)

とノヤギダイの性格について語っているのであるが、この noyamsig aburi を小沢は註釈では《勿体ぶった性格》という説明もしており、これが「女性的な性格」だから男性なのに neretei が使われているのだと解釈している。しかし、ここで大事なのは、noyamsig の意味を詳しく辿って男性っぽい、女性っぽいかを判断することではない。その性格自体の男らしさ、女らしさを検討するより問題にしなければならないのは、noyamsig aburi の後に接続している派生接尾辞の形式が -tu になっている点である。仮に、ここも aburitai で現れているのなら、ノヤギダイを描写するのに、本来は男性なのに恣意的に女性の -tai を用いているということで一貫性があることになる。ところが、実際には同一人物（男性）を描写するのに、一方では aburitu、他方では neretei と異なる派生接尾辞が用いられているのである。neretei の -tei に関しては、『元朝秘史』作者の誤記ではなかろうかと筆者は見る。主語が男性なのだから、neretü が正しい形である。

neretei という形で現れるのは『元朝秘史』では 13 回あって、これ以外の 12 回は被限定詞もしくは主語が女性単数あり呼応が守られている。また、nereten という形で現れるのは 5 回あって、すべて複数に対する呼応が守られている。neretü は 26 回で現れる。そのうちの 25 回は、被限定詞もしくは主語が男性単数あり呼応が守られている。残りの 1 回は被限定詞の位置に来るのが「人」ではなく「もの」（場所）である。

王京丞相 莫州、撫州 捏舌列秃 中豁矢兀納 古舌兒帖列 成吉思中合阿泥
Ongging-čingseng Muju Fuju neretü qoši'ün-a kürtele Činggis-qa'ān
王京丞相は、 莫州、撫州という名を持つ 山嘴 まで チンギス・ハーンを

忽迭周 中合舌里顔 (11—248)

hüdejü qariba.

<限定用法>

見送って 帰った。

1 例だけなので、「～という名のある〔地名〕」と言うとき nere に付ける派生接尾辞が全体の分布がどうであったかまでは知ることができない。なお、qariba (行った) の -ba は男性単数過去を表示する動詞語尾であり、主語（男性）と動詞語尾との間の呼応が守られていることが分かる。

次に、派生接尾辞が接続している語が nasu (年齢) の場合で対応が守られているかどうかをしてみる。

拙赤中合撒兒 朶羅安 納速秃 不列額 (1—60)

Joči - qasar dolo'ān nasutu büle'ē.

<述語用法>

ジョチ・カサルは 七 歳 であった。

男性だから -tu

帖木真捏址 你刊 納孫 也客 哈兒班台 阿主尤 (1-66)

Temüjin-eče niken nasun yeke harbantai aju'ū.

<述語用法>

テムジンより 一歳 年上の 十歳 であった。

女性だから -tai

一つ目の文は主語の「拙赤^中合撒兒」(ジョチ・カサル)が男性なので、派生接尾辞の形態は -tu で現れている。また、現代語では -tu は<限定用法>のみであって<述語用法>では現れないが、『元朝秘史』のモンゴル語にはそのような制約がなかったこともこの例文によって立証されている。ただし、この例文でも -tu. (ピリオド)ではなく、「不列額」(~であった)という語で文は完結させている。一方、二つ目の文は文脈を辿ると主語の位置にあるのは「孛児帖」(ボルテ)という名前の女性である。数詞に直接 -tai が接続しているが、harban nasutai の nasu の省略形であるという解釈が成立するところであって呼応そのものは守られている。現代語の年齢表現は「数詞 наcтaй」が定式化されているが、当時は男性と女性で明確に使い分けられており、たとえば自分の年齢を言うのでも、男性なら ~nasutu、女性なら ~nasutai と話されていた予想される。複数に対する呼応としての nasutan という語は『元朝秘史』では現れないが、仮に「彼ら三人は七歳であった」という場面だったら、nasutan と言っていたはずである。

さらに、慣用表現であっても男性か女性かで派生接尾辞の部分を使い分けしている例がある。まず、男性に対する呼応例から挙げる。

德薛禅 鳴話列^舌論 額捏 可温 你敦秃^舌里顔 ^中合勒秃^舌 你兀兒秃^舌里顔

Dei-sečen ügülerün ene kö'ün nidün-tür-iyën galtu ni'ür- tur-iyān

デイ・セチェンが言うには この子は 目に 火を持ち 顔に

格^舌列秃^舌 可温備 (1-62)

geretü kö'ün bui.

<限定用法>

光を持つ 子です。

男性だから -tu

上例では、被限定詞の位置に来る子というのはテムジン(男性)を指している。派生接尾辞は、-tu の形態が現れている。また、「額捏 可温」以下は、派生接尾辞の前後に主語と被限定詞の両方を伴う少ない例の一つでもある。次に挙げるのは、女性に対する呼応例である。

你兀児秃^舌里顔 格^舌列^台 你敦秃^舌里顔 中合^勒台 幹乞泥 兀者周 (1-66)
 ni'ūr- tur-iyān geret^{ei} nidün-tür-iyēn galtai ökin-ü üjejü <限定用法>
 顔に 光を持^ち 目に 火を持^つ 娘を 見て、

女性だから -tai

上例では、被限定詞の位置に来る娘はボルテ（女性）である。派生接尾辞は、-tai の形態が現れている。この慣用表現は、(2-82)でももう一度現れる。そこでは、対象がテムジン（男性）であって派生接尾辞の形態は -tu である。このように、慣用表現であってもその文が完全に固定されていたわけではなく、派生接尾辞の部分は男女の呼応の原則に従って変えられていることが3例から分かる。

もう一つ、派生接尾辞の前の語が de'el²⁶⁾（デール）の場合を取り上げて対応例を見る。

亦赤^勒勤 札^舌児^中合^黒 兀速訥 不黠^中罕 札^勒中合^黒三
 ičilkin jargag usun-u bulugan jalgasan
 鹿などの なめし皮、かわうその 皮を つないだ

迭額^勒秃 塔莽 納速秃 曲出 (3-114)

de'eltü tabun nasutu Kücü <限定用法>
 服を着^た 五歳の クチュ

男性だから -tu

上例では、被限定詞の位置に「男性」が来て、派生接尾辞は -tu の形態が現れているから呼応の原則通りである。

額客 亦納 捏克 経額^勒台 (3-112)

eke inu nekei de'elt^{ei} <述語用法>
 母は 羊皮のデールを着^て、

女性だから -tai

上例では、被限定詞の位置に「女性」が来て、派生接尾辞は -tai の形態が現れているから、これも呼応の原則通りである。上の二つは性の呼応が守られているが、それが守られていない例も de'el で一つだけ見受けられる。

你刊 忽刺安 迭額^勒秃 額蔑 古温 帖木真者 客延 也客 擣兀阿^舌児
 niken hula'ān de'eltü eme kü'ūn Temüjin-je keyēn yeke dau'ū-ār
 一人の 赤い デールを着^た 女性が テムジンよ と 大声で

中合亦闌 禿亦闌 擺亦^中忽^耳 (4-146)

qayilan uiyilan baiyiqu-yi

泣き 叫んで いるのを、

<限定用法>

女性なのに -tu

上例では、被限定詞の位置に「女性」が来て、派生接尾辞は -tu の形態が現れている。この箇所の呼応のずれについては、本文中に小沢の註はないが、やはり筆者は誤記ではないかとする。被限定詞が女性なのだから、de'eltei が正しい形である。

ここまで性の点から見てきたが次に示すのは数の点での呼応の問題である。数の呼応が守られていない例は、性の呼応が守られていない例よりもずっと少なく、『元朝秘史』で確認できるのは2例のみである。

察^中合 米訥 蒙力^克 可尤^楊 尤出格禿 不列額 (1-68)

čaqa minu Münglig kö'üd

ücügetü büle'ē.

<述語用法>

我が子、ムンリグよ、子供たちは（小ささを持つ）小さいのだ。

複数なのに -tu

上例では、主語の位置に「複数」があるのに、派生接尾辞は「単数」（男性）の -tu の形態が現れている。これについては、小沢は呼応の「崩壊過程を示している」²⁷⁾と捉えている。そうした側面は『元朝秘史』のどこかにあるのかもしれないが、この例がそれを如実に示しているとは言い切れまい。ここも筆者は誤記ではないかとする。主語が複数なのだから、ücügeten が正しい形である。

また、次のように厳密には主語ではない対格を伴う場合も、便宜上主語とみなして<述語用法>としている。

帖迭泥 只兀^舌兒禿 孛^勒周 你思抽 (8-199)

teden-i

ji'ürtü

bolju

nisčü

<述語用法>

彼らが 翼を持つ ようになって、飛んで、

複数なのに -tu

上例も主語に相当するのが複数であるから、述語の形は原則通りにするのであれば、ji'ürten となるべきところである。

以上、呼応の原則に適う例と反する例とを対比させる必要性から、後者の例もそれがある場合は同等に並べて比較してきたが、改めて回数を提示すると以下のような内訳になっているのである。

	-tu	-tai	-tan	計
男性	162	3	0	165
女性	5	32	0	37
複数	12	0	186	198
計	179	35	186	400

(被限定詞もしくは主語が「人」の場合の内訳)

当該の派生接尾辞をめぐって被限定詞もしくは主語の位置に「人」が来るのは全 496 例中 400 例である。呼応が守られていないのは、上の表の網掛の部分である。400 例中 20 例が、守られていない。逆に言うなら、400 例中 380 例は呼応が守られているということになる。すなわち、被限定詞もしくは主語の位置に来るのが「人」であれば、95%が原則に適った現れ方をしているのである。形態別の呼応適合率も見ておくと、

-tu は、179 例中 162 例 (90%以上)

-tai は、35 例中 32 例 (90%以上)

-tan は、186 例すべて (100%)

が呼応の原則に適っている。この数値からいって、＜限定用法＞であれ＜述語用法＞であれ、「人」との対応では当初の予想通り小沢の見解に全く問題はない。

次に考察しなければならないのは、被限定詞もしくは主語の位置に来るのが「人以外」の場合である。「人以外」には当然性別がない。「動物」には生物上の性はあるが、言語上そこまで意識されていたのかどうか。「人以外」について描写する場合に当該の派生接尾辞はどのように現れるのかという問題を解決しなければならない。「人以外」がどのような状況になっているかに関しても、小沢は独自の見解を提示しており、その要点は次の 2 点にまとめられると考えられる²⁸⁾。

「人以外」に関する小沢説

その 1: 「人以外」に -tu が使用されることは稀であって、-tai が用いられることが多い。

これは、「人以外」が文法的に女性扱いされていたことを示すものである。

その 2: 実詞語彙の中では「人以外」のほうが数において勝る。現代語で -tai が生産的に用いられるようになったのは、数の多いほうへ集約されて来た結果である。

ところが、筆者が検証したところ『元朝秘史』から得られるのは両方ともかなりかけ離れたデータなのである。

まず、「人以外」は -tai が用いられることが多いとの見方についてであるが、『元朝秘史』で「人」を対象としてこの派生接尾辞を用いている例は、496 回中 400 回であった。つま

り、残りの 96 回は被限定詞もしくは主語の位置に来るのが「人以外」であり、それは

-tu	-tai	-tan	計
54	27	15	96

(被限定詞もしくは主語が「人」以外の場合の内訳)

という内訳になっている。「人以外」に -tai が用いられるのは 96 例中 27 例、すなわち「人以外」全体の 3 割にも満たないのである。

次に、「人以外」のほうで総数において勝つとの見方についてであるが、辞書に載っている総語彙数という観点から捉えるのであれば、

人 (少) < 人以外 (多)

であることは自明である。しかし、『元朝秘史』で当該の派生接尾辞が用いられている場合に絞ってデータを取ると、496 例中

人 (400 例) > 人以外 (96 例)

という結果が得られている。人物紹介に回数を割くという『元朝秘史』の歴史書ならではの特徴を考慮に入れたとしても、当該の派生接尾辞は「人」との対応で現れる回数のほうが圧倒的に勝っているのである。

つまり、「人以外」が文法的に女性扱いされて -tai とされていたと見る (その 1) ことも、「人以外」が総数で優勢だったと見る (その 2) こともできないのである。現代語でなぜ -tu が石化して -tai が生産的になっているのか。前述した通り -tu : -tai の比率が、

『元朝秘史』 82 : 18

現代小説 24 : 76

のように逆転したのかは、この派生接尾辞の状況を通時的観点から考察するにあたって極めて重要な課題であり、小沢もその答を見出そうとしているわけであるが、ここで述べられている説はデータの的に支持することが難しく、「人以外」に関しては再考を要するところがあると言わざるを得ないのである。

4.3 性と数の呼応に関する再考

4.3.1 「人」

被限定詞もしくは主語の位置に来るのが「人」であるときには、上で確認した通り 95% が原則に適用しており、ごく僅かな誤記は見られるものの

-tu 男性単数

-tai 女性単数

-tan 複数

と定義付けることに特に問題はない。したがって、ここでは「人」の性によって文法形態に変化を来すという『元朝秘史』の現象について、その発生要因を探ってみたいのであるが、このとき動詞語尾のありようが無関係ではないように思われるのである。小沢（1979）^{29）}は、『元朝秘史』では人間関係に応じて次のような原則が見られることを指摘している。

原則①

話し手（優）→話し相手（劣）の線上で取りかわされる会話文に於ては

- （イ） 話し手が自分の行為について述べた述語動詞の語尾には -la'ā/-le'ē が用いられる。
- （ロ） 話し手が話し相手の行為について述べた述語動詞の語尾には -lu'ā/-lu'ē が用いられる。

原則②

話し手（劣）→話し相手（優）の線上で取りかわされる会話文に於ては

- （ハ） 話し手が、自分の行為について述べた述語動詞の語尾にも、話し相手の行為について述べた述語動詞の語尾にも、共に -la'ā/-le'ē が用いられる。

原則③

対等関係にある話し手と話し相手との間に取りかわされる会話文に於ては

- （ニ） 話し手が話し相手の行為を述べた述語動詞の語尾には -la'ā/-le'ē が用いられる。
- （ホ） 話し手が自分の行為を述べた述語動詞の語尾には -lu'ā/-lu'ē を用いる。

上で挙げられているのはあくまで述語動詞の語尾のことであるが、ここで大切なのは、『元朝秘史』の言語では優位者と劣位者の間の使い分けが確立されていたという点である。モンゴル語にも、（小沢の言葉をそのまま借りるなら）「優位者」の動作を敬う動詞も存在するが、そのような基礎語彙の違いによって区分するのではなく、語尾に委ねられている点にも着目しなければならない。なぜそのような体系が構築されたのかを考えると、モンゴル統一という歴史と密接な関係があると言っても決して的外れではあるまい。まず動詞の領域で優位者と劣位者の間で表現方法を語尾によって使い分けるという発想が生じ、その次に（あるいは同時に）それが男女の間にも波及したのである。動詞語尾の体系にも性による呼応の違いがあったことについては、小沢の見解を紹介している通りである。

動詞語尾における ①優位者・劣位者による体系化

②男性・女性・複数による体系化

という流れ（①と②は時間的に同時、逆の可能性もある）があつて、（文脈によっては動詞的意味を持つ）当該の派生接尾辞にもさらに波及して男女、複数の区別が生じたとは推測するのは必ずしも見当違いではないように思われる。

ただし、ここで改めて注意しなければならないのは、『元朝秘史』のモンゴル語における男女の区別は、-tu が男っぽい、-tai が女っぽいといった次元の、男らしさ、女らしさを表

すためのいわゆる「役割語」³⁰⁾のようなものではなく、あくまで文法的拘束事項であったという点である。文法的拘束事項であったという点は、当該の派生接尾辞のみならず、動詞語尾等であっても当然同じである。

4.3.2 「人以外」

次に、小沢の見解に疑問が残る「人以外」について考察するのであるが、いったん「動物」は別区分として考察してみる。なお、ここで言う「動物」とは、被限定詞もしくは主語の位置に「動物」が来る場合のことを指しているのものであって、派生接尾辞の前に何が入るかによるものではないので、たとえば *morintu*³¹⁾ (馬に乗った) を「動物」の区分として扱うのではない。これを踏まえて、「人」「動物」「もの」に分けた場合の回数を提示すると以下のような内訳になっている。

	-tu	-tai	-tan	計
人	179	35	186	400
人以外 (動物)	23	0	6	29
人以外 (もの)	31	27	9	67
計	233	62	201	496

(「人」「動物」「もの」に分けた場合の内訳)

「人以外」から、生物上は性差のある「動物」を切り離して「もの」のところだけ取り出したとしても、-tu が 31 回、-tai が 27 回となっており、使用頻度の点においては、やはり -tu が優勢なのである。「人以外」は文法的に女性扱いされていたと見る小沢説に反するデータが、むしろ得られるのである。

まず、「動物」について検証する。被限定詞もしくは主語の位置に来るのが「動物」の例は、<限定用法><述語用法>合わせて 29 例ほど確認されるが、それらのうち単数は例外なく -tu の形態で現れている。以下、いくつかその例を挙げる。

中豁勒 荅阿舌里秃 中豁多黎 薛温勒秃 幹舌羅黑 升中忽刺宜 兀訥周 (1-24)
col da'āritu godli se'ūltū orog singqula-yi unuju

<限定用法>

背筋に 鞍傷のある 短い尻尾を持つ 黒背の灰青色の 馬に 乗って、

尤中忽舌兒中合秃 中忽蘭 速古秃 不中忽 孛勒周 幹楊罷 (8-199)
ucurgatu qulan sumutu bucu bolji odba. <限定用法>

馬捕竿にかかった 野馬、 矢に射られた 鹿に なって行った。

速都禿 抹^中合牙 雪都^舌兒帖額速 雪都^舌兒堅突^舌兒 不幹^舌羅牙 (5-164)
südütü mogai-a sūdūrte‘ēsü sūdürgen-dür bü oruya. <限定用法>
牙のある へびに 中傷されても、 その挑発には 乗るまい。

一方、複数の「動物」は6例確認されるが、それらはみな複数の呼応の原則にあって -tan で現れる。そのうちの1例を挙げる。

朶^舌兒邊 那^中孩思 失^舌列門 莽来壇 (7-195)
dörben noqais širemün manglaitan <述語用法>
四匹の 犬どもは 生鉄の 額を持ち、

以上から、「動物」では単数か複数かという数の面での呼応の違いは如実に反映されていたことが知られる。

ここで考えなければならないのは、単数の「動物」のときなぜ -tai が現れず、-tu のみがい用いられているのかとい問題である。モンゴル語は、五畜に関しては生物上の性別が強く意識され、それが基礎語彙の違いとなって現れる言語である。仮に、雌に特化した家畜語彙が被限定詞もしくは主語の位置にあって、かつ派生接尾辞の形態が女性を示す -tai になっている例があったなら、「動物(家畜)」でも性が意識されていた可能性を示唆していることになるのであるが、『元朝秘史』にはそのような家畜の雌を表す語は1例(üniyen、牝牛。しかも、対応する派生接尾辞の形態は -tu)に過ぎないので深くは追求できない。

また、「動物」においてはその野性味や獐犷さが意識されて「男性名詞」同然の扱いをされるようになったという考え方はふさわしくないと思われる。さらに、「人以外」の名詞全般を通して見ても、「男性名詞」「女性名詞」という文法性が当時のモンゴル語にあったようには全く感じられない。「動物」(単数)の描写に際して『元朝秘史』で例外なく現れる -tu は、動物自体の男らしさによるものでもなければ、文法性によるものでもないのである。

次に、「もの」について検証する。「もの」は、当該の派生接尾辞によって描写されるときには、『元朝秘史』では(現代モンゴル語でも)主語の位置にはほとんど来ない。「もの」を対象としてこの派生接尾辞を用いるときはほぼ<限定用法>なのである。そして、「もの」では主語と被限定詞が指している内容は常に同じではないという問題が生じる。

忽迭速禿 中忽牙吉顔 額木思罷 必 (3-106)
hüdēsütü quyaq-iyān emüsbe bi. <限定用法>
皮条で綴じ合わせた 鎧を 身に着けたのだ 俺は。

倒置法が用いられている上の文から「bi quyaġ. (俺は鎧だ)」という文を抽出できないのは当然である。しかし、呼応の側面から捉えるときには、限定詞の位置にある性別のない「もの」を超えて、主語の位置にある「人」の性別が意識されているのではないと思われる例がいくつか観察される。上例もこれに該当する。上の例は、引用箇所だけでは bi の性別は分からないが、文脈を辿ると鎧を身に着けたのが男性であると知られる。限定詞の鎧には性はないが、(「鎧」から受ける印象がいかにも男性っぽいから「男性名詞」のような扱いをされているわけではない)それを扱っている主語の「人」が男性なので、派生接尾辞の形式も -tu で現れていると解釈できないだろうか。また、その文には主語がなくても、「もの」を扱う動作主や所有者が文脈から明瞭であれば、上の例と同様に当該の「人」の性と呼応していると見られることもある。この派生接尾辞を用いて(「動物」と「もの」を合計した)「人以外」を描写するのは上の表によれば 96 例ある。この 96 例中、上のように「人」の関与が明瞭な「もの」は 46 例であり、内訳は以下の通りである。

	-tu	-tai	-tan	計
男性の「人」の関与が明白	28	9	0	37
女性の「人」の関与が明白	0	4	0	4
複数の「人」の関与が明白	1	3	1	5
計	29	16	1	46

(「もの」に関与する「人」の性数ごとの内訳)

ただし、どこまでを「人」の関与と見なすかについては厳然とした基準は設けられず、筆者の主観が混じることはやむを得ない。たとえば、車や家は所有性が高いので『人』の関与ありとするが、空や天は誰のものでもないのもので、誰かがそれを見ていたとしても関与なしと判断する。全例をどのように筆者が判断したかについては、索引と附録を合わせて参考にしてもらいたい。

被限定詞の位置に来る「もの」が同じ語である二つの文を比較してみる。

^中豁亦圖 農^中合速禿 帖兒干圖兒 訥圖^勤周 (2-85)
 qoyitu nungasutu tergen-dür unu'ülju <限定用法>
 北側の 羊毛を入れた 車に 乗せて、

^中合^丑刺尤台 帖兒格訥 完^勤只格迭 你刊 幹勤 撤因 備由 (1-6)
 qaraūtai tergen-ü öljige-de niken ökin sayin buyu. <限定用法>
 黒い木枠の付いた 車の 前室に 一人の 娘の 美しいのがいる。

「もの」に相当する被限定詞は、いずれも *tergen* (車) という同じ語であるが、限定詞を形成する実詞に接続する派生接尾辞は使い分けられている。引用箇所からだけでは分らないが、前者の例は文脈を辿ると車に乗っているのは男性である。よって、*-tu* が用いられていると解釈することが可能である。後者の例は、引用箇所のみからでも乗っているのが女性であると分かる。よって、*-tai* が用いられていると解釈することが可能である。被限定詞の位置に「もの」(「人以外」) が来る場合には、

限定詞：被限定詞

という句の中で派生接尾辞の形態を決定できない。このとき、「もの」に対する「人」の関与が明白な場合には、主語もしくは動作主体の影響を受けることがあると考えられるのがこれらの例である。これは文のレベルで明瞭に主語に「人」があるかどうかが重要視されるわけではない。文としては主語に位置付けられていなくても、文脈上その「もの」に携わっている「人」の性が明白であれば、それにいわば「引きずられる」側面があると考えられるのである。中世蒙古語の動詞語尾の体系のところで、小沢が「主語及び目的語に女性及び女性に関する限定詞がある場合にもそれ等に対する述語動詞の語尾も女性をとることがある」と指摘していることとも繋がるのである。

「もの」に対する「人」の関与が明白な場合には、主語もしくは動作主体の影響を受けることがあるという私見は、46 例中 33 例(男性 28 例、女性 4 例、複数 1 例)、割合で言うと約 72% が適っていることになる。被限定詞もしくは主語の位置に来るのが「人」の場合、呼応が守られるのが約 95% であったのに比べると数値は下がる。一方、呼応が守られていないのは上の表の網掛の部分である。*-tu* の場合はすべて男性の「人」が関与している。*-tan* の場合はすべて複数の「人」が関与している。しかし、*-tai* の場合は男性、女性、複数 が混在しているのである。つまり、あくまで「もの」に対する「人」の関与が影響を与える場合もあるという考え方が支持されることが前提であるが、三形態の中で特に *-tai* に呼応の崩れが見られるのである。その例を一つ挙げておく。

幹^{𐰽𐰺𐰍}魯格^{𐰺𐰠}台^{𐰺𐰠} 格^{𐰺𐰠}兒^{𐰺𐰠} 米訥^{𐰺𐰠} 額額^{𐰺𐰠}連^{𐰺𐰠} 客^{𐰺𐰠}帖周^{𐰺𐰠} (10-230)

örügetei ger minu e'ëren kebtejü

<限定用法>

天窓のある 家を 囲み 臥して、

ここでは、文脈を辿ると家の持ち主がチンギス・ハーン(男性)であることが分かるが、派生接尾辞の形態は *-tai* が現れている。「もの」に対する「人」の関与が明白な場合には、主語もしくは動作主体の影響を受けることがあるという私見に従うなら *örügetü* となるべきところである。

一方、「人」の関与が不明な「もの」が被限定詞の位置に来る例は 48 例あって、その内訳は以下のようになっている。

	-tu	-tai	-tan	計
人の関与が不明	25	11	14	50

(「もの」に「人」が関与しない場合の内訳)

例を -tu, -tai から一つずつ挙げておく。

額^舌児客^禿 騰^舌吉里迭 捏^舌列亦^楊抽 (3-113)
 erketü tenggiri-de nereyidčü <限定用法>
 威力のある 天に 名ざされて、

豁都台 騰^舌格理 豁^舌児赤周 不列額 (11-254)
 hodutai tenggeri horčiju büle'ë. <限定用法>
 星のある 天は 回っていた。

複数の関与が明白であって、かつ「人」の関与がない「もの」との -tan の呼応例の一つとして挙げられるのも、天体関連の語である。

騰^舌格理 迭額^舌列 納^舌蘭 撒^舌刺^中割牙^舌児 格^舌列田 格格延 孛^勅禿^中孩 (7-189)
 tenggeri de'ëre naran sara qoyar gereten gegeyen boltucaï. <述語用法>
 天上には 太陽、 月 二つが光^を持^{って} 明るくあれかし。

「もの」においては、「人」の関与が派生接尾辞の形態に影響を及ぼす場合もあるというのが筆者の見解である。そのように説明ができることもあるのである。しかしながら、「人以外」における当該の派生接尾辞の原則は、「人」の関与の有無に決定的に左右されるものではないと見る。-tu と -tai に役割の明らかな差異があったのは「人」に対してのみであって、「人以外」の場合に現れる単数の二形態に関しては差異がなく、自由交替が可能な状態ではなかったのではなかろうかと考えるほうが、整合性がありそうである。『元朝秘史』の「動物」がすべて -tuなのは、役割の差異のない二形態のうちの一方の -tu が極端に現れただけであって、実はいずれも -tai と交替可能なのではないかと考えられる。ちなみに、筆者の見解によれば一方が極端に現れただけに過ぎないという「動物」に対する -tu は、現代語においては消失していて、一部の定型表現を除いては -tai の形態で現れる。自由交替可能な -tu, -tai ということに関しては、次章で『元朝秘史』以前の状況を確認しながら再度検証する。

最後に、-tan について改めて述べる。-tan は、『元朝秘史』全体では 201 回現れる。-tan は被限定詞が省略されていたり、格語尾が接続されていたりする例が他の二形態より多い。た

例えば、

numutan qarbiyaldun buqui-dur (3-116) 弓を持った者たちが射合っているとき、
という例では、numutan の後に人の複数を明示するような語（例 čeri'ūd 兵士たち）を想定
できる。

-tan における役割の段階については、以下のように考えられる。

1 -tan (a「複数」の意味) + b「複数」の意味を持つ名詞(類)
という二つの要素で構成されていた。これが、もっとも典型的な呼応である。

次第に b の名詞(類)が欠落して、

2 -tan (a「複数」の意味) + ∅
だけで通用するようになった。典型的な呼応からは外れるが、∅との呼応と見ることが可能
である。

さらに a の「複数」の意味も欠落して、

3 -tan が「複数」の意味を喪失した状態
となり、「複数」の意味を表示するためには、別途複数接尾辞を必要とすることになった。

2と3の状態を<集合名詞>と呼ぶ。ただし、1と2とは『元朝秘史』の段階では既に混
在しているわけである。一方、3は現代語の状態であって、『元朝秘史』の時代にはまだ確
認できない。しかし、最も初期の用法と思われる1の典型的な呼応表現が現代語でも皆無と
いうわけではなく、その例は3章ですでに紹介している。

4.4 『元朝秘史』における当該の派生接尾辞と共同格

派生接尾辞の現れ方の事実以上の通りである。「人以外」をもう一度一つの項目にして、
『元朝秘史』における性と数の呼応状況に関する状況についてまとめる。

	-tu	-tai	-tan	計
人	179	35	186	400
人以外	54	27	15	96
計	233	62	201	496

- ① 被限定詞もしくは主語の位置に「人」が来るときには、男性 -tu、女性 -tai、複数 -tan
という形態で 95%が原則通り現れる。「人」に関しては、「この接尾辞の使い分けも秘史
蒙古語では可成り厳密で例外は殆どない」³²⁾ という小沢の記述に何ら問題はない。
- ② 被限定詞もしくは主語の位置に「人以外」が来るときには、-tu と -tai 両方現れるが
頻度は -tu のほうが優勢である。「人以外」は、-tai が優勢という小沢の見解とは異なる。

- ③ 被限定詞もしくは主語の位置に「人以外」であって、そこに「人」の関与があるときには、男性 -tu、女性 -tai、という形態で現れる場合もあるが、呼応の適合率は①よりは下がる。そもそも「人以外」では、-tu と -tai の間には役割の差がなかったと見るほうが妥当であり、小沢の言うように「人以外」は文法的に「女性」であったと解釈することはできない
- ④ -tan は、＜限定用法＞の厳密な形とそれが崩れた形とが混在している。

共同格の形態は -tai ではなくすべて -luya が用いられている。いくつかその例を挙げて確認する。

孛斡兒出 別勒古台宜 古兒格兀魯額揚 額赤格 都^舌里顏 兀祿 客列連
 Bo'örču Belgütei-yi kürge'ülü'äd ečige-dür-iyēn ülü kelemen
 ボオルチュはベルグテイを到らしめて、 父に 言わないで

孛戈禿兒 中晃中豁^舌里 兀訥阿揚 孛^舌羅 斡兒木格邊 孛克禿^舌魯額揚
 bögötür qorggor unu'äd boru örmüge-ben bügtürü'äd
 猫背の 薄黄色の馬に 乗って 灰褐色の毛布を 馬に付けて

別勒古台 魯額 亦^舌列 (2-95)
 Belgütei-lü'ē irebe.
 ベルグテイ とともにやって来た。

也速該^{中罕} 額赤格魯額 客^舌列亦揚 亦兒格訥 王^{中罕} 安達
 Yesügei-qan ečige-lü'ē Kereyid irgen-ü Ong-qan anda
 イエスゲイ汗なる父 とともに ケレイトの人衆の王汗は義兄弟と

客額^勒都克^先 阿主兀 (2-96)
 ke'ēldügsen aju'ü.
 言い合ったのである。

田迭 札木^{中合} 王^{中罕}魯阿 中合禿 歌多魯^勒扯周 迈步^舌倫 (5-160)
 tende Jamuqa Ongqan-lu'ā qamutu küdülülčejü yaburun
 そこで ジャムカは王汗 とともに 先に動いて 行きながら

成吉思^{中合罕}魯阿 王^{中罕} 土兀刺因 中合^舌刺屯納 中忽^舌里周
 Činggis qahān-lu'ā Ongqan Tu'ūla-yin qara tün-ne quriju

チンギス・ハーンとともに 王汗は、トーラ河の 黒森に 集って

額赤格 可兀 客額勤都罷 (5-164)

ečige kö'ü ke'eldübe.

父 子と 言い合った。

補遺 『元朝秘史』における irge~irgen

『元朝秘史』では、「人衆」を表すのに irge と irgen の二つの語が見られる。ここでの n の有無を小沢 (2000) ³³⁾ は、特定性の有無であると解説している。すなわち、特定性があれば n が付き、それがなければ付かないという弁別があったとしているのである。しかし、irge~irgen に関しては、全例 (栗林によると、irge は 47 回、irgen は 199 回。表記上は同じ irge でも「去勢羊」の意味で現れる分は、当然回数には含まない) を確認しても、その弁別には疑問が残るのである。

一方、n には複数を表示する場合があるのであるが、irge~irgen の間には、文脈を辿っても「単数~複数」という対立も成立しておらず、この n の有無が何であるかは、疑問のままである。

当該の派生接尾辞との対応において現れる箇所だけ取り上げると、irge は 1 回、irgen は 19 回となっている。派生接尾辞は、

irge に対しては、-tu が 0 回、-tan が 1 回

irgen に対しては、-tu が 5 回、-tan が 14 回

という内訳となっている。本稿では、irge~irgen とも「複数」と見なすこととする。

また、当該の派生接尾辞は実は öki~ökin をめぐっても現れている。しかし、そこには明確に特定性の有無があるようには感じられない。したがって、n の問題はやはり疑問のまま残されるのであるが、本稿の考察においては、これが「単数~複数」という対立ではないことが確認されることが重要なのであって、öki~ökin はいずれも「単数」である。なお、「複数」としては、ökid という形が現れる。

<索引 1> 『元朝秘史』における当該の派生接尾辞に関する索引

見出し語は、以下の順に並べる。() の数字は、その語が現れる章・節を示している。

- | | |
|---------------|--------------------|
| 1. -tu 「人」 | ラテン文字転写によるアルファベット順 |
| 2. -tu 「人以外」 | " |
| 3. -tai 「人」 | " |
| 4. -tai 「人以外」 | " |
| 5. -tan 「人」 | " |
| 6. -tan 「人以外」 | " |

見出し語の日本語訳は、派生接尾辞の意味を除外した形で付している。

当該の派生接尾辞が<限定用法>として現れる場合には被限定詞に相当する語を、<述語用法>として現れる場合には主語に相当する語を、それぞれの欄に記している。

当該の派生接尾辞をめぐって、一文の中に被限定詞と主語の両方が見られる例は極めて少ないが、そのような例は便宜上<限定用法>に区分する。

派生接尾辞の後に格を伴う場合は、派生接尾辞と格の間の被限定詞が省略されていると解釈して「被限定詞」の欄には「非明示」と記す。同様に、それ一語で集合名詞化しているような例も「被限定詞」の欄に「非明示」と記す。また、前文の内容を受けているなどの理由で、その文の中には主語が省略されている例は「主語」の欄に「非明示」と記す。

<被限定詞もしくは主語が「人」の場合>

男性、女性、複数のいずれか該当する欄に「+」と記す。「単男」は単数男性、「単女」は単数女性の略である。「被限定詞」もしくは「主語」の位置に来るのが人名である場合には、その都度名前を提示するのではなく、「人名」と記す。また、その語自体には性が含有されていなくても、文脈からどちらの性であるか判断できるな場合には、該当する性の欄に「+」と記す。

呼応の欄には

性と数の呼応が守られている場合 ○ 守られていない場合 ●

と記す。

<被限定詞もしくは主語が「人以外」の場合>

単数、複数のいずれか該当する箇所に「+」を記す。また、文脈からそこに「人」の関与が認められると筆者が判断した場合は「関与」の欄に男、女、複と記す。「人」の関与が認められない場合は「-」と記す。

『元朝秘史』に関してのみ、附録でさらに別途説明を付す。

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
1 aburitu 性格 (1-46)		非明示	+			○
2 aburitu 性格 (5-152)		aqā 兄	+			○
3 aburitu 性格 (10-243)		男・人名	+			○
4 ačī'ātu 荷 (12-265)		bi 私	+			○
5 ačī'ātu 荷 (12-265)	irgen 人衆				+	●
6 agtastu 去勢馬 (1-3)		男・人名	+			○
7 amatu 口 (5-167)	kū'ūn 人		+			○
8 amitu 命 (2-85)	kū'ūn 人		+			○
9 amitu 命 (7-193)	kū'ūn 人		+			○
10 amitu 命 (7-193)	kū'ūn 人		+			○
11 argatu 才覚 (2-82)	非明示		+			○
12 beyetū 体 (1-46)		非明示	+			○
13 beyetū 体 (7-195)		非明示		+		●
14 böğsetū 尻 (12-277)	kū'ūn 人		+			○
15 buqa'ūtu 枷 (2-83)	kū'ūn 人		+			○
16 čagtu 限り (6-170)	nökör 僚友		+			○
17 čagtu 限り (6-170)	nökör 僚友		+			○
18 čagtu 限り (10-245)	nökör 僚友		+			○
19 de'ēltū 服 (3-114)	男・人名		+			○
20 de'ēltū 服 (4-146)	eme 女			+		●
21 degeltū 服 (6-181)	kō'ūn 子		+			○
22 deretū 枕 (6-183)		bi 私	+			○
23 de'ūnertū 弟達 (8-201)		anda 盟友	+			○
24 dōrebčitū 鼻輪 (4-135)	kō'ūken 子		+			○
25 duratu 好み (4-145)		bi 私	+			○
26 eketū 母 (8-201)		anda 盟友	+			○
27 elčitū 使者 (5-160)		anda 盟友	+			○
28 elčitū 使者 (5-166)		anda 盟友	+			○
29 emegetū 老婆 (8-201)		bi 私	+			○
30 emestū 女達 (3-121)		namayi 私	+			○
31 emestū 女達 (8-207)		nama 私	+			○
32 emetū 妻 (7-188)		男・人名	+			○
33 erdemtū 才能 (10-244)	男・人名		+			○
34 erdemtū 才能 (10-244)		男・人名	+			○

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
35 erdemtü 才能 (10-244)		男・人名	+			○
36 galtu 火 (1-62)	kö'ün 子		+			○
37 galtu 火 (2-82)		非明示	+			○
38 galtu 火 (3-114)	kö'üken 子		+			○
39 galtu 火 (5-149)		非明示	+			○
40 godusutu 靴 (3-114)	男・人名		+			○
41 geretü 光 (1-62)	kö'ün 子		+			○
42 geretü 光 (2-82)		非明示	+			○
43 geretü 光 (5-149)		非明示	+			○
44 gergeitü 妻 (1-3)		男・人名	+			○
45 gergeitü 妻 (1-3)		男・人名	+			○
46 gertü 家 (12-265)		bi 私	+			○
47 gertü 家 (12-265)	irgen 人衆				+	●
48 hačitu 恨み (3-113)	irgen 人衆				+	●
49 helgebčitü 胴当て (4-135)	kö'üken 子		+			○
50 heligetü 肝臓 (7-195)		tere 彼	+			○
51 heligetü 肝臓 (12-275)	irgen 人衆				+	●
52 huja'utu 根源 (9-211)	男・人名		+			○
53 idešitü 食物 (7-195)		非明示		+		●
54 itegeltü 信頼 (9-229)		男・人名	+			○
55 itegeltü 信頼 (12-278)		男・人名	+			○
56 itegeltü 信頼 (12-278)		kebte'ül 宿直兵	+			○
57 jala'utu 若者 (1-3)		男・人名	+			○
58 jaya'atu 宿命 (8-201)	anda 盟友		+			○
59 jidatu 槍 (7-195)	ere 男		+			○
60 jirügetü 心臓 (4-139)	küčüten 力ある者達				+	●
61 ji'ürtü 翼 (8-199)		teden 彼ら			+	●
62 kebte'ülsütü 宿直兵 (9-224)		非明示	+			○
63 keletü 言葉 (5-166)	elči 使者		+			○
64 keletü 言葉 (5-167)		男・人名	+			○
65 keletü 言葉 (5-167)	kü'ün 人		+			○
66 keletü 言葉 (12-278)	kü'ün 人		+			○
67 keregtü 必要 (12-265)		非明示	+			○
68 kešigtentü 宿直兵 (9-224)		非明示	+			○

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
69 kešigtü 宿直 (9-227)	kü'ün 人		+			○
70 kešigtü 宿直 (9-227)	非明示		+			○
71 kešigtü 宿直 (9-227)	非明示		+			○
72 kešigtü 宿直 (9-227)	非明示		+			○
73 kešigtü 宿直 (9-228)	非明示		+			○
74 kešigtü 宿直 (9-228)	非明示		+			○
75 kešigtü 宿直 (9-228)	非明示		+			○
76 kešigtü 宿直 (12-278)	kü'ün 人		+			○
77 kešigtü 宿直 (12-278)	kü'ün 人		+			○
78 kešigtü 宿直 (12-278)	非明示		+			○
79 kö'ütü 子 (1-11)		aqa 兄	+			○
80 kö'ütü 子 (5-164)		非明示	+			○
81 küčütü 力 (7-194)	男・人名		+			○
82 küčütü 力 (9-209)	非明示		+			○
83 küčütü 力 (11-255)	非明示		+			○
84 mačalaitu 帽子 (3-114)	男・人名		+			○
85 morintu 馬 (1-30)		kü'ün 人	+			○
86 moritu 馬 (2-91)	kü'ün 人		+			○
87 moritu 馬 (2-91)	kü'ün 人		+			○
88 moritu 馬 (2-103)		男・人名	+			○
89 moritu 馬 (2-103)		bi 私	+			○
90 moritu 馬 (5-152)		非明示	+			○
91 moritu 馬 (6-177)		či お前	+			○
92 mörtü 道 (8-201)	kü'ün 人		+			○
93 nasutu 年齢 (1-60)		男・人名	+			○
94 nasutu 年齢 (1-60)		男・人名	+			○
95 nasutu 年齢 (1-60)		男・人名	+			○
96 nasutu 年齢 (1-61)		男・人名	+			○
97 nasutu 年齢 (2-94)		非明示	+			○
98 nasutu 年齢 (3-114)	男・人名		+			○
99 nasutu 年齢 (3-116)		男・人名	+			○
100 nasutu 年齢 (5-152)	非明示		+			○
101 nasutu 年齢 (5-152)	非明示		+			○
102 nasutu 年齢 (9-214)	非明示		+			○

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
103 neretü 名前 (1-40)		kö'ün 子	+			○
104 neretü 名前 (1-43)		非明示	+			○
105 neretü 名前 (1-43)		非明示	+			○
106 neretü 名前 (1-46)		kö'ün 子	+			○
107 neretü 名前 (1-46)		kö'ün 子	+			○
108 neretü 名前 (1-47)		非明示	+			○
109 neretü 名前 (2-90)		bi 私	+			○
110 neretü 名前 (2-92)		ečige 父	+			○
111 neretü 名前 (2-97)	kö'ün 子		+			○
112 neretü 名前 (3-114)	kö'üken 子		+			○
113 neretü 名前 (3-119)	kö'ün 人		+			○
114 neretü 名前 (4-137)	kö'üken 子		+			○
115 neretü 名前 (4-138)	kö'üken 子		+			○
116 neretü 名前 (4-138)	kö'üken 子		+			○
117 neretü 名前 (4-138)	kö'üken 子		+			○
118 neretü 名前 (4-138)	kö'üken 子		+			○
119 neretü 名前 (4-147)		非明示	+			○
120 neretü 名前 (5-158)	noyan 長官		+			○
121 neretü 名前 (7-190)	elči 使者		+			○
122 neretü 名前 (7-190)	elči 使者		+			○
123 neretü 名前 (10-245)	elči 使者		+			○
124 neretü 名前 (10-245)	elči 使者		+			○
125 neretü 名前 (11-250)	qan 帝		+			○
126 neretü 名前 (11-253)	kö'ü 子		+			○
127 neretü 名前 (11-257)		či お前	+			○
128 nidütü 目 (1-4)		男・人名	+			○
129 nököčeltü 僚友 (4-147)	kü'ün 人		+			○
130 nöködtü 僚友達 (8-200)	o'ōrag 残賊		+			○
131 nöködtü 僚友達 (8-201)		eme 妻		+		●
132 nöködtü 僚友達 (9-224)		非明示	+			○
133 nöködtü 僚友達 (9-224)		非明示	+			○
134 nöködtü 僚友達 (11-253)	非明示		+			○
135 nökörtü 僚友 (9-224)		非明示	+			○
136 nuntugtu 居营地 (12-265)		bi 私	+			○

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
137 obogtu 姓 (1-9)		男・人名	+			○
138 obogtu 姓 (1-44)		tere 彼	+			○
139 obogtu 姓 (4-139)	非明示				+	●
140 olotu 多い (1-41)		男・人名	+			○
141 olotu 多い (7-190)		irgen 人衆			+	●
142 omogtu 傲り (7-194)	男・人名		+			○
143 öljeitü 吉祥 (8-200)	anda 盟友		+			○
144 öljeitü 吉祥 (8-204)	çi お前		+			○
145 öljeitü 吉祥 (9-211)	男・人名		+			○
146 öljeitü 吉祥 (10-239)	irgen 人衆				+	●
147 östü 仇 (5-149)	kü'ün 人		+			○
148 östü 仇 (9-210)	kü'ün 人		+			○
149 qarčidaitu 黄鷹 (1-31)		非明示	+			○
150 qortu 矢筒 (7-195)	kü'ün 人		+			○
151 qubitu 黄馬 (1-55)		男・人名	+			○
152 qutuctu 至福 (8-200)	anda 盟友		+			○
153 qutuctu 至福 (8-204)	çi お前		+			○
154 qutuctu 至福 (9-211)	男・人名		+			○
155 sayitu 良い (4-135)	kü'ün 人		+			○
156 sayitu 良い (10-239)		çi お前	+			○
157 sedkiltü 心 (8-201)	anda 盟友		+			○
158 sedkiltü 心 (11-254)		qadun 妃		+		●
159 sölsütü 胆力 (4-139)	küčüten 力ある者達				+	●
160 sutu 至福 (12-272)	男・人名		+			○
161 süldertü 御稜威 (11-249)	beye 身		+			○
162 telegetü 車 (8-199)	非明示		+			○
163 telegetü 車 (10-236)		男・人名	+			○
164 teme'ētü らくだ (6-182)		男・人名	+			○
165 teri'ütü 頭 (1-21)	kü'ün 人		+			○
166 to'öutu 数 (10-240)	kü'ün 人		+			○
167 to'ürgatu 帳幕 (8-202)	ulus 民人		+			○
168 törülkitü 生まれ (8-201)		bi 私	+			○
169 törülkitü 生まれ (8-201)	anda 盟友		+			○
170 üčügetü 小さい (1-68)		kö'üd 子供たち			+	●

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
171 ügetü 言葉 (7-197)		非明示	+			○
172 üldütü 剣 (7-195)	ere 男		+			○
173 yaratu 傷 (2-73)		ebügen 老人	+			○
174 yaratu 傷 (6-171)	非明示		+			○
175 yasutu 骨 (3-112)	kü'ün 人		+			○
176 yasutu 骨 (5-148)	kü'ün 人		+			○
177 yeketü 大きい (7-190)		irgen 人衆			+	●
178 yosutu 道理 (12-278)	非明示		+			○
179 yosutu 道理 (12-278)	非明示		+			○

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数	関与
179 ači'ātu 荷 (6-172)	morin 馬		+		男
180 ara'ātu 牙 (5-164)	mogai へび		+		－
181 ara'ātu 牙 (6-177)	mogai へび		+		－
182 a'üşgitu 肺 (1-13)	jildü ギルド		+		男
183 būri'ētü 器 (4-145)	非明示		+		男
184 čingggültüktü 鉤 (3-116)	ši'a シャー		+		男
185 čistu 血 (7-187)	tonog 頭皮		+		男
186 čistu 血 (7-195)	tonog 頭皮		+		男
187 da'āritu 鞍傷 (1-24)	šingqula 馬		+		男
188 da'āritu 鞍傷 (1-25)	šingqula 馬		+		男
189 dabčitu ダブチ (3-105)	qor 矢筒		+		男
190 dau'ütü 音 (3-106)	kü'ürge 太鼓		+		男
191 dau'ütü 音 (3-106)	kü'ürge 太鼓		+		男
192 dau'ütü 音 (3-116)	yor 鳴りかぶら		+		男
193 doto'ājitu 下帯 (4-145)	ničügen 裸		+		男
194 ebertü 角 (3-117)	ünügün 小山羊		+		男
195 ebertü 角 (3-121)		üniyen 牝牛	+		－
196 eme'ēltü 鞍 (6-184)	acta 去勢馬		+		男
197 eme'ēltü 鞍 (7-193)	非明示		+		－
198 eme'ēltü 鞍 (7-193)	morin 馬		+		－
199 eme'ēltü 鞍 (9-229)	非明示		+		－
200 eme'ēltü 鞍 (12-278)	非明示		+		－
201 erketü 威光 (3-113)	tenggiri 天		+		－

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数	関与
202 harutu 模様 (12-273)	a'ūrasun 絹布		+		—
203 hüdēstü 皮条 (3-106)	quyag 鎧		+		男
204 itegeltü 信頼 (11-248)	地名		+		—
205 jaqatu 襟 (1-33)	de'el 服		+		—
206 jaya'ātu 宿命 (1-1)	čino 狼		+		—
207 jaya'ātu 宿命 (3-111)		kere'e 鳥	+		—
208 jaya'ātu 宿命 (12-281)	görö'esün 獣		+		—
209 jayātu 宿命 (3-111)		šibau'un 鳥	+		—
210 költü 脚 (8-202)	tug 旗		+		男
211 manglaitu 尖端 (3-116)	godoli 鎗		+		男
212 neretü 名前 (11-248)	qoši'un 山鼻		+		—
213 nungcasutu 羊毛 (2-85)	tergen 車		+		男
214 nungcasutu 羊毛 (2-86)	tergen 車		+		男
215 onggitu 柄穴 (3-106)	üldü 剣		+		男
216 onotu 刻み目 (3-106)	sumun 矢		+		男
217 qada'artu 轡 (12-278)	acta 去勢馬		+		—
218 qadagatu 切実 (8-201)	üges 言葉		+		複
219 qadārtu 馬勒 (9-229)	非明示		+		—
220 qara'ātu 遠見 (3-106)	tug 旗		+		男
221 qara'ātu 遠見 (3-106)	tug 旗		+		男
222 qaratu 黒 (3-111)	qabčal 山峡		+		—
223 qatqurasutu 山桃皮 (3-106)	sumun 矢		+		男
224 sayitu 良い (1-9)	cajar 所		+		—
225 se'ültü 尻尾 (1-24)	šingqula 馬		+		男
226 se'ültü 尻尾 (1-25)	šingqula 馬		+		男
227 sumutu 矢 (8-199)	bugu 鹿		+		—
228 südütü 齒 (5-164)	mocai 蛇		+		—
229 südütü 齒 (6-177)	mocai 蛇		+		—
230 tanatu 真珠 (4-133)	künjile 掛物		+		男
231 teri'ütü 頭 (1-33)	beye 体		+		—
232 ugurgatu 馬捕竿 (8-199)	qulan 野馬		+		—
233 yo'ürgatu 壁 (8-203)	balagsun 城街		+		—

複と網掛けしているのは、「人以外」でもそこに「人」の関与があるときには、その「人」の性と数に引きずられるように呼応することもあるという筆者の考えに反する例だからである。

-tai 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
1 busitai 他にない (1-54)	öki qatu 女性			+		○
2 čogtai 冠 (3-115)	eme 女			+		○
3 de'ēltei 服 (3-112)		eke 母		+		○
4 galtai 火 (1-66)	ökin 娘			+		○
5 geretei 光 (1-66)	ökin 娘			+		○
6 harbantai 十 (1-66)		非明示		+		○
7jarčimtai 規律 (2-74)	eke 母			+		○
8 ke'ēltei 胎児 (1-38)	eme 女			+		○
9 ke'ēltei 胎児 (1-40)	eme 女			+		○
10 ke'ēltei 胎児 (1-59)		女・人名		+		○
11 mörtei 道 (2-71)		či お前		+		○
12 mörtei 道 (2-71)		či お前		+		○
13 neretei 名前 (1-7)	ökin 娘			+		○
14 neretei 名前 (1-8)	ökin 娘			+		○
15 neretei 名前 (1-8)	ökin 娘			+		○
16 neretei 名前 (1-46)	kö'ün 子		+			●
17 neretei 名前 (1-60)	ökin 娘			+		○
18 neretei 名前 (1-66)		非明示		+		○
19 neretei 名前 (2-85)	düi 妹			+		○
20 neretei 名前 (2-94)		eke 母		+		○
21 neretei 名前 (4-146)		bi 私		+		○
22 neretei 名前 (5-155)	非明示			+		○
23 neretei 名前 (5-156)	ökin 娘			+		○
24 neretei 名前 (11-248)	öki 娘			+		○
25 neretei 名前 (11-249)	öki 娘			+		○
26 ni'ürtai 顔 (7-188)		eme 女		+		○
27 ölegeitei 揺りかご (8-203)		bi 私	+			●
28 ölegeitei 揺りかご (1-60)		男・人名	+			●
29 qutuctai 至福 (3-111)	üjin 夫人			+		○
30 sölsüitei 胆力 (2-74)	eke 母			+		○
31 sutai 至福 (3-111)	üjin 夫人			+		○
32 tergetei 車 (10-244)		eke 母		+		○
33 yeketei 大きい (1-7)	ökin 娘			+		○
34 yosutai 道理 (2-71)		či お前		+		○

-tai 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
35 yosutai 道理 (2-71)		či お前		+		○

-tai 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数	関与
36 altatai 金 (11-252)	har 文様		+		男
37 altatai 金 (11-252)	har 文様		+		男
38 altatai 金 (12-273)	har 文様		+		男
39 būri'ētei 器 (4-145)	tarag ヨーグルト		+		男
40 čō'ōrgatai 錠 (3-124)	tergen 車		+		－
41 čuctai 束 (1-19)	mūsūd 矢柄			+	複
42 čuctai 束 (1-22)	mūsūd 矢柄			+	複
43 e'ūltei 雲 (10-230)	šōni 夜		+		－
44 galtai 火 (9-229)	非明示		+		－
45 göre'ētei 獲物 (1-9)	gajar 所		+		－
46 hartai 文様 (11-252)	a'ūrasu 反物		+		男
47 hartai 文様 (11-252)	a'ūrasu 反物		+		男
48 hodutai 星 (10-230)	šōni 夜		+		－
49 hodutai 星 (11-254)	tenggeri 天		+		－
50 irgetei 縁布 (10-230)	ger 家		+		男
51 kilügūtei 轅 (6-177)	tergen 車		+		－
52 kōrisūtei 土壤 (11-254)	etügen 大地		+		－
53 kūrđūtei 車輪 (6-177)	tergen 車		+		－
54 naratai 太陽 (12-278)	非明示		+		－
55 ōljigetei 前室 (1-64)	tergen 車		+		複
56 örūgetei 天窓 (10-230)	ger 家		+		男
57 qa'ātai 閉じられた (2-101)	tergen 車		+		女
58 qara'ūtai 黒枠 (1-6)	tergen 車		+		女
59 qara'ūtai 黒枠 (2-100)	tergen 車		+		女
60 qara'ūtai 黒枠 (10-244)	tergen 車		+		女
61 siltesūtei 細条 (10-230)	ger 家		+		男
62 tenggisgetei 車軸 (3-124)	tergen 車		+		－

男、複と網掛けしているのは、「人以外」でもそこに「人」の関与があるときには、その「人」の性と数に引きずられるように呼応することもあるという筆者の考えに反する例だからである。

-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
1 ači'ātan 荷 (12-266)	複数・人名				+	○
2 aldatan 罪 (8-203)		haran 人々			+	○
3 aldaltan 罪 (9-224)		haran 人々			+	○
4 aldaltan 罪 (9-227)		ötögüs 長老達			+	○
5 aldaltan 罪 (9-227)		kešigten 宿直兵達			+	○
6 aldaltan 罪 (10-233)		čerbin 侍従達			+	○
7 aldaltan 罪 (12-278)		ötögüs 長老達			+	○
8 aldaltan 罪 (12-280)		非明示			+	○
9 aldaltan 罪 (12-280)		非明示			+	○
10 amitan 命 (11-254)	非明示				+	○
11 andacartan 宣誓 (3-108)		複数・人名			+	○
12 a'ürtan 気概 (4-139)	küčüten 力ある者達				+	○
13 a'ürtan 気概 (4-139)	jor kimes 勇者達				+	○
14 balacasutan 城 (11-249)	非明示				+	○
15 balacasutan 城 (12-265)		irgen 人衆			+	○
16 baratutan 汚れ (7-189)		irgen 人衆			+	○
17 baiyidaltan 陣営 (10-230)	kebte'ül 宿直兵				+	○
18 čiraitan 顔 (1-55)		非明示			+	○
19 elčiten 使者 (10-245)		jirin 二人			+	○
20 erdemüdten 諸才能 (4-139)	küčüten 力ある者達				+	○
21 erdemüten 才能 (7-191)	非明示				+	○
22 erdemüten 才能 (8-201)	dě'üner 弟達				+	○
23 erdemüten 才能 (9-224)	sayid 良い者達				+	○
24 e'üdenten 門 (8-203)	非明示				+	○
25 eyeten 和 (1-22)		ta お前達			+	○
26 eyeten 和 (5-166)		複数・人名			+	○
27 galtan 火 (7-193)		非明示			+	○
28 galtan 火 (7-193)		čeri'üd 兵士達			+	○
29 gagčatan 一つ (3-121)		ba 我々			+	○
30 gerten 家 (12-266)	複数・人名				+	○
31 hončitan 命中力 (4-139)	küčüten 力ある者達				+	○
32 itegelten 信頼 (5-149)	haran 人々				+	○
33 itegelten 信頼 (6-170)	非明示				+	○
34 itegelten 信頼 (6-172)	qoyar 二人				+	○

-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
35 itegelten 信頼 (10-230)	kebte'ül 宿直兵				+	○
36 itegelten 信頼 (12-266)	ina'ūd 寵臣達				+	○
37 itegelten 信頼 (12-266)	ina'ūd 寵臣達				+	○
38 jalqamşıgtan 恐れ (2-98)	複数・人名				+	○
39 jasactan 節度 (2-74)	sečed 賢者達				+	○
40 keleten 言葉 (9-229)	haran 人々				+	○
41 keleten 言葉 (10-245)	irgen 人衆				+	○
42 keleten 言葉 (10-245)	irgen 人衆				+	○
43 keşıgtan 宿直 (7-187)	非明示				+	○
44 keşıgtan 宿直 (7-191)	非明示				+	○
45 keşıgtan 宿直 (7-191)	非明示				+	○
46 keşıgtan 宿直 (7-192)	非明示				+	○
47 keşıgtan 宿直 (7-192)	非明示				+	○
48 keşıgtan 宿直 (9-224)	非明示				+	○
49 keşıgtan 宿直 (9-224)	非明示				+	○
50 keşıgtan 宿直 (9-224)	非明示				+	○
51 keşıgtan 宿直 (9-226)	非明示				+	○
52 keşıgtan 宿直 (9-226)	非明示				+	○
53 keşıgtan 宿直 (9-227)	非明示				+	○
54 keşıgtan 宿直 (9-227)	非明示				+	○
55 keşıgtan 宿直 (9-227)	非明示				+	○
56 keşıgtan 宿直 (9-227)	非明示				+	○
57 keşıgtan 宿直 (9-227)	非明示				+	○
58 keşıgtan 宿直 (9-227)	非明示				+	○
59 keşıgtan 宿直 (9-227)	非明示				+	○
60 keşıgtan 宿直 (9-227)	非明示				+	○
61 keşıgtan 宿直 (9-227)	非明示				+	○
62 keşıgtan 宿直 (9-227)	非明示				+	○
63 keşıgtan 宿直 (9-227)	非明示				+	○
64 keşıgtan 宿直 (9-227)	非明示				+	○
65 keşıgtan 宿直 (9-227)	非明示				+	○
66 keşıgtan 宿直 (9-228)	非明示				+	○
67 keşıgtan 宿直 (10-231)	非明示				+	○
68 keşıgtan 宿直 (10-231)	非明示				+	○

-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
69 kešigten 宿直 (10-231)	非明示				+	○
70 kešigten 宿直 (10-234)	非明示				+	○
71 kešigten 宿直 (12-269)	非明示				+	○
72 kešigten 宿直 (12-270)	非明示				+	○
73 kešigten 宿直 (12-278)	非明示				+	○
74 kešigten 宿直 (12-278)	非明示				+	○
75 kešigten 宿直 (12-278)	非明示				+	○
76 kešigten 宿直 (12-278)	非明示				+	○
77 kešigten 宿直 (12-278)	非明示				+	○
78 kešigten 宿直 (12-278)	非明示				+	○
79 kešigten 宿直 (12-278)	非明示				+	○
80 kešigten 宿直 (12-278)	非明示				+	○
81 kešigten 宿直 (12-279)	非明示				+	○
82 kešigentü 宿直兵 (9-224)	非明示				+	○
83 kišiten 恨み (4-136)	複数・人名				+	○
84 kišiten 恨み (9-214)	irgen 人衆				+	○
85 kötölten 従者 (11-247)	非明示				+	○
86 küčüten 力 (4-139)	非明示				+	○
87 mau'ūtan 悪い (7-189)		irgen 人衆			+	○
88 nemüreten 悪い (6-174)		tede 彼ら			+	○
89 nereten 名前 (1-10)		非明示			+	○
90 nereten 名前 (1-17)		非明示			+	○
91 nereten 名前 (1-46)		非明示			+	○
92 nereten 名前 (1-46)		非明示			+	○
93 nereten 名前 (11-263)	qoyar 二人				+	○
94 nikenten 一つ (3-105)		bida 我々			+	○
95 niketen 一つ (3-121)		ba 我々			+	○
96 numutan 弓 (3-116)	非明示				+	○
97 nutuctan 居営地 (11-249)	非明示				+	○
98 nutuctan 居営地 (12-265)		irgen 人衆			+	○
99 obogtan 姓 (1-11)		tede 彼ら			+	○
100 obogtan 姓 (1-40)		tede 彼ら			+	○
101 obogtan 姓 (1-41)		tede 彼ら			+	○
102 obogtan 姓 (1-42)		複数・人名			+	○

-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
103 obogtan 姓 (1-42)		複数・人名			+	○
104 obogtan 姓 (1-42)		複数・人名			+	○
105 obogtan 姓 (1-42)		複数・人名			+	○
106 obogtan 姓 (1-42)		複数・人名			+	○
107 obogtan 姓 (1-46)		非明示			+	○
108 obogtan 姓 (1-46)		非明示			+	○
109 obogtan 姓 (1-46)		tede 彼等			+	○
110 obogtan 姓 (1-46)		tede 彼等			+	○
111 obogtan 姓 (1-46)		非明示			+	○
112 obogtan 姓 (1-46)		tede 彼等			+	○
113 obogtan 姓 (1-47)		複数・人名			+	○
114 obogtan 姓 (1-47)		非明示			+	○
115 obogtan 姓 (1-47)		tede 彼等			+	○
116 obogtan 姓 (1-49)		tede 彼等			+	○
117 obogtan 姓 (11-263)	複数・人名				+	○
118 omogtan 誇り (4-139)	jor kime 豪勇者達				+	○
119 omogtan 誇り (4-139)	irgen 人衆				+	○
120 omogtan 誇り (4-140)	kö'üd 子供達				+	○
121 öčilten 奏上 (1-64)		irgen 人衆			+	○
122 öljeiten 吉祥 (3-125)	nököd 伴ら				+	○
123 öljeiten 吉祥 (10-230)	kebte'ül 宿直兵				+	○
124 öljeiten 吉祥 (10-230)	kebte'ül 宿直兵				+	○
125 önggeten 顔色 (1-64)		irgen 人衆			+	○
126 öšiten 仇 (4-133)	irgen 人衆				+	○
127 öšiten 仇 (4-136)	複数・人名				+	○
128 öšiten 仇 (8-199)	irgen 人衆				+	○
129 öšiten 仇 (9-214)	irgen 人衆				+	○
130 qalqatan 楯 (1-64)		irgen 人衆			+	○
131 qariyatan 関係 (7-186)	irge 人衆				+	○
132 qariyatan 関係 (8-208)	ulus 民人				+	○
133 qariyatan 関係 (10-245)	irgen 人衆				+	○
134 qariyatan 関係 (10-245)	irge 人衆				+	○
135 qortan 矢筒 (12-275)	emeged 老婆達				+	○
136 saqaltan ひげ (12-275)	emeged 老婆達				+	○

-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
137 sayitan 良い (7-191)	非明示				+	○
138 sedkilten 心 (10-230)	kebte'ül 宿直兵				+	○
139 serelten 心 (6-170)	irgen 人衆				+	○
140 sölsüten 胆 (4-139)	jor kimes 勇者達				+	○
141 sutan 至福 (2-74)	kö'üd 子供達				+	○
142 teri'üten 頭 (1-46)	複数・人名				+	○
143 teri'üten 頭 (1-59)	複数・人名				+	○
144 teri'üten 頭 (3-122)	複数・人名				+	○
145 teri'üten 頭 (4-129)	複数・人名				+	○
146 teri'üten 頭 (4-132)	複数・人名				+	○
147 teri'üten 頭 (4-133)	複数・人名				+	○
148 teri'üten 頭 (4-133)	複数・人名				+	○
149 teri'üten 頭 (4-133)	複数・人名				+	○
150 teri'üten 頭 (4-141)	複数・人名				+	○
151 teri'üten 頭 (4-141)	非明示				+	○
152 teri'üten 頭 (4-141)	非明示				+	○
153 teri'üten 頭 (4-141)	非明示				+	○
154 teri'üten 頭 (4-141)	非明示				+	○
155 teri'üten 頭 (4-141)	非明示				+	○
156 teri'üten 頭 (8-198)	複数・人名				+	○
157 teri'üten 頭 (8-199)	kö'üd 子供達				+	○
158 teri'üten 頭 (8-199)	kö'üd 子供達				+	○
159 teri'üten 頭 (8-203)	noyad 長官達				+	○
160 teri'üten 頭 (9-210)	noyad 長官達				+	○
161 teri'üten 頭 (10-236)	kö'üd 子供達				+	○
162 teri'üten 頭 (11-251)	elč'in 使者達				+	○
163 teri'üten 頭 (11-254)	elč'in 使者達				+	○
164 teri'üten 頭 (11-254)	elč'in 使者達				+	○
165 teri'üten 頭 (12-269)	kö'üd 子供達				+	○
166 teri'üten 頭 (12-269)	kö'üd 子供達				+	○
167 teri'üten 頭 (12-269)	kö'üd 子供達				+	○
168 teri'üten 頭 (12-270)	kö'üd 子供達				+	○
169 teri'üten 頭 (12-270)	kö'üd 子供達				+	○
170 teri'üten 頭 (12-274)	kö'üd 子供達				+	○

-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
171 teri'üten 頭 (12-277)	kö'üd 子供達				+	○
172 teri'üten 頭 (12-280)	kö'üd 子供達				+	○
173 teri'üten 頭 (12-280)	kö'üd 子供達				+	○
174 tugtan 旗 (6-170)		tede 彼等			+	○
175 turastan 楯 (4-144)	čeri'üd 兵士達				+	○
176 tusatan 功劳 (8-203)	非明示				+	○
177 tu'ürgatan 帳幕 (8-203)	非明示				+	○
178 unu'ātan 乗り物 (6-174)		tede 彼等			+	○
179 üiyileten 罪 (5-154)	非明示				+	○
180 yabudaltan 行い (10-230)	kebte'ül 宿直兵				+	○
181 yabudaltan 行い (10-233)		非明示			+	○
182 yosutan 道理 (8-203)	非明示				+	○
183 yosutan 道理 (8-203)	非明示				+	○
184 yosutan 道理 (9-227)	非明示				+	○
185 yosutan 道理 (9-227)	非明示				+	○
186 yosutan 道理 (10-246)		ta お前達			+	○

-tan 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数	関与
187 galtan 火 (7-194)		非明示		+	—
188 gereten 光 (7-189)		qoyar 二つ		+	—
189 kelten 言葉 (7-195)		noqais 犬ども		+	—
190 kemten 限り (8-199)	aba 卷狩り			+	複
191 manglaitan 額 (7-195)		noqais 犬ども		+	—
192 mina'ātan 鞭 (7-195)		noqais 犬ども		+	—
193 öreten 心 (7-195)		noqais 犬ども		+	—
194 qoši'ūtan 口先 (7-195)		noqais 犬ども		+	—
195 qurčatan 鋭利 (12-270)		meses 刀具 (複数)		+	—
196 teri'üten 頭 (11-258)	balacad 城 (複数)			+	—
197 teri'üten 頭 (11-263)	balacad 城 (複数)			+	—
198 teri'üten 頭 (12-270)	balacad 城 (複数)			+	—
199 teri'üten 頭 (12-274)	balacad 城 (複数)			+	—
200 usutan 水 (11-262)	müred 河 (複数)			+	—
201 usutan 水 (12-270)	müred 河 (複数)			+	—

5. 『知恵の鍵』における当該の派生接尾辞と共同格

『元朝秘史』以前の状況を知るための史料として、この章では『知恵の鍵』(Oyun Tülkigür)を取り上げる。これは、チンギス・ハーン(1162～1227)が書いたという見解³⁴⁾がある。この見解を支持するなら、文献としては『元朝秘史』の性と数の呼応体系が確立されるより少し前の史料と捉えることが可能である。Ц.Буянзая³⁵⁾は、「モンゴル人の伝統的な考え方が濃く反映された人生・生活のありようを、多方面に渡って完結にまとめて深い趣のある詩として編纂された」史料であるところにその文学史的意義を見出している。当時の口語の状況が反映されている『元朝秘史』と、必ずしもそれが反映されていない『知恵の鍵』とは、同一線上に並べられないかもしれない。また、『元朝秘史』以前と言ってもそれほど時間の隔たりはない。しかし、『元朝秘史』以前の状況を推測するための材料となる史料が他にないので、参考までにこれを提示することにする。

当該の派生接尾辞は、-tu,-tai,-tan の三形態すべて現れる。その内訳は以下の通りである。

-tu	26 回
-tai	41 回
-tan	11 回
計	78 回

この史料では -tu より -tai のほうがやや上回っている。

次に、これらを<限定用法>と<述語用法>に分けると以下のようなになる。

	-tu	-tai	-tan	計
限定用法	26	16	11	53
述語用法	0	25	0	25
計	26	41	11	78

(<限定用法><述語用法>ごとの内訳)

-tu と -tan の二形態において<述語用法>が全く見られないのが『元朝秘史』とは異なる大きな特徴である。しかし、『知恵の鍵』は『元朝秘史』と比べると当該の派生接尾辞の総数では2割にも満たない。よって、これをもって「-tu と -tan の<述語用法>は、『元朝秘史』以前にはなかった」と判断するのは早計である。また、同様の理由により使用頻度の点で -tai のほうが多かったと断言することも避けた。三形態とも存在していた点に関しては確かであるように思われる。

さらに、被限定詞もしくは主語の位置に来る語が何かによって分けると、以下のような数

値が得られる

	-tu	-tai	-tan	計
人	15	36	11	62
人以外（動物）	2	0	0	2
人以外（もの）	9	5	0	14
計	26	41	11	78

（「人」「動物」「もの」に分けた場合の内訳）

『元朝秘史』で行ったように、いったん「動物」を別区分としてみた。やはり、データの総数が小さいのが難点であるが、「人以外」は「動物」を含んでも含まなくても -tu と -tai の両形態が現れ、-tu のほうが多いことが分かる。この点に関しては、『元朝秘史』と同じ特徴を有している。

なお、上の表で「動物」に対する -tu は2例あるとしているが、うちの1例は、

γaltu qorqai （火を持つ虫 → 蜚）(p.125)

当該のテキストは、キリル文字と韓国語訳も掲載されているが、（ ）内の数字は、ラテン文字転写の例が載っているページを示している。

である。現代語の -tu の役割を「定型表現を形成する」と本稿では述べているが、その役割は現代になって急に生じたのではなく、僅かながら当時も存在してことを示す例であると言える。現代語の役割を思わせる例としては他に、

časutu ayula （雪山）

という例もあるが、それ以外は現代語の指標から見た場合 -tu でなければならない必然性はなく、-tai と交替してもニュアンスは変わらないように思える。

-tu, -tai, -tan の三形態とも『元朝秘史』以前から存在していたことは以上の通りであるが、最も重点的に見なければならぬのは、被限定詞もしくは主語の位置に「人」が来る場合、そこに性と数の呼応があったかどうかである。このとき、『知恵の鍵』の性質が問題となる。すなわち、『元朝秘史』であれば kü'ün（人）とだけあっても登場人物のやり取り等から性別を特定することが容易であり、それ自体には性差のない語でも文脈から男女を判断して本稿におけるデータを作成したのであるが、『知恵の鍵』は物語ではなく教訓書のような体裁を取っているため、そこに現れる kü'ün その他の語は「人」一般を指していることが多くなっており、

-tu 11回、-tai 32回

がそれに該当する。-tu と -tai に関して、これらを除外して性別を特定できる「人」だけを抜き出すと、

-tu 4回、-tai 6回

というように、非常に少なくならざるを得ないのである。それを踏まえた上で「人」の内訳を表示すると次のようになる。

	-tu	-tai	計
男性	2	2	4
女性	0	1	1
複数	2	3	5
計	4	6	10

(被限定詞もしくは主語が「人」の場合の内訳)

以下、いくつか例を挙げる。なお、格などを除いて分かち書きのハイフンは省略する。

ariyun yabudaltu blama-yi burqan metü taki. (p.99)

清き行いのあるラマ僧を仏のように敬え。

erdemütü blama-yin tangyariy-i büü ebde. (p.111)

修行を積んだラマ僧の誓いを 破るな。

という例では、これだけ見ると、「ラマ僧」は男性なのだからそれに対する呼応の -tu であると言えるかもしれないが、

böke yeke küçüte bolqu. (p.89)

力士は非常に（強さを持つ）強くなる。

という例では、男性である「力士」に対して -tai が用いられている。

üneker mayu sedkilte kümüs (p.97)

本当に悪い 心を持つ人々

という例では、複数である「人々」に対して -tai が用いられている。-tai が女性に対して用いられているのは、

qatun kümün qamuγ sayıqan-i tegüsbecü, ayali mayutai bolbasu

夫人は 完璧に繕ったとしても、性格が悪い（のを持つ）なら、

の1例があるだけである。

「人」の場合には強固に呼応が守られている『元朝秘史』の視線に立って、呼応が守られていない部分に網掛を施している。しかし、性の呼応を見る参考になる総数が10例しかないとはいえ、原則に適っているのは3例というデータを見る限り、-tu と -tai の間には性による呼応という概念がそもそもなかったというのが『元朝秘史』以前の状態であったと推定される。

ちなみに、「人」一般しては、

üneker gemtū kümün-i geske. (p.77)

本当に罪のある人を罰せよ。

erdenitū kümün-ü bey-e oluysan tula (p.119)

宝を持つ 人の 体を得たので、

jöbteḡ yabuqu kümün-i büü darula.

buruḡutai yabuqu kümün-i büü asara. (p.103)

(正しさを持って) 正しく行く人を圧するな。

(間違いを持って) 間違っていく人を助けるな。

という例が挙げられる。

また、「人以外」としては

kilinčetū üyile-dür büü sinu. (p.86)

罪のある 行いに 執着するな。

ayultu tamu-yin qayalya-yi ese qayaysan-u tula (p.108)

(恐ろしさのある) 恐ろしい地獄の扉を閉めなかったので、

qujirtai yajar (p.116)

天然のソーダのある地

oyun tülkigür nereteḡ

šastir tegüsbei. (p.130)

オヨン・トゥルフル（知恵の鍵）という名（のある）経典を完成した。

のように、-tu,-tai それぞれの例を挙げられる。

以上のことから、『知恵の鍵』の -tu と -tai の役割に関してまとめると、

男性 -tu、女性 -tai

という「人」の性による差あったようには感じられず、「人」一般さらには「人以外」を表すのに両形態の役割差は未分化な状態（自由交替が十分可能）ではなかったかと推測されるのである。

なお、『知恵の鍵』で合計 11 回現れる -tan には、すべて＜限定用法＞であるとしたが、そのうち

qoortan dayisun (p.102)

恨みを持つ 敵

という複数に対する呼応が明白な例は 1 例のみである。これ以外の -tan は対応する被限定詞もしくは主語が明示されず、

amitan (p.76 他) 生命を持つ者

öndür yeke jayayatan (p.84) 崇高な運命を持つ者

のように、集合名詞を形成する役割を主に担っている。集合名詞形成の -tan は、上例で言う amitan の後に「人」(複数)が省略された＜限定用法＞の一種と本稿では見なしており、これについては「複数」に対する呼応が自動的に守られている

なお、『知恵の鍵』では共同格は以下のように -luya/-lüge の形態で現れる。-tai の形態では全く現れない。

olan kümün-lüge nayiran jokilduji (p.74)

多くの人と 協調して、

segül ügei-eče busu noqai-luy-a adali. (p.116)

尻尾がないことを除けば犬と同じだ。

補遺 『回鶻式蒙古語文献氾編』

『元朝秘史』に先行する文献は少なく、『知恵の鍵』以外では道布（1983）による『回鶻式蒙古語文献氾編』から『元朝秘史』以前の時代の碑文等の状況が知られる。当該の派生接尾辞に関しては必ずしも多くのデータを得られないが、あえてその少ないデータから状況を提示すると、-tu と -tai の間には男女による呼応の別はなく、両形態の頻度はほぼ同じであるという状況が見られる。

<索引 2> 『知恵の鍵』における当該の派生接尾辞に関する索引

表記の仕方等は『元朝秘史』と同様である。

本文同様、分かち書きによる表記は行わない。

筆者は、『元朝秘史』以前には性による呼応はなかったと推測するが、書式上『元朝秘史』の原則に照らし合わせて、それが守られているかどうかの判定は行う。また、性別の特定できない「人」一般の場合は、空欄のままとして、呼応の欄には「×」と記す。

多くが「人」一般なので、被限定詞もしくは主語が「人以外」における「人の関与」の有無の判定は行わないこととする。

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
1 albatu 公務 (p.79)	非明示					×
2 albatu 公務 (p.113)	非明示					×
3 erdemtü 教養 (p.111)	blama ラマ僧		+			○
4 erdemtü 教養 (p.123)	kümün 人					×
5 erdenitü 宝 (p.119)	kümün 人					×
6 erdenitü 宝 (p.123)	kümün 人					×
7 erdenitü 宝 (p.131)	kümün 人					×
8 gemtü 罪 (p.77)	kümün 人					×
9 qalamjitu 援助 (p.91)	boγul 奴隷					×
10 sedkiltü 心 (p.101)	aqa degüü 兄弟				+	●
11 uqaγantu 理性 (p.125)	kümün 人					×
12 yabudaltu 行い (p.99)	blama ラマ僧		+			○
13 yeketü 多い (p.89)	非明示					×
14 yeketü 多い (p.89)	noyad 領主たち				+	●
15 yeketü 多い (p.99)	非明示					×

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
16 ayulutu 恐れ (p.109)	tamu 地獄		+	
17 buyantu 徳 (p.87)	üyilen 行い		+	
18 časutu 雪 (p.123)	aγula 山		+	
19 γaltu 火 (p.125)	qorqai 虫		+	
20 γayiqamsiytu 驚き (p.123)	üloiger 伝説		+	
21 gemtü 罪 (p.75)	yabudal 行動		+	
22 irtü 刃 (p.115)	mese 剣		+	

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
23 kilençetü 罪 (p.87)	üyile 行い		+	
24 neretü 名前 (p.123)	suryal 教え		+	
25 qoortu 恨み (p.79)	sedkil 心		+	
26 qoortu 恨み (p.83)	činua 狼		+	

-tai 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
1 aryatai 詭計 (p.97)	kümün 人					×
2 bolıymjıtai 注意 (p.121)		非明示				×
3 buruyutai 誤り (p.103)		非明示				×
4 čidaltai 能力 (p.129)		非明示				×
5 čidaltai 能力 (p.129)		非明示				×
6 ebedčitei 病気 (p.117)	kümün 人					×
7 ebtei 和 (p.95)		qoyar kümün 二人			+	●
8 ejentei 主 (p.127)		非明示				×
9 erdemtei 教養 (p.81)		toyın kümün ラマ僧	+			●
10 erdemtei 教養 (p.127)		非明示				×
11 jöbtei 正しい (p.103)	kümün 人					×
12 keregtei 必要 (p.103)		非明示				×
13 keregtei 必要 (p.109)		非明示				×
14 keregtei 必要 (p.109)		非明示				×
15 keregtei 必要 (p.111)		非明示				×
16 keregtei 必要 (p.113)		非明示				×
17 keregtei 必要 (p.115)		非明示				×
18 keregtei 必要 (p.115)		非明示				×
19 keregtei 必要 (p.119)		非明示				×
20 keregtei 必要 (p.119)		非明示				×
21 keregtei 必要 (p.123)		非明示				×
22 küčütei 力 (p.89)		böke 力士	+			●
23 mayutai 悪い (p.81)		qatun kümün 夫人		+		○
24 mayutai 悪い (p.101)	törül 親類					×

-tai 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
25 neretei 名前 (p.89)		非明示				×
26 nöküdei 友達 (p.91)		非明示				×
27 örgesütü 刺 (p.113)		非明示				×
28 ösiyetei 恨み (p.103)	kümün 人					×
29 qaratai 黒い (p.87)	kümün 人					×
30 qoortai 憎悪 (p.103)	ken 誰					×
31 qoortai 憎悪 (p.113)		非明示				×
32 qoortai 憎悪 (p.115)		非明示				×
33 sedkiltei 心 (p.97)	kümüs 人々				+	●
34 sidütei 齒 (p.115)		非明示				×
35 tusatai 援助 (p.103)	ken 誰					×
36 tusatai 援助 (p.107)		非明示				×
37 tusatai 援助 (p.109)	kümün 人					×
38 tusatai 援助 (p.113)	dayisun 敵				+	●

-tai 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
39 qujirtai (p.117)	ɣajar 土地		+	
40 tusatai (p.109)	sanaɣa 思い		+	
41 yarsiɣtai (p.109)	üyile 行い		+	

-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
1 amitan 命 (p.77)	非明示				+	○
2 amitan 命 (p.77)	非明示				+	○
3 amitan 命 (p.77)	非明示				+	○
4 amitan 命 (p.109)	非明示				+	○
5 amitan 命 (p.109)	非明示				+	○
6 amitan 命 (p.115)	非明示				+	○
7 gemten 罪 (p.103)	非明示				+	○
8 jayayatan 運命 (p.85)	非明示				+	○
9 jigürten 翼 (p.123)	非明示				+	○
10 qoortan 憎悪 (p.103)	dayisun 敵				+	○
11 terigüten 頭 (p.79)	非明示				+	○

6. Лү.『アルタン・トブチ』における性と数の呼応

一般に『アルタン・トブチ』は、

- ① 著者不明のもの（17世紀？）
- ② Лувсанданзан によるもの（17世紀）³⁶⁾
- ③ Мэргэн гэгээн によるもの（18世紀）

という大きく三つの系統があるとされている³⁷⁾。この章ではまず、②の Лувсанданзан のテキストを通して『元朝秘史』との比較を行う。③の Мэргэн гэгээн のテキストについては、同じ『アルタン・トブチ』という名称を冠していても、Лувсанданзан のテキストとは記述内容や時代に隔たりがあるので、章を変えて9章で考察する。

6.1 Лү.『アルタン・トブチ』と『元朝秘史』との比較考察

この史料について Ц.Буянзая³⁸⁾ は、「インド・チベットの王の系譜がモンゴルに繋がっているという記載が見られる」「主要部分は、『元朝秘史』に依拠している」「チンギス・ハーン死後以降、オゴタイ・ハーンの即位からリグデン・ハーンに至るまでの歴史が書かれている」という三つの特徴を挙げている。この節における『アルタン・トブチ』は、『元朝秘史』との同一場面における派生接尾辞の現れ方の対比を明らかにするのが主目的である。17世紀の文献において小沢の言うように呼応が崩壊していたのかどうかを見るには、同一場面を取り出して比較するのが分かりやすいからである。よって、最初のインド・チベットの王の記述や、後半のチンギス・ハーン死後以降の大部分の記述、その他『元朝秘史』とはあまり内容が重なっていない以下の網掛けの節のは除外して考察を進めることにする。本稿では、Ш.Чоймаа（2006）によるテキスト³⁹⁾を使用する。

ここで、左側に『アルタン・トブチ』（Лү.АТ と略す）、右側に『元朝秘史』（МНТ と略す）として各節の大まかな対応を示しておく。

1a		6a	16~21	11a	55~56	16a	71~73	21a	90	26a	105
1b		6b	21~24	11b	57~58	16b	74~75	21b	90~91	26b	105~106
2a		7a	24~30	12a	59	17a	75~76	22a	91~93	27a	106~107
2b		7b	30~34	12b	59	17b	76~78	22b	93~95	27b	108~109
3a		8a	34~41	13a	59	18a	78~79	23a	96~97	28a	109~110
3b		8b	41~46	13b	60~61	18b	79~80	23b	97~99	28b	111
4a		9a	46	14a	62~64	19a	80~82	24a	100~101	29a	111~113
4b	1~4	9b	47~50	14b	64~66	19b	82~84	24b	101~102	29b	113~116
5a	5~9	10a	50~53	15a	67~69	20a	84~86	25a	103~104	30a	116~117
5b	10~16	10b	53~55	15b	69~71	20b	87~90	25b	104	30b	118

31a	118~120	49a		67a	211~213	85a		103a		121a
31b	120~121	49b		67b	213~214	85b		103b		121b
32a	121~122	50a		68a		86a		104a		122a
32b	122~123	50b		68b		86b		104b		122b
33a	123	51a		69a	215~216	87a	239	105a		123a
33b	124	51b	149	69b	217~219	87b	239~240	105b		123b
34a	124~126	52a	149	70a	219	88a	240~241	106a		124a 265~266
34b	127~128	52b	149	70b	219~220	88b	241	106b		124b~177a
35a	128~130	53a	150~151	71a	221~225	89a	242	107a		
35b	130	53b	151~152	71b	225	89b		107b		
36a	131	54a	152	72a	225	90a		108a		
36b	131~132	54b	152~153	72b	226	90b		108a		
37a		55a	153~154	73a	226~227	91a		109a		
37b	133	55b	154~155	73b	227	91b		109b		
38a	133~134	56a	155~156	74a	227~229	92a		110a	247	
38b	134~136	56b	156~158	74b	229	92b		110b	247~248	
39a	136~137	57a	158~161	75a	229~230	93a		111a	248	
39b	137~138	57b	161~163	75b	230~232	93b		111b	248~249	
40a	138~140	58a	163~164	76a	233~234	94a		112a	249~251	
40b	140~141	58b	164~165	76b	234	94b	244	112b	251~252	
41a	141~142	59a	165~166	77a		95a	244	113a	252~253	
41b	142~143	59b	167	77b		95b	244	113b	253	
42a	144~145	60a	167~168	78a		96a	245	114a	254	
42b	145	60b	168~169	78b		96b	245	114b	255	
43a	145	61a	169~170	79a		97a	245	115a	256~257	
43b	145~146	61b	170	79b		97b	245	115b	257	
44a	146	62a	170	80a		98a		116a	257~258	
44b	147	62b	170~171	80b		98b		116b	258~260	
45a		63a	171	81a		99a		117a	260	
45b		63b	171~173	81b		99b		117b	260~263	
46a		64a	173~174	82a		100a		118a	263~264	
46b		64b	174~175	82b		100b		118b		
47a		65a	175~176	83a		101a		119a	264	
47b		65b		83b		101b		119b		
48a		66a	209	84a		102a		120a		
48b		66b	209~211	84b		102b		120b		

なお、省いた節を含む Jly.『アルタン・トブチ』における当該の派生接尾辞の全貌については後で改めて記す。

最初に、当該の派生接尾辞が Jly.『アルタン・トブチ』で何回現れるかを示す。右側には、参考までに『元朝秘史』の回数を再掲載する。

	Jly. AT	MHT
-tu	210 回	233 回
-tai	58 回	62 回
<u>-tan</u>	<u>123 回</u>	<u>201 回</u>
計	391 回	496 回

『元朝秘史』にあった kešigtentü は、Jly.『アルタン・トブチ』にも現れる。これは、ここでも -tan と -tu をそれぞれ 1 回と数え、《索引》にもそれぞれの欄に掲げている。

さて、Jly.『アルタン・トブチ』と『元朝秘史』とでは、前者のほうが生産量では大きく上回る。したがって、『元朝秘史』に描かれている場面は Jly.『アルタン・トブチ』にも描かれていることのほうが多いのであるが、『元朝秘史』には描かれているのに、Jly.『アルタン・トブチ』にはないという場面もあることはある。表で -tan だけに極端な差が見られるのは、『元朝秘史』では -tan が多く用いられている場面そのものが Jly.『アルタン・トブチ』には描かれていないことが大きな要因であって、必ずしも 17 世紀には -tan が生産的でなくなったことを示す数値なのではないことは断っておかなければならない。

-tu と -tai の二形態の使用頻度の比率は、Jly.『アルタン・トブチ』では 78 : 22 である。『元朝秘史』では 82 : 18 であったので、使用頻度に関しては、大きな変化が見られないことが分かる。

次に、これを＜限定用法＞と＜述語用法＞とに分けると以下のようにになっている。

Jly.AT

	-tu	-tai	-tan	計
限定用法	156	39	84	279
述語用法	54	19	39	112
計	210	58	123	391

MHT

	-tu	-tai	-tan	計
限定用法	149	48	140	337
述語用法	84	14	61	159
計	233	62	201	496

(＜限定用法＞＜述語用法＞ごとの内訳)

三形態とも＜限定用法＞の比率が高い点では、両史料に大きな差異は見られない。形態別に見ると、＜限定用法＞：＜述語用法＞の比率は、-tu では、

『元朝秘史』 64 : 36

Лy.『アルタン・トブチ』 74 : 26

現代語の小説 100 : 0

となっていて、＜述語用法＞の減少傾向が少し感じられる。-tai は、

『元朝秘史』 77 : 23

Лy.『アルタン・トブチ』 67 : 33

現代語の小説 42 : 58

となっていて、ここでは -tu とは逆に＜述語用法＞の増加傾向がごく僅かながら感じられる。-tan は、

『元朝秘史』 70 : 30

Лy.『アルタン・トブチ』 68 : 32

現代語の小説 100 : 0

となっていて、全く変化は見られない。現代語では集合名詞を形成する役割に特化しているので、あえて区分するならすべて＜限定用法＞である。『元朝秘史』、Лy.『アルタン・トブチ』でも、集合名詞は＜限定用法＞としている。

さらに、被限定詞もしくは主語の位置に来る語が何かによって分けると、以下のような数値が得られる。「元朝秘史」で行ったように、ここでもいったん「動物」を別区分とした場合には以下ようになる。

Лy.AT

	-tu	-tai	-tan	計
人	155	38	123	316
人以外（動物）	14	0	0	14
人以外（もの）	41	20	0	61
計	210	58	123	391

MHT

	-tu	-tai	-tan	計
人	179	35	186	400
人以外（動物）	23	0	6	29
人以外（もの）	31	27	9	67
計	233	62	201	496

（「人」「動物」「もの」に分けた場合の内訳）

『元朝秘史』で僅かに見られる「人以外」に対応する -tan が Лy.『アルタン・トブチ』では使用されていないが、これは -tan が「人以外」では使用されなくなったことを示しているとは言い難い。「動物」では -tai が用いられない点は両文献に共通しているが、ここに重大な要素が秘められているとは解釈しない。ただし、Лy.『アルタン・トブチ』でも試しに「動物」を除外して「もの」だけ取り出しても、-tu と -tai では -tu のほうが倍現れている点は看過できない。すなわち、「人以外」は -tai であるという見方は Лy.『アルタン・トブチ』においても当てはまらないのである。

以上のことを踏まえた上で、性と数の呼応について見て行く。

6.1.1 「人」

まず、被限定詞もしくは主語の位置に「人」が来るときの状況を表にすると以下のようになる。

Лй.АТ

	-tu	-tai	-tan	計
男性	126	9	0	135
女性	15	27	0	42
複数	14	2	123	139
計	155	38	123	316

MHT

	-tu	-tai	-tan	計
男性	162	3	0	165
女性	5	32	0	37
複数	12	0	186	198
計	179	35	186	400

(被限定詞もしくは主語が「人」の場合の内訳)

Лй.『アルタン・トブチ』では、316 例中網掛けを除く 276 例（約 87%）が原則に合っている。形態別では、

-tu は、155 例中 126 例 すなわち約 81% （90%以上）

-tai は、38 例中 27 例 すなわち約 71% （90%以上）

-tan は、123 例すべて すなわち 100% （100%）

() は、『元朝秘史』

が呼応の原則通り現れるのである。-tai に関しては『元朝秘史』と比べて、かなり数値が低くなっていることが分かる。-tu も呼応の適合率もやや下がってはいる。しかし、全体としては性による呼応が小沢の指摘するように、「15、16 世紀の蒙古語では消失」と見なせるほどの崩壊度なのであろうか。-tan は「数」の呼応であるから特殊であると見なして、-tu と -tai だけに絞って「性」の適合率を見ても、『元朝秘史』の 214 例中 194 例（約 91%）に対して、Лй.『アルタン・トブチ』は 193 例中 153 例（約 79%）が呼応に合っている。確かに下がってはいるが、「消失」と言えるほどの下がり具合なのかとなると、必ずしもそうは言えず、むしろまだ呼応の痕跡を十分留めていると解釈するほうが妥当であるまいか。

以下では、前章で挙げた『元朝秘史』の例をもう一度挙げながら Лй.『アルタン・トブチ』の当該箇所と比較する。なお、ここでは比較対象となる前章の『元朝秘史』の例文については、原文（漢字音訳）は割愛してラテン文字転写と日本語訳のみ掲載する。一方、Лй.『アルタン・トブチ』の例文の表記に関しては、たとえばテキストのラテン文字転写で ner-e-tü（名前を持つ）とあっても、本稿ではハイフンのない形で neretü と表記する。ただし、格などの場合にはハイフンを残す。また、このテキストの転写では人名も小文字で始めているが、人名の頭文字は大文字に改める。それ以外の表記については、筆者による変更は加えないことにする。

まず、派生接尾辞が接続している語が nere (名前) の場合に、男性だから -tu という呼応が守られている『元朝秘史』の場面に対応する例から見る。

tere Jadaradai-yin kö'ün Tügü'üdei neretü büle'ē. (1-40) <<MHT>>
そのチャダラダイの子は、トゥグウデイという名を持つのであった。

tere Jurčidai-yin köbegün Tögüdei neretü bülüge. (8a) <<Jly.AT>>
そのチャルチダイの子は、トゥグウデイという名を持つのであった。

Jadaradai~Jurčidai と人名の綴りは若干異なるが、Jly.『アルタン・トブチ』でも呼応は守られている。次に、女性だから -tai という呼応が守られている場面に対応する例を見る。

Bargujin go'ā-ča töregsen Alan-go'ā neretei ökin tere. (1-8) <<MHT>>
バルグデン・ゴアから生まれたアラン・ゴアという名を持つ娘が彼女である。

Alun-yowa neretü ökin ajuyu. (5a) <<Jly.AT>>
アラン・ゴアという名を持つ娘である。

「バルグデン・ゴアから生まれた」と対をなす記述はないが、問題なのはここで ökin (娘) に対して -tu が用いられていることである。つまり、『元朝秘史』では呼応に適っていたのに、Jly.『アルタン・トブチ』では崩れているのである。さらに、複数だから -tan という呼応が守られている場面に対応する例を見る。

Alan-go'ā Dobun-mergen-dur irejü qoyar kö'ün töreülbi.
アラン・ゴアは、ドブun-メルゲンのところに行って、二人の子供を産んだ。
Bügünütei Belgünütei nereten büle'ē. (1-10) <<MHT>>
ブグヌテイ、ベルグヌテイという名を持っていた。

Alun-yowa Dobu mergen-dür irejü
アラン・ゴアは、ドブun-メルゲンのところに行って、
Belgütei Begünütei nereten qoyar köbegün törübei. (5b) <<Jly.AT>>
ブグヌテイ、ベルグヌテイという名を持つ 二人の 子供を産んだ。

複数に対する派生接尾辞の呼応は、両史料とも守られている。しかし、動詞語尾に着目すると、女性単数の主語に対する「産んだ」の語尾が、『元朝秘史』では -bi と守られているのに対して、Jly.『アルタン・トブチ』では -bei と崩れていることが分かる。-bei は主語が複

数のとき用いられる動词语尾である。

また、*nere* に接続する派生接尾辞をめぐって、男性なのに *-tai* が現れている理由について、その人物が女性っぽい性格だったからであるというように小沢が説明していた問題の箇所は、

Qačín-nu kö'ũ Noyagidai neret*ej* büle'ě. (1-46) «MHT»
カチンの子は ノヤギダイという名を持っていた。

Qači külüg-ün köbegün Qayidu neret*ü* bülüge. (9a) «Jly.AT»
カチ・クルグの子は カイドウという名を持っていた。

のようにの名前が変わっている。本稿の考察で問題にしなければならないのは、登場人物の性別である。カイドウは文脈からも男性である。したがって、『元朝秘史』では崩れている呼応が Jly.『アルタン・トブチ』では守られているということになる。

次に、派生接尾辞が接続している語が *nasu* (年齢) の場合に、男性だから *-tu* という呼応が守られている『元朝秘史』の場面に対応する例を見る。

Joči - qasar dolo'ān nasut*u* büle'ě. (1-60) «MHT»
ジョチ・カサルは 七 歳 であった。

Joči-qasar doluγan nasut*ai* bülüge. (13b) «Jly.AT»
ジョチ・カサルは 七 歳 であった。

この描写では、Jly.『アルタン・トブチ』で呼応が崩れていることが分かる。次に、女性だから *-tai* という呼応が守られている場面に対応する例を見る。

Temüjin-eče niken nasun yeke harbant*ai* aju'ū. (1-66) «MHT»
テムジンより 一歳 年上の 十歳 であった。

Tömüjin-eče inu nigen nasun egečiken arban nasut*u* ajuγu. (14b) «Jly.AT»
テムジンより 一歳 姉の 十歳 であった。

指している人物は女性である。したがって、Jly.『アルタン・トブチ』ではここも呼応が崩れていることになる。なお、このテキストではテムジンは Tömüjin と表記されているのでそれに従う。Tömüjin ではテムジンとは読めないが、混乱を避けるため筆者による日本語の人名表記は変えないことにする。

また、『元朝秘史』では慣用表現であっても男性か女性かで派生接尾辞の部分は使い分けられているのであった。当該の場面对応する例を見る。

(男性例)

Dei-sečen ügülerün ene kö'ün nidün-tür-iyen galtu ni'ür- tür-iyän
デイ・セチェンが言うには この 子は 目に 火を持ち、 顔に
geretü kö'ün bui. (1-62) «MHT»
光を持つ 子です。

Deyi seçen ögülerün činu nidün-tür-iyen γaltu niγur-tur-iyän
デイ・セチェンが言うには この子は 目に 火を持ち、 顔に
gereltü köbegün buyu. (14a) «Jly.AT»
光を持つ 子です。

上例では、Jly.『アルタン・トブチ』でも呼応が守られている。

(女性例)

ni'ür- tur-iyän geretei nidün-tür-iyen galtai ökin-ü üjeju (1-66) «MHT»
顔に 光を持ち、 目に 火を持つ 娘を 見て、

nidün-tür-iyen γaltai niγur-tur-iyän gereltei ökin-i üjeju (14b) «Jly.AT»
目に 火を持ち、 顔に 光を持つ 娘を 見て、

順番に異同が見られるものの、性による呼応という点に関しては、Jly.『アルタン・トブチ』でも守られている。

さらに、派生接尾辞が接続している語が de'el (デール) の場合に、男性だから -tu という呼応が守られている『元朝秘史』の場面对応する例を見る。

de'eltü tabun nasutu Kücü (3-114) «MHT»
デールを着た五歳の クチュ

degeltü tabun nasutu Kücü (29b) «Jly.AT»
デールを着た 五歳の クチュ

このように、両史料とも呼応が守られている。ついでに言うと、nasutu の部分も男性に対す

る呼応が両史料とも守られている。次に、女性だから -tai という呼応が守られている場面に
に対応する例を見る。

eke inu nabtarqai nekei de'ēltei (3-112) <<MHT>>
母は ぼろぼろの 羊皮のデールを着て、

eke inu nabtaraqai nekei degeltei (29a) <<Jly.AT>>
母は ぼろぼろの 羊皮のデールを着て、

このように、やはり両史料とも呼応が守られている。一方で、女性なのに -tu の形態が現れ
ていた箇所は、

niken hula'an de'ēltü eme kü'ün Temüjin-je keyen yeke dau'ü-ār
一人の 赤い デールを着た 女性が テムジンよ と 大声で
ayilan uiyilan baiyiqu-yi (4-146) <<MHT>>
泣き 叫んで いるのを、

nigen ulayan degeltü eme kümün Tömüjin kemen yeke dayu-bar
一人の赤いデールを着た女性がテムジンよと 大声で
qayilan uyilan baiyiqu-yi (43b) <<Jly.AT>>
泣き 叫んで いるのを、

のように、Jly.『アルタン・トブチ』でも呼応の不一致のまま書かれている。

数のほうも見ておく。数の面での呼応が守られておらず、小沢が『元朝秘史』で「崩壊過
程を示している」と説明している箇所は、

čaqa minu Münglig kö'ūd ücügetü bül'e. (1-68) <<MHT>>
我が子 ムンリグよ 子供たちは (小ささを持つ) 小さいのだ。

čaya minu Menglig köbegün öcügüketü bülüge. (15a) <<Jly.AT>>
我が子 ムンリグよ 子供は (小ささを持つ) 小さいのだ。

のように記述されている。すなわち、意図的にそうしたのかどうかまでは知ることができないが、
Jly.『アルタン・トブチ』では呼応の原則に反する派生接尾辞の形態を訂正するのではなく、主
語を kö'ūd「子供たち」(複数) から köbegün「子供」(単数) に変えることで、呼応に適うよう
になっているのである。なお、ここでも Menglig ではムンリグとは読めないが、混乱を避け

るため日本語の表記は『元朝秘史』と同じにしておく。

他に前章では上げなかった例を少し比較すると、

ke'elitei eme (1-38) <MHT>

kegelitü eme (8a) <Jly.AT>

は、どちらも「身籠った女性」という意味であるが、『元朝秘史』では呼応が守られているのに、Jly.『アルタン・トブチ』では守られていない。一方、

Temülün ölegetei büle'e. (1-60) <MHT>

Tömülün ölügeitü bülüge. (13b) <Jly.AT>

は、どちらも「テムルン（男性）は揺りかごの中だった」という意味であるが、ここでは『元朝秘史』では呼応が守られていないのに、Jly.『アルタン・トブチ』ではそれが守られているのである。

被限定詞もしくは主語の位置に「人」が来るときの呼応の適合率が『元朝秘史』と比較してやや下がるのは、『元朝秘史』では守られていた箇所が Jly.『アルタン・トブチ』で崩れている例のほうが総数としては多いからであるが、逆に『元朝秘史』では守られていない箇所を後世の Jly.『アルタン・トブチ』が、あたかも「訂正を試みている」ような例もいくつか見られるのである。

6.1.2 「人以外」

ここでも、前章同様いったん「動物」を分けて考察する。『元朝秘史』では被限定詞もしくは主語の位置に来るのが「動物」であるときには、単数であれば派生接尾辞は -tu の形態で現れるのであった。

col da'āritu godli se'ültü oro_G singqula-yi unuju (1-24) <MHT>
背筋に 鞍傷のある短い尻尾を持つ 黒背の灰青色の馬に乗って、

γool dayaritu γoldi segültü oroγ singqul-yin (7a) <Jly.AT>
背筋に 鞍傷のある短い尻尾を持つ 黒背の灰青色の馬の

bida qoyar-i haiyidaju
我々二人を妬んで
südütü mo_Gai-a südürte'ēsü südürgen-dür bü oruya (5-164) <MHT>
牙のある へびに 中傷されても その挑発には 乗るまい。

bide qoyar nayitabasu
我々二人を妬んで

sidütü moyai-a sidürtebesü sidürgen-tür büü oroya (58b) <<Jly.AT>>
 牙のある へびに 中傷されても その挑発には乗るまい。

このように、Jly.『アルタン・トブチ』でもいずれも -tu で現れる。-tai では現れない点も共通している。一方、「動物」でも数の呼応は見られ、複数の場合は -tan は現れるとして『元朝秘史』で挙げた

dörben noqais širemün manglaitan (7-195) <<MHT>>
 四匹の 犬どもは 生鉄の 額を持ち、

に対応する場面は Jly.『アルタン・トブチ』では描かれておらず、他のところでも複数の「動物」は現れないので比較できない。単数の「動物」がすべて -tu である点に関しては、『元朝秘史』同様、役割の差異のない二形態のうちの一方の -tu が極端に現れただけであるという見方を、ここでも示しておく。

さて、私見によれば『元朝秘史』では被限定詞が「人以外」のときは、-tu と -tai の役割差のない状態を保持しつつも、それに関与する「人」の性が派生接尾辞の形態に反映されることもあるのであった。「人」の関与という観点から「人以外」の呼応の状況を表にまとめると次のようになる。

Jly.AT

	-tu	-tai	-tan	計
男性の関与が明白	17	4	0	21
女性の関与が明白	0	6	0	6
複数の関与が明白	0	0	0	0
計	17	10	0	27

MHT

	-tu	-tai	-tan	計
男性の関与が明白	28	9	0	37
女性の関与が明白	0	4	0	4
複数の関与が明白	1	3	1	5
計	29	16	1	46

(「もの」に関与する「人」の性数ごとの内訳)

「元朝秘史」では、46 例中 33 例 (約 72%) が当てはまっていた。Jly.『アルタン・トブチ』では、26 例中 22 例 (約 85%) がそうである。つまり、この点に関してはむしろ Jly.『アルタン・トブチ』のほうで数値がやや高くなっているのである。男性が関与している「人以外」の例としては、

hüdesütü quyaç-iyān emüsbe bi. (3-106) <<MHT>>
皮条で綴じ合わせた鎧を 身に着けたのだ 俺は。

üdegesütü quyaγ-ıyan emüsbe bi. (27a) <<Jly.AT>>
 皮条で綴じ合わせた鎧を 身に着けたのだ 俺は。

のように、両史料とも -tu で現れている。

「人以外」に相当する被限定詞が同じ tergen (車) でも、乗っている人の性が派生接尾辞に影響を与えている可能性があるとして取り上げた例では、まず、

qoyitu nungasutu tergen-dür unu'ulju (2-85) <<MHT>>
 北側の 羊毛を入れた 車に 乗せて、

qoyitu ungyasutu qara tergen-dür (20a) <<Jly.AT>>
 北側の 羊毛を入れた 車に、

は、どちらも車に乗っているのは男性であり、かつ派生接尾辞の形態も両者とも -tu である。また、

qara'ütai tergen-ü öljige-de niken ökin sayin buyu. (1-6) <<MHT>>
 黒い木枠の付いた 車の前室に一人の 娘の 美しいのがいる。

qaryutai tergen-ü öljige-dür sayuγsan nigen ökin-ü (5a) <<Jly.AT>>
 黒い木枠の付いた 車の前室に 一人の 少女の、

は、どちらも車に乗っているのは女性であり、かつ派生接尾辞の形態も両者とも -tai である。以上は、被限定詞が「人以外」のときでも、「人」の関与という観点からの呼応に適合している例であるが、「人」の関与（男性）があるのに呼応が守られていない例として『元朝秘史』で挙げた箇所は、

örügetei ger minu e'ëren kebtejü (10-230) <<MHT>>
 天窓のある 家を 囲み 臥して、

erüketei ger-i minu (75a) <<Jly.AT>>
 天窓のある 家を、

のように、Jly.『アルタン・トブチ』でもそのまま -tai が現れている。

一方、「人」の関与が不明な場合の「もの」に対する派生接尾辞は、以下のように現れる。

	-tu	-tai	-tan	計
人の関与が不明	43	10	0	53

	-tu	-tai	-tan	計
人の関与が不明	25	11	14	50

88

部を見ると、たとえば、

Yisükei bayatur ečigetü	イエスゲイ・バートルを父に <u>持ち</u>
Ögelen qatun eketü	ホエルンを母に <u>持ち</u>
yisün örlügüd tösimeitü	九人の元帥を臣下 <u>に持ち</u>
yerü tabun öngge dörben qari ulus-i	そうして五色の四つの異国を
erke-dür-iyen oroyuluysan	支配下に治めたる
sutü Činggis qayan ejen minu	偉大なる主我がチンギス・ハーンよ

という箇所では、チンギス・ハーン（男性）に対してすべて -tu という派生接尾辞が現れている。このとき、男性だから -tu であって呼応の原則に合っているという見方は、まさに『元朝秘史』の側から眺めた見解であり、現代モンゴル語の側から眺めたならば、被限定詞が男性といえども積極的に -tai が現れて然るべきである。これ以外に『元朝秘史』には登場しない「男性」も『アルタン・トブチ』には多く登場するが、それらもほぼ -tu で現れている。「原則として定型表現を形成するのであれば -tu、それ以外であれば -tai」という現代モンゴル語に見られる両派生接尾辞の役割の差が既に 17 世紀に生じていたのであれば、-tu の使用は少なくなるはずである。-tu のほうの使用頻度が高いということは、当該の派生接尾辞をめぐる状況に関しては、17 世紀には 13 世紀における役割の体系がまだ濃く意識されていたということではあるまいか。

つまり、次のように時代順に並べた場合、Лы.『アルタン・トブチ』における -tu と -tai は、役割の点でも頻度の点でも『元朝秘史』と大きく変わっておらず、17 世紀の文献からは現代モンゴルに向かう流れは見出せないのである。

	(13 世紀)	(17 世紀)	
役割	『元朝秘史』	Лы.『アルタン・トブチ』	現代モンゴル語
-tu	男性	男性	定型表現形成
-tai	女性	女性	定型表現以外
頻度	『元朝秘史』	Лы.『アルタン・トブチ』	現代モンゴル語
-tu	多い	多い	少ない
-tai	少ない	少ない	多い

上の図で示した『元朝秘史』と Лы.『アルタン・トブチ』における役割は、被限定詞もしくは主語が「人」の場合である。「人以外」の場合には、両形態の間に役割の差がない状態であるのも両者に共通する。頻度は、「人」の場合であっても、「人以外」の場合であっても上の図の通りである。

Лй.『アルタン・トブチ』が『元朝秘史』と比べて目立った変化がなく、現代モンゴル語に通じる変遷が見られない理由を解釈しようとするとき、考えられるのは17世紀のモンゴル語における書き言葉と話し言葉の乖離である。時代が下がっても、当該の派生接尾辞による呼応の体系は書き言葉にあっては崩れる速度が遅く、いわば「言文不一致」の時期を17世紀の段階に想定することはできないだろうか。一方、話し言葉のほうでは、現代モンゴル語の役割・頻度に移行する兆候、すなわち性による呼応の消失と -tu より -tai の頻度が増す流れがあったのではあるまいか。ただし、書き言葉の状況に関してはЛй.『アルタン・トブチ』および他の史料からからそう言える可能性が高いとしても、話し言葉の状況に関してはそれを裏付ける証拠はなく、現代語の役割・頻度から整合性を探った推測に過ぎない。

最後に、共同格の状況を確認する。Лй.『アルタン・トブチ』の共同格の形態は、大部分が -luya である。『元朝秘史』の例と対応させながら見ていく。

Bo'örču Belgütei-yi kürge'ülü'ed ečige-dür-iyen ülü kelen bögötür qonggor
ボオルチュはベルグテイを到らしめて、父に 言わないで 猫背の薄黄色の馬に
unu'ad boru örmüge-ben bügtürü'ed Belgütei-lü'ē irebe.
(2-95) 《MHT》

乗って 灰褐色の毛布を 馬に付けて ベルグテイとともに やって来た。

Boγurači Belgütei-yi kürügelüged ečige-dür-iyen ülü kelen bögötür qongγur-i
ボオルチュはベルグテイを到らしめて、父に 言わないで 猫背の薄黄色の馬に
unuji boru örmügen jangčün-ıyan bögtürüged Belgütei-lü'ē irebe.
(22b) 《Лй.AT》

乗って 灰褐色の毛布を 馬に付けて ベルグテイとともに やって来た。

上例では、男性単数主語に対する動詞語尾 -e の呼応のところも両者守られている。

ečige-lü'ē Kereyid irgen-ü Ong-qan anda ke'eldügsen aju'ü. (2-96) 《MHT》
父とともに ケレイトの人集の 王汗は義兄弟と 言い合ったのである。

ečige-lü'ē manu Kereyid irgen-ü Ong-qan anda kemeldügen ajuγu. (23a) 《Лй.AT》
父とともに ケレイトの人集の 王汗は義兄弟と 言い合ったのである。

tende Jamuqa Ongqan-lu'a qamutu küdülülčejü yaburun (5-160) 《MHT》
そこで ジャムカは王汗とともに 先に動いて 行きながら、

tende Jamuqa Ongqayan-luya qamutu küdeljü yaburun (57a) 《Лй.AT》

そこで ジャムカは王汗とともに 先に動いて 行きながら、

Činggis qahān-lu'ā Ongqan Tu'ūla-yin qara tün-ne quriju
チンギス・ハーンとともに 王汗は、トーラ河の 黒森に 集って
ečige kö'ü ke'öldübe. (5-164) <<MHT>>
父 子と 言い合った。

Činggis qayan-luya Ongqayan Tuγula-yin qara tüne quraju
チンギス・ハーンとともに王汗は、トーラ河の黒森に集って
ečige köbegün kemeldübei. (58a) <<Jly.AT>>
父 子と 言い合った。

上例では、主語は同じ男性単数であるのに、動詞語尾は Jly.『アルタン・トブチ』のほうで崩れている。また、

aqa-nar degüü-ner-luya eyedüldüy-e kemeldüjü (8a) <<Jly.AT>>
兄たち弟たちとともに 話し合おうと言い合って、

という箇所は『元朝秘史』では、

aqanar de'üner eyetündüjü (1-36) <<MHT>>
兄たち弟たちが話し合って、

のように共同格のない文体で描写している。

その一方で、Jly.『アルタン・トブチ』では、

Jamuqa-tai qamtu yabutala (103a) <<Jly.AT>>
>>
ジャムカとともに行くと、

のように、共同格としての -tai が確認できる。この場面は、『元朝秘史』にはないので、「元朝秘史」と記述の違いを比較することはできない。しかし、当時存在しなかった形態で書くはずはないのだから、『元朝秘史』では一例も現れない共同格 -tai が Jly.『アルタン・トブチ』で現れているということは、17 世紀の時点では生産的ではないにせよ、それが存在していたことを示しているのではないか。

<索引 3> Лy. 『アルタン・トブチ』における当該の派生接尾辞に関する全索引

表記の仕方等は『元朝秘史』と同様である。

本文同様、分かち書きによる表記は行わない。

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
1 aburitu 性格 (9a)	非明示		+			○
2 aburitu 性格 (53b)		aqa 兄	+			○
3 ačiyatu 荷 (124a)	irgen 人衆				+	●
4 albatu 公務 (12a)	qaračus 平民たち				+	●
5 amatu 口 (59b)	kümün 人		+			○
6 arγatu 才覚 (19b)	非明示		+			○
7 bariyatu 枷 (19a)	kümün 人		+			○
8 beyetü 体 (9a)	非明示		+			○
9 buyantu 幸福 (12a)		非明示	+			○
10 čolatu 称号 (114a)	beri 嫁			+		●
11 degeltü 服 (21b)	kümün 人		+			○
12 degeltü 服 (21b)	kümün 人		+			○
13 degeltü 服 (29b)	男・人名		+			○
14 degeltü 服 (43b)	eme 女			+		●
15 duratu 好み (43a)		bi 私	+			○
16 elčitü 使者 (57a)		anda 盟友	+			○
17 elčitü 使者 (59a)		anda 盟友	+			○
18 elegebečitü 胴当て (38a)	köbegün 子供		+			○
19 emetü 女 (32a)		非明示	+			○
20 erdemtü 才能 (95a)	男・人名		+			○
21 erdemtü 才能 (95a)	男・人名		+			○
22 erdemtü 才能 (95a)	非明示		+			○
23 eyetü 和 (6b)		非明示			+	●
24 γaltu 火 (14a)	köbegün 子供		+			○
25 γaltu 火 (19b)		非明示	+			○
26 γaltu 火 (29b)	köbegün 子供		+			○
27 γaltu 火 (52a)		非明示	+			○
28 γutultu 靴 (29b)	男・人名		+			○
29 gereltü 光 (14a)	köbegün 子供		+			○

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
30 gereltü 光 (19b)		非明示	+			○
31 gergeitü 妻 (4b)		男・人名	+			○
32 gergeitü 妻 (4b)		男・人名	+			○
33 gertü 家 (124a)	irgen 人衆				+	●
34 ijayurtu 根源 (67a)	男・人名		+			○
35 itegeltü 信頼 (75a)		男・人名	+			○
36 jayunitu 百 (66a)		女・人名		+		●
37 jalayutu 若者 (4b)		男・人名	+			○
38 jirketü 心臓 (40a)	eres 男たち				+	●
39 joriyü 勇氣 (13b)	男・人名		+			○
40 jöbtü 正しさ (96b)		činu お前	+			○
41 kebtégülsütü 宿直兵 (71b)		非明示	+			○
42 kegelitü 胎児 (5a)	eme 女			+		●
43 kegelitü 胎児 (5a)	eme 女			+		●
44 keletü 言葉 (59a)	elči 使者		+			○
45 keletü 言葉 (59b)	男・人名		+			○
46 keletü 言葉 (59b)	kümün 人		+			○
47 kesigtentü 宿直兵 (73b)		非明示	+			○
48 kesigtü 宿直 (73b)	kümün 人		+			○
49 kesigtü 宿直 (73b)	非明示		+			○
50 kesigtü 宿直 (73b)	非明示		+			○
51 kesigtü 宿直 (74a)	非明示		+			○
52 kesigtü 宿直 (74a)	非明示		+			○
53 kistü 恨み (68a)	irgen 人衆				+	●
54 malayatu 帽子 (29b)	男・人名		+			○
55 moritu 馬 (4b)		男・人名	+			○
56 moritu 馬 (7b)		kümün 人	+			○
57 moritu 馬 (21b)	kümün 人		+			○
58 moritu 馬 (21b)	kümün 人		+			○
59 mörtü ? (25a)		bi 私	+			○
60 mörtü ? (25a)		bi 私	+			○

59,60 の mörtü は、moritu 馬 の誤りではないかと筆者は見る。

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
61 nasutu 年齢 (13b)	男・人名		+			○
62 nasutu 年齢 (13b)	男・人名		+			○
63 nasutu 年齢 (14b)		非明示		+		●
64 nasutu 年齢 (29b)	男・人名		+			○
65 nasutu 年齢 (53b)	非明示		+			○
66 nasutu 年齢 (54a)	男・人名		+			○
67 nasutu 年齢 (68b)		男・人名	+			○
68 neretü 名前 (4b)	ökin 娘			+		●
69 neretü 名前 (4b)		köbegün 子供	+			○
70 neretü 名前 (4b)		köbegün 子供	+			○
71 neretü 名前 (4b)		非明示	+			○
72 neretü 名前 (4b)		köbegün 子供	+			○
73 neretü 名前 (5a)	ökin 娘			+		●
74 neretü 名前 (8a)		köbegün 子供	+			○
75 neretü 名前 (8a)		köbegün 子供	+			○
76 neretü 名前 (8a)		köbegün 子供	+			○
77 neretü 名前 (8b)	ökin 娘			+		●
78 neretü 名前 (8b)		tere 彼	+			○
79 neretü 名前 (8b)		köbegün 子供	+			○
80 neretü 名前 (9a)		köbegün 子供	+			○
81 neretü 名前 (9a)		köbegün 子供	+			○
82 neretü 名前 (9a)		köbegün 子供	+			○
83 neretü 名前 (9b)		köbegün 子供	+			○
84 neretü 名前 (9b)		köbegün 子供	+			○
85 neretü 名前 (9b)		非明示	+			○
86 neretü 名前 (9b)		köbegün 子供	+			○
87 neretü 名前 (9b)		köbegün 子供	+			○
88 neretü 名前 (10a)	elçi 使者		+			○
89 neretü 名前 (13b)	qoyar kümün 二人				+	●
90 neretü 名前 (13b)	ökin 娘			+		●
91 neretü 名前 (20a)	ökin 娘			+		●
92 neretü 名前 (21b)		bi 私	+			○
93 neretü 名前 (23b)	köbegüd 子供たち				+	●

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
94 neretü 名前 (29b)	irged 人衆				+	●
95 neretü 名前 (29b)	köbegüken 男の子		+			○
96 neretü 名前 (31a)	köbegün 子供		+			○
97 neretü 名前 (39b)	köbegün 子供		+			○
98 neretü 名前 (39b)	köbegün 子供		+			○
99 neretü 名前 (39b)	köbegün 子供		+			○
100 neretü 名前 (39b)	köbegün 子供		+			○
101 neretü 名前 (43b)	ere 男		+			○
102 neretü 名前 (44b)		非明示	+			○
103 neretü 名前 (88b)	ökin 娘			+		●
104 neretü 名前 (88b)	ökin 娘			+		●
105 neretü 名前 (96b)	elčin 使者		+			○
106 neretü 名前 (97a)	elçi 使者		+			○
107 neretü 名前 (112b)	noyan 長官		+			○
108 neretü 名前 (113a)	noyan 長官		+			○
109 neretü 名前 (113b)	köbegün 子供		+			○
110 neretü 名前 (114a)	beri 嫁			+		●
111 neretü 名前 (116a)		çi お前	+			○
112 nidütü 目 (4b)		男・人名	+			○
113 nöküçeltü 友 (44b)	kümün 人		+			○
114 nöküdtü 僚友 (71b)	degüü 弟		+			○
115 nöküdtü 僚友 (71b)	degüü 弟		+			○
116 nöküdtü 僚友 (71b)	degüü 弟		+			○
117 nöküdtü 僚友 (113b)	非明示		+			○
118 onçitu 命中力 (40a)	eres 男たち				+	●
119 oyitu 才 (35b)		çi お前	+			○
120 öčügüketü 小さい (15a)		köbegün 子供	+			○
121 ökidtü 娘たち (14b)		irgen 人衆			+	●
122 öljeitü 吉祥 (67a)	男・人名		+			○
123 öljeitü 吉祥 (87a)	irgen 人衆				+	●
124 ölügeitü 揺りかご (13b)		男・人名	+			○

「人衆」という意味の語を持つ 94 の irged が他の箇所の irgen と大きな差異があるようには感じられないので、いずれも「複数」として扱う。

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
125 önggetü 色 (10b)	非明示		+			○
126 östü 仇 (51b)	köbegün 子供		+			○
127 östü 仇 (66b)	köbegün 子供		+			○
128 östü 仇 (68a)	irgen 人衆				+	●
129 qabutu 才能 (35b)	男・人名		+			○
130 qutuytu 至福 (10a)	köbegün 子供		+			○
131 qutuytu 至福 (12a)		非明示		+		●
132 qutuytu 至福 (39b)	köbegün 子供		+			○
133 qutuytu 至福 (67a)	男・人名		+			○
134 sayitu 良い (38b)	kümün 人		+			○
135 sedkiltü 心 (75a)	非明示		+			○
136 sölsütü 胆力 (40a)	eres 男たち				+	●
137 süldertü 御稜威 (111b)	beye 身		+			○
138 sutu 至福 (13a)	男・人名		+			○
139 sutu 至福 (13a)	男・人名		+			○
140 sutu 至福 (13a)	男・人名		+			○
141 sutu 至福 (87a)	男・人名		+			○
142 sutu 至福 (89a)	男・人名		+			○
143 sutu 至福 (110a)	男・人名		+			○
144 sutu 至福 (110a)	男・人名		+			○
145 sutu 至福 (113b)	男・人名		+			○
146 sutu 至福 (114a)	男・人名		+			○
147 sutu 至福 (114a)	男・人名		+			○
148 sutu 至福 (118b)	男・人名		+			○
149 terigütü 頭 (6b)	kümün 人		+			○
150 toɣatu 数 (88a)	kümün 人		+			○
151 yratu 傷 (16a)		男・人名	+			○
152 yratu 傷 (63a)	非明示		+			○
153 yasutu 骨 (29a)	kümün 人		+			○
154 yosutu 道理 (73b)	非明示		+			○
155 yosutu 道理 (73b)	非明示		+			○

sutu は、suutu と出る場合や、sütü と出る場合があるが、索引では一つの形で表記する。

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数	関与
156 açiyatu 荷 (63b)	morin 馬		+		—
157 ayusqitu 肺 (5b)	arasun 皮		+		—
158 arɣatu 齒 (58b)	moyai へび		+		—
159 belgetü 吉兆 (12b)	sibayun 鳥		+		—
160 belgetü 吉兆 (12b)		sibayun 鳥	+		—
161 budangtu もや (11b)	ayula 山		+		—
162 būrigetü 器 (42b)	非明示		+		—
163 çilayutu 石 (11b)	çöl 砂漠		+		—
164 dabalɣatu 波 (12a)	ɣool 川		+		—
165 dayaritu 鞍傷 (6b)	singqula 馬		+		—
166 dayaritu 鞍傷 (7a)	singqula 馬		+		—
167 dayutu 音 (26b)	kenggerege 太鼓		+		男
168 dayutu 音 (27a)	kenggerege 太鼓		+		男
169 dayutu 音 (30a)	yor 鳴りかぶら		+		男
170 dörbeljitü 四角 (38b)	taji 織物		+		—
171 ebertü 角 (32a)		ünige 牝牛	+		—
172 ebertü 角 (30a)	ünükün 牛		+		—
173 eketü 母 (20b)	quraya 子羊		+		—
174 erketü 威光 (13a)	burqan 仏		+		—
175 erketü 威光 (29a)	tngri 天		+		—
176 erketü 威光 (76b)	tngri 天		+		—
177 itegeltü 信賴 (44a)	sedkil 心		+		男
178 itegeltü 信賴 (111a)	地名		+		—
179 jayayatu 運命 (28b)		sibayun 鳥	+		—
180 jirɣalangtu 喜び (75a)	oron 地位		+		男
181 jüiltü 種類 (5b)	arasun 皮		+		—
182 költü 脚 (33a)	tuy 旗		+		男
183 költü 脚 (33a)	tuy 旗		+		男
184 manglaitu 尖端 (30a)	ɣoduli 鎗		+		男
185 namayatu 酒樽 (36b)	ayiray アイラグ		+		—
186 neretü 名前 (13a)	qota 街		+		—
187 neretü 名前 (13a)	süme 寺院		+		—
188 neretü 名前 (111b)	qosiɣun 山鼻		+		—
189 neretü 名前 (113b)	qotan 街		+		—

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数	関与
190 neretü 名前 (114a)	süme 寺院		+		—
191 neretü 名前 (118a)	ɣajar 土地		+		—
192 olatu 多い (5a)	非明示		+		—
193 onitu 刻み目 (27a)	sumu 矢		+		男
194 qadquratu 山桃皮 (26b)	sumu 矢		+		男
195 qajayartu 馬勒 (74b)	非明示		+		—
196 qarayatu 遠見 (26b)	tuy 旗		+		男
197 qarayatu 遠見 (26b)	tuy 旗		+		男
198 qariyatu 関係 (65a)	ulus 国		+		—
199 qooratu 毒 (35b)	moyai へび		+		—
200 qoryatu 黒い (29a)	qabčil 山峡		+		—
201 sayitu 良い (87a)	ɣajar 土地		+		—
202 segültü 尻尾 (6b)	singqula 馬		+		—
203 segültü 尻尾 (7a)	singqula 馬		+		—
204 sidütü 歯 (58b)	moyai へび		+		—
205 tanatu 真珠 (38a)	könjile 掛物		+		男
206 ungyasutu 羊毛 (20a)	tergen 車		+		男
207 ungyasutu 羊毛 (20a)	tergen 車		+		男
208 üdegesü 皮条 (27a)	quyar 鎧		+		男
209 ükertü 牛 (27a)	ildü 皮		+		男
210 yosutu 道理 (28b)	keriye 烏		+		—

-tai 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
1 busitai 容貌 (10b)	ökin 娘			+		○
2 degeltei 服 (29a)		eke 母		+		○
3 ebtei 和 (12a)	非明示				+	●
4 ɣaltai 火 (14b)	ökin 娘			+		○
5 gereltei 光 (14b)	ökin 娘			+		○
6 jarčimtai 規律 (16b)	eke 母			+		○
7 jarčimtai 規律 (17a)	eke 母			+		○
8 köbegüntei 子供 (5b)		男・人名	+			●
9 küčütei 力 (110b)		複数・人名			+	●

-tai 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
10 moritai 馬 (54a)		非明示	+			●
11 mörtei 道 (15b)		či お前		+		○
12 mörtei 道 (16a)		či お前		+		○
13 nasutai 年齢 (13b)		男・人名	+			●
14 nasutai 年齢 (13b)		男・人名	+			●
15 nasutai 年齢 (13b)		男・人名	+			●
16 nasutai 年齢 (22b)		女・人名		+		○
17 nasutai 年齢 (30a)		男・人名	+			●
18 neretei 名前 (10b)	kümün 人			+		○
19 neretei 名前 (14b)		非明示		+		○
20 neretei 名前 (22b)		eke 母		+		○
21 neretei 名前 (55b)	非明示			+		○
22 neretei 名前 (56a)	ökin 娘			+		○
23 neretei 名前 (66b)	非明示		+			●
24 neretei 名前 (111a)	ökin 娘			+		○
25 neretei 名前 (111b)	ökin 娘			+		○
26 öljeitei 吉祥 (67a)	男・人名		+			●
27 sereltei 心 (35b)	非明示			+		○
28 süldertei 胆力 (16b)	eke 母			+		○
29 sutai 至福 (17a)	üjin 夫人			+		○
30 sutai 至福 (28b)	üjin 夫人			+		○
31 sutai 至福 (114b)		非明示		+		○
32 tergetei 車 (94b)		eke 母		+		○
33 üjesükülengetei 美 (65b)		bi 私		+		○
34 ünürtei 匂い (65b)		bi 私		+		○
35 yeketei 多い (5a)	ökin 娘			+		○
36 yeketei 多い (9b)	男・人名		+			●
37 yosutai 道理 (15b)		či お前		+		○
38 yosutai 道理 (16a)		či お前		+		○

-tai 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数	関与
39 altatai 金 (113a)	erdeni 宝		+		－
40 altatai 金 (113a)	erdeni 宝		+		－
41 čegürgetei 錠 (33b)	tergen 車		+		男

-tai 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数	関与
42 čikitei 耳 (11b)	jegeren かもしか		+		－
43 čikitei 耳 (11b)	jigeri かもしか		+		－
44 dotuɣajitai 下帯 (42b)	ničügen 裸		+		男
45 egületei 雲 (75a)	söni 夜		+		－
46 erüketei 天窓 (75a)	ger 家		+		男
47 jiqatai 襟 (7b)	degel 服		+		－
48 odutai 星 (75a)	söni 夜		+		－
49 öljigetei 前室 (14a)	tergen 車		+		女
50 qarqutai 黒柰 (5a)	tergen 車		+		女
51 qarqutai 黒柰 (24a)	tergen 車		+		女
52 qarqutai 黒柰 (94a)	tergen 車		+		女
53 qutuytai 至福 (28b)	üjin 夫人		+		女
54 siberitei 汗 (65b)		köl 足	+		女
55 sidesötei 細条 (75a)	ger 家		+		男
56 sütei 乳 (42b)	taray ヨーグルト		+		－
57 tegesütei 車軸 (33b)	tergen 車		+		－
58 terigütei 頭 (8a)	beye 体		+		－

男としているのは、「人以外」でもそこに「人」の関与があるときには、その「人」の性に引きずられるように呼応することが多いという筆者の考えに反する例だからである。

-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
1 ačitan? (96b)		qoyar 二人			+	○
2 aɣartan 気概 (40a)	eres 男たち				+	○
3 aɣurtan 気概 (40a)	omuɣtan 一族				+	○
4 albatan 公務 (95b)	čerig 兵				+	○
5 aldaltan 罪 (72a)		arad 人々			+	○
6 aldaltan 罪 (73b)		öteges 長老たち			+	○
7 aldaltan 罪 (73b)		kesigüdten 宿直兵			+	○
8 aldaltan 罪 (76a)		čirbi 侍従			+	○

当該のテキストの註によると、1 の ačitan は、elčiten (使者) の誤写ではないかと考えられるとのことである。

-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
9 amitan 命 (13a)	非明示				+	○
10 amitan 命 (13b)	非明示				+	○
11 andayartan 誓い (27b)		複数・人名			+	○
12 degelten 服 (110a)		noyad 領主たち			+	○
13 erdemten 才能 (40a)	omuγtan 一族				+	○
14 erdemten 才能 (71b)	sayitan 良い者たち				+	○
15 eyeten 和 (59a)		複数・人名			+	○
16 itegelten 信頼 (52a)	arad 人々				+	○
17 itegelten 信頼 (75a)	kebūtegül 宿直人				+	○
18 itegelten 信頼 (61a)	非明示				+	○
19 jalqamsıγtan 恐れ (23b)	複数・人名				+	○
20 jayayatan 運命 (16b)	köbegüd 子供たち				+	○
21 jayayatan 運命 (17a)	sayid 良い者たち				+	○
22 jisüten 顔色 (14b)		irgen 人衆			+	○
23 keleten 言葉 (13a)	ulus 人々				+	○
24 keleten 言葉 (74b)	aran 人				+	○
25 keleten 言葉 (96a)	非明示				+	○
26 keleten 言葉 (96b)	irgen 人衆				+	○
27 kesigten 宿直 (71b)	非明示				+	○
28 kesigten 宿直 (71b)	非明示				+	○
29 kesigten 宿直 (71b)	非明示				+	○
30 kesigten 宿直 (73a)	非明示				+	○
31 kesigten 宿直 (73a)	非明示				+	○
32 kesigten 宿直 (73a)	非明示				+	○
33 kesigten 宿直 (73a)	非明示				+	○
34 kesigten 宿直 (73a)	非明示				+	○
35 kesigten 宿直 (73a)	非明示				+	○
36 kesigten 宿直 (73b)	非明示				+	○
37 kesigten 宿直 (73b)	非明示				+	○
38 kesigten 宿直 (73b)	非明示				+	○
39 kesigten 宿直 (73b)	非明示				+	○
40 kesigten 宿直 (74a)	非明示				+	○
41 kesigten 宿直 (74a)	非明示				+	○
42 kesigten 宿直 (74a)	非明示				+	○

-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
43 kesigten 宿直 (75b)	非明示				+	○
44 kesigten 宿直 (75b)	非明示				+	○
45 kesigten 宿直 (75b)	非明示				+	○
46 kesigten 宿直 (76b)	非明示				+	○
47 kesigentü 宿直 (71b)	非明示				+	○
48 kiligten 誇り (40a)	omuɣtan 一族				+	○
49 kistan 仇 (37b)	irgen 人衆				+	○
50 kistan 仇 (39a)	複数・人名				+	○
51 küčüten 力 (40a)	非明示				+	○
52 nereten 名前 (5b)		非明示			+	○
53 nereten 名前 (6a)	ɣurban köbegün 三人の子供				+	○
54 nereten 名前 (8b)		非明示			+	○
55 nereten 名前 (9a)		köbegün 子供			+	○
56 nemüriten 蔽い (64b)		tede 彼ら			+	○
57 nigeten 一つ (31b)		ba 彼ら			+	○
58 nutuɣtan 居营地 (111b)		ba 彼ら			+	○
59 omuɣtan 姓 (4b)		非明示			+	○
60 omuɣtan 姓 (5a)		複数・人名			+	○
61 omuɣtan 姓 (5b)		tede 彼ら			+	○
62 omuɣtan 姓 (8a)		tede 彼ら			+	○
63 omuɣtan 姓 (8b)		複数・人名			+	○
64 omuɣtan 姓 (8b)		複数・人名			+	○
65 omuɣtan 姓 (8b)		複数・人名			+	○
66 omuɣtan 姓 (8b)		複数・人名			+	○
67 omuɣtan 姓 (8b)		複数・人名			+	○
68 omuɣtan 姓 (8b)		複数・人名			+	○
69 omuɣtan 姓 (8b)		複数・人名			+	○
70 omuɣtan 姓 (9a)		非明示			+	○
71 omuɣtan 姓 (9a)		非明示			+	○
72 omuɣtan 姓 (9a)		非明示			+	○
73 omuɣtan 姓 (9a)		非明示			+	○
74 omuɣtan 姓 (9a)		非明示			+	○
75 omuɣtan 姓 (9a)		非明示			+	○

-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
76 omuγtan 姓 (9b)		非明示			+	○
77 omuγtan 姓 (9b)		非明示			+	○
78 omuγtan 姓 (10a)		非明示			+	○
79 omuγtan 姓 (13a)	ulus 人々				+	○
80 omuγtan 姓 (36b)		非明示			+	○
81 omuγtan 姓 (40a)	非明示				+	○
82 omuγtan 姓 (40a)	非明示				+	○
83 omuγtan 姓 (40a)	irgen 人衆				+	○
84 omuγtan 姓 (40b)	köbegüd 子供たち				+	○
85 öljeitü 吉祥 (34a)	nökür 友				+	○
86 öljeitü 吉祥 (75a)	kebütegül 宿直人				+	○
87 öljeitü 吉祥 (75a)	kebütegül 宿直人				+	○
88 önggeten 色 (14b)		irgen 人衆			+	○
89 östen 仇 (37b)	irgen 人衆				+	○
90 östen 仇 (39a)	複数・人名				+	○
91 qaritan 所属 (95b)	dayisun 敵				+	○
92 qariyatan 関係 (96b)	irgen 人衆				+	○
93 qariyatan 関係 (97a)	irgen 人衆				+	○
94 qoortan 毒 (35b)	dayisun 敵				+	○
95 qutuγtan 至福 (16b)	köbegüd 子供たち				+	○
96 qutuγtan 至福 (16b)	sayid 良い者たち				+	○
97 qutuγtan 至福 (75b)		kesigten 宿直兵			+	○
98 sandaltan 椅子 (110a)	noyad 領主たち				+	○
99 sayitan 良い (71b)	非明示				+	○
100 serelten 心 (61b)	irgen 人衆				+	○
101 sölsüten 胆力 (17a)	sečed 賢者たち				+	○
102 sutan 至福 (16b)	köbegüd 子供たち				+	○
103 terigüten 頭 (9a)	非明示				+	○
104 terigüten 頭 (9a)	非明示				+	○
105 terigüten 頭 (9b)	非明示				+	○
106 terigüten 頭 (11b)	非明示				+	○
107 terigüten 頭 (12a)	非明示				+	○
108 terigüten 頭 (32a)	非明示				+	○
109 terigüten 頭 (35a)	非明示				+	○

-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
110 terigüten 頭 (37b)	非明示				+	○
111 terigüten 頭 (37b)	非明示				+	○
112 terigüten 頭 (38a)	非明示				+	○
113 terigüten 頭 (40b)	非明示				+	○
114 terigüten 頭 (41a)	非明示				+	○
115 terigüten 頭 (66b)	非明示				+	○
116 terigüten 頭 (112a)	非明示				+	○
117 terigüten 頭 (114b)	非明示				+	○
118 terigüten 頭 (115a)	非明示				+	○
119 terigüten 頭 (116a)	非明示				+	○
120 terigüten 頭 (118a)	非明示				+	○
121 tuytan 旗 (61b)		tede 彼ら			+	○
122 unayatan 乗り物 (110a)	seçed 賢者たち				+	○
123 yabudaltan 行い (75a)	kebütegül 宿直人				+	○

7. 『ムカディマツト・アル・アダブ』における当該の派生接尾辞と共同格

『元朝秘史』および Лы.『アルタン・トブチ』の考察は、中世モンゴル語東方言に関する史料によるものであったので、この章では中世モンゴル語西方言の状況を把握するために『ムカディマツト・アル・アダブ』という史料を見る。『ムカディマツト・アル・アダブ』は、『元朝秘史』より時代としてはおよそ百年後に編纂された史料である。派生接尾辞の問題に入る前に、まず両史料の性格が異なることに触れておく必要がある。『元朝秘史』が歴史書であるのに対して、『ムカディマツト・アル・アダブ』は辞書である。辞書上、この派生接尾辞をめぐる表示に関して言えば、

_____ -派生接尾辞

というラテン文字による見出し語が冒頭に 250 語提示されていて、後の箇所であラビア文字表記とその意味のチュルク語訳、ロシア語訳を載せるという体裁でポッペが編纂したものである。後の箇所での意味説明に際しては、見出し語の

・ _____ -派生接尾辞

の一語だけ取り上げている場合が多い。この語の前か後、あるいは前後両方に他の語を伴った形で、

・ { _____ } _____ -派生接尾辞

・ _____ -派生接尾辞 { _____ }

・ { _____ } _____ -派生接尾辞 { _____ }

という形で、それぞれ説明を加えている場合もあるが、当該の派生接尾辞をめぐるのは、この辞書には主語が明示された完全な文の形で挙げられている用例はない。したがって、＜限定用法＞か＜述語用法＞の別は示すことができない。『ムカディマツト・アル・アダブ』では、＜限定用法＞に相当する用例は見られても、主語が明示されていない以上、主語と派生接尾辞の間に性と数の呼応を見出すことができないからである。これらのことを踏まえた上で、この辞書で当該の派生接尾辞が現れる回数を示す。

-tu 242 回

-tai 0 回

-tan 8 回

計 250 回

当該の派生接尾辞をめぐる、『ムカディマツト・アル・アダブ』が『元朝秘史』とも異なるのは、-tu と -tan の二形態のみで現れる点である。つまり、『元朝秘史』にあつては、被限定詞もしくは主語の位置に来るのが「人」のときには、約 95% 守られていた

男性 -tu、女性 -tai

という対立構図が存在しないのである。

被限定詞の位置に「女性」が来る

_____ + 派生接尾辞 → 女性

という句の形で挙げられている用例のうちのいくつかを掲げながら、それを確認する。

aburitu eme (p.313) (人柄を持つ) 人柄のよい女性
ačiatu eme (p.95) 荷物を持った女性
eretü eme (p.162) 夫のいる女性
ičeritü eme (p.194) (内気さを持つ) 内気な女性

() 内の数字は、その用例が載っているページを示している

このように、すべて -tu の形態で現れている。これらの句は、仮に『元朝秘史』であったらそれぞれ

aburitai eme
ačiatai eme
eretei eme
ičeritei eme

となっているところである。(訳は、上と同じである)

なお、aburitu の aburi は単独では характер の意味であると説明が施されている。このロシア語の日本語訳は辞書⁴⁰⁾によると、

性格、性質、気質、特徴

という訳が当てられている。しかし、派生接尾辞を伴った aburitu は учтивый の意味であるとの説明が施されている。このロシア語の日本語訳は、同辞書によると、

いんぎんな、丁寧な

とある。派生接尾辞が接続することで意味が転じることは、現代モンゴル語でも同様である。авир の意味は2章で取り上げたモンゴル語の辞書によると、

хүний зан ааль 人の性格

とあるが、派生接尾辞を接続させて авиртай とすることによって、「落ち着いた」(小沢の辞書による訳)という意味が生じる。「～の性格を持つ」という意味合いで現れることも現代語で皆無ではあるまいが、派生接尾辞が接続することによって転義が生じるという現象は、『ムカディマツト・アル・アダブ』よりおよそ百年前の『元朝秘史』ではそれほど顕著には現れない。地域が異なるので両者を通時的に並べることはできないが、このことから派生接尾辞接続による転義は時代が下るにつれて次第に生じて来たと推測するのは、問題ないように思われる。

次に、-tai の形態を持っていないのだから、被限定詞の位置に男性が来る

_____ -派生接尾辞 → 男性

という句であっても、派生接尾辞の形式は当然 -tu で現れるはずであるが、念のためその用例もいくつか掲げておくと、

hildütü ere (p.185) 剣を携えた男性

kühetü ere (p.220) 鎧を纏った男性
 qalqatu ere (p.280) 楯を持った男性
 üjeskülengthü ere (p.377) (美しさを持つ) 美しい男性

のように、やはりいずれも -tu の形態である。

また、『元朝秘史』では被限定詞もしくは主語の位置に来るのが単数の「動物」のときには、必ず -tu が現れるのであった。『ムカディマツト・アル・アダブ』における

_____ -派生接尾辞 → 動物

の用例も合わせて確認しておく、

nasutu üker (p.142) (年齢を持つ) 高齢の牛
 nasutu qonin (p.144) (年齢を持つ) 高齢の羊
 nasutu temen (p.244) (年齢を持つ) 高齢のらくだ

のように、-tu の形態が当然現れる。

さらに、被限定詞の位置に単数の「物」が来る

_____ -派生接尾辞 → 物

の用例としては、

qoyar e'üdetü ger (p.174) 二つの扉がある家

などが挙げられる。これは、『元朝秘史』であれば、誰の家かによって（「男性」が関与する家か、「女性」が関与する家か）-tu,-tai 両方の可能性がある場面である。現代モンゴル語であれば、特に固定表現ではないので

хоёр үүдтэй гэр

のように -тай となるべきところである。さて、「物」に関しては次の用例も見られる。

bortu ayaga (p.121) ぶどう酒が入ったコップ

これは、本稿で言うところの「器と中身の関係」である。上の例では中身側である bor（ぶどう酒）に派生接尾辞が接続している。逆の用例は記載されていないが、器側である ayaga（コップ）に -tu を接続させて

ayayatu bor コップに入ったぶどう酒

と描写することは可能であろう。

ここまで単数 -tu の用例を見て来たが、-tan に関しては

moritu (p.239) 馬を持つ、あるいは馬に乗った〔単数の者〕

に対する

moritan (p.239) 馬を持つ、あるいは馬に乗った〔複数の者〕

という用例や、

jebetü (p.373) 槍を持つ〔単数の者〕

に対する

jebeten (p.204) 槍を持つ〔複数の者〕

という用例が確認できる。

これらの対応例から、『ムカディマツト・アル・アダブ』においても単数が複数かによる呼応の区別はあったことが知られる。その一方、単数間の性による区別はなかったのである。

では、『元朝秘史』には

男性 -tu、女性 -tai

という性による区別があるのに、『ムカディマツト・アル・アダブ』にはそれがなく、単数は一貫して -tu で現れるという特徴をどのように捉えるべきなのであろうか。

一つには、時代差によるものであるという見方があるかもしれない。両史料の間にはおよそ百年の隔たりがある。もし、現代モンゴル語でも -tai が消滅していたなら

	『元朝秘史』	⇒	『ムカディマツト・アル・アダブ』	⇒	現代モンゴル語
-tu	多い		すべて		*すべて
-tai	少ない		なし		*なし

という歴史的変遷があったと通時的に説明することができよう。しかし、実際には現代モンゴル語はそのようにはなっておらず、

現代モンゴル語

-tu	少ない
-tai	多い

となっているわけである。したがって、『元朝秘史』の時代に -tu よりは少ないながらも生産的に用いられていた -tai が約百年後の『ムカディマツト・アル・アダブ』の時代で一時的消滅し、現代モンゴル語に至る過程のどこかで再び出現し、今度は『元朝秘史』とは反対に -tai のほうがより多く用いられるようになったと解釈するのは整合性に欠ける。

よって、もう一つ考えられるのは単なる地域差ではないかという見方である。東方言には、単数として -tu と -tai があり、『元朝秘史』ではさらにそこに性による呼応の区別が加わった。それに対して西方言には、そもそも -tai の形態がなかったか、あるいは早い段階に消滅していたのではないかという二つの考え方ができる。しかし、ここで留意しなければならないのは -tan の存在である。現代語のところ (3.3) で示した塩谷の説を支持するなら、-tan は -tai から生じたのである。上述したように、『ムカディマツト・アル・アダブ』では -tan という形態は現れる。元々 -tai を持っていなかったと仮定すると -tan を有していることが理解できなくなる。西方言の史料に -tai が現れないことに関しては、古くは東方言同様単数として役割差のない状態で -tu と -tai があったが、遅くとも『ムカディマツト・アル・アダブ』の頃には消滅したと推定するほうが、妥当性が高いように思われる。少なくとも、当該の派生接尾辞の体系に限って言うなら、東西相互の影響は大きくはなくそれぞれ異なる変遷を遂げて来たと見られるのである。

次に、動詞語尾（終止語尾）の状況について触れる。『ムカディマツ・アル・アダブ』では過去を表示する

-ba

という形態は確認できる。そのうちのいくつかを挙げる。

alquba (p.99) 歩いた

ayilyaba (p.108) 驚いた

bosuba (p.122) 立った

yabuba (p.285) 行った

-ba という形態は、小沢によれば『元朝秘史』では男性単数に対する呼応として現れるのであったが、『ムカディマツ・アル・アダブ』では主語を伴った用例はなく、呼応の状況までは把握できない。また、『元朝秘史』では女性単数に対する呼応であった -bi や、複数に対する呼応であった -bai の形態は全く見られないことから、動詞語尾に関しては -ba のみあったと考えられる。当該の派生接尾辞では、男女の差異はなく単数複数の差異はあるが、動詞語尾では、男女の差異のみならず単数複数の差異もなかったのではあるまいか。

形動詞語尾（連体語尾）ではどうかというと、

irekü čaq (p.197) 来る時

irekün hon (P.197) 来る年

のような -kü と -kün の対立が一例だけ見られるが、全貌は確認できない。

なお、『ムカディマツ・アル・アダブ』では本稿で言うところの共同格は、人称代名詞において、

nadalā 1 人称単数

bidanlā 1 人称複数

のように -lā の形態で表記されている。これは、チュルク系と同じ形態素であり、アウドゥルラッハマン・ギェルベヤズ (2016) による現代トルコ文法の入門書⁴¹⁾では、「共格」という名称で掲げられている

benimle 1 人称単数

bizimle 1 人称複数

という語が上と対応する。

チュルク系の形態素ということに関して言えば、『ムカディマツ・アル・アダブ』に現れる派生接尾辞 -liq もそうであり、

_____ -liq

という見出し語がおよそ 50 語掲載されている。表示する意味は、-tu と同じであることが分かる。すなわち、

dušmanliq と dušmantu 敵意のある

oiraliq と oiratu 近い

に対して、チュルク語訳もそれぞれ同一の説明が施されているのである。250 語以上が見出

し語に載っている -tu よりはだいぶ少ないが、十分生産的であったと言える数ではないか。このことから、『ムカディマツト・アル・アダブ』では《～のある、～を持つ》という意味を表示する派生接尾辞としては、

-tu (複数は -tan) モンゴル系 (多)
-liq チュルク系 (少)

が併用されていたと考えられるのである。また、現代トルコ語では《～のある、～を持つ》により近い意味を表示する派生接尾辞は、-liq ではなく -li であるが、両者の変遷の問題となると、完全にチュルク側のことになるので、本稿ではこれ以上は言及しないことにする。

なお、辞書である『ムカディマツト・アル・アダブ』は、それ自体に索引としての性格が備わっているので、ここでは改めて筆者による索引の添付は行わない。

8. パスパ文字史料における当該の派生接尾辞と共同格

この章では、モンゴル文字とは異なる文字で書かれた文献の状況を把握するために、パスパ文字史料を見ることにする。1269 年フビライによって制定されたとされるパスパ文字は、実際に使用されていた期間は短いと考えられていて、現存する文献も僅かであり、N.Poppe の編纂したものがそのすべてであると見られる。したがって、ここでは N.Poppe の編纂した史料に全面的に依拠して考察を進めることにする。パスパ文字史料で当該の派生接尾辞が現れる回数を示すと次のようになっている。

-tu 23 回
-tai 0 回
-tan 17 回
計 40 回

『ムカディマツト・アル・アダブ』同様、-tu と -tan の二形態の対立になっており、-tai は現れないという特徴を持つ。＜限定用法＞＜述語用法＞の分布は以下の通りである。

	-tu	-tai	-tan	計
限定用法	20	0	15	35
述語用法	3	0	2	5
計	23	0	17	40

(＜限定用法＞＜述語用法＞ごとの内訳)

<限定用法>のほうが多い点は、『元朝秘史』や Лй.『アルタン・トブチ』と同様である。これらを被限定詞もしくは主語の位置に来る語が何かによって分けると、以下のような数値が得られる。

	-tu	-tai	-tan	計
人	15	0	12	27
人以外 (もの)	8	0	5	13
計	23	0	17	40

(「人」「もの」に分けた場合の内訳)

まず、-tu から見る。なお、öljeet‘u qa·an という表記が2回見られるが、これはひとまとまりで人名なので除外し、23 回の中には含んでいない。ちなみに、あえて分析を加えるなら öljeet‘u は「幸福を持った」の意、qa·an は「ハーン」「王」の意である。一方、派生接尾辞の後に属格が接続する

buyant‘u yin 徳のある者の

sut‘u yin 威光のある者の

の2例は<限定用法>の一種として回数に含んだ。

-tu の23 例中、<述語用法>と見なすのが適当と思われるのは、

čin tav minijarliqt‘u. (III-21~22) チン・タオ・ミンは勅令を持っている。

() 内は、その用例が載っているテキストの番号と段を示しているという男性の主語に対する例がある。-tu の23 例中、被限定詞もしくは主語の位置に「人」が来るのは上の表で示している通り15 例であるが、それらがすべて男性であって、女性が来る例がないのが他の史料とは異なる点である。以下、例をいくつか挙げる。

yeke čoqt‘u bala (XIII-1) 大いなる威光のある王

yeke buyant‘u puryan (XIII-2) 多くの善行のある仏陀

horčin mergen neret‘u yeke qa·an (XIII-2)

ホルチン・メルゲンという名を持つ大ハーン

sut‘u galbavaras (XIII-7) 威光のあるカルバウルクサ

delger oyit‘u irinjin dorji (XIII-13) 広い知識を持つリンチェン・ドルジ

次に、「人以外」の例をいくつか挙げる。

kudagar neret‘u sudur (XII-6) クダガルという名を持つ経典

yeke auqat‘u (中略)naran met‘u (XIII-8) 偉大さを持つ (中略) 太陽のように

さて、ここで問題としなければならないのはパスパ文字史料において -tai の形態が現れない理由である。前章の『ムカディマツト・アル・アダブ』で -tai が現れないのは、地域性

によるものであると結論付けたが、これと同一視してはならない。この史料はモンゴル語東方言の13～14世紀のものであるから、当時の社会に *-tai* の形態がなかったはずはないのである。男性のことのみに記述するようになった結果、そこに *-tai* の形態が現れる余地がなかったと筆者は解釈する。したがって、性の呼応という観点からは、

	<i>-tu</i>	<i>-tan</i>	計
男性	15	0	15
女性	0	0	0
複数	0	12	12
計	15	12	27

(被限定詞もしくは主語が「人」の場合の内訳)

という偏ったデータしか得られないが、同時代の『元朝秘史』同様「守られている」と見たい。言い換えれば、呼応の問題に関しては、使用される文字の違いそのものに根差した特徴はないと考える。

そして、単数か複数かによる区別は概ねあったことが確認できる。すなわち、被限定詞もしくは主語の位置に来るのが複数のときには、*-tan* が現れるのである。まず、＜限定用法＞の例を挙げる。

depri-eč'e jaya-t'an bodhisivid (XIII-4) 天からの宿命を持った仏教徒たち
複数の「もの」であっても、

adisdidt'an al t'an k'örgudi (XII-4) ありがたさを持つ(複数の)金の肖像
次に、＜述語用法＞の例を挙げる。

ède (中略) bič'gt'en. (I-18) 彼らは(中略)文書を持っている。

ède basa jarliqt'an. (II-22) 彼らも勅命を持っている。

このように、複数に対する呼応が確認できる一方で、集合名詞化している例も見られる。*-tan* は全部で17例現れるのであるが、*ami t'an* (生ある者)のように必ずしも複数と呼応しているわけではない例もいくつかあるのである。ちなみに、*ami t'an* は6回現れる。これ以外にも、複数に対する呼応ではない *-tan* が見られる。つまり、*-tan* に関しては『元朝秘史』同様、複数に対する呼応と集合名詞を形成する役割の二つが混在しているのである。

最後に、派生接尾辞が接続している語のことに触れておきたい。というのも、パスバ文字で記されている文献は極めて抽象度が高く、それに伴い

_____派生接尾辞
の _____ に入る語も、具体的な形状を有する「物」である例はほとんどなく、多くは抽象的な語であるところに特徴を見出すことができるからである。ここまでの例で扱っていない語からも挙げると、

čınart <u>‘u</u> (XII-1)	能力を持つ
ėrdemt <u>‘u</u> (XIII-10)	価値のある
jırqalaŋt <u>‘u</u> (XII-1)	幸福を持つ (幸福な)
öŋget <u>‘u</u> (XIII-5)	形を持つ
qariyat <u>‘an</u> (II-18、他)	所属を持つ (所属する)
quduqt <u>‘u</u> (XIII-9)	幸運を持つ (幸運な)
yeket <u>‘u</u> (XIII-8)	大きさを持つ (大きい)
ijit <u>‘en</u> (IV-17)	勅令を持つ

本稿では、その必要性からこれまで被限定詞がどのような語であるかに着目してきたわけであるが、派生接尾辞の前の語を見た場合、パスパ文字史料ではこのように多くが抽象的な語の後に接続していることが分かる。「物」の後にも派生接尾辞が付く『元朝秘史』や『ムカディマツト・アル・アダブ』とは対照的である。

パスパ文字史料について、文字そのものに由来する特徴をあえて探すなら、呼応の有無ではなくむしろこの点にある。荒井 (2006) ⁴²⁾ が「その使用は宮廷に限られていたようである」と指摘しているように、日常生活にはそれほど普及しなかったために、自ずと抽象度の高い事柄を記録することになり、派生接尾辞も日常生活的な「物」ではなく、抽象的な語に接続することになったと考えられるのである。『元朝秘史』と同地域の史料でありながら、「人以外」でも -tai の形態が現れないのは、記述する内容の抽象性にその理由があるのではないかと筆者は考える。すなわち、抽象度の高い内容の記述には -tu のほうが生産的に用いられたのではあるまいか。

なお、形動詞語尾については、僅かではあるが

ayuyu~ayuyun 恐れる

のような、単数～複数の対立は確認できるが、-qui の形態は見られない。

動詞語尾と共同格の状況は、いずれもパスパ文字史料には現れないので確認することができない。

表記の仕方等は『元朝秘史』と同様である。

-tu 「人」はすべて男性であるから、当然呼応もすべて「○」となる。

本文で説明しているように、この史料では -tai の形態では現れない。

同じ単語でも他の史料ではニュアンスが異なる場合もあることから、同一語であっても各索引間で日本語訳の統一は特に行っていない。

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
1 biligt'u 知性 (XIII-3)	男・人名		+			○
2 buyant'u 徳 (XIII-2)	purvan 仏陀		+			○
3 buyant'u 徳 (XIII-3)	非明示		+			○
4 buyant'u 徳 (XIII-10)	qa'an 王		+			○
5 čoqt'u 威光 (XIII)	bala 王		+			○
6 jarliqt'u 勅令 (III-22)		男・人名	+			○
7 neret'u 名前 (XIII-1)		非明示	+			○
8 neret'u 名前 (XIII-2)	yeke qa'an 大王		+			○
9 oyit'u 知識 (XIII-13)	男・人名		+			○
10 oyit'u 知識 (XIII-14)	男・人名		+			○
11 quduqt'u 幸運 (XIII-6)	男・人名		+			○
12 sut'u 威光 (XII-3)	男・人名		+			○
13 sut'u 威光 (XIII-7)	男・人名		+			○
14 sut'u 威光 (XIII-9)	非明示		+			○
15 sut'u 威光 (XIII-10)	男・人名		+			○

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数		
16 a·uqat'u 偉大な (XIII-8)	naran 太陽		+			
17 činart'u 能力 (XII-1)		非明示	+			
18 ǵrdemt'u 価値 (XIII-10)	horayi 王冠		+			
19 jirqalaqt'u 幸福 (XII-1)	huja'ur 根源		+			
20 neret'u 名前 (XII-6)	sudur 経典		+			
21 neret'u 名前 (XIII-13)	gabšesun (階級名)		+			
22 ǵnget'u 形 (XII-5)	qoyar beye 二つの体			+		
23 yeket'u 大きい (XIII-8)	naran 太陽		+			
-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応

1 amit'an 命 (II-4)	非明示				+	○
2 amit'an 命 (XIII-3)	非明示				+	○
3 amit'an 命 (XIII-4)	非明示				+	○
4 amit'an 命 (XIII-10)	非明示				+	○
5 amit'an 命 (XIII-11)	非明示				+	○
6 amit'an 命 (XIII-12)	非明示				+	○
7 bičigt'en 記録 (I-18)		ède 彼ら			+	○
8 jarliqt'an 勅令 (II-22)		ède 彼ら			+	○
9 jaya·at'an 運命 (XIII-4)	bodhisivid 仏教徒たち				+	○
10 quduqt'an 幸運 (XIII-9)	非明示				+	○
11 teri·ut'en 頭 (IV-12)	非明示				+	○
12 ijit'en 勅令 (IV-17)	非明示				+	○

-tan 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
13 adišdidt'an 祝福 (XII-4)	alt'an k'örgudi 金の肖像			+
14 buyant'an 徳 (XIII-9)	üeles 行い			+
15 qariyat'an 従属 (II-18)	qajar 土地		+	
16 qariyat'an 従属 (III-20)	qajar 土地		+	
17 qariyat'an 従属 (IV-14)	qajar 土地		+	

9. その他の史料における当該の派生接尾辞と共同格

この章では、17～18 世紀の史料として『アルタン・ハーン伝』、『宝徳蔵般若経』、Мэргэн Гэгээн『アルタン・トブチ』の三つを順に取り上げる。13 世紀のモンゴル語と現代モンゴル語との時代的空白を埋めるのが、この章の目的である。

9.1 『アルタン・ハーン伝』

この史料について Ц.Буянзая⁴³⁾ は、成立年代に関しては、17 世紀上旬と中旬の説があるとした上で、「作品全体を詩の体裁で整えている」「仏教の関与が語られている」「仏典を直接引用している」「主人公の経歴が詳しく述べられている」という四点が特徴的であると捉えている。また、編者について森川（2007）は、作品にも登場するダヤン・キヤである可能性を示唆⁴⁴⁾している。『アルタン・ハーン伝』で当該の派生接尾辞が現れる回数を示すと、以下のようになっている。

-tu 323 回
-tai 23 回
-tan 180 回
計 526 回

-tu : -tai の比率は 93 : 7 であり、-tai に対する -tu の頻度という点に関しては『元朝秘史』や Лy.『アルタン・トブチ』よりも高くなっていることが分かる。なお、当該の派生接尾辞をめぐって、それが固有名詞の一部なのか称号（修飾語）なのかの判断は訳者である吉田の見解に委ねることにした。たとえば、

γaltu noyan (3513)

は、「火を持つ」ノヤンというように γaltu を修飾語としては見ておらず、「ガルト＝ノヤン」という人名として訳出しており、このような場合な派生接尾辞は上記の回数には含んでいない。このことを踏まえた上で、＜限定用法＞と＜述語用法＞に分けると次のようになる。

	-tu	-tai	-tan	計
限定用法	313	6	179	498
述語用法	10	17	1	28
計	323	23	180	526

（＜限定用法＞＜述語用法＞ごとの内訳）

<限定用法>と<述語用法>の比率は、全体としては<限定用法>のほうが高くなっていることは一目瞭然であるが、形態別にも特徴を述べることができる。

まず、-tu に関しては『元朝秘史』や Лы.『アルタン・トブチ』と比べると、<述語用法>の頻度が大幅に低くなっている点である。-tu の<述語用法>は、『元朝秘史』では 36%、Лы.『アルタン・トブチ』では 25%見られたが、『アルタン・ハーン伝』ではそれが 3%にまで減少している。まず、その少数の例を挙げる。なお、この史料に関しては、当該の派生接尾辞および単語の分かち書きはしない、格などはハイフンを付けるという点で吉田の転写に変更を加えることにする。

1902

ilangyui-a manu töbed-ün orun-u nomuγadqai yosutu bülügei.

とりわけ わがチベットの 地を 調伏することわりがある。

3674

tegüs ilayuyusan tsöngkaba-yin siregen-ü čorji-ača

完全な勝者 ツォンカバの 座主によって

toyin bolqu yosutu bülüge bi.

比丘とならなければならないのである、私は。

いずれも現代語なら yosutai (ёсүтэй) となるべきところである。吉田は、影印本に忠実に転写しており、この yosutu に関しては原典に基づき yosu tu と分かち書き表記している。

次に、-tai に関しては<限定用法>と<述語用法>の頻度の逆転が見られる。-tai の<述語用法>は、『元朝秘史』では約 23%、Лы.『アルタン・トブチ』では約 33%見られるが、『アルタン・ハーン伝』ではそれが約 74%に増加している。

-tan に関しては、<述語用法>は『元朝秘史』では約 30%、Лы.『アルタン・トブチ』で約 32%見られるが、『アルタン・ハーン伝』では 180 例中次の 1 例のみである。

0563

yeke ulus bayasqulangtan bolji

大オルスが歡喜(を持って)して、

ここでは、yeke ulus が主語に相当する。それ以外の -tan には、被限定詞の位置に「複数」が明示されている例としては、

0204

tegün-ü degü inu ubasanji nereten köbegüd bülügei.

その弟はオバサンジという名を持つ諸子であった。

のように、被限定詞に相当する語（ここでは、köbegüd）が明確に現れている例も見られるが、-tan の役割の段階としては、

1 -tan (a「複数」の意味) + b「複数」の意味を持つ名詞類
という二つが一組であったが、b が減少して、

2 -tan (a「複数」の意味)
に移行している例が明らかに多い。

次に、被限定詞もしくは主語が「人」か「人以外」かで分けると次のようになる。

	-tu	-tai	-tan	計
人	178	20	121	319
人以外	145	3	59	207
計	323	23	180	526

（「人」「人以外」に分けた場合の内訳）

「人以外」であっても、『元朝秘史』以降依然として -tu のほうが多い状況が続いていることが分かる。

もっとも重要な問題は、性と数の呼応が保持されているのか、崩壊しているのかという点である。被限定詞もしくは主語の位置に「人」が来るときの状況は以下のようになっている。

	-tu	-tai	-tan	計
男性	149	10	0	159
女性	8	0	0	8
複数	21	10	121	152
計	178	20	121	319

（被限定詞もしくは主語が「人」の場合の内訳）

上の表で、-tan はすべて呼応の原則に適用しているので問題にする必要はない。-tu は、178 例中 149 例、すなわち 84%が原則通り現れており、-tu と -tan のところだけ見るなら、この史料でもまだ性と数の呼応が保持されていたとすることもできなくはない。しかし、筆者はここで -tai の 20 例において呼応が全く守られていないことに何よりも着目したい。たとえば、

0143

erdeni metü köbegün-iyen nigen nasutai-ača sakın
 宝のような男子を 一歳一歳の時から守り、

0171

dolıan nasutai qoyitu eke-yi asarayuluyad
 七歳七歳のときに 後母を娶らせて、

0302

köbegün inu altan qaγan γunan nasutai
 その子 アルタン・ハーンは三歳三歳で、

これら三者はいずれも「男性」であるのに、年齢を言う際の派生接尾辞は -tai が用いられている。『元朝秘史』や Лы.『アルタン・トブチ』であれば、「男性」の年齢は必ず -tu で表している。また、「複数」であるのに -tai が用いられている例としては、

3491～3494

noyad (中略) bayasqulangtai-a čaγan taulai jil-e esen tügel qariju bayubai.
 ノヤンたちは、 喜び喜びを持って(喜んで) 白い卯年に 無事に帰営した。

3821～3834

γurbayula (中略) γayiqamsiy jokistai-a debter-tür orusiγulju talbilai.
 三人は、 驚くべく適切さ適切さを持って(適切に) 書籍となして安置した。

などが挙げられる。その一方で、-tu が「女性」に対応している例としては、

0134

bürin törülkitü manduqai qatun-i abqui jabduγsan-dur
 完全な生生を持つマンドハイ・ハトンを娶ろうとすると、

0313

ele negüdel bolbasu belbesün düritü eme-dür degürgejü
 移動するときには寡婦の姿姿を持つ女の鞍の前に乗せて、

0992

siluyun uqayatu uyanču jönggen qatun-i abuyad qayiday mordaju

すぐれた知恵あるオヤンチュ・ジュンゲン・ハトンを連れて替え馬なしで出発し、

などが挙げられる。いずれも、『元朝秘史』であれば -tai が現れるべきところである。呼応の適合率という観点から言えば、-tu のそれは『元朝秘史』と比べてやや下がるだけであるが、-tai の呼応の完全な崩壊や -tan における呼応の弱化など総合的に考えると、『アルタン・ハーン伝』では当該の派生接尾辞による呼応は大きく後退していると言えるのではないか。

以上のことから、

- ① 性と数の呼応の後退
- ② -tu における<述語用法>の大幅な減少
- ③ -tai における<限定用法>と<述語用法>の頻度の逆転
- ④ -tan における「複数」との呼応関係の弱化

の四点は、どれも現代語に通じる流れがあると言えるのである。ただし、

- ⑤ 総数として -tu の使用頻度が高い

点は、前時代の『元朝秘史』や Jly.『アルタン・トブチ』と同様である。

また、『アルタン・ハーン伝』に見られる共同格の形態は以下のように -luya で現れる。
-tai の形態では全く現れない。

0382

tung γadayadu dayisun-luya temečeldün yabuju

外なる 敵と 戦いつつ、

0882

tere ayan-dur töbed-ün olan qudaldučin-luya jolyalduju

その遠征でチベットの多くの商人と会って、

0883

tede-lüge bayilduju daruyad asaraqui sedkil-iyer

彼らと戦い打ち負かして、慈しむ心によって、

<索引 5> 『アルタン・ハーン伝』における当該の派生接尾辞に関する全索引

表記の仕方等は『元朝秘史』と同様である。

当該の派生接尾辞に関して、本文でも述べているように吉田は影印本に基づき分かち書きかどうかを転写にも厳密に反映させているが、この<索引>でもすべて分かち書きせずに表記することとする。

「人」における性の呼応は既に喪失しているとするが、書式上呼応が守られているかどうかをこれまで通り表示する。ただし、「人以外」における「関与」の有無の判定は行わない。

仏の名称や仏教用語の日本語訳は、吉田の訳をそのまま用いる。また、仏の類は便宜上「人以外」に区分する。

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
1 albatu 務め (069)		非明示	+			○
2 albatu 務め (071)		noyad 領主たち			+	●
3 albatu 務め (072)		男・人名	+			○
4 albatu 務め (104)		非明示	+			○
5 atayatu 憎悪 (065)	男・人名		+			○
6 bayasqulangtu 喜び (086)	男・人名		+			○
7 bayasqulangtu 喜び (101)	男・人名		+			○
8 bayasqulangtu 喜び (182)	qayan qatun 王、王妃				+	●
9 bayasqulangtu 喜び (216)	qayan 王		+			○
10 bayasqulangtu 喜び (376)	男・人名		+			○
11 beyetü 体 (001)	blama nar ラマ僧ら				+	●
12 beyetü 体 (203)	男・人名		+			○
13 beyetü 体 (267)	男・人名		+			○
14 beyetü 体 (366)	男・人名		+			○
15 biligtü 智恵 (112)	男・人名		+			○
16 biligtü 智恵 (189)	男・人名		+			○
17 biligtü 智恵 (195)	男・人名		+			○
18 bisireltü 信念 (069)	男・人名		+			○
19 bisireltü 信念 (189)	男・人名		+			○
20 bisireltü 信念 (342)	複数・人名				+	●
21 buyantu 徳 (068)	男・人名		+			○

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
22 buyantu 徳 (172)	男・人名		+			○
23 buyantu 徳 (178)	男・人名		+			○
24 buyantu 徳 (199)	男・人名		+			○
25 buyantu 徳 (203)	男・人名		+			○
26 buyantu 徳 (208)	男・人名		+			○
27 buyantu 徳 (211)	男・人名		+			○
28 buyantu 徳 (224)	男・人名		+			○
29 buyantu 徳 (226)	男・人名		+			○
30 buyantu 徳 (233)	男・人名		+			○
31 buyantu 徳 (352)	男・人名		+			○
32 buyantu 徳 (353)	男・人名		+			○
33 činartu 本性 (001)	blama nar ラマ僧ら				+	●
34 činartu 本性 (183)	非明示		+			○
35 činartu 本性 (203)	男・人名		+			○
36 čoytu 輝き (226)	男・人名		+			○
37 čoytu 輝き (233)	男・人名		+			○
38 čoytu 輝き (338)	男・人名		+			○
39 čoytu 輝き (356)	男・人名		+			○
40 čoytu 輝き (365)	男・人名		+			○
41 čoytu 輝き (375)	男・人名		+			○
42 dūritü 姿 (031)	eme 女			+		●
43 erdemtü 教養 (091)	男・人名		+			○
44 erdemtü 教養 (261)	男・人名		+			○
45 erdemtü 教養 (261)	複数・人名				+	●
46 erdemtü 教養 (370)	男・人名		+			○
47 erdemtü 教養 (385)	urad 匠たち				+	●
48 erketü 力 (037)	男・人名		+			○
49 erketü 力 (067)	男・人名		+			○
50 erketü 力 (107)	男・人名		+			○
51 erketü 力 (161)	男・人名		+			○
52 erketü 力 (166)	boyda 聖者		+			○
53 erketü 力 (166)	男・人名		+			○
54 erketü 力 (241)	yeke qayan 大王		+			○

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
55 erketü 力 (283)	boyda 聖者		+			○
56 erketü 力 (314)	非明示		+			○
57 erketü 力 (327)	qayan 王		+			○
58 erketü 力 (354)	qayan qatun 王、王妃				+	●
59 yabiyatu 優秀 (179)	quvarayud 僧たち				+	●
60 yabiyatu 優秀 (270)	uran 匠		+			○
61 yartu 手 (030)		男・人名	+			○
62 yayiqamsiytu 驚き (274)	qubitan 有分の者ら				+	●
63 yayiqamsiytu 驚き (282)	男・人名		+			○
64 yayiqamsiytu 驚き (343)	quvarayud 僧たち				+	●
65 yayiqamsiytu 驚き (347)	男・人名		+			○
66 jarliytu 勅命 (001)	blama nar ラマ僧ら				+	●
67 jayayatu 運命 (095)	男・人名		+			○
68 jibqulangtu 威光 (165)	qayan 王		+			○
69 jibqulangtu 威光 (295)	qan 王		+			○
70 jibqulangtu 威光 (301)	男・人名		+			○
71 jibqulangtu 威光 (313)	ejen 主		+			○
72 jirketü 意志 (063)	男・人名		+			○
73 joriytu 勇気 (042)	ejen 主		+			○
74 joriytu 勇気 (062)	男・人名		+			○
75 joriytu 勇気 (069)	男・人名		+			○
76 joriytu 勇気 (118)	男・人名		+			○
77 küčütü 力 (075)	男・人名		+			○
78 küčütü 力 (109)	男・人名		+			○
79 küčütü 力 (117)	男・人名		+			○
80 küčütü 力 (118)	男・人名		+			○
81 küčütü 力 (327)	qayan 王		+			○
82 küčütü 力 (342)	男・人名		+			○
83 neretü 名前 (007)	男・人名		+			○
84 neretü 名前 (013)	köbegün 子供		+			○
85 neretü 名前 (039)	kümün 人		+			○

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
86 neretü 名前 (062)	kümün 人		+			○
87 neretü 名前 (077)	kümün 人		+			○
88 neretü 名前 (078)	kümün 人		+			○
89 neretü 名前 (101)	noyan 領主		+			○
90 neretü 名前 (106)	kümün 人		+			○
91 neretü 名前 (110)	tüngsi 通事		+			○
92 neretü 名前 (111)	tüsimel 官吏		+			○
93 neretü 名前 (250)	kümün 人		+			○
94 omuytu 傲慢 (067)	男・人名		+			○
95 oyutu 知性 (281)	irgen 民				+	●
96 ösiyetü 仇 (044)	男・人名		+			○
97 ösiyetü 仇 (069)	dayisun 敵				+	●
98 qourtu 毒 (030)	男・人名		+			○
99 qourtu 毒 (081)	男・人名		+			○
100 qubitu 有分 (177)	複数・人名				+	●
101 qubitu 有分 (228)	女・人名			+		●
102 qutuytu 至福 (005)	男・人名		+			○
103 qutuytu 至福 (027)	eme 女			+		●
104 qutuytu 至福 (105)	ere 男		+			○
105 qutuytu 至福 (159)	男・人名		+			○
106 qutuytu 至福 (166)	男・人名		+			○
107 qutuytu 至福 (174)	男・人名		+			○
108 qutuytu 至福 (180)	男・人名		+			○
109 qutuytu 至福 (186)	男・人名		+			○
110 qutuytu 至福 (189)	男・人名		+			○
111 qutuytu 至福 (197)	男・人名		+			○
112 qutuytu 至福 (198)	男・人名		+			○
113 qutuytu 至福 (207)	男・人名		+			○
114 qutuytu 至福 (209)	男・人名		+			○
115 qutuytu 至福 (210)	男・人名		+			○
116 qutuytu 至福 (217)	男・人名		+			○
117 qutuytu 至福 (227)	男・人名		+			○
118 qutuytu 至福 (228)	男・人名		+			○
119 qutuytu 至福 (230)	男・人名		+			○

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
120 qutuγtu 至福 (239)	男・人名		+			○
121 qutuγtu 至福 (254)	男・人名		+			○
122 qutuγtu 至福 (260)	lama ラマ		+			○
123 qutuγtu 至福 (262)	男・人名		+			○
124 qutuγtu 至福 (263)	男・人名		+			○
125 qutuγtu 至福 (265)	男・人名		+			○
126 qutuγtu 至福 (269)	男・人名		+			○
127 qutuγtu 至福 (272)	男・人名		+			○
128 qutuγtu 至福 (279)	男・人名		+			○
129 qutuγtu 至福 (281)	男・人名		+			○
130 qutuγtu 至福 (289)	男・人名		+			○
131 qutuγtu 至福 (294)	男・人名		+			○
132 qutuγtu 至福 (295)	男・人名		+			○
133 qutuγtu 至福 (297)	男・人名		+			○
134 qutuγtu 至福 (301)	男・人名		+			○
135 qutuγtu 至福 (304)	男・人名		+			○
136 qutuγtu 至福 (306)	男・人名		+			○
137 qutuγtu 至福 (312)	男・人名		+			○
138 qutuγtu 至福 (323)	男・人名		+			○
139 qutuγtu 至福 (333)	qayan 王		+			○
140 qutuγtu 至福 (337)	男・人名		+			○
141 qutuγtu 至福 (340)	男・人名		+			○
142 qutuγtu 至福 (344)	男・人名		+			○
143 qutuγtu 至福 (345)	男・人名		+			○
144 qutuγtu 至福 (346)	男・人名		+			○
145 qutuγtu 至福 (350)	男・人名		+			○
146 qutuγtu 至福 (353)	男・人名		+			○
147 qutuγtu 至福 (359)	男・人名		+			○
148 qutuγtu 至福 (363)	男・人名		+			○
149 qutuγtu 至福 (381)	男・人名		+			○
150 sedkiltü 心 (001)	blama nar ラマ僧ら				+	●
151 sedkiltü 心 (013)	男・人名		+			○
152 sedkiltü 心 (016)	sayid 臣下たち				+	●

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
153 sedkiltü 心 (042)	ejen 主		+			○
154 sedkiltü 心 (068)	男・人名		+			○
155 sibergeltü 辮髪 (066)	ulus 人々				+	●
156 sibsigtü 恥 (052)	男・人名		+			○
157 suutu 至福 (002)	男・人名		+			○
158 suutu 至福 (008)	男・人名		+			○
159 suutu 至福 (166)	男・人名		+			○
160 törülkitü 生 (013)	女・人名			+		●
161 törülkitü 生 (102)	女・人名			+		●
162 törülkitü 生 (104)	男・人名		+			○
163 törülkitü 生 (178)	女・人名			+		●
164 törülkitü 生 (290)	女・人名			+		●
165 tusatu 利益 (171)	男・人名		+			○
166 tusatu 利益 (173)	男・人名		+			○
167 tusatu 利益 (185)	非明示		+			○
168 tusatu 利益 (193)	男・人名		+			○
169 uqayatu 理性 (066)	男・人名		+			○
170 uqayatu 理性 (096)	男・人名		+			○
171 uqayatu 理性 (099)	女・人名			+		●
172 uqayatu 理性 (108)	tüsimed 官吏たち				+	●
173 yeketü 大きい (082)	男・人名		+			○
174 yeketü 大きい (108)	tüsimed 官吏たち				+	●
175 yeketü 大きい (199)	男・人名		+			○
176 yeketü 大きい (384)	男・人名		+			○
177 yosutu 道理 (190)		男・人名	+			○
178 yosutu 道理 (367)		bi 私	+			○

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
179 ačitu 恩 (001)	jayaya 運命		+	
180 ačitu 恩 (144)	非明示		+	
181 aytatu 馬 (293)	šang 賞		+	
182 altatu 金 (121)	bičig 書		+	
183 arslantu 獅子 (356)	tabčang 座		+	
184 bayasqulangtu 喜び (027)	qurim 宴		+	

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
185 bayasqulangtu 喜び (028)	qurim 宴		+	
186 bayasqulangtu 喜び (045)	olja 戦利品		+	
187 bayasqulangtu 喜び (102)	qurim 宴		+	
188 bayasqulangtu 喜び (213)	qurim 宴		+	
189 bayasqulangtu 喜び (229)	nomud 法		+	
190 bayasqulangtu 喜び (297)	tüşid tngri 兜率天		+	
191 bayasqulangtu 喜び (371)	shikamuni 釈迦牟尼		+	
192 belgetü 兆 (148)	orun 場所		+	
193 biligtü 兆 (310)	orun 場所		+	
194 bisireltü 信心 (199)	süsüg 信仰		+	
195 buyantu 至福 (227)	üiles 行い			+
196 buyantu 至福 (342)	sara 月		+	
197 čibeltü 罪 (015)	sedkil 心		+	
198 činartu 本性 (319)		shikamuni 釈迦牟尼	+	
199 činartu 本性 (390)	bilig barmaid 智慧波羅蜜		+	
200 čoytu 輝き (141)	naran 太陽		+	
201 čoytu 輝き (156)	orun 場所		+	
202 čoytu 輝き (171)	öngge 色		+	
203 čoytu 輝き (203)	alimad qoyar költen 両足尊		+	
204 čoytu 輝き (267)	naran 太陽		+	
205 dayayatu 従属 (094)	čolmon 金星		+	
206 erketü 力 (014)	tngri 天		+	
207 erketü 力 (016)	yal 火		+	
208 erketü 力 (131)	sedkil 心		+	
209 erketü 力 (139)	ma üsüg マ字		+	
210 erketü 力 (150)	shikamuni 釈迦牟尼		+	
211 erketü 力 (150)	qurmusta 帝釈天		+	
212 erketü 力 (191)	burqan 仏		+	
213 erketü 力 (233)	asistid 加持		+	
214 erketü 力 (259)	burqan 仏		+	
215 erketü 力 (268)	nom 法		+	
216 erketü 力 (298)	čakravarti 輪		+	

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
217 erketü 力 (319)	qurmusta 帝釈天		+	
218 erketü 力 (329)	burqan 仏		+	
219 yabiyatu 優秀 (221)	nom 法		+	
220 yabiyatu 優秀 (226)	stongkor トンコル		+	
221 yabiyatu 優秀 (246)	abisig 灌頂		+	
222 yabiyatu 優秀 (347)	sudur 書籍		+	
223 yayiqamsigtu 驚き (045)	olja 戦利品		+	
224 yayiqamsigtu 驚き (154)	burqan 仏		+	
225 yayiqamsigtu 驚き (224)	jarliy 勅令		+	
226 yayiqamsigtu 驚き (313)	shikamuni 釈迦牟尼		+	
227 yayiqamsigtu 驚き (319)	sitügen 抛り所		+	
228 yayiqamsigtu 驚き (336)	gegen kegüri 御遺体		+	
229 yayiqamsigtu 驚き (355)	ilaıuısan čimeg 勝利幢		+	
230 yayiqamsigtu 驚き (357)	bramid 波羅蜜		+	
231 yayiqamsigtu 驚き (374)	eldeb jüil qubčasun čimeg ger tergen 種々の衣服・装飾 品・家・車			+
232 yayiqamsigtu 驚き (378)	belges 兆		+	
233 gereltü 光 (276)	naran 太陽		+	
234 ibegeltü 加護 (144)	非明示		+	
235 jayayatu 運命 (152)	qamuy すべて			+
236 jibqulangtu 威光 (140)	pad üsüg パド字		+	
237 jibqulangtu 威光 (152)		shikamuni burqan 釈迦牟尼仏	+	
238 jibqulangtu 威光 (337)	ordu qarsi 宮殿		+	
239 jiryalangtu 安楽 (140)	qung üsüg フム字		+	
240 jiryalangtu 安楽 (155)	orun 場所		+	
241 jiryalangtu 安楽 (234)	čakravarti 輪		+	
242 jokistu 適切 (357)	bramid 波羅蜜		+	
243 jüiltü 種類 (121)	degel 服		+	

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
244 jüiltü 種類 (209)	bramid 波羅蜜		+	
245 jüiltü 種類 (235)	öglige bramid 布施波羅蜜		+	
246 jüiltü 種類 (277)	iru-a 兆		+	
247 jüiltü 種類 (342)	belges 兆			+
248 jüiltü 種類 (347)	nomud 法			+
249 jüiltü 種類 (350)	belges 兆			+
250 jüiltü 種類 (384)	erdenis 宝			+
251 jüiltü 種類 (386)	takil nuγud 供物			+
252 küčütü 力 (228)	čakravarti 輪		+	
253 küčütü 力 (234)	čakravarti 輪		+	
254 küčütü 力 (235)	čakravarti 輪		+	
255 küčütü 力 (236)	čakravarti 輪		+	
256 küčütü 力 (249)	čakravarti 輪		+	
257 küčütü 力 (256)	čakravarti 輪		+	
258 küčütü 力 (259)	čakravarti 輪		+	
259 küčütü 力 (273)	čakravarti 輪		+	
260 küčütü 力 (275)	čakravarti 輪		+	
261 küčütü 力 (298)	čakravarti 輪		+	
262 küčütü 力 (326)	čakravarti 輪		+	
263 asartu 樓閣 (148)	qota 城		+	
264 neretü 名前 (000)	sudur 書籍		+	
265 neretü 名前 (034)	γajar 土地		+	
266 neretü 名前 (040)	γajar 土地		+	
267 neretü 名前 (048)	γajar 土地		+	
268 neretü 名前 (074)	sübe 隘路		+	
269 neretü 名前 (090)	γajar 土地		+	
270 neretü 名前 (098)	qota 城		+	
271 neretü 名前 (099)	γajar 土地		+	
272 neretü 名前 (099)	γajar 土地		+	
273 neretü 名前 (102)	γajar 土地		+	
274 neretü 名前 (105)	qota 城		+	
275 neretü 名前 (106)	qota 城		+	
276 neretü 名前 (127)	γajar 土地		+	

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
277 neretü 名前 (164)	γajar 土地		+	
278 neretü 名前 (197)	γajar 土地		+	
279 neretü 名前 (198)	γajar 土地		+	
280 neretü 名前 (202)	γajar 土地		+	
281 neretü 名前 (202)	γajar 土地		+	
282 neretü 名前 (202)	γajar 土地		+	
283 neretü 名前 (250)	qota 城		+	
284 neretü 名前 (302)	γajar 土地		+	
285 neretü 名前 (306)	γajar 土地		+	
286 neretü 名前 (308)	γajar 土地		+	
287 neretü 名前 (310)	γajar 土地		+	
288 neretü 名前 (340)	γajar 土地		+	
289 neretü 名前 (350)	γajar 土地		+	
290 neretü 名前 (354)	γajar 土地		+	
291 neretü 名前 (387)	čadig 略伝		+	
292 omuytu 傲慢 (139)	törüküi üküküi 生死		+	
293 orunggitu 右巻き (335)	非明示		+	
294 öljeitü 吉祥 (177)	sayin edür 吉日		+	
295 önggetü 色 (086)	gerel 光		+	
296 önggetü 色 (087)	gerel 光		+	
297 önggetü 色 (171)	ayula 山		+	
298 qabiyatu 相応 (218)	emegel qajayar 鞍轡			+
299 qajayartu 轡 (289)	aytas 馬		+	
300 qariyatu 所属 (239)		abisig 灌頂	+	
301 qariyatu 所属 (374)	temegen morin lausa らくだ・馬・騾騾			+
302 qayiratu 愛 (010)	amin 命		+	
303 qutyutu 至福 (226)	čola 称号		+	
304 qutyutu 至福 (226)	čola 称号		+	
305 qutyutu 至福 (317)	noqai 戌		+	
306 sariltu 舍利 (336)	suburyan 塔		+	
307 sariltu 舍利 (340)	suburyan 塔		+	

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
308 suburyatu 塔 (085)	非明示		+	
309 suutu 至福 (057)	čayan ger 白室		+	
310 suutu 至福 (058)	čola 称号		+	
311 tusatu 利益 (155)	burqan 仏		+	
312 tusatu 利益 (167)	üiles 行い		+	
313 tusatu 利益 (215)	ganjur stanjur ガンジュール タンジュール			+
314 tusatu 利益 (284)	nom 法		+	
315 tusatu 利益 (285)	doluyan doluyan qonuy 四十九日		+	
316 tusatu 利益 (292)	doluyan takil 七種の供養			+
317 üjeskülengtü 美 (148)	naiman asar 八つの塔			+
318 üjügürtü 端 (244)	sedkil 心		+	
319 üjügürtü 端 (246)	sedkil 心		+	
320 üyetü 節 (142)	sanvar 戒		+	
321 üyetü 節 (143)	sanvar 戒		+	
322 üyetü 節 (146)	sanvar 戒		+	
323 yabudaltu 行い (390)	bilig barmaid 智慧波羅蜜		+	

-tai 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
1 bayasqulangtai 喜び (051)		yeke ulus 大オルス			+	●
2 bayasqulangtai 喜び (076)		yeke ulus 大オルス			+	●
3 bayasqulangtai 喜び (339)		複数・人名			+	●
4 bayasqulangtai 喜び (349)		noyad 領主たち			+	●
5 bodatai 本性 (013)	önüčin 孤児		+			●
6 bolčimtai 思慮 (104)		非明示	+			●
7 bolčimtai 思慮 (328)		男・人名	+			●

-tai 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
8 jokistai 適切 (165)		非明示	+			●
9 jokistai 適切 (165)		qotala みんな			+	●
10 jokistai 適切 (295)		bügüdegür みんな			+	●
11 jokistai 適切 (300)		非明示			+	●
12 jokistai 適切 (301)		非明示			+	●
13 jokistai 適切 (337)		非明示			+	●
14 jokistai 適切 (383)		yurbayla 三人			+	●
15 nasutai 年齢 (013)	önüčin 孤児		+			●
16 nasutai 年齢 (014)		köbegün 子供	+			●
17 nasutai 年齢 (017)		非明示	+			●
18 nasutai 年齢 (030)		男・人名	+			●
19 nasutai 年齢 (037)		男・人名	+			●
20 temdegtei 印 (011)	男・人名		+			●

-tai 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
21 belgetei 兆 (255)	üsüg 字		+	
22 jibqulangtai 壮麗 (234)	mandal 曼荼羅		+	
23 tusatai 利益 (038)	sayin üiles 善行			+

-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
1 ačitan 恩 (144)	非明示				+	○
2 amitan 命 (026)	非明示				+	○
3 amitan 命 (134)	非明示				+	○
4 amitan 命 (138)	非明示				+	○
5 amitan 命 (141)	非明示				+	○
6 amitan 命 (144)	非明示				+	○
7 amitan 命 (151)	非明示				+	○
8 amitan 命 (151)	非明示				+	○
9 amitan 命 (160)	非明示				+	○
10 amitan 命 (173)	非明示				+	○
11 amitan 命 (175)	非明示				+	○
12 amitan 命 (183)	非明示				+	○
13 amitan 命 (184)	非明示				+	○

-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
14 amitan 命 (190)	非明示				+	○
15 amitan 命 (191)	非明示				+	○
16 amitan 命 (203)	非明示				+	○
17 amitan 命 (204)	非明示				+	○
18 amitan 命 (210)	非明示				+	○
19 amitan 命 (213)	非明示				+	○
20 amitan 命 (219)	非明示				+	○
21 amitan 命 (257)	非明示				+	○
22 amitan 命 (258)	非明示				+	○
23 amitan 命 (267)	非明示				+	○
24 amitan 命 (273)	非明示				+	○
25 amitan 命 (274)	非明示				+	○
26 amitan 命 (303)	非明示				+	○
27 amitan 命 (307)	非明示				+	○
28 amitan 命 (316)	非明示				+	○
29 amitan 命 (327)	非明示				+	○
30 amitan 命 (340)	非明示				+	○
31 amitan 命 (341)	非明示				+	○
32 amitan 命 (358)	非明示				+	○
33 amitan 命 (369)	非明示				+	○
34 amitan 命 (370)	非明示				+	○
35 amitan 命 (381)	非明示				+	○
36 atıyan 憎悪 (064)	dayisun 敵				+	○
37 bayasqulangtan 喜び (056)		yeke ulus 大オルス			+	○
38 biligten 智 (008)	非明示				+	○
39 ejedten 主たち (257)	非明示				+	○
40 jayayatan 運命 (247)	非明示				+	○
41 nereten 名前 (020)	köbegüd 子供たち				+	○
42 omuytan 傲慢 (070)	dayisun 敵				+	○
43 omuytan 氏族 (079)	複数・人名				+	○
44 ösiyeten 仇 (033)	非明示				+	○
45 ösiyeten 仇 (034)	dayisun 敵				+	○
46 ösiyeten 仇 (059)	dayisun 敵				+	○

-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
47 ösiyeten 仇 (064)	非明示				+	○
48 ösiyeten 仇 (118)	dayisun 敵				+	○
49 qaritan 異国 (063)	非明示				+	○
50 qaritan 異国 (075)	dayisun 敵				+	○
51 qaritan 異国 (079)	kitad キタド				+	○
52 qaritan 異国 (087)	dayisun 敵				+	○
53 qaritan 異国 (117)	kitad キタド				+	○
54 qaritan 異国 (129)	dayisun 敵				+	○
55 qaritan 異国 (322)	dayisun 敵				+	○
56 qourtan 毒 (077)	非明示				+	○
57 qubitan 有分 (274)	非明示				+	○
58 qutuytan 至福 (172)	非明示				+	○
59 qutuytan 至福 (225)	非明示				+	○
60 qutuytan 至福 (267)	非明示				+	○
61 qutuytan 至福 (386)	quvarayud 僧たち				+	○
62 sedkilten 心 (015)	非明示				+	○
63 süsügten 信仰 (243)	非明示				+	○
64 terigüten 頭 (028)	非明示				+	○
65 terigüten 頭 (044)	oyurçay bülüg 残党				+	○
66 terigüten 頭 (071)	noyad 領主たち				+	○
67 terigüten 頭 (073)	非明示				+	○
68 terigüten 頭 (079)	noyad 領主たち				+	○
69 terigüten 頭 (100)	noyad 領主たち				+	○
70 terigüten 頭 (100)	非明示				+	○
71 terigüten 頭 (102)	非明示				+	○
72 terigüten 頭 (103)	noyad 領主たち				+	○
73 terigüten 頭 (109)	tabun sayin kümün 五人の良い者				+	○
74 terigüten 頭 (112)	非明示				+	○
75 terigüten 頭 (115)	noyad 領主たち				+	○
76 terigüten 頭 (116)	非明示				+	○
77 terigüten 頭 (119)	yurban tümen 三トゥメン				+	○
78 terigüten 頭 (120)	noyad 領主たち				+	○

-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
79 terigüten 頭 (189)	noyad 領主たち				+	○
80 terigüten 頭 (207)	yeke ulus 大オルス				+	○
81 terigüten 頭 (208)	tabun öngge ulus 五色のオルス				+	○
82 terigüten 頭 (219)	非明示				+	○
83 terigüten 頭 (224)	非明示				+	○
84 terigüten 頭 (225)	noyad 領主たち				+	○
85 terigüten 頭 (234)	bögüdegür みんな				+	○
86 terigüten 頭 (257)	amitan 有情				+	○
87 terigüten 頭 (261)	γurban tümen 三トゥメン				+	○
88 terigüten 頭 (261)	非明示				+	○
89 terigüten 頭 (269)	qamuy みんな				+	○
90 terigüten 頭 (270)	qamuy みんな				+	○
91 terigüten 頭 (273)	非明示				+	○
92 terigüten 頭 (290)	非明示				+	○
93 terigüten 頭 (303)	amitan 有情				+	○
94 terigüten 頭 (305)	非明示				+	○
95 terigüten 頭 (309)	非明示				+	○
96 terigüten 頭 (311)	qaračin tümen ハラチン・トゥメン				+	○
97 terigüten 頭 (312)	qamuy みんな				+	○
98 terigüten 頭 (315)	γurban tümen 三トゥメン				+	○
99 terigüten 頭 (326)	noyad 領主たち				+	○
100 terigüten 頭 (339)	qaračin tümen ハラチン・トゥメン				+	○
101 terigüten 頭 (345)	非明示				+	○
102 terigüten 頭 (346)	quvarayud 僧たち				+	○
103 terigüten 頭 (349)	noyad 領主たち				+	○
104 terigüten 頭 (351)	mingyan čerig 千の兵				+	○
105 terigüten 頭 (355)	非明示				+	○
106 terigüten 頭 (357)	qamuy みんな				+	○

-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
107 terigüten 頭 (358)	quvarayud 僧たち				+	○
108 terigüten 頭 (360)	qotala みんな				+	○
109 terigüten 頭 (361)	sayid 大臣たち				+	○
110 terigüten 頭 (362)	tabun ayımay tursiyul 五部の斥候				+	○
111 terigüten 頭 (364)	quvarayud 僧たち				+	○
112 terigüten 頭 (366)	lama nar ラマたち				+	○
113 terigüten 頭 (376)	tabun ayımay tursiyul 五部の斥候				+	○
114 terigüten 頭 (379)	非明示				+	○
115 terigüten 頭 (380)	非明示				+	○
116 terigüten 頭 (382)	非明示				+	○
117 toyatan 数 (271)	kölged 乗用馬				+	○
118 toyatan 数 (387)	datud 妃たち				+	○
119 toyatan 数 (387)	köbegüd 子供たち				+	○
120 üjeltin 見解 (136)	非明示				+	○
121 yabudaltan 行い (196)	非明示				+	○

-tan 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
122 amtatan 味 (079)	idegen 食べ物			+
123 ariyatan 牙 (121)	非明示			+
124 činartan 本性 (282)	非明示			+
125 yadayatan 外 (123)	qayalyas 関			+
126 yadayatan 外 (123)	qayalyas 関			+
127 yadayatan 外 (123)	qayalyas 関			+
128 yayiqamsiytan 驚き (158)	非明示			+
129 jülten 種類 (121)	非明示			+
130 jülten 種類 (158)	非明示			+
131 jülten 種類 (163)	非明示			+
132 segülten 尾 (277)	odud 星			+
133 terigüten 頭 (005)	非明示			+
134 terigüten 頭 (010)	非明示			+
135 terigüten 頭 (121)	ed ayurasun nuγud 種々のもの			+

-tan 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
136 terigüten 頭 (121)	非明示			+
137 terigüten 頭 (145)	非明示			+
138 terigüten 頭 (159)	非明示			+
139 terigüten 頭 (163)	非明示			+
140 terigüten 頭 (163)	非明示			+
141 terigüten 頭 (165)	非明示			+
142 terigüten 頭 (178)	非明示			+
143 terigüten 頭 (181)	非明示			+
144 terigüten 頭 (182)	非明示			+
145 terigüten 頭 (188)	非明示			+
146 terigüten 頭 (201)	非明示			+
147 terigüten 頭 (212)	非明示			+
148 terigüten 頭 (215)	qamuy nomud 一切諸法			+
149 terigüten 頭 (218)	非明示			+
150 terigüten 頭 (218)	非明示			+
151 terigüten 頭 (223)	非明示			+
152 terigüten 頭 (234)	非明示			+
153 terigüten 頭 (259)	erdenis 宝			+
154 terigüten 頭 (271)	非明示			+
155 terigüten 頭 (287)	非明示			+
156 terigüten 頭 (288)	非明示			+
157 terigüten 頭 (311)	beleg 贈り物			+
158 terigüten 頭 (320)	非明示			+
159 terigüten 頭 (333)	非明示			+
160 terigüten 頭 (334)	非明示			+
161 terigüten 頭 (335)	šaril 舍利			+
162 terigüten 頭 (337)	非明示			+
163 terigüten 頭 (339)	非明示			+
164 terigüten 頭 (346)	süme 寺院			+
165 terigüten 頭 (354)	beleg 贈り物			+
166 terigüten 頭 (355)	非明示			+

-tan 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
167 terigüten 頭 (363)	bsam-a čüngkür rsang brasi lungbo ori kürbülen (寺の名)			+
168 terigüten 頭 (374)	非明示			+
169 terigüten 頭 (374)	kölged 家畜			+
170 toyatan 数 (163)	非明示			+
171 toyatan 数 (181)	非明示			+
172 toyatan 数 (218)	qubčisun 服			+
173 toyatan 数 (219)	temegen morin lausa üker qonin らくだ、馬、驢馬、羊			+
174 toyatan 数 (219)	非明示			+
175 toyatan 数 (271)	非明示			+
176 toyatan 数 (271)	mal 家畜			+
177 toyatan 数 (387)	yabudal 行い			+
178 utayatan 煙 (277)	odud 星			+
179 üneden 価値 (245)	erdeni 宝			+
180 üneden 価値 (292)	erdeni 宝			+

9.2 『宝徳蔵般若経』

ここでは 18 世紀の仏典について考察する。その前に断っておかなければならないのは、樋口 (1990) ⁴⁵⁾ が「その仏典の中には実は 14 世紀の翻訳であり、その言語は紛れもなく中期蒙古語であって、当時の蒙古語の姿を今日再現するに足る資料として位置づけら得るものが少なからず存在する」と見なしている点である。つまり、書かれたのが 18 世紀だからといって同時代の一般的なモンゴル語の状況を如実に反映しているとは言えないという点を断っておく必要がある。『元朝秘史』と現代語との時代的空白を埋めるという意図からすれば、同一線上では言及しにくい面があるのは否めない。しかし、「語彙的にも文体的にも、年代記を代表する世俗的な文献とは、大いに趣を異にしている。一種の方言として、『仏教蒙古語』というジャンルをたてることも可能である」と樋口はしており、時代としては 13 世紀と現代の間に位置するそのような特殊なジャンルのモンゴル語における当該の派生接尾辞の状況を確認するという観点からであれば、参考になるデータが得られる可能性があるように思われる。

樋口は、この史料を

A 旧訳 I 蒙古大蔵経經部所収の単行の『宝徳蔵般若経』

18 世紀に北京で開版された木版仏典集所収の『宝徳蔵般若経』

B 旧訳 II 18 世紀に北京で開版された木版仏典集所収 4 典に所収の『宝徳蔵般若経』

C 新訳 『一万八千頌般若経』第 84 章

の三つの底本を対比させながら考察している。筆者も、これをそのまま踏襲して -tu, -tai, -tan の現れる状況をまとめる。すると、その総数は以下ようになる。

	A	B	C
-tu	53 回	53 回	30 回
-tai	0 回	0 回	3 回
<u>-tan</u>	<u>102 回</u>	<u>100 回</u>	<u>83 回</u>
計	155 回	153 回	116 回

新訳の C は -tu の現れる回数が極端に少ない点で、旧訳の A・B とは異なる特徴を有していることが分かる。C で -tu が少なくなっているのは、A・B では -tu を用いているところが他の表現になっている文が多いからである。いくつか例を挙げる。なお、この史料に関しても、当該の派生接尾辞および単語の分かち書きはしない、格などはハイフンを付けるという点で樋口の転写に変更を加えることにする。

16-6

A tusatu sedkil 利益を持つ心

- B tusatu sedkil 利益を持つ心
C tusalaqu sedkil 利益する心

上例では、C では派生接尾辞の代わりに、動詞 tusalaqu が用いられている。

7 - 7

- A erdenitü qoi 宝物を持つ蔵
B erdenitü qoi 宝物を持つ蔵
C erdeni-yin qoi 宝物の蔵

上例では、C では派生接尾辞の代わりに、属格 -yin が用いられている。

6 - 7

- A amtatu idegen 美味を持つ食物
B amtatu idegen 美味を持つ食物
C sayin idegen おいしい食物

上例では、派生接尾辞の代わりに、C では意味がほぼ同じの他の基礎語彙 sayin が用いられている。新訳とされる C で -tu が減っているのは、大きく上の三つの要因に区分できるのであるが、あえて派生接尾辞を回避して動詞に変えるのも、属格に変えるのも、派生接尾辞を伴わない他の基礎語彙に変えるのも、現代モンゴル語で特に好まれる表現法であるとは言えない。つまり、少なくとも表現方法に関しては、新訳 C が現代語の表現に近づいていると見なすことはできないのである。

これらを、＜限定用法＞と＜述語用法＞に分けると次のようになる。

A	-tu	-tai	-tan	計
限定用法	40	0	99	139
述語用法	13	0	3	16
計	53	0	102	155

B	-tu	-tai	-tan	計
限定用法	40	0	97	137
述語用法	13	0	3	16
計	53	0	100	153

C	-tu	-tai	-tan	計
限定用法	23	2	83	108
述語用法	8	1	0	9
計	31	3	83	117

(＜限定用法＞＜述語用法＞ごとの内訳)

前節で述べた『アルタン・ハーン伝』では、-tu の＜述語用法＞の後退が確認できたが、この史料ではその減少度合いは、それ程大きくはないことが分かる。もちろん、『元朝秘史』や Jy.『アルタン・トブチ』と比べたら、その割合は低くなっている。

次に、被限定詞もしくは主語が「人」か「人以外」かで分けると次のようになる。

A	-tu	-tai	-tan	計
人	17	0	93	110
人以外	36	0	9	45
計	53	0	102	155

B	-tu	-tai	-tan	計
人	17	0	91	108
人以外	36	0	9	45
計	53	0	100	153

C	-tu	-tai	-tan	計
人	14	1	80	94
人以外	17	2	3	22
計	31	3	83	116

(「人」「人以外」に分けた場合の内訳)

「人」よりも「人以外」のほうが多くなっているという点が、これまで提示した史料と大きく異なる。また、この史料は「人」が現れても、仏典という性格上、それは「人」一般について語っているのであって、そこに男女の区別はないという特徴がある。性が明示されているのは、『宝徳蔵般若経』の A、B の 17 例中

20-2

- A qamuy tegüs erdemtü mergen ere 一切の完全な功德を備えた賢い男
 B qamuy tegüs erdemtü mergen ere 一切の完全な功德を備えた賢い男

という「男性」の 1 例だけである。当該の部分は C では完全に対応しておらず、törökiltü qotala (生を持つすべて) という表現に変わっている。そして、「女性」であることが明示されている「人」の例は、-tu だけではなく -tai を見ても皆無である。一方、「男性」か「女性」か明確ではない「人」一般について語られているの例としては、

21-3

- A öcüken oyutu kemen (足りない知恵を持つ) 知恵の足りない者
 B öcüken oyutu kemen (足りない知恵を持つ) 知恵の足りない者
 C öcüken oyutu kemen (足りない知恵を持つ) 知恵の足りない者

などいくつか見られる。

また、-tu によって「複数」の「人」のについて語られているのは、

22－1

A qatayun sedkiltü merged 堅固な心を持った智者たち

B qatayun sedkiltü merged 堅固な心を持った智者たち

(C では、「を持った」に相当する箇所が tegüsügsen という動詞によって表されている)

などの例がある。数の呼応に従うのであれば sedkilten となるべきところである。さらに、

11－10

C öcüken oyutu amitan (足りない知恵を持つ) 知恵の足りない衆生

という例がある。ここも、数の呼応に従うのであれば oyutan となるべきところである。この箇所は A、B では原則通り -tan の形態で現れている。

-tu は「人以外」に対しても次のように生産的に用いられている。

18－4

A γabiyatu degedü nom 功德のある最勝の法

B γabiyatu degedü nom 功德のある最勝の法

C では、「のある」に相当する箇所が tegüsügsen という動詞によって表されている。

また、「人以外」のときにも -tu が「複数」に対して用いている例がいくつか見られる。

4－6

C eldeb jüil olan düritü olan modun 多くの種類がある多くの木々

(A、B では、-tan が用いられている)

-tu に関して、「人以外」の数の面での呼応を見た場合には、次のようになっている。

-tu	A	B	C
単数	29	29	14
複数	7	7	3
計	36	36	17

(「人以外」における -tu の単数、複数の内訳)

これまで、このような視点からの表を提示しなかったのは、-tu では「複数」の欄が概ね 0 になるからであった。したがって、上の表の「複数」の数値は、呼応の崩壊とい点で必ずしも低いとは言えないのである。

さらに、-tu の<述語用法>は次のようにいくつか見られる。

4 - 3

- A alimad qorçay talbibasu qorçay mörgüdekü yosutu boluyu.
何かの小箱に置けば、小箱が敬われなければならなくなる。」
- B alimad qayuyçay-tur talbibasu qayuyçay mörgüdekü yosutu boluyu.
何かの小箱に置けば、小箱が敬われなければならなくなる。
- C ali qayuyçay-un dotor-a talbibasu tere inu mörgüdekü yosutu bolumui.
何かの小箱の中におけば、それが敬われなければならなくなる。

また、興味深い例としては、『知恵の鍵』にも見られた定型表現を作る役割が一例だけではあるが、

23 - 1

- A yaltu qoruqai (火を持つ虫) 蜚
- B yaltu qoruqai (火を持つ虫) 蜚
- C yaltu qoruqai (火を持つ虫) 蜚

のように、全訳共通で確認できる。

次に、C で 3 例しか現れない -tai の例をすべて見ておく。

6 - 7

- A ker ber belegten üildbesü tere inu irügegsen busu bolai.
もし有相の（を持つ）者が回向するならそれは回向ではない。
- B ker ba belegten üildbesü tere inu irügegsen busu bolai.
もし有相の（を持つ）者が回向するならそれは回向ではない。
- C ker ba belegtej kemen sedkibesü tere inu jorin irügekü busu.
もし有相の（を持つ）者が回向するならそれは回向ではない。

「有相の者」を言うのに、A、B が belegten という被限定詞を伴わない集合名詞化した形で現れているのに対して、C は被限定詞に「人」を表す kemen を伴っている。ただし、kemen は文脈からこれが「女性」であるということもない。-tai は、あくまで「人」一般に対して

現れている。

24－5

- A vivangkirid ögdegsen bovadhi sadova-dur urin sedkil temeçen tuγurbibasü ele
記を授かった菩薩に怒りの（を持つ）思いを抱いた刹那が俱胝の数だけあれば、
- B vivangkirid ögdegsen bovadü-dur urin sedkil temeçen tuγurbibasü ele
記を授かった菩薩に怒りの（を持つ）思いを抱いた刹那が俱胝の数だけあれば、
- C vivangkirid ögdegse-te kilingteḡ sedkil-iyer temeçiküi-yi tuγurban üiledbesü
記を授かった菩薩に怒りの（を持つ）思いを抱いた刹那が俱胝の数だけあれば、

上例では、A、B が意味は kiling とほぼ同じ urin 「怒り」という語に派生接尾辞も格も付けない形で現れているが、C は kiling に派生接尾辞を伴った形で現れていて、このとき被限定詞は「人以外」である。

24－5

- A tedüi kü galab-un toya bui ijaγur-aça jabdun quyaγlaydaqu boluyu.
それとおなじ劫の数だけ根本から始めて鎧をまとわねばならない。
- B tedüi kü galab-un toya-bar ijaγur-aça terigülen jabdun quyaγlaydaqu boluyu.
それとおなじ劫の数だけ根本から始めて鎧をまとわねばならない。
- C tedüi činegen-u galab-tur uy-aça quyaγ emüskü keregteḡ bolai.
それとおなじ劫の数だけ根本から始めて鎧をまとわねばならない。

上例では、引用文の前に bovadhi sadova 菩薩という主語がある。A、B は -γda という受動態を形成する接尾辞が用いられているが、C は同じ内容を派生接尾辞によって表示している。

最後に、-tan の状況について見る。-tan は、amitan（衆生、1－1 以下頻出）のように集合名詞化の役割が多くを占めているが、それ以外の状況を見ると、

4－5

- | | |
|------------------|-----------|
| A buyantan nomud | 善法（善を持つ法） |
| B buyantan nomud | 善法（善を持つ法） |
| C buyantu nom | 善法（善を持つ法） |

上例では、C は被限定詞が nom という単数の形で現れており、それに対して -tu の形態で現れている。一方、A と B はそれが nomud という複数の形で現れており、その複数に対する呼応として -tan の形態が用いられている。この箇所に関してのみ言うなら、単数と複数の違いが派生接尾辞に概ね反映されているようであるが、前述したようにだいたい緩やか

になっているのである。

以上のことから「仏教蒙古語」(18世紀)における当該の派生接尾辞の状況をまとめると、性の呼応は、(おそらく、すでに後退もしくは崩壊していたに違いないが)性別が特定でないで、それを立証するデータが得られない。その一方で、数の面での呼応が緩くなっていることが確認できる史料になっている。また、総数では -tai より -tu のほうが生産的に用いられていたことは一目瞭然であり、『元朝秘史』から時代としては近づいて来てもまだ現代語とは正反対である。当時の口語の実態を把握するのは難しいが、仏典のように抽象的な事案を表現する場合には、-tu のほうが好まれる期間がモンゴル語の歴史の中で長く続いているように感じられる。

共同格の形態は A 訳、B 訳、C 訳いずれもすべて -luγa である。例を挙げておく。なお、-tai の形態では全く現れない。

1 - 15

- A ken nigültü nökör-lüge nököčeged busud-un aldar-iyar yabuγči
悪友と親しみ他者の導きによって行じるもの
- B ken nigültü nökör-lüge nököčeged busud-un aldar-iyar yabuγči
悪友と親しみ他者の導きによって行じるもの
- C alimad kilinčetü nökör-lüge tegüsün busud-un aldar-i dayayači
悪友と親しみ他者の導きによって行じるもの

4 - 1

- | | |
|--|--------------|
| A qumaki-yin toyan- <u>luγa</u> burqan ulus | 砂の数と同じだけの仏国土 |
| B qumaki-yin toyan- <u>luγa</u> sača burqan ulus | 砂の数と同じだけの仏国土 |
| C qumaki-yin toyan- <u>luγa</u> sačayu burqan-u orod | 砂の数と同じだけの仏国土 |

<索引 6> 『宝徳蔵般若経』における当該の派生接尾辞に関する全索引

表記の仕方等は『元朝秘史』と同様である。

A 訳、B 訳と C 訳の間では、本文の異動等も多々見られるのであるが、A と B の間には極端な違いは見られない。したがって、ここでは A 訳と B 訳に関しては A 訳を代表させることとし、B 訳は取り上げない。C 訳は、他の二つとは様相が異なるので別途掲載する

性が明確な「人」はほとんど現われないが、書式上これまでの記載方法で行う。仏の類をどちらに区分するかは重要な問題ではないが、これも書式上「人以外」に区分する。

なお、大多数の「人」が性を特定できないので、「もの」における「人の関与」の有無の判定は行わない。

A 訳

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
1 baysitu 師 (1-15)	非明示					×
2 biligtü 智 (1-10)		tere (彼、彼女)				×
3 erdemtü 功德 (16-4)		yabuγči 行う者				×
4 erdemtü 功德 (17-1)	非明示					×
5 erdemtü 功德 (20-2)	mergen ere 賢い男		+			○
6 jiryalangu 安楽 (29-8)	非明示					×
7 jobalangu 苦しみ (14-9)	kümün 人					×
8 küčütü 力 (17-1)		非明示				×
9 küčütü 力 (19-7)	非明示					×
10 nigültü 悪 (1-15)	nökör 友					×
11 oyutu 智慧 (7-6)	非明示					×
12 oyutu 智慧 (21-3)	kemen 人					×
13 önggetü 色 (32-2)	amitan 衆生				+	●
14 sedkiltü 心 (22-1)	merged 智者たち				+	●
15 sedkiltü 心 (22-5)	amitan 衆生				+	●
16 ügetü 言葉 (17-3)		非明示				×
17 yosutu 道理 (23-3)		tere (彼、彼女)				×

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
18 amtatu 味 (4-7)		bügüdeger すべて		+
19 amtatu 味 (6-7)	idegen 食べ物		+	
20 amtatu 味 (11-5)	idegen 食べ物		+	
21 beyetü 体 (16-4)		sibayun 鳥	+	
22 biligtü 智 (32-3)	ilayıysad 仏			+
23 buyantu 功德 (32-3)	erdemüd 宝			+
24 çeçegtü 花 (27-5)	mod 木		+	
25 činegetü 一掻き (17-3)	非明示		+	
26 čuburitu 有漏 (6-4)	buyad 功德			+
27 erdemtü 功德 (4-3)	öındamani erdeni 宝珠		+	
28 erdemtü 功德 (15-2)	ilayıysan 仏		+	
29 erdenitü 宝 (7-7)	qoi 蔵		+	
30 erdenitü 宝 (20-15)	qoiy 半島		+	
31 erdenitü 宝 (20-17)	qoi 蔵		+	
32 ɣabiyatu 功德 (18-4)	nom 法		+	
33 ɣaltu 火 (23-1)	qoruqai 虫		+	
34 jobalangtu 苦しみ (20-16)	sedkil 心		+	
35 küčütü 力 (29-1)	dörben samadi diyan 四禅定			+
36 mergen uqayatu 明智 (1-24)	bovadhı sadova 菩薩		+	
37 mergen uqayatu 明智 (2-7)	bovadhı sadova 菩薩		+	
38 neretü 名前 (18-6)	qoɣosun 空 (くう)		+	
39 olatu 多い (14-6)		süsüg 信心	+	
40 omuytu 傲慢 (21-6)		bovadhı sadova 菩薩	+	
41 oyutu 智慧 (1-10)	diyan 禅定		+	
42 sedkiltü 心 (1-25)	bovadhı sadova 菩薩		+	
43 sedkiltü 心 (15-7)	qutuy 菩薩		+	
44 sedkiltü 心 (20-14)	bovadhı sadova 菩薩		+	
45 sedkiltü 心 (21-3)		bovadhı sadova 菩薩	+	
46 sedkiltü 心 (24-2)		bovadhı sadova 菩薩	+	
47 sedkiltü 心 (24-3)		bovadhı sadova nar 菩薩ら		+
48 toɣatu 数 (27-2)	simnu 悪鬼		+	

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
49 tourutu 網 (23-1)	narad 太陽			+
50 tusatu 利益 (16-6)	sedkil 心		+	
51 tusatu 利益 (20-24)	nigülesküi 慈心		+	
52 yosutu 道理 (4-3)		qorčay 箱	+	
53 yosutu 道理 (17-2)	üge 言葉		+	

49 の被限定詞 narad 太陽が、なぜ複数の形態になっているのかは不明である。C 訳では、単数である。
(C 訳 -tu 「人以外」 21 参照)

-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
1～88 amitan 命 (1-1、他)	非明示				+	○
89 jobalangtan 苦しみ (32-1)	amitan 衆生				+	○
90 küčüten 力 (12-5)	uduriyulsud 導師ら				+	○
91 nomtan 法 (12-6)	非明示				+	○
92 oyutan 智慧 (11-10)	amitan 衆生				+	○
93 sedkiltan 心 (22-5)		amitan 衆生			+	○

amitan 命は、-tan 「人」の総数と比して、その大部分を占めるので、このように簡略化して掲載する。

-tan 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
94 aldaltan 名声 (15-5)	bovadhī sadova nar 菩薩ら			+
95 belegten 有相 (6-7)	非明示			+
96 buyantan 善 (4-5)	nomud 法			+
97 dūriten 色 (4-6)		modud 木々		+
98 sedkiltan 心 (31-11)	birid 餓鬼		+	
99 toṃatan 数 (1-3)	nom 法		+	
100 toṃatan 数 (6-2)	burdad 仏			+
101 tusatan 利益 (27-9)	bovadhī 菩薩		+	
102 yosutan 道理 (4-6)		modud 木々		+

C 訳

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
1 amuyulangutu 安楽 (29-8)	非明示					×
2 biligtü 智 (1-10)		tere 彼、彼女				×
3 erdemtü 功德 (17-1)	非明示					×
4 jobalangtu 苦しみ (32-1)	amitan 衆生				+	●
5 jokistu 適切 (32-3)	amitan 衆生				+	●
6 kilenčetü 悪 (1-15)	nökör 友					×
7 küčütü 力 (17-1)		非明示				×
8 küčütü 力 (19-7)	非明示					×
9 oyutu 智慧 (7-6)	非明示					×
10 oyutu 智慧 (11-10)	amitan 衆生				+	●
11 oyutu 智慧 (21-3)	kemen 人					×
12 önggetü 色 (32-2)	amitan 衆生				+	●
13 törökiltü 生 (20-2)	qotala みんな				+	●
14 yosutu 道理 (23-3)		非明示				×

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
15 amtatu 味 (4-7)		非明示	+	
16 beyetü 体 (16-4)	sibayun 鳥		+	
17 biligtü 智 (32-3)	ilayıysad 仏			+
18 buyantu 善 (4-5)	nom 法		+	
19 čuburitu 有漏 (6-4)	buyan 功德		+	
20 dürütü 色 (4-6)	olan modun 多くの木			+
21 erdemtü 功德 (3-9)	nom 法		+	
22 ɣaltu 火 (23-1)	qoruqai 虫		+	
23 gereltü 光 (23-1)	dabblyan 波		+	
24 küčütü 力 (12-5)	burqad 仏			+
25 küčütü 力 (14-3)	naran 太陽		+	
26 mergen uqayatu 明智 (1-24)	bovadhi sadova 菩薩		+	
27 mergen uqayatu 明智 (2-7)	bovadhi sadova 菩薩		+	
28 omuytu 傲慢 (21-6)		bovadhi sadova 菩薩	+	
29 oyutu 智慧 (1-10)	samadi 禪定		+	

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
30 süsügtü 信心 (14-6)		bovadhi sadova 菩薩	+	
31 yosuti 道理 (4-3)		tere それ	+	

-tai 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
1 belegtei 有相 (6-7)	kemen 人					×

-tai 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
2 keregtei 必要 (24-5)		bovadhi sadova 菩薩	+	
3 kilingtei 怒り (24-5)	sedkil 心		+	

-tan 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
1～80 amitan 命 (1-1、他)	非明示				+	○

amitan 命は、-tan 「人」の全体を占めるので、このように簡略化して掲載する。

-tan 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
81 sedkilten 心 (31-11)	birid 餓鬼		+	
82 toyatan 数 (4-6)	modun 木々			+
83 toyatan 数 (6-2)	burqan 仏		+	

9.3 Мэргэн гэгээн『アルタン・トブチ』

ここでは、5章で扱った Лу.『アルタン・トブチ』とは系統の異なる Мэргэн гэгээн（メルゲン・ゲゲン）による『アルタン・トブチ』の考察を行う。この史料について Ц.Буянзаяа⁴⁶⁾は、『元朝秘史』による歴史観に変更を加えている点や、『元朝秘史』では必ずしも重きを置かれていないハサルという人物を強調して描いている点などを特徴として挙げている。森川（2007）⁴⁷⁾は、作者が「自分の祖先であるハサルとその後裔の事績に強い関心を持ってこの年代記を編纂した」としている。したがって、二つのテキストの相違は語彙の異同という次元のものではなく、同じように『アルタン・トブチ』という名称を冠しているが、全く別な史料と見るのが妥当であるため、本稿でも両テキストを並べて考察することはせず、このように章・節を別にした上で進める。また、本稿では Д.Бүрнээ（2014）らがモンゴル文字からキリル文字に翻訳したテキスト⁴⁸⁾を使用するので、例文の表記もキリル文字で行うことにする。例文の後に付しているページも、このテキストによるものである。

Мэргэн гэгээн の『アルタン・トブチ』で当該の派生接尾辞が現れる回数を示すと、以下のようにになっている。

-tu	119 回
-tai	57 回
<u>-tan</u>	<u>91 回</u>
計	267 回

なお、当該の派生接尾辞をめぐって、それが固有名詞（人名や地名）の一部である場合は、これまでの他の史料のとき同様回数には含まれていない。

Мэргэн гэгээн の『アルタン・トブチ』では、-tu : -tai 二形態の比率は 68 : 32 であり、現代語のように -tai のほうが多いという状況にはまだ至っていないものの、本稿で扱ってきた『元朝秘史』以降の史料の中では、もっとも -tai の割合が高くなっていることが分かる。これらを、＜限定用法＞と＜述語用法＞に分けると次のようになる。

	-tu	-tai	-tan	計
限定用法	105	10	91	205
述語用法	14	47	0	62
計	119	57	91	267

（＜限定用法＞＜述語用法＞ごとの内訳）

形態別に特徴を挙げると、まず -tu に関しては、＜述語用法＞の後退が確認できる。これ

は、同時代の『アルタン・ハーン伝』でも見られた特徴であり、現代語の状態に近づいているといえる。しかし、現代語と違って 0 ではなく、

ИХЭНХИ НЬ чулуут болон (p.31)
その大部分が土と石（のある状態）となって

のようなく述語用法>もまだ見られる。

次に -tai に関しては、<述語用法>のほうが多くなっている。『元朝秘史』や Лy.『アルタン・トブチ』は、<限定用法>のほうが多かったので、この点では全く逆の様相を呈していることになる。-tai に関しては、-tu とは逆にこれ以降<限定用法>から<述語用法>へ向かう流れがあったと推測できる。

また -tan に関しては、筆者の示す三段階、

- 1 -tan (a「複数」の意味) + b「複数」の意味を持つ名詞(類)
- 2 -tan (a「複数」の意味) + ∅
- 3 -tan が「複数」の意味を喪失した状態 (複数接尾辞を必要とする状態)

のうち、1 は完全に消失して、2 の段階に移行している。主語を伴う形で現れることもほとんどなく、上の表で<限定用法>としているのは、2 の集合名詞の状態である。その代表的な語が『アルタン・ハーン伝』や『宝徳蔵般若経』でも頻出した амьтан (命を持つ者たち) である。ただし、当該の派生接尾辞の後に複数を表示する接尾辞が付加されるという 3 の現象は、『アルタン・ハーン伝』や『宝徳蔵般若経』、さらにはこの Мэргэн гэгээн の『アルタン・トブチ』でも、まだ生じていない。

次に、被限定詞もしくは主語が「人」か「人以外」かで分けると次のようになる。

	-tu	-tai	-tan	計
人	67	35	89	191
人以外	52	22	2	76
計	119	57	91	267

(「人」「人以外」に分けた場合の内訳)

「人以外」では、-tai より -tu が多い点は『元朝秘史』以降ほとんど変わっておらず、この点に関しては、現代語へ向かう流れは依然として見られないことが分かる。

また、Мэргэн гэгээн の『アルタン・トブチ』でも、文脈からも性を特定できない「人」一般がいくつか現れる。性と数の呼応を見るために、単数の -tu と -tai については「人」一般を除外すると、-tu は 59 回、-tai は 33 回となり、その内訳は次のようになる。

	-tu	-tai	計
男性	51	27	78
女性	3	3	6
複数	5	3	8
計	59	33	92

(被限定詞もしくは主語が「人」の場合の内訳)

Мэргэн гэгээн の『アルタン・トブチ』は、『元朝秘史』に比べるとそもそも登場人物に女性は少ない。これは、『アルタン・ハーン伝』においてもそうであった。そして、-tu の形態にだけ着目するなら、59 例中 51 例、すなわち約 86% が原則通り現れるという『アルタン・ハーン伝』同様高い適合率が得られる。しかし、性による呼応の問題を考えると、ここでもやはり -tai における適合率の低さのほうを重視しなければなるまい。-tai の適合率は、33 例中 3 例、すなわち 9 % に過ぎない。

-tai に関して、以下いくつかの例を挙げる。まず、女性に対して現れている 3 例をすべて挙げる。

хятад ястай охиныг би авч (p.56)
 キタドの骨を持つ娘を 私は得て、

上例では、охин (娘) という「女性」の被限定詞に対して -tai の形態が現れている。

Алаг хатан шалтагтай болсны хойно (p.92)
 アラグ王妃は胎児を宿した後、

上例は、Алаг хатан (アラグ王妃) という「女性」の主語に対して -tai の形態が現れている。

Баридайн бие шалтагтай (p.97)
 バリダイの体は胎児を宿して、

上例は、厳密に言うと主語は бие (体) であるが、「女性」であることが明白なので「女性」(人) の主語に対して -tai の形態が現れていると見る。

しかし、表で提示しているように、-tai は『元朝秘史』の呼応の原則から大きく隔たっていて、たとえば『元朝秘史』であれば、すべて -tu の形態を伴って現れていた「男性」の年齢が、Мэргэн гэгээн の『アルタン・トブチ』では逆にすべて -tai の形態を伴って現れている。-tai における状況を重視して、「呼応はない」と判断するのが妥当ではあるまいか。『ア

ルタン・ハーン伝』、Мэргэн гэгээн『アルタン・トブチ』のいずれも、その崩れ方が -tu ではそれほどでもなく、-tai ではより大きいことも確認できた。ただし、これをもって当該の派生接尾辞の性による呼応が -tu では依然として守られているという解釈は妥当ではないように思われる。18 世紀のモンゴル語の書き言葉では（話し言葉の実態まで正確に掌握するのは困難である）、当該の派生接尾辞をめぐる性の呼応は崩壊していたのであって、-tu が「男性」と呼応しているように感じられるのは、単に登場人物に「男性」が多いからそう見えるに過ぎないのである。

そうした中で、-tu の形態を用いた定型表現として

ясᠲᠦ мэлхий 骨のある蛙→亀 (p.55)

という語も一例見られる。-tu における定型表現形成の役割は、現代語では -tai との役割を弁別するための指標として重要である。しかし、

γaltu qoruqai (火を持つ虫) 蜚

という例が『宝徳蔵般若経』で見られたように、現代語において特化している役割ではあるが、それ以前のモンゴル語に全くなかったわけではないことを示す例である。この ясᠲᠦ мэлхий の 1 例を除けば、Мэргэн гэгээн『アルタン・トブチ』における -tu と -tai は概ね自由交替が可能である。

つまり、当該の派生接尾辞について、Мэргэн гэгээн の『アルタン・トブチ』は次のように位置付けられる。

① -tan が集合名詞形成の役割に完全移行している。

という点は、現代語と同様である。

② -tu の＜述語用法＞の衰退

という点は、現代語の状態に近づく過渡期である。

③ -tu と -tai の間に性による呼応がない。

という点は、現代語と同様である。

④ -tu と -tai は、自由交替可能な状態にある。

という点は、いったんそういう過程を経て、現代語の状態に近づく過渡期であると言える。

なお、共同格の形態は大部分が -luγa であるが、-tai も次のように僅かに確認できる。

Би хоёр түшмэлтэй хэлэлцье。 (p.75)

私は二人の官吏と話し合おう。

他にもう 2 例見られる。ただし、これに対して -luγa は 30 例以上現れており、共同格の形態が -luγa から -tai へ移行する兆しが見られるとは言い難い。ましてや、18 世紀の他の文献では共同格の -tai は全く見られないわけで、-tai に移行した時期を特定することはできない。

<索引 7> Мэргэн гэгээн『アルタン・トブチ』における当該の派生接尾辞に関する全索引

本文でも触れているように、この史料に関してはキリル文字によるテキストを採ったので、見出し語は

- | | |
|---------------|-----------------------|
| 1. -т 「人」 | モンゴル語キリル文字によるアルファベット順 |
| 2. -т 「人以外」 | ” |
| 3. -тай 「人」 | ” |
| 4. -тай 「人以外」 | ” |
| 5. -тан 「人」 | ” |
| 6. -тан 「人以外」 | ” |

それ以外の表記方法については、これまでの史料と同様であるが、-тан に関しては集合名詞形成の役割に完全移行していて、呼応の関係が見出せないので、簡略した形で提示する。

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
1 албат 公務 (p.96)	非明示		+			○
2 албат 公務 (p.105)	非明示		+			○
3 албат 公務 (p.106)	非明示		+			○
4 албат 公務 (p.109)	非明示		+			○
5 албат 公務 (p.112)	非明示		+			○
6 ачит 恩 (p.106)	хүн 人		+			○
7 билигт 智慧 (p.72)	бүх すべて				+	●
8 дээлт 服 (p.37)	яргачин 死刑執行人		+			○
9 залихайт 狡猾 (p.28)	хүн 人					×
10 заяат 運命 (p.93)		男・人名	+			○
11 заяат 運命 (p.94)		非明示	+			○
12 зовлонт 苦悩 (p.31)		非明示				×
13 зовлонт 苦悩 (p.100)		複数・人名			+	●
14 ивээлт 庇護 (p.88)	хаан 王		+			○
15 номт 法 (p.60)	хаад 王たち				+	●
16 нүгэлт 罪 (p.76)	азар 阿闍梨		+			○
17 нүүрт 顔 (p.36)	арш 遁世者		+			○
18 нүүрт 顔 (p.37)	арш 遁世者		+			○
19 нүүрт 顔 (p.38)	арш 遁世者		+			○
20 нүүрт 顔 (p.39)	арш 遁世者		+			○

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
21 нүүрт 顔 (p.39)	арш 遁世者		+			○
22 нэрт 名前 (p.36)	янхан 娼婦			+		●
23 нэрт 名前 (p.37)	эр 男		+			○
24 нэрт 名前 (p.40)	арш 遁世者		+			○
25 нэрт 名前 (p.56)	хөвгүүн 子供		+			○
26 нэрт 名前 (p.67)	түшмэл 官吏		+			○
27 нэрт 名前 (p.72)	түшмэл 官吏		+			○
28 нэрт 名前 (p.87)	非明示		+			○
29 нэрт 名前 (p.87)	非明示		+			○
30 нэрт 名前 (p.91)	охин 娘			+		●
31 нэрт 名前 (p.105)	хүн 人		+			○
32 нэрт 名前 (p.110)	хүн 人		+			○
33 нэрт 名前 (p.113)	хүн 人		+			○
34 нэрт 名前 (p.116)	жанжин 將軍		+			○
35 овогт 姓 (p.61)	男・人名		+			○
36 овогт 姓 (p.74)	түшмэл 官吏		+			○
37 овогт 姓 (p.89)	男・人名		+			○
38 овогт 姓 (p.89)	男・人名		+			○
39 овогт 姓 (p.90)	男・人名		+			○
40 овогт 姓 (p.120)	хүн 人		+			○
41 овогт 姓 (p.126)		男・人名	+			○
42 өшөөт 恨み (p.69)	男・人名		+			○
43 самуунт 混乱 (p.69)	түшмэл 官吏		+			○
44 сэтгэлт 心 (p.30)	хүн 人					×
45 төөрөгт 運命 (p.143)	非明示					×
46 төрөлхт 生まれ (p.39)	男・人名		+			○
47 төрөлхт 生まれ (p.39)	非明示			+		●
48 төрөлхт 生まれ (p.39)	хан 王		+			○
49 төрөлхт 生まれ (p.39)	хан 王		+			○
50 төрөлхт 生まれ (p.39)	非明示		+			○
51 төрөлхт 生まれ (p.40)	хан 王		+			○
52 увдист 魔力 (p.107)	мэргэн 賢者		+			○
53 ухаант 知性 (p.19)	нэгэн нэгэн 一人一人					×

-tu 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
54 ухаант 知性 (p.60)	男・人名		+			○
55 хөвгүүнт 子供 (p.85)		非明示	+			○
56 хувилгаагт 転生 (p.17)	男・人名		+			○
57 хувилгаагт 転生 (p.81)	шидтэн 魔力を持つ者たち				+	●
58 хутагт 至福 (p.19)	男・人名		+			○
59 хутагт 至福 (p.43)	男・人名		+			○
60 цогт 威光 (p.17)	男・人名		+			○
61 цогт 威光 (p.19)	мэргэн 賢者		+			○
62 цогт 威光 (p.19)	男・人名		+			○
63 чанарт 性質 (p.29)	хүн 人					×
64 чанарт 性質 (p.30)	хүн 人					×
65 элбэрэлт 尊敬 (p.117)	хүн 人		+			○
66 эрдэмт 教養 (p.125)	男・人名		+			○
67 язгуурт 根源 (p.36)		非明示				×
68 язгуурт 根源 (p.145)	төрөгсөд 生まれた者たち				+	●

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
69 амтат 味 (p.28)	юм 物		+	
70 амтат 味 (p.28)	юм 物		+	
71 амтат 味 (p.28)	юм 物		+	
72 атаат 嫉妬 (p.107)	сэтгэл 心		+	
73 буянт 徳 (p.60)	үйлс 行い			+
74 гайхамшигт 驚き (p.54)		非明示	+	
75 гайхамшигт 驚き (p.119)	гөрөөс 獣		+	
76 дүрт 姿 (p.28)	юм 物		+	
77 дүрт 姿 (p.28)	юм 物		+	
78 дүрт 姿 (p.28)	юм 物		+	
79 ёслолт 儀式 (p.63)	журам 秩序		+	
80 ёст 道理 (p.40)	үг 言葉		+	
81 журамт 秩序 (p.87)	非明示		+	
82 залихайт 狡猾 (p.123)	санаа 考え		+	
83 найрт 宴 (p.110)	ёслолт 儀式		+	

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
84 нүгэлт 罪 (p.81)	хов шив 中傷		+	
85 нэрт 名前 (p.28)	юм 物		+	
86 нэрт 名前 (p.28)	юм 物		+	
87 нэрт 名前 (p.28)	юм 物		+	
88 нэрт 名前 (p.34)	балгас 城壁		+	
89 нэрт 名前 (p.37)	хүрээ 垣		+	
90 нэрт 名前 (p.49)	элс 砂地		+	
91 нэрт 名前 (p.90)	газар 土地		+	
92 нэрт 名前 (p.96)	газар 土地		+	
93 нэрт 名前 (p.114)	уул 山		+	
94 нэрт 名前 (p.115)	газар 土地		+	
95 нэрт 名前 (p.115)	уул 山		+	
96 овт 詭計 (p.19)	паван こうもり		+	
97 өнгөт 色 (p.28)	юм 物		+	
98 өнгөт 色 (p.28)	юм 物		+	
99 өнгөт 色 (p.28)	юм 物		+	
100 өнгөт 色 (p.38)		нүүр 顔	+	
101 өнгөт 色 (p.38)		нүүр 顔	+	
102 өнгөт 色 (p.77)	дөрвөн суварга 四つの塔			+
103 сайт よい (p.27)		өнгө 色	+	
104 сайт よい (p.65)		амт 味	+	
105 сайт よい (p.65)		ам 口	+	
106 уст 水 (p.52)	гол 川		+	
107 учирт 理由 (p.43)	эш 根源		+	
108 үзэмжит 外見 (p.40)	юм 物		+	
109 ховст 魔法 (p.120)	чөтгөр 鬼		+	
110 хуягт 鎧 (p.92)	тэнгэр 天		+	
111 хэмжээт 程度 (p.61)	дүрс 姿		+	
112 хэмжээт 程度 (p.63)	дүрс 姿		+	
113 хэрэгт 必要 (p.123)	төрөл 種類		+	
114 цогт 威光 (p.23)	Сүмбэр уул 須弥山		+	
115 цуст 血 (p.37)	илд 劍		+	
116 чулуут 石 (p.31)		ихэнхи 大部分	+	

-tu 「人以外」	被限定詞	主語	单数	複数
117 шунхайт 貪欲 (p.123)	санаа 考え		+	
118 эвт 和 (p.59)	үг 言葉		+	
119 элбэрэлт 尊敬 (p.87)	非明示		+	
120 яст 骨 (p.55)	мэлхий 蛙		+	

-tai 「人」	被限定詞	主語	单男	单女	複数	呼応
1 ачтай 恩 (p.18)	男・人名		+			●
2 бэлгэтэй 兆 (p.43)		хөвгүүн 子供	+			●
3 зохистой 適當 (p.133)		非明示	+			●
4 зохистой 適當 ()	非明示					×
5 жилтэй 年 (p.83)		男・人名	+			●
6 жилтэй 年 (p.84)		男・人名	+			●
7 жилтэй 年 (p.84)		男・人名	+			●
8 жилтэй 年 (p.121)		男・人名	+			●
9 муутай 悪い (p.40)		хан 王	+			●
10 мэдэлтэй 知識 (p.32)		非明示	+			●
11 настай 年齡 (p.69)		男・人名	+			●
12 настай 年齡 (p.72)	非明示		+			●
13 настай 年齡 (p.84)	非明示		+			●
14 настай 年齡 (p.100)		хоёул 二人			+	●
15 настай 年齡 (p.100)	非明示		+			●
16 настай 年齡 (p.107)		男・人名	+			●
17 настай 年齡 (p.107)		男・人名	+			●
18 настай 年齡 (p.123)		хоёул 二人			+	●
19 настай 年齡 (p.124)		男・人名	+			●
20 настай 年齡 (p.124)		男・人名	+			●
21 настай 年齡 (p.125)		男・人名	+			●
22 өвчтэй 病 (p.120)		бие 体	+			●
23 өргөлтэй 贈り物 (p.118)		非明示	+			●
24 ухаантай 知性 (p.95)		非明示				×
25 хартай 邪心 (p.75)		男・人名	+			●
26 хөвгүүнтэй 子供 (p.99)		男・人名	+			●
27 хөвгүүнтэй 子供 (p.102)		男・人名	+			●

-tai 「人」	被限定詞	主語	単男	単女	複数	呼応
28 хөвгүүнтэй 子供 (p.103)		男・人名	+			●
29 хямгатай 儉約 (p.115)	мэргэн 賢者		+			●
30 чадалтай 能力 (p.40)			+			●
31 чадалтай 能力 (p.40)			+			●
32 шалтагтай 胎児 (p.92)		女・人名		+		○
33 шалтагтай 胎児 (p.97)		女・人名		+		○
34 шүтэлтэй 信仰 (p.56)		非明示	+			●
35 эе эвтэй 仲 (p.94)	非明示				+	●
36 явдалтай 行い (p.36)		非明示	+			●
36 ястай 骨 (p.56)	охин 娘			+		○

-tai 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
36 азаргатай 種馬 (p.101)	адуу 馬		+	
37 арьстай 皮 (p.116)	хохис 角の素材		+	
38 багштай 師 (p.98)		非明示	+	
39 дүртэй 姿 (p.25)		гурав 三つ		+
40 дүртэй 姿 (p.25)		гурав 三つ		+
41 дүртэй 姿 (p.25)		гурав 三つ		+
42 дүртэй 姿 (p.25)		гурав 三つ		+
43 жаргалтай 幸福 (p.98)		非明示	+	
44 журамтай 法則 (p.98)		非明示	+	
45 зохистой 適當 (p.19)		бичиг 書	+	
46 зохистой 適當 (p.133)		非明示	+	
47 зохистой 適當 (p.145)		非明示	+	
48 лавтай 確實 (p.43)		жил 年	+	
49 мэргэнтэй 賢者 (p.98)		非明示	+	
50 өнгөтэй 色 (p.118)		бие 体	+	
51 сахиултай 守護神 (p.98)		非明示	+	
52 сүүлтэй 尻尾 (p.118)		бие 体	+	
53 тивтэй 大陸 (p.77)		Сүмбэр уул 須弥山	+	
54 тогтоолтой 法則 (p.98)		非明示	+	

-tai 「人以外」	被限定詞	主語	単数	複数
55 холбоотой 関係 (p.106)		зүүлсэн нь 夢を見たこと	+	
56 хуучтай 古い (p.70)		сэтгэл 心	+	
57 шившигтэй 恥 (p.65)		非明示	+	

-tan 「人」 () 内は、現れる回数である。

амьтан 命 (22)、байдалтан 状態 (1)、билигтэн 智慧 (3)、бөхтөн 力士 (1)、дуршилтан 欲望 (1)、
ёртон 兆 (1)、заяатан 運命 (1)、мунхагтан 驚き (1)、нүүртэн 顔 (1)、овогтон 姓 (9)、
таалалтан 希望 (1)、тоотон 数 (1)、төрөлтөн 出生 (1)、тэргүүтэн 頭 (20)、ухаантан 知性 (4)、
үнэртэн 匂い (1)、харгистан 残忍 (1)、хөлтөн 足 (2)、хувьтан 運命 (1)、хутагтан 至福 (2)、
чанартан 能力 (1)、шидтэй 神通力 (2)、эрдэмтэн 教養 (7)、язгууртан 根源 (4)

計 (89)

本文でも触れているように、これらの語は概ね集合名詞化しており、「複数」の被限定詞もしくは主語と並んで現れることがない。単独で「～を持つ者たち」の意味であり、あえて示すのであれば89例すべてが被限定詞の欄に「非明示」と記すことになるので、上のように簡略化した。

-tan 「人以外」 () 内は、現れる回数である。

араатан 牙 (1)、жигүүртэн 翼 (1) 計 (2)

10. モンゴル系周辺言語の概況

この章ではモンゴル系周辺言語における派生接尾辞 *-tu* と *-tai* の状況、共同格の形態をブリヤート語、カルムイク語、オイラト語、ダグル語、シラ・ユグル語、モンゴル語互助方言、モンゴル語民和方言、ドゥンシャン語、カンジャ語、バオアン語の順にそれぞれ見て行く。なお、各言語の文字表記は筆者が参考にした文献の記載方法にそのまま従うものとする。また、この章では共同格については *-la* 系列、*-tai* 系列という言い方で説明する。

10.1 ブリヤート語

当該の派生接尾辞は、*-tu* と *-tai* の両方の形態とも見られる。N.Poppe (1960)⁴⁹⁾ は、次のような例を挙げている。*-tu* を伴う例としては、

naran 太陽 > narata 太陽のある
xynde 尊敬 > xyndete (尊敬のある) 尊敬する
arga 手段 > argata 手段のある

などの語が示されている。*-tai* を伴う例としては、

amtan 味 > amtatai (味のある) おいしい
morin 馬 > moritai 馬を持った

などの語が示されている。ただし、いずれも文として提示されているわけではないので、上の例で *-tu* と *-tai* が自由交替可能なのか、それとも両派生接尾辞の間に何らかの役割差があるのかどうかまで深く考察することはできない。ただし、性による呼応に関しては、『元朝秘史』のモンゴル語およびそれを踏襲して書いた Ля.『アルタン・トブチ』固有の現象であり、周辺言語にまでそれが及んでいるとは考えにくい。

共同格については、人称代名詞の状態から見てみる。N.Poppe (1955)⁵⁰⁾ が人称代名詞の変化の表で Comitative (共同格) を、次のように説明している。すなわち、

bi 1 人称単数 > namlār, namtā
ši 2 人称単数 > šamlār, šamtē

のように、*-la* 系列と *-tai* 系列の二種類が見られるのである。ただし、この場合も文として表示されているわけではないので、両系列の間にニュアンスの違いがあるかどうかまでは掌握できない。

10.2 カルムイク語

当該の派生接尾辞は、*-tu* と *-tai* の両方の形態とも見られる。G.J.Ramstedt (1935)⁵¹⁾ の辞書には、次のような例を挙げられている。*-tu* を伴う例としては、

atši 恩 > atšit 恩のある

g<al 火 > ga<lt^o 火のある
 などの語が示されている。-tai を伴う例としては、
 nasŋ 年齢 > nastɛ 年齢を持つ、～歳
 arun nastɛ 十歳
 tsasŋ 雪 > tsastɛ 雪のある
 tsastɛ tsayān ūl 雪のある白い山
 χär 愛 > χärtɛ (愛のある) 愛する
 sül 尻尾 > sültɛ 尻尾のある

などの語が示されている。

また、カルムイク語には共同格の問題をめぐっては、『言語学大辞典』（栗林）⁵²⁾によると -la 系列と -tai 系列の二種類が保持されていて、-la に対しては「連帯格」、-tai に対しては「共同格」という用語を当てている。代表的な意味として、

-la 連帯格 ～と（～とともに）
 -tai 共同格 ～をもって

という説明が施されている。例として、

γal 火 > γal-lā 火と
 > γal-tā 火をもって
 axə 兄 > axə-lā 兄と
 > axə-tā 兄をつれて

などの語（日本語訳も栗林による）を挙げている。形態が異なる以上、別な格として扱うべきであるという立場なのであろうが、表示する意味という観点からは相互の間にニュアンスの差は微少であるように思われる。

一方、N.Poppe (1955) はこれらを別な格であるとは見なしていない。ブリヤート語同様、Comitative（共同格）という一つの用語を当てて表示している。

bi 1 人称単数 > nanlā
 > nantā
 tši 2 人称単数 > tšamlā
 > tšamtā

形態が異なっても意味にはほとんど違いがないのだから、別な格として扱う必要はないという立場なのであろう。つまり、N.Poppe はカルムイク語でも Comitative という一つの格に二つの形態があると見ているのである。ちなみに、栗林の立場からは人称代名詞においても、これらは当然「連帯格」と「共同格」に区別されることになる。

筆者は、形態が異なってもニュアンスにほとんど違いがないのだから、別な格として扱う必要はないという立場に立つ。重要なのは、「～と」「～とともに」（あるいは、「～をもって、～をつれて」というような意味を表示するための格として、-la 系列と -tai 系列の二つ持っているのか、それともどちらか一つのみ持っているかという点であり、同じ格か別

な格かの判定は、少なくとも今回の考察にとってそれほど重要ではないと考える。よって、カルムイク語には共同格として -la 系列と -tai 系列の二つが現れると解釈する。

10.3 オイラト語

オイラト語に関しては、17 世紀の文語の用例となる。当該の派生接尾辞は、-tu と -tai の両方の形態とも見られる。使用されていたのはトド文字であるが、表記方法はテキストに依拠する。サンボードルジ、橋本（2005）^{53）} から例を挙げる。-tu を伴う例としては、

bayar 喜び > bayartu 喜びのある
 ašiq 利益 > ašiqtu 利益のある
 üzemji 外見 > üzemjitü （外見のある）美しい

などの語を挙げている。-tai を伴う例としては、

coq 威光 > coqtoi （威光のある）偉大な
 ebüčin 病氣 > ebüčintei 病氣のある
 küčün 力 > küčüntei （力のある）強い

などの語を挙げている。ただし、これだけをもとに -tu と -tai の役割の違いにまで言及することはできない。

また、オイラト語でも共同格の問題をめぐっては、カルムイク語同様 -la 系列と -tai 系列の二種類が保持されていて、著者はこれらを別な格と見なしており、

-luya には холбох、
 -tai には хамтрах

という別々の用語を当てている。例として、

mori 馬 > mor-luya
 > mori-tai
 ger 家 > ger-lüge
 > ger-tei
 degüü 弟 > degüü-lüge
 > degüü-tei

などの語を挙げている。また、人称代名詞の変化に関しては、

bi 1 人称単数 > nada-luyā
 > nada-tai,
 bida 1 人称複数 > bidan-luyā
 > bidan-tai
 či 2 人称単数 > čima-luyā
 > čima-tai,

ta	2 人称複数	>	tan-luyā
		>	tan-tai
ene	3 人称単数	>	üün-lügē
		>	üün-tei,
tere	3 人称複数	>	tüün-lügē
		>	tüün-tei,

のように表している。カルムイク語における栗林同様、形態が異なるからには別な格として扱うべきであるという立場なのである。N.Poppe による表ではオイラト語には言及していないが、筆者はオイラト語ではカルムイク語と同じく共同格として -la 系列と -tai 系列の二つが現れると解釈する。

オイラト文語は、地域としては西に属するが、当該の派生接尾辞に関しては同じく西方言の『ムカディマツ・アル・アダブ』に見られる特徴を有していない。すなわち、『ムカディマツ・アル・アダブ』の特徴は、「-tu は現れるけれども、-tai は現れない」であったが、オイラト文語では両形態とも現れる。これについては、両者の間で影響し合うことがなかったからであると見る。言い換えれば、「-tu は現れるけれども、-tai は現れない」という特徴は必ずしも西方言すべてを網羅するものではないということである。

10.4 ダグル語（達斡爾語）

ダグル語には、表記体系がない。

当該の派生接尾辞は、-tu と -tai の両方の形態とも見られる。恩和巴圖（1984）⁵⁴⁾ から例を挙げる。-tu を伴う例としては、

džiryo:	六	>	džiryo:t	（六を持つ）六歳の
dolo:	七	>	dolo:t	（七を持つ）七歳の
naim	八	>	naimət	（八を持つ）八歳の

などの語を挙げている。-tai を伴う例としては、

ila:n	光	>	ila:nti:	光のある
nas	年齢	>	nasti:	年齢を持つ、～歳
nər	名前	>	nərti:	名前のある、有名な

などの語を挙げている。ただし、両派生接尾辞の役割の違いにまで言及することはできない。

また、共同格は Samuel E.Martin（1960）⁵⁵⁾ により人称代名詞の状態を確認できる。これによると、

bii	1 人称単数	>	nametei
biede	1 人称単数	>	biedentei（包括形）、maantei（排除形）
šii	2 人称単数	>	šametei
taa	2 人称複数	>	taantai

tere	3 人称単数	>	teret <u>ei</u>
tede	3 人称複数	>	tedent <u>ei</u>

のように、-tai のみで現れている。さらに、N.Poppe の表でもここに記載されているのは、

bi	1 人称単数	>	namt <u>i</u>
----	--------	---	---------------

のみであって、*nam-luya のような記載は見られない。よって、ダグル語の共同格の形態には -la 系列はなく -tai 系列のみであると見られる。

10.5 シラ・ユグル語（東部裕固語）

シラ・ユグル語には、表記体系がない。

当該の派生接尾辞は、-tu の形態のみ見られる。保朝魯（1985）⁵⁶⁾ から例を挙げると、

amən	命	>	amt <u>ə</u>	命 <u>のある</u>
eŋ	幅	>	eŋt <u>ə</u>	幅 <u>のある</u>
nasən	年齢	>	nast <u>ə</u>	年齢 <u>を持つ</u> 、～歳
bəjar	喜び	>	bəjart <u>ə</u>	喜び <u>のある</u>
hsən	乳	>	hsənt <u>ə</u>	乳 <u>を持つ</u>
kereg	必要	>	keregt <u>ə</u>	必要 <u>のある</u>

のような語が示されているが、-tai を伴う語は現れない。

また、共同格は保朝魯（1991）⁵⁷⁾ により人称代名詞の状態を確認できる。これによると、

bu	1 人称単数	>	namdala
buda	1 人称複数	>	budanla
tʃə	2 人称単数	>	tʃəmal <u>a</u>
ta	2 人称複数	>	tanla

のように、-la のみで現れる。-tai では現れない。なお、著者はこの -la に対して連合格という用語を当てていて、共同格という用語は使っていない。しかし、前述した通りこの考察においては用語の当て方は重要ではない。-tai では現れず、-la のみで現れることに留意しなければならないのである。保朝魯は -la を連合格と呼んでいるが、筆者がこれを共同格と読み替えても特に理解に支障はないと考える。よって、シラ・ユグル語の共同格の形態には -tai 系列はなく -la 系列のみであるとする。なお、N.Poppe の表ではシラ・ユグル語には言及していない。

10.6 モンゴル語（土族語）互助方言

モンゴル語互助方言には、表記体系がない。

当該の派生接尾辞は -tu と -tai の両方の形態が見られる。哈斯巴特爾（1986）⁵⁸⁾ から例を挙げる。-tu を伴う例としては、

amən	生命	>	aməntə	生命 <u>のある</u>
ŋgo	顔色	>	ŋgotə	(顔色 <u>のある</u>) 顔色の良い
fi:	林	>	fi:də	林 <u>のある</u>

などの語を挙げている。-tai を伴う例としては、

amuta	味	>	amutadi:	(味 <u>のある</u>) おいしい
omɔɕ	姓	>	omɔɕdi:	姓 <u>を持つ</u>
ula	山	>	uladi:	山 <u>のある</u>
nase	年齢	>	nasedi:	年齢 <u>を持つ</u> 、～歳

などの語を挙げている。

また、共同格は人称代名詞の変化として、照那斯図 (1981) ⁵⁹⁾ より人称代名詞の状態を確認できる。これによると、-la 系列と -tai 系列の二種類が保持されて、著者はこれらを別な格と見なしており、

-la	には	連合格
-dii	には	共同格

という別々の用語を当てている。例として、

bu	1 人称単数	>	ndaa- <u>la</u>
		>	ndaa- <u>dii</u>
buda	1 人称複数	>	budaŋgula- <u>la</u>
		>	budaŋgula- <u>dii</u>
teə	2 人称単数	>	teə- <u>la</u>
		>	teə- <u>dii</u>
ta	2 人称複数	>	taŋgula- <u>la</u>
		>	taŋgula- <u>dii</u>

のように表しているが、ここでも、両方の形態が現れることが重要であり、筆者は共同格として -la 系列と -tai 系列の二つが現れると解釈する。なお、N.Poppe の表ではモンゴル語互助方言には言及していない。

10.7 モンゴル語（土族語）民和方言

モンゴル語民和方言には、互助方言同様表記体系はない。

当該の派生接尾辞は、-tai の形態のみ見られる。塩谷 (1992) ⁶⁰⁾ から例を挙げると、

be:tcin	病気	>	be:tcintai	病気 <u>のある</u>
gaga	兄	>	gagatai	兄 <u>のある</u>

のような語が見られる。しかし、民和方言では -tu に相当する形態は現れない。当該の派生接尾辞に関して、-tu の形態では現れず -tai の形態でのみ現れるというのは、周辺言語の中では、極めて異例である。筆者の推測するところによれば、

① -tu と -tai の両方を持っている

のが最も古い状態であり、その後の推移としては、

① そのまま両方とも保持している

② -tai を消失して -tu のみとなる

のいずれかになることが多いのであるが、

③ -tu を消失して -tai のみの体系となっている

のは、今回考察した中ではこのモンゴル語民和方言のみである。

また、共同格の形態は、塩谷 (2018) ⁶¹⁾ から例を挙げると、

motu	木	>	motu- <u>la</u>	木とともに
tierge	車	>	tierge- <u>la</u>	車とともに

のように -la 系列のみ見られる。

さらに、人称代名詞の例を挙げると、

bi	1 人称単数	>	damai- <u>la</u>
dasi, da	1 人称複数	>	dasi- <u>la</u> , da- <u>la</u>
qi	2 人称単数	>	qi- <u>la</u>
tasi	2 人称複数	>	tasi- <u>la</u>
gan	3 人称単数	>	gan- <u>la</u>
gansi	3 人称複数	>	gansi- <u>la</u>

のように、-la 系列のみで現れている。-tai 系列では現れない。よって、モンゴル語民和方言の共同格の形態には -tai 系列はなく -la 系列のみであると見られる。なお、N.Poppe の表ではモンゴル語民和方言にも言及していない。

当該の派生接尾辞に関しては -tai のみ現れるにも関わらず、共同格では -tai 系列が現れないという点でも、モンゴル語民和方言は特殊な位置付けにあると言っていい。

10.8 ドウンシャン語 (東郷語)

当該の派生接尾辞は、-tu の形態のみ見られる。布和 (1983) ⁶²⁾ から例を挙げると、

mori	馬	>	morit <u>u</u>	馬の <u>ある</u> 、馬に乗った
giən	病	>	giənt <u>u</u>	病の <u>ある</u>
nasuŋ	年齢	>	nasut <u>u</u>	年齢を <u>持つ</u> 、～歳の

ような語が見られる。しかし、ドウンシャン語では -tai に相当する形態は現れない。

また、共同格の形態は布和 (1988) ⁶³⁾ から人称代名詞を見ると、

bi	1 人称単数	>	nama <u>lə</u>
bidziən	1 人称複数 (包括形)	>	bidziənl <u>ə</u>
matan	1 人称複数 (排除形)	>	matanl <u>ə</u>
tʃu	2 人称単数	>	tʃuma <u>lə</u> , tʃuən <u>lə</u>

ta 2人称複数 > ta_{la}

のように、-la のみで現れている。ここで著者は共同格ではなく連合格という用語を用いているが、これまで述べているようにどういう用語を当てているかは重要ではない。したがって、ドゥンシャン語の共同格の形態にも -tai 系列はなく -la 系列のみであると解釈する。

10.9 カンジャ語（康家語）

カンジャ語には、表記体系がない。

当該の派生接尾辞は、-tu の形態のみ見られる。斯欽朝克圖（1999）⁶⁴⁾ から例を挙げると、

amin 生命 > amin-tu 生命のある
 mōri 馬 > mōri-tu 馬のある、馬に乗った
 kuʃir 力 > kuʃir-tu （力のある）強い

また、共同格は人称代名詞の変化として、同じく斯欽朝克圖から例を挙げると、

bi 1人称単数 > bi-gala
 bəde 1人称複数（包括形） > bəde-gala
 mənə 1人称複数（排除形） > mənə-gala
 tʃi 2人称単数 > tʃi-gala
 ta-suu 2人称複数 > ta-suu-gala

のように、-gala という形態で現れる。-tai の形態では現れない。この -gala が中世モンゴル語の -luya と同源であって、それが -luya 音韻転換して -gala となったものなのか、あるいは集合数詞を形成する派生接尾辞 -yula を起源とするものなのかについては見解が分かれているようであるが、-tai では現れないことから少なくとも -tai 系列を保持していないという点は確かである。また、この著者も共同格ではなく凭連格という異なる用語を用いているが、筆者はこれを便宜上共同格と読み替える。

10.10 バオアン語（保安語）

バオアン語には、表記体系がない。

当該の派生接尾辞は、-tu の形態のみ見られる。陳乃雄（1987）⁶⁵⁾ から例を挙げると、

təseŋ 油 > təseŋtu （油のある）油っぽい
 bəjaŋ 富 > bəjaŋtu （富のある）富んだ
 nasə 年齢 > nasətu 年齢を持つ、～歳
 nərə 名前 > nərətu 名前のある、有名な

のような語が示されている。しかし、バオアン語では -tai に相当する形態は現れない。

また、共同格は人称代名詞の変化として、布和（1982）⁶⁶⁾ から例を挙げると、

bu 1人称単数 > bugala

bəḁə 1人称複数（包括形） > bəḁəcala
 mangə 1人称複数（排除形） > mangəcala
 tci 2人称単数 > tcicala
 ta 2人称複数 > tacala
 ŋgaŋ 3人称単数 > ŋgaŋcala
 ŋgaŋia 3人称複数 > ŋgaŋiacala

のように、-cala という形態で現れる。ただし、この -cala が中世モンゴル語の -luya と同源であって、それが -luya 音韻転換して -cala となったものなのか、あるいは集合数詞を形成する派生接尾辞 -γula を起源とするものなのかについては、カンジャ語同様断言することはできない。

以上の考察から、モンゴル系周辺言語における -tu と -tai の状況、共同格の形態に関して、次のようにまとめることができる。

		派生接尾辞		共同格	
		-tu 系列	-tai 系列	-la 系列	-tai 系列
1	ブリヤート語	+	+	+	+
2	カルムイク語	+	+	+	+
3	オイラト語	+	+	+	+
4	ダグル語	+	+	—	+
5	シラ・ユグル語	+	—	+	—
6	モンゴル語互助方言	+	+	+	+
7	モンゴル語民和方言	—	+	+	—
8	ドゥンシャン語	+	—	+	—
9	カンジャ語	+	—	+	—
10	バオアン語	+	—	+	—

カンジャ語とバオアン語の共同格は、-la 系列に属する形態なのか断言できないが、少なくとも -tai 系列を保持していないことは確かなので、ここでは -la 系列としている。

- ① 当該の派生接尾辞に関しては、-tu と -tai の両方を持つのがもっとも多く 5 言語、次いで -tu のみのが 4 言語、-tai のみ持つのが 1 言語であることから、-tu のほうが保持される傾向にある。
- ② 共同格に関しては、-la 系列のみ持つのが最も多く 5 言語、次いで -la 系列と -tai 系列の両方を持つのが 4 言語、-tai 系列のみ持つのが 1 言語であることから、-la 系列のほうが保持される傾向にある。共同格がほぼ -tai で表される現代モンゴル語は、周辺言語と比べるとむしろ例外であることが分かる。

- ③ 派生接尾辞に *-tai* が現れない言語では、共同格でも *-tai* は現れない。ただし、派生接尾辞に *-tai* の形態を持っているからといって、その言語の共同格の形態が必ず *-tai* であるとは限らない。

参考までに、本稿で扱った他の史料も考察した順に掲載する。

	派生接尾辞		共同格	
	-tu 系列	-tai 系列	-la 系列	-tai 系列
現代モンゴル語	+	+	△	+
『元朝秘史』	+	+	+	—
『知恵の鍵』	+	+	+	—
Лы. 『アルタン・トブチ』	+	+	+	△
『ムカディマツト・アル・アダブ』	+	—	+	—
パスパ文字史料	+	—		
『アルタン・ハーン伝』	+	+	+	—
『宝徳蔵般若経』	+	△	+	—
Мэргэн гэгээн 『アルタン・トブチ』	+	+	+	△

同一史料の中で、もう片一方の系列と比較して著しく数が少ないものに関しては、(△) とした。

パスパ文字史料の共同格に関しては、両形態とも確認できないので両方とも空欄とした。

11. 結論

当該の派生接尾辞が『元朝秘史』では、性と数の呼応が見られることは小沢によってすでに示されている。筆者も検証したところ、被限定詞もしくは主語が「人」の場合、約 95% が原則に適った現れ方になっている。本稿の考察によって明らかになったのは、

- (1) 『元朝秘史』で「人以外」に対してこの派生接尾辞が現れるとき、*-tu* と *-tai* の間に役割の差異はなく、自由交替可能な状態であった。また、使用頻度の点では *-tu* が *-tai* を大きく上回っている。ただし、*-tan* は「人以外」であっても「複数」に特化して使用されている。「単数」に使用されることはない。
- (2) *-tu* と *-tai* の間に役割の差異がないのは、『元朝秘史』以前の状態がそうであったからであると推測される。役割の差異のなかった二形態に対して、「*-tu* は男性、*-tai* は女性」という役割を付与したのは『元朝秘史』のモンゴル語からであり、その要因にはモンゴル国の統一という歴史的背景が関係していると考えられる。
- (3) 『元朝秘史』以後も、書き言葉では、呼応がむしろまだ保持されていると言ってよい時

期がある。さらに時代が下ると、書き言葉においても性による役割の差異が消失するが、使用頻度の点では依然として -tu が -tai を大きく上回る状況が続いている。

- (4) -tu の〈述語用法〉は、18 世紀には大幅に減少する。そして、現代モンゴル語では全く見られなくなっている。一方、-tan は、「複数に対する呼応」の役割から「集合名詞形成」の役割へ変遷する。現代モンゴル語では「集合名詞形成」の役割にほぼ特化している。
- (5) 現代モンゴル語の -tu,-tai の間には、-tu は結合度が強く一部の定型表現にのみ使用されるのに対して、-tai は結合度が弱く生産的に使用されるという差異が見られる。したがって、相互の交替は不可能であることのほうが多い。
- (6) モンゴル系周辺言語において -tu と -tai の状況を見ると、-tu のほうが -tai よりもよく用いられているが、これは中世以降のモンゴル語東方言が使用頻度の点で -tu が優勢であったことと無関係ではないと思われる。

モンゴル語東方言について、時系列に沿って表にまとめると以下ようになる。

	1 『元朝秘史』 以前 〈5 章〉	2 『元朝秘史』 〈4 章〉	3 Jly.AT 〈6 章〉	4 Jly.AT 以後 〈9 章〉	5 現代語 〈2 章、3 章〉
-tu/-tai の頻度	-tu -tai	-tu 多 -tai 少	-tu 多 -tai 少	-tu 多 -tai 少	-tu 少 -tai 多
-tu/-tai の役割	差異なし 相互交替可能	-tu 「男性」 -tai 「女性」 「人以外」は、 原則として 差異はない	書き言葉では、 性による呼応を 保持 「人以外」は、 原則として 差異はない	性による呼応は 消滅 -tu が好まれる 傾向	-tu <u>結合度強</u> 主として定型表現 に使用 -tai <u>結合度弱</u> 定型表現を除き多 様に使用
述語の -tu		＋ (あり)	＋ (あり)	＋ (減少傾向)	－ (なし)
-tan の役割	複数への呼応 (混在) 集合名詞形成	複数への呼応 (混在) 集合名詞形成	複数への呼応 (混在) 集合名詞形成	複数への呼応は 衰退傾向 (混在) 集合名詞形成	複数への呼応は 極めて稀 ほぼ集合名詞形成
共同格	-la 系列のみ	-la 系列のみ	-la 系列 稀に -tai 系列	-la 系列 稀に -tai 系列	稀に -la 系列 ほぼ -tai 系列

・〈 〉内は、本稿でそれを取り扱っている章である。

・『元朝秘史』以前の状況に関しては、得られるデータが非常に少ないことから、-tu と -tai の頻度の欄は空白とした。また、同様の理由で（『知恵の鍵』では現れないが）-tu の〈述語用法〉を「-」とする断定ことは避けた。

当該の派生接尾辞に関して言うなら、『元朝秘史』の位置付けはモンゴル語の歴史の中で極めて特殊である。したがって、こと -tu, -tai, -tan については、まとめるに当たって、『元朝秘史』とそれを大方踏襲している Jly.『アルタン・トブチ』を軸に据えた区分をしても、その全容を把握するのに不適切ではないと考える。

西方言の他のモンゴル系周辺言語の場合でも、最も古い段階においては上の表の 1 と同様の状況であったと推測される。そのうち、-tu のみ持つ言語は、1 の状況から -tai が衰退したと考えられる。逆に -tai のみ持つ言語は（モンゴル語民和方言）は、-tu が衰退したのである。

おわりに

- (1) 『元朝秘史』以外は、現代語に至るまではモンゴルには口語の状況を如実に反映した文献はほとんどない。したがって、依拠した文献における派生接尾辞の状況は分析できても、必ずしもそれが当時のモンゴル語の口語の実態を如実に反映しているとは言えない。また、文献上のモンゴル語と実際の口語との乖離を実証するのは困難である。
- (2) モンゴル系周辺言語における -tu と -tai の状況は、他の研究者による業績を元に簡潔に表にまとめることはできたが、両形態とも有する言語の場合、この二形態の間に現代モンゴル語同様の役割の差異があるのか、それとも自由交替可能なのか状態なのかについては、筆者が当該の言語に精通していないので深く追究できなかった。
- (3) 使用頻度の点で -tai が -tu を上回った時期、共同格の形態が -luya から -tai に完全移行した時期の特定、および両者の相関関係の解明には至らなかった。

このうち、(2) と (3) に関してはさらなる研究によって明らかにすることが可能であり、それを今後の課題としたい。

註

- 1) 塩谷茂樹 (2006) pp.1-3
- 2) 小沢重男 (1963) pp.131-132
- 3) 小沢重男 (1997) p.247
- 4) 塩谷茂樹 (2006) pp.36-37
- 5) 小沢重男 (1984) 『元朝秘史全釈 (上)』 p.161
- 6) 塩谷茂樹 (2006) 『モンゴル語ことわざ用法辞典』 p.51
- 7) Баярсайхан.Б (2009) толгой は p.639、次の нэр は p.460 に掲載されている。
- 8) Бадатдорж.Д (2015) *Монгол хэлний үгийн сангийн утга зүй* p.78
- 9) 田中セツ子 (2005) p.194
- 10) Бадатдорж.Д (2015) p.132
- 11) 小沢重男 (1997) p.137
- 12) 塩谷茂樹 (2006) p.11
- 13) 小沢重男 (1994) p.500
- 14) 谷博之 (2011) 大阪大学での授業用に作成したプリントにこの記述が見られる。
以下の谷の見解も、それに書かれているものである。
- 15) 塩谷茂樹 (2006) p.36
- 16) 山越康裕 (2012) pp.71-72
- 17) Лувсанвандан.Ш (1968) pp.129-130
- 18) 小沢重男 (1997) pp.247-249
- 19) 塩谷茂樹 (2006) p.38
- 20) 塩谷茂樹 (2006) p.38
- 21) Буянзаяа.Ц (2013) p.91
- 22) 小沢重男 (1979) p.10
「蒙古語」という言い方は、今ではあまりしないが原文通り表記する。
- 23) 橋本勝 (1972) 「中世モンゴル語の未来形動詞語尾について」
- 24) 栗林均、确精扎布編 (2001) 「『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引」
ただし、転写の表記方法等が異なる場合は小沢に拠った。
- 25) 小沢重男 (1984) 『元朝秘史全釈 (上)』 p.200
- 26) degeltü という形で現れる箇所もある。
- 27) 小沢重男 (1984) 『元朝秘史全釈 (上)』 p.279
- 28) 小沢重男 (1984) 等の解説で挙げられている考え方をまとめたものである。
- 29) 小沢重男 (1979) pp.35-41
- 30) 金水敏による用語であり、『役割語研究の展開』(2011)、その他のところで述べられている。
- 31) moritu という形で現れる箇所もある。

- 32) 小沢重男 (1979) p.14
- 33) 小沢重男 (2000) 附録 pp.403-418 に掲載されている。
- 34) Аюурзаха.Г,Өлзийтөгс.Л (2008) p.26
- 35) Буянзаяа.Ц (2013) p.114
- 36) 小沢重男 (1984) は、「ロー・アルタン・トブチに関する翻訳二題」の中で、この文献の成立年代を「1669 年から 1675 年の間」とであると、かなり期間を絞って結論付けている。(『元朝秘史蒙古語文法講義 続講』附録 p.503)
- 37) 森川哲雄 (2007) の『モンゴル年代記』で大きく扱われているのが、この三つであったので、本稿ではこのように記した。他に中国から出されたものとして朱風、賈敬顔らによる『漢訳蒙古黄金史綱』といったものもある。
- 38) Буянзаяа.Ц (2013) pp.225-228
- 39) Чоймаа.Ш (2006) *erten-ü qad-un ündüsülegsen törü ypsun-u jokiya-i tobčilan quriya γsan altan tobč kemekü orosibai*
- 40) 木村彰一他編 (1975) характер は p.1321、учтивый は p.1304 に掲載
- 41) アウドウルラッハマン・ギェルベヤズ (2016) p.89
- 42) 荒井幸康 (2006) 『「言語」の統合と分離：1920－1940 年代のモンゴル・ブリヤート・カルムイクの言語政策の相関関係を中心に』 p.27
- 43) Буянзаяа.Ц (2013) pp.256-258
- 44) 森川哲雄 (2007) p.117
- 45) 樋口康一 (1990) 「はしがき」に記載。「仏教蒙古語」という用語も同氏によるものである。
- 46) Буянзаяа.Ц (2013) pp.263-264
- 47) 森川哲雄 (2007) p.429
- 48) Бүрнээ.Д (2014) *Мэргэн гэгээн Лувсандамбижлцан*
ИХ МОНГОЛ УЛСЫН ҮНДСЭН АЛТАН ТОВЧ ТУУЖ ОРШВОЙ
 全 216 ページ中、17 ページから 148 ページまでが、本文と脚注という体裁となっている。
- 49) N. Poppe (1960) p.93
- 50) N. Poppe (1955) pp.212-213
- 51) Ramstedt.G.J (1935) *Kalmückisches Wörterbuch*
- 52) 亀井孝、河野太郎、千野栄一編著 (1988) カルムイク語に関しては、第 1 巻 pp.1300-1306 に記載
- 53) オチルバト・サンボドルジ、橋本勝 (2005)
 派生接尾辞は p.143 に、共同格は pp.133-134 に、人称代名詞は pp.152-155 にそれぞれ掲載されている。
- 54) 恩和巴圖 (1984) 『達斡爾語詞彙』
- 55) Samuel E.Martin (1960) *DAGUR MONGOLIAN GRAMMAR, TEXTS, AND LEXICON*
- 56) 保朝魯 (1985) 『東部裕固語詞彙』

- 57) 保朝魯（1991） 『東部裕固語和蒙古語』
- 58) 哈斯巴特爾（1986） 『土族語詞彙』
- 59) 照那斯圖（1981） 『土族語簡志』
- 60) 塩谷茂樹（1992） 「中国領内の蒙古系孤立的諸言語における接尾辞一覧・蒙古文語索引」 p.209
- 61) 塩谷茂樹、何菊紅（2018） 共同格の例は p.6 に、人称代名詞の例は pp.14-16 に掲載されている。
- 62) 布和（1983） 『東郷語詞彙』
- 63) 布和（1988） 『東郷語論集』
- 64) 斯欽朝克圖（1999） 『康家語研究』
- 65) 陳乃雄（1986） 『保安語詞彙』
- 66) 布和（1982） 『保安語簡志』

【参考文献】

【日本語文献】

- アウドウルラッハマン・ギェルベヤズ（2016）『しっかり学ぶトルコ語』ベレ出版
- 荒井幸康（2006）『「言語」の統合と分離：1920－1940年代のモンゴル・ブリヤート・カルムイクの言語政策の相関関係を中心に』三元社
- 小沢重男（1963）『モンゴル語四週間』大学書林
- 小沢重男（1979）『中世蒙古語諸形態の研究』開明書院
- 小沢重男（1984～1989）『元朝秘史全釈（上・中・下）』風間書房
- 『元朝秘史全釈続攷（上・中・下）』風間書房
- 小沢重男（1997）『蒙古語文語文法講義』大学書林
- 小沢重男（2000）『元朝秘史蒙古語文法講義 続講』風間書房
- 小沢重男（1994）『現代モンゴル語辞典』大学書林
- 亀井孝、河野太郎、千野栄一編著（1988）『言語学大辞典』三省堂
- 木村彰一他編（1975）『ロシア語辞典』博友社
- 栗林均、确精扎布編（2001）『「元朝秘史」モンゴル語全単語・語尾索引』東北アジア研究センター叢書；第4号 東北大学
- 塩谷茂樹（1992）『中国領内の蒙古系孤立的諸言語における接尾辞一覧・蒙古文語索引』京都大学
- 塩谷茂樹（2006）『モンゴル語ハルハ方言における派生接尾辞の研究』大阪外国語大学研究推進室編集部門
- 田中セツ子（2005）『現代モンゴル語口語辞典』大学書林
- 橋本勝（1972）『中世モンゴル語の未来形動詞語尾について』アジア・アフリカ文法研究2号 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 樋口康一（1990）『蒙古語訳「宝徳蔵般若経」の研究』溪水社
- 森川哲雄（2007）『モンゴル年代記』白帝社
- 山越康裕（2012）『詳しくわかるモンゴル語文法』白水社
- 吉田順一（1998）『「アルタン＝ハーン伝」訳注』風間書房

【外国語文献】

- Аюурзаяа.Г, Өлзийтөгс.Л（2008）*Монголийн сонгомол яруу найраг* Улаанбаатар
- Бадатдорж.Д（2015）*Монгол хэлний үгийн сангийн утга зүй* Улаанбаатар
- Баярсайхан.Б（2009）*Монгол хэлний хураангуй тайлбар толь* Улаанбаатар
- Буянзаяа.Ц（2013）*Монгол уран зохиолын түүхэн товч* Улаанбаатар
- Бүрнээ.Д（2014）*ИХ МОНГОЛ УЛСЫН ҮНДСЭН АЛТАН ТОВЧ ТУУЖ ОРШВОЙ* Улаанбаатар
- Лувсанвандан.Ш（1968）*Орчин цагийн монгол хэлний бүтэц, монгол хэлний үг нөхцөл хоёр нь* Улаанбаатар

- | | | |
|---------------------|---|-------------|
| Отгонтуул.Т (2014) | <i>Оюуныг нээгч оюун түлхүүр</i> | Улаанбаатар |
| Поппе.Н.Н (1938~39) | <i>Монгольский Словарь Мукаддимат- ал-Адаб</i> | Москва |
| Поппе.Н.Н (1955) | <i>Introduction to Mongolian Comparative Studies</i> | Helsinki |
| Поппе.Н.Н (1957) | <i>The Mongolian Monuments in hP`ags-pa Script</i> | Weisbaden |
| Сарантуяа.Б(2013) | <i>Сорхугтани</i> | Улаанбаатар |
| Чоймаа.Ш (2006) | <i>erten-ü qad-un ündüs ülegsен törü ypsun-u jokiya-l-i
tobčilan quriya γsan altan tobč kemekü orosibai</i> | Улаанбаатар |
- 【語彙集類】
- ブリヤート語
- | | | |
|------------------|--|----------|
| Поппе.Н.Н (1960) | <i>URALIC AND ALTAIC SERIES Volume 2 BURIYAT GRAMMAR</i> | Richmond |
|------------------|--|----------|
- カルムイク語
- | | | |
|---------------------|---------------------------------|----------|
| Ramstedt.G.J (1976) | <i>Kalmückisches Wörterbuch</i> | Helsinki |
|---------------------|---------------------------------|----------|
- オイラト語
- オチルバト・サンボードルジ、橋本勝 (2005) 『オイラト・モンゴル文語概説』
- ダグル語
- | | | |
|------------------------|--|----------|
| 恩和巴圖 (1984) | 『達斡爾語詞彙』 | 内蒙古人民出版社 |
| Samuel E.Martin (1960) | <i>DAGUR MONGOLIAN GRAMMAR, TEXTS, AND LEXICON</i> | |
- シラ・ユグル語
- | | | |
|------------|-------------|----------|
| 保朝魯 (1985) | 『東部裕固語詞彙』 | 内蒙古人民出版社 |
| 保朝魯 (1991) | 『東部裕固語和蒙古語』 | 内蒙古人民出版社 |
- モンゴル語互助方言
- | | | |
|--------------|---------|----------|
| 照那斯図 (1981) | 『土族語簡志』 | 民族出版社 |
| 哈斯巴特爾 (1986) | 『土族語詞彙』 | 内蒙古人民出版社 |
- モンゴル語民和方言モンゴル語
- | | | |
|-----------------|---------|-------------|
| 塩谷茂樹、何菊紅 (2018) | 『土族語文法』 | アジア・アフリカ研究所 |
|-----------------|---------|-------------|
- ドゥンシャン語
- | | | |
|-----------|---------|---------------|
| 布和 (1983) | 『東鄉語詞彙』 | 内蒙古人民出版社 |
| 布和 (1988) | 『東鄉語論集』 | 西北民族学院西北民族研究所 |
- カンジャ語
- | | | |
|--------------|---------|---------|
| 斯欽朝克圖 (1999) | 『康家語研究』 | 上海遼東出版社 |
|--------------|---------|---------|
- バオアン語
- | | | |
|------------|-----------|----------|
| 陳乃雄 (1987) | 『保安語和蒙古語』 | 内蒙古人民出版社 |
| 布和 (1982) | 『保安語簡志』 | 民族出版社 |

附録 『元朝秘史』全編における当該の派生接尾辞一覧

4章で取り上げた『元朝秘史』について、当該の派生接尾辞が現れる箇所を巻1から順に提示する。ここでは、小沢によるラテン文字転写のみ掲載する。日本語訳は、小沢を参照にしながらも変更を加える場合がある。特に、当該の派生接尾辞に関しては、その意味を明確にするために日本語としては不自然な訳になっている場合がある。

- ・派生接尾辞には下線を施す。
- ・派生接尾辞と対応する主語は〈〉、被限定詞は〔〕で示す。その右肩に、
「人・男」「人・女」「人・複数」、
「人以外・単数」「人以外・複数」

のどれであるかを記す

- ・〔〕の中が空白になっているのは、被限定詞が省略されていると解釈できるものであり、索引では「非明示」と記しているが、何が省略されているのかについての説明を施す。
- ・索引で「男・人名」「女・人名」「複数・人名」と表記している箇所の人物名を記す。
- ・人称代名詞で表されている人物とその性別を記す。
- ・索引で施した日本語訳は、より簡潔に記そうと試みたものである。したがって、ここで示すものと訳語が合致していない場合がある。
- ・その他、索引のみでは不十分と思われる事項についての説明を適宜施す。

巻1

1－1

Činggis qahān-nu huja'ūr de'ēr tenggeri-eče jaya'ātu töregsēn bōrte [čino] 人以外・単数 aju'ū.
チンギス 可汗 の 源祖は 上天 よりの定めを持って生れた灰白色の狼 であった。

1－3

Qarču-yin kö'ün 〈Borjigidai-mergen〉人・男 Mongcoljin-go'a gergeitū aju'ū.
カルチュの 子 ボルヂギダイ・メルゲンは モンゴルジン・ゴアという妻を持っていた。

Borjigidai-mergen-nū kö'ün 〈Torogoljin-bayan〉人・男 Borogčin-go'a gergeitū
ボルヂギダイ・メルゲンの子トロゴルジン・バヤンはボログチン・ゴアという妻を持ち、

Boroldai-suyalbi jala'ūtu Dayir Boro qoyar külü'ūd actastū būle'ē.
ボロルダイ・ソヤルビという若党を持ち、ダイル、ボロという二匹の駿れた去勢馬を持っていた。

1 - 4

〈Duwa-soqur〉^{人・男} manglai dunda gagča nidütü gurban ne'ürid gajar-a qaraqū büle'ē.
 ドウワ・ソコルは 額の真中に唯一つの目を持ち、三行程の地をも望見するのだった。

1 - 6

niken qaraūtai [tergen]^{人以外・単数} -ü öljige-de niken ökin sayin buyu.
 一台の黒い木柙の付いた車の 前室に一人の娘の美しいのがいる。
 (車にいるのは、ökin「女」である)

1 - 7

Dobun-mergen tede irgen-dür kürü'ēsü ünen-kü go'ā sayin aldar nere yeketei Alan- go'ā
 ドブun・メルゲンがその人衆の所に到ると、本当に美しい名声の大きさを持つアラン・ゴアという
 neretei kü'ün-e ber ögte'ēi üdü'üi [ökin]^{人・女} aju'ū.
 名を持つ人には与えられていない 娘がいた。

1 - 8

tede böleg irgen ber Köl-bargujin töküm-ün ejen Bargudai-mergen-nü ökin Bargujin-go'ā
 その一団の 人々は コル・バルグヂン盆地の 主人バルグヂダイ・メルゲンの娘バルグヂン・ゴアと
 neretei [ökin]^{人・女} -ni Qori-tumad-un noyan Qorilartai-mergen-ne ögdegsen aju'ū.
 という名を持つ娘を コリ・トゥマドの首長コリラルタイ・メルゲンに与えられていた。

Qori-tumad-un gajar-a Arig usun-na Qorilartai-mergen-nü Bargujin-go'ā-ča töregsen
 コリ・トゥマドの土地、アリグ・ウスンでコリラルタイ・メルゲンのバルグヂン・ゴアから生まれた
 Alan- go'ā neretei [ökin]^{人・女} tere.
 アラン・ゴアという名を持つ娘が彼女である。

1 - 9

〈Qorilartai-mergen〉^{人・男} Qori-tumad-un gajar-tur-iyān bulucan keremün göre'ētei
 コイラルタイ・メルゲンは コリ・トゥマドの土地で 黒貂、黒鼠など獲物のいる
 [gajar]^{人以外・単数} -iyan qorilalduju mau'ülalduju Qorilar obogtu bolju
 土地を皆で禁じて 互いに悪口を言い合ってコリラル姓を持つようになり、

(göre'ētei に対する被限定詞が gajar であり、oboctu に対する主語が Qorilartai-mergen である)

Burqan-qaldun-nu göre'ēsün görü'ūli sayitu [gajar] 人以外・単数 sayin ke'ēn
ブルカン・カルドゥンの 獲物の (良さのある) 良い 所が よいと言って、

1-10

Alan go'ā Dobun-mergen-dür irejü qoyar kö'ün töre'ūlbi.

アラン・ゴアはドブun・メルゲンのところに来て二人の子を産んだ。

Belgünūtei Belgünūtei nereten bülle'ē.

ブグヌテイ、ベルグヌテイという名を持っていた。

(主語に相当するのは qoyar kö'ün 「複数」であるが、文としてはいったん途切れているので、索引では主語の欄に「非明示」と記している)

1-11

Duwa-soqur <aqa> 人・男 inu dörben kö'üntü bülle'ē.

ドゥワ・ソコル 兄は 四人の 子を持っていた。

Dörben oboctan bolju Dörben irgen <tede> 人・複数 bolba.

ドゥルベン姓を持って、 ドゥルベンの人衆に彼等はなった。

1-13

ögsü ke'ējü a'ūsigitu [jildü] 人以外・単数 arasun inu abču čö'ē buca-yin miqa kübčin-i

あげようと言って肺の付いたザルドを 皮を取って 三歳鹿の肉すべてを

Dobun-mergen-ne ögbe.

ドブun・メルゲンに与えた。

(与えたのは、この節の前に登場する Uriyangqadal kü'ün ウリヤンカイ族の人 「男」である)

1-17

Alan-go'ā ere ügei-ūi bö'ēd gurban kö'ūd töre'ūlbi.

アラン・ゴアは夫がいないのに 三人の子を産んだ。

Buqu-qadagi Buqatu-salji Bodončar-mungqac nereten bülle'ē.

ブク・カタギ フカトゥ・サルヂ ボドンチャル・ムンクカグの 名を持っていた。

(主語に相当するのは gurban kö'üd 「複数」であるが、文としてはいったん途切れているので、索引では主語の欄に「非明示」としている)

1-19

tabu'ūla tabun čuġtai [müsüd] 人以外・単数 kü'üleldün bariju bitü'üljü quġulun yabada.
五人とも、五本束になった矢柄を それぞれ握って順番に折ろうとしてできなかった。
(折ろうとしたのは、tabu'ūla 「複数」である)

1-21

qara teri'ūtü [kü'ün] 人・男 -dür qanilgan yekin üġüled ta.
黒い頭を持つ人に なぞらえて何と言うのですか、お前たちは。

1-22

tere čuġtai [müsüd] 人以外・単数 metü qamtu niken eyeten bolu'āsu
あの束になった 矢柄のように、 とともに一つの和を持つなら、
kene ber kilbar-a yekin bolqun <ta> .人・複数
誰にも簡単にはやられないでしょう、お前たちは。
(čuġtai に対する被限定詞が müsüd であり、eyeten に対する主語が ta である)

1-24

gol da'āritu godoli se'ūltü orog [šingqula] 人以外・単数 -yi unuju
背筋に鞍傷のある短い尻尾を持つ黒背の灰青色の馬に 乗って、
ükü'ēsü inu üküšügei a'āsu inu asuġai.
死ぬなら死のう、生きるなら生きよう。
(馬に乗っているのは、この引用箇所の前に現れる Bodončar 「男」である)

1-25

gol da'āritu godoli se'ūltü orog [šingqula] 人以外・単数 -yin kilgasun-bar huraqalaju bariju asaraba.
背筋に鞍傷のある短い尻尾を持つ黒背の灰青色の馬の 尾毛でわなを作って捕えて養った。
(養ったのは、この節の前に現れる Bodončar 「男」である)

1－30

teyimü teyimü 〈kü'ün〉 人・男 teyimü morintu büle'ē.
ここかしこの 人が そのような馬に乗っていた。

1－31

kü'ün ber morin ber činu suraqu-dur adali buyu.
人も 馬も お前の尋ねるのと同じである。

qarčigaitu-je buyu.

黄鷹を持っている。

(主語に相当するのは kü'ün (男) であるが、文としてはいったん途切れているので、索引では主語の欄に「非明示」と記している)

1－33

〔beye〕 人以外・単数 teri'ūtū 〔de'el〕 人以外・単数 jaqatu sayin.
体に頭があり、 衣服に襟があるのは良いことです。

1－38

Bodončar alginči ha'ulju dunda ke'elitei 〔eme〕 人・女-yi bariju ya'ujin kü'ün čike'ēn hasagba.
ボドンチャルは先鋒として行き、五、六か月の胎児を身ごもった女を捕え、 何者かと尋ねた。

1－40

tere dumda ke'elitei 〔eme〕 人・女 Bodončar-tür irejü kö'ülebi.
その五、六か月の胎児を身ごもった女はボドンチャルの所に来て子を産んだ。

Jadaran obocan 〈tede〉 人・複数 bolba.
ジャダラン姓を持つ者に彼らはなった。

tere Jadaradai-yin 〈kö'ün〉 人・男 Tügü'üdei neretü büle'ē.
そのジャダラダイの子は、 トウグウデイという名を持つのであった。

1－41

Ba'āridai-yin kö'ün Čiduqul bökö. 〈Čiduqul bökö〉 人・男 emes olotū büle'ē.

バアリダイの子はチドゥクル・ボコ。 チドゥクル・ボコは 女たちを多く持っていた。

Menen-ba'ārin oboqan 〈tede〉 人・複数 bolba.

メネン・バアリン姓を持つ者に彼らはなった。

1－42

〈Belgünūtei〉 人・複数 Belgünūd oboqan bolba.

ベルグヌテイはベルグヌド姓を持つ者になった。

〈Bügünūtei〉 人・複数 Bügünūd oboqan bolba.

ブグヌテイはブグヌド姓を持つ者になった。

〈Buqu-qatagi〉 Qatagin oboqan bolba.

ブク・カタギはカタギン姓を持つ者になった。

〈Buqutu-salji〉 人・複数 Salji'ūd oboqan bolba.

ブクトゥ・サルヂはサルヂウド姓を持つ者になった。

〈Bodončar〉 人・複数 Borjigin oboqan bolba.

ボドンチャルはボルヂギン姓を持つ者になった。

(これらは、複数であることは表示されていないが、主語の人物には別に複数の人が伴われていると『元朝秘史』の作者が判断したものと解釈して、索引では「複数・人名」としている。このような例は、以下頻出する)

1－43

Bodončar-un abulin eme-deče töregsən 〈〉 人・男 Barim-siyiratu Qabiči neretü büle'ē.

ボドンチャルの最初の妻から生まれた バリム・シイラト カピチという名を持つ者がいた。

(主語に相当するのは、kü'ün「男」のような語である)

niken kö'ün törbe. Jeü'ūredei neretü büle'ē.

一人の子が生まれた。ジェウレデイという名を持っていた。

(主語に相当するのは niken kö'ün「男」であるが、文としてはいったん途切れているので、索引では主語

の欄に「非明示」と記している)

1-44

Jeü'üreyid oboctu bolucaju Jeü'üred-ün ebüge 〈tere〉人・男 boluba.

ジェウレデイド姓を持つ者として、ジェウレデイドの祖に彼はなった。

1-46

Qačín-nu 〈kö'ün〉人・男 Noyagidai neretei büle'ë.

カチンの子は ノヤギダイという名を持っていた。

noyamsig aburitu tula Noyakin oboctan bolba.

ノヤンのような性格を持っていたのでノヤキン姓を持つ者になった。

(aburitu の主語に相当するのは Noyagidai 「男」であるが、文としてはいったん途切れているので、索引では主語の欄に「非明示」と記している。同様に、oboctan の主語に相当するのも Noyagidai であるが、主語の人物には別に複数の人が伴われていると『元朝秘史』の作者が判断したものと解釈して、索引では複数扱いとしている)

Qači'ü-yin 〈kö'ün〉人・男 Barulatai neretü büle'ë.

カチウの子は バルラタイという名を持っていた。

yeke beyetü ide'ën-e baruc büle'ë Barulas oboctan bolba.

大きな体を持ち、食べ物に食欲なのでバルラス姓を持つ者になった。

(beyetü の主語に相当するのは Barulatai 「男」であるが、文としてはいったん途切れているので、索引では主語の欄に「非明示」と記している。同様に、oboctan の主語に相当するのも Barulatai であるが、主語の人物には別に複数の人が伴われていると『元朝秘史』の作者が判断したものと解釈して、索引では複数扱いとしている。)

Barulas oboctan bolucaju Erdemtü-barula Tödöyen-barula teri'üten

バルラス姓を持つ者として、エルデムトゥ・バルラ、トドイェン・バルラの頭を持つ

〔Barulas〕人・複数 〈tede〉人・複数 bolba.

バルラス族に 彼らはなった。

(teri'üten に対する被限定詞が Barulas「複数」である。oboctan に対する主語が tede「複数」である。teri'üten は、『元朝秘史』で頻出する。文脈によっては、「～など」と訳したほうが自然であり、小沢もそのように訳している箇所がある)

Qaraldai-yin 〈kö'ūd〉 人・複数 buda'ān qudqulaqu eki teri'ū üge'ün tula

カルルダイの子たちは、米飯をかき混ぜる秩序がないので、

Buda'ād oboctan 〈tede〉 人・複数 bolba.

ブダアト姓を持つ者に彼らはなった。

(索引では主語の欄に tede と記しているが、ここでは kö'ūd としてもよい)

Qači'ün-nu 〈kö'ün〉 人・男 Adarkidai neretü büle'ē.

カチウンの子は アダルキダイという名を持っていた。

aqa de'ū ja'ūra adarugči tula Adargin oboctan bolba.

兄弟の間で譲りあう人なのでアダルギン姓を持つ者になった。

(oboctan の主語に相当するのは Adarkidai 「男」であるが、ここでは主語の人物には別に複数の人が伴われていると『元朝秘史』の作者が判断したと解釈して、索引では複数扱いとしている)

Način-ba'atur-un 〈kö'ūd〉 人・複数 Uru'ūdai Mangcutai nereten büle'ē.

ナチン・バートルの子たちは、ウルウダイ・マングダイという名を持っていた。

Uru'ūd Mangcud oboctan 〈tede〉 人・複数 bolba.

ウルウド、マングドの姓を持つ者に彼らはなった。

Način-ba'atur-un abulin eme-deče töregsen 〈〉 人・複数 Šijü'ūdei Dogoladai nereten büle'ē.

ナチン・バートルの最初の妻から生まれたのが、シヂュウデイ、ドゴラダイという名を持っていた。

(主語に相当するのは, kü'ün 「男」のような語である)

1-47

〈Senggün-bilge Ambagai-tan〉 人・複数 Tayičj'ūd oboctan bolba.

セングン・ビルゲ、アムバガイらは、タイチュードの姓を持つ者になった。

Čaraqai-lingqu-yin berigen eme-deče töregsen 〈〉 人・男 Besütei neretü büle'ē.

チャラカイ・インクの兄嫁から生まれたのがベステイという名を持っていた。

(主語に相当するのは, kü'ün 「男」のような語である)

Besüd oboctan 〈tede〉 人・複数 bolba.

ベスドの姓を持つ者に彼らはなった。

Čaujin-örtegei-yin 〈kö'ūd〉 人・複数 Oronar Qongqotan Arulad Sönid Qab-turqas

チャウジン・オルテゲイの子らは、オロナル、コンコタン、アルラド、ソニド、カブ・トゥルカス

Genisges oboctan 〈tede〉 人・複数 bolba.

ゲニスゲンの姓を持つ者に彼らはなった。

(索引では主語の欄に tede と記しているが、ここでは kö'ūd としてもよい。いずれを取っても、主語が

「人・複数」であることに変わりはない)

1-49

Yürki oboçtan 〈tede〉人・複数 bolba.

ユルキの姓を持つ者に彼らはなった。

1-54

öngge jisu busitai 〔öki qatu〕人・女 üjeü ger-tür-iyēn qarin hau'ülju

絶世の器量を持つ女性を 見て、 家に 連れ帰り、

1-55

〈Čiledü〉人・男 ayuju kürdün qubtu.

チレドゥは恐れて足の速い黄馬に乗っていた。

tede gurban haran-i uqaba'ü č*i*.

あの三人の意図を分かりましたか、あなたは。顔は、顔から異なっています。

čirai cirai-ača busud bui. amin-dür činu kürküi čiraitan bui.

顔は、顔から異なっています。 命に及ぶ顔を持っています。

(主語に相当するのは gurban haran 「複数」であるが、文としてはいったん途切れているので、索引では主語の欄に「非明示」と記している)

1-59

Yesügei-ba'atur Tatar-un Temüjin-üge Qori-buqa teri'üten 〔Tatar〕人・複数 -i dau'üliju ire'ēsü

イエスゲイ・バートルはタタールのテムジン・ウゲ、コリ・ブカを頭に持つタタール族を略奪して帰ると、

tende 〈Hö'elün-üjin〉人・女 ke'elitei

そのときホエルン・ウゼンは胎児を宿していて、

1-60

Temülün neretei niken 〔ökin〕人・女 törebi.

テムルンという名を持つ一人の娘が生まれた。

〈Temüjin〉 人・男 -i yesün nasutu büküi-dür 〈Joči-qasar〉 人・男 dolo'ān nasutu büle'ē.

テムジンが九歳

のとき、 ジョチ・カサルは七歳であった。

(Temüjin 「男」は、従属節の主語であって、この文の主語には当たらないが、便宜上二つ目の nasutu の主語に区分する。二つ目の nasutu の主語が、Joči-qasar 「男」である)

〈Qači'ün-elči〉 人・男 tabun nasutu büle'ē.

カチウン・エルチは五歳であった。

〈Temülün〉 人・女 ölegetei büle'ē.

テムルンは 揺りかごの中であった。

1-61

Yesügei-ba'atur 〈Temüjin〉 人・男 -i yesün nasutu büküi-dür (中略) Temüjin-i abu'ad yorčiba.

イエスゲイ・バートルは、テムジンが

九歳

のとき テムジンを連れて赴いた。

(Temüjin 「男」は、従属節の主語であって、この文の主語には当たらないが、便宜上 nasutu の主語に区分する)

1-62

Dei-sečen ügülerün

デイ・セチェンが言うには

ene 〈kö'ün〉 činu nidün-tür-iyēn caltu ni'ūr-tur-iyān gerētü [kö'ün] 人・男 bui.

この子は

目に火を持ち、

顔に光を持つ子です。

(一つ目の kö'ün 〈主語〉と二つ目の kö'ün [被限定詞]は同一人物を指している)

1-64

ba Unggirad 〈irgen〉 人・複数 erte üdür-eče je'e-yin jisün ökin-ü önggeten

我々オングドの人衆は

昔の日から娘の容色、乙女の顔色を持ち、

ba öngge sayid ökid-iyēn ösgejü öljigetei [tergen] 人以外・単数 -dür unu'ülju

我々は顔色の良い乙女たちを育て、前室のある 車に

乗せて、

(乗るのは、ökid 「複数」である)

erten-eče Unggirad 〈irgen〉 人・複数 qatun qalqatan ökid öčilten

昔からオングラドの人衆は、后という楯を持ち、乙女たちの奏上者を持ち、

1 – 66

ni'ür-tur-iyān gerētei nidün-tür-iyēn galtai [ökin] 人・女 -i üjejü oyin-tur-iyān oro'ūba.

顔に光を持ち、 目に火を持つ娘を 見て 心に叶った。

Temüjin-eče niken masun yeke harbantai aju'ū. Börte neretei.

テムジンより一歳年上の 十歳であった。ボルテという名を持っていた。

(harbantai、neretei の主語に相当するのは ökin (女) であるが、文としてはいったん途切れているので、索引では主語の欄に「非明示」と記している)

1 – 68

〈kö'ūd〉 人・複数 üčügetü büle'ē.

子供たちは小さくある。

巻 2

2 – 71

uriju ülü ögteküi mörtei 〈či〉 人・女. uçira'asu idekü yosutai 〈či〉 人・女

呼び招いて与えられない道を持つ、汝は。その場にあうならば食べる道理がある、汝は。

gürejü ülü ögtekü mörtei 〈či〉 人・女. kürte'ēsü idekü yosutai 〈či〉 人・女

請うて与えられない道がある、汝は。 到れば食べる道理がある、汝は。

(či は、Hö'elün 「女」を指している)

2 – 73

Čaraqa 〈ebügen〉 人・男 yaratu bolju ger-tür-iyēn irejü

チャラカ老人は 傷を負って 家に帰って来て、

2 – 74

sölsüte töregsen Üjin [eke] 人・女 sutan [kö'ūd] 人・複数 -iyēn teji'erün

胆力を持って生まれたウゲン母は、 威福のある子供たちを養うとき、

jarčimtai Üjin [eke] 人・女 -yin ja'ugasu-bar teji'ēgsed 〈kö'ūd〉 jasactan [sečed] 人・複数 bolba.

規律のあるウゲン母の紅百合の根で養った

子供たちは節度の^{ある}賢者たちになった。

2-82

jöb ele eyimū argattu [] 人・男 -yin tula nidün-tür-iyēn caltu ni'ūr-tur-iyān gerēttu keyēn
 まさにこのような才覚を持っているので、 目に火を持ち、顔に光を持つ と言って、
 (被限定詞に相当するのは、Temüjin「男」である。また、caltu と gerēttu の主語に相当するのも Temüjin
 「男」であるが、一文上にないので索引では主語の欄に「非明示」と記している)

2-83

qa'a odqu tere buqa'ūtu [kü'ün] .人・男
 どこへ行くのか、あの枷の付いた人が。
 (kü'ün は、Temüjin「男」のことを指している)

2-85

qoyitu nungcasutu [tergen] 人以外・単数 -dür unu'ülju
 北側の羊毛を入れた 車に 乗せて、
 (乗るのは、Temüjin「男」である)

Qada'an neretei [düi] 人・女 -yi -ben amitu [kü'ün] 人・男 -e bū ke'ēju asara'ülba.
 カダアンという名を持つ妹に、 命がある人に言うな と言って世話をさせた。

2-86

qoyitu nungcasutu [tergen] 人以外・単数 -dür unu'ülju
 北側の羊毛を入れた 車に 乗せて、
 (乗るのは、Temüjin「男」である)

2-90

〈bi〉 人・男 gagča kö'ün inu bi, Bo'örču neretü bui.
 私は ひとりっ子です、私は、 ボオルチュという名を持っている。
 (bi は、Bo'örču「男」のことを指している)

2－91

niken čaga'ān moritu [kü'ün] 人・男 u'urga bariju gagča'ār güiyičejü ayisu.
 一人の白い馬に乗った人が 馬捕竿を持ってただ一人で追い付いて来る。

tere čaga'ān moritu [kü'ün] 人・男 u'urga-bar-iyān dokiju baiyiba.
 その白い馬に乗った人は、 馬捕竿で 手招きをして立っていた。
 (いずれも、人名は明示されていないが、文脈から kü'ün は「男」であると考えられる)

2－92

〈ečige〉 人・男 minu Naqu-baiyan neretü buyu.
 父は、 ナク・バヤンという名を持っている。

2－94

tende-če Temüjin Belgütei qoyar Dei-sečen-nü Börte-üjin-i yesün nasutu бүкүй-дүр үежү
 それからテムジン、ベルグテイの二人は、デイ・セチュンのボルテ・ウゼンを九歳のとき見て、
 (主語に相当するのは Temüjin「男」であるが、一文上にないので索引では主語の欄に「非明示」と記している)

Börte-üjin-ü 〈eke〉 人・女 Čotan neretei büliyi.
 ボルテ・ウゼンの母は、チョタンという名を持っていた。

2－97

Jarči'ūdai ebügen kü'ūrge-ben ūrčü Jelme neretü [kö'ün] 人・男 -iyēn uduridču irejü
 ジャルチウダイ老人が、ふいごを背負ってヂェルメという名を持つ子を 引き連れて来て、
 (kö'ün は、Jelme「男」のことを指している)

2－98

jalqamšigtan [Taiyiči'ūd] 人・複数 ayisun aqun-ū
 恐るべきタイチウド族が 近づいているのか、

2 – 100

Qo'āgčīn emegen Börte-ūjin-i ni'ūsū keyēn böken qaraū'tai [tergen] 人以外・単数 -dür unu'ūlju
 コアクチン老婆は、ボルテ・ウデンを隠そうとして幌の付いた黒い木柵のある車に 乗せて、
 （乗るのは、Börte-ūjin「女」である）

2 – 101

qa'atai [tergen] 人以外・単数 -ü qa'ālga abūqui-lu'ā dōtora qatun-je kū'ūn sa'ūju
 閉じられた車の扉を 開けると、中に貴婦人然とした人が座っていて、
 （中にいるのは、貴婦人然とした人「女」である）

2 – 103

〈Temūjin〉人・男（中略）bugiya moritu
 テムヂンは、（中略）ブギを付けた馬に乗り、

gacča amin-iyān qayiralan gacča moritu （中略）〈bi〉人・男.
 たった一つの命を惜しみたった一頭の馬に乗って、（中略）私は。
 （bi は、Temūjin「男」のことを指している）

卷 3

3 – 105

nikenten busutū 〈bida〉人・複数
 一つ（である）ではないか、我々は。

dabčitu [qor] 人以外・単数 darbaljaqui-dur daiyijicči Daiyir-usun
 ダブチの入った矢筒が 揺れ動く逃げ去る ダイル・ウスンは、
 edö'ē Orqon, Selenge qoyar-un Talqun aral-a bui-je
 今オルコン、セレンゲの二つの間のタルタン川中島にいるぞ。
 （矢筒に関与しているのは、Daiyir-usun「男」である）

qara'ātu [tug] 人以外・単数 -iyān sačuba bi.
 (遠見を持つ) 遠くから見える旗に祈りを捧げて 散布した、 私は。

bürkiren бүкүйи dau'ütü [kö'ürge] 人以外・単数 -ben deledbe bi.
 とどろきわたる 音のする太鼓を 打った、 私は。

qadqurasutu [sumun] 人以外・単数 -iyān onolaba bi.
 山桃皮を巻いた 矢を番えた、 私は。

qara'ātu [tug] 人以外・単数 -iyān sačuba bi.
 (遠見を持つ) 遠くから見える旗に祈りを捧げて散布した、 私は。

ödken бүкүйи dau'ütü [kö'ürge] 人以外・単数 -ben deledbe bi.
 太い音のする 太鼓を 打った、 私は。

hüdēsütü [quyag] 人以外・単数 -iyān emüsbe bi.
 皮条で綴じ合わせた 鎧を 着た、 私は。

onggitu [üldü] 人以外・単数 -beyēn bariba bi.
 柄穴に入れた 剣を 取った、 私は。

onotu [sumun] 人以外・単数 -iyān onolaba bi.
 刻みのある 矢を 番えた、 私は。
 (bi は、いずれも Jamuqa「男」のことを指している)

〈monggol〉 人・複数 je andacartan busutū.
 モンゴル族は、「ヂェー」の宣誓をした者たちではないか。

qara 〈kere'ē〉 人以外・単数 qalisu körisü idekü jaya'ātu bö'ētele
 黒いからすは、 ものの外皮を食べる運命を持っているのに、

galau'un togura'un-i idesü keyēn ješin aju'ū.

雁、鶴を 食べようと高望みしてしまった。

quladu mau'ū 〈šibau'un〉 人以外・単数 qulugana küčügene idekü jaya'ātu bö'ētele

クラドという悪い鳥は、鼠、小鼠を食べる運命を持っているのに、

qun togura'un-i idesü keyēn ješin aju'ū.

白鳥、鶴を食べようと高望みしてしまった。

bi qutugtai sutai [üjin] 人・女 -i quriyaju irekü bolun

私は、福ある幸あるウデンを 収めてくることになり、

qaratu qarangu [qabčal] 人以外・単数 -a širgusu

(黒さを持つ) 黒い 暗い 山峡に 潜り込もう、

3－112

〈eke〉 人・女 inu nabtarqai nekei de'ēltei

母は、ぼろぼろの羊皮の服を着て、

Belgütei noyan Merkidei ele yasutu [kü'ün] 人・男 -ni eke-yi minu abčira ke'ējü godolidqu büle'ē,

ベレグテイ長官は、メルキド族のその骨を持つ人を、母を連れて来いと言って、鎗矢を射るのだった。

3－113

erketü [tenggiri] 人以外・単数 -de nereyidčü eke etügen-e kürgejü

威力のある天に名ざされて、 母なる地に祝福され

ere hačitu Merkid [irgen] 人・複数 -i ebür ba anu hogtorgui bolgaba.

恨みのあるメルキド族の人衆を、 その懐をも 空にした。

3－114

bulugan macalaitu maral-un godun gudusutu

貂の帽子をかぶり、 牝鹿の脛皮の靴を履き、

ičilkin jargag usun-u bulugan jalgasan de'ēltü tabun nasutu [Küčü] 人・男 neretü

鹿などのなめし皮、かわうその皮をつないだ服を着た五歳の クチュという名を持つ

nidün-dür-iyēn galtu 〔kō'ūken〕 人・男 -i

目に火を持つかわいい男の子を、

3 - 115

Temüjin, To'ōril qan, Jamuqa, gurban qamtudču Merkid-ün čorqan ger čogoli'ūlju

テムジン、トオリル汗、チャムカの三人は、メルキド族の住処を破壊して

čoctai 〔eme〕 人・女 -yi arbilaju

冠をかぶった女を 捕えて、

3 - 116

〈Temüjin〉 人・男 harban niken nasutu buqii-dur

テムジンが 十一歳のとき、

(Temüjin 「男」は、従属節の主語であって、この文の主語には当たらないが、便宜上 nasutu の主語に区分する)

Jamuqa guralultuc ši'a Temüjin-ne ögčü Temüjin-ü činggültügtü 〔ši'a〕 人以外・単数 araljju

チャムカは、のろ鹿のシャーをテムジンに与え、テムジンの鉤状に曲がったシャーと交換して、

(交換したのは、Jamuqa 「男」である)

alanggir numutan 〔 〕 人・複数 qarbiyaldun buqui-dur

櫟製の反りの少ない弓を持った者たちが射合っているとき

(被限定詞に相当するのは、čeri'ūd 兵士たち「複数」のような語である)

Jamuqa bura'ū-yin qoyar eber ni'āju nükelejü dau'ūtu 〔yor〕 人以外・単数 -iyān Temüjin-e ögčü

チャムカは、二歳牛の二本の角を貼り付けて、穴を開け、音のする鳴り鐃をテムジンに与え、

Temüjin-ü arča manglaitu 〔godoli〕 人以外・単数 araljju andačilalduna.

テムジンの杜松の先端を持つ鐃と交換して、盟友の誓いをし合った。

(交換したのは、Jamuqa 「男」である)

3 - 117

ebertü 〔ünügün〕 人以外・単数 čaca'ān-i Temüjin-e unu'ulba.

角のある小山羊のように、 白い馬にテムジンを乗せた。

(乗るのは、Temüjin 「男」である)

3－119

niken üçügen Kököčü neretü [kö'ün] 人・男 -i nuntug-tur qočorugsan-i
 一人の幼いココチュという名を持つ子が 居営地に残っていたのを、

3－121

Jamuqa-lu'ā ke'ēli niketen keke gagčatan büle'ei 〈ba〉 人・複数
 ジャムカと 腹を一つ持ち、 羊水を一つ持っている、我々は。

〈üniyen〉 人以外・単数 ireju (中略) sojir ebertü bolju
 牝牛が来て (中略) 歪んだ角を持つようになって、

〈namayi〉 人・男 (中略) gučin ba emestü bolga
 私が 三十人もの女たちを持つようにしてくれ。
 (対格 namayi は Temüjin「男」 のことであり、索引では namayi を主語としている)

3－122

Qunan teri'üten [Geniges] 人・複数 niken küreyēn irebe kü.
 クナンを頭に持つ グニスゲス族の 一群が来た。

3－124

čo'örgatai [tergen] 人以外・単数 -i či'ū inu būči'ūde'ūlsü
 銃の付いた車を くさびを脱れさせまい、

tenggiligetei [tergen] 人以外・単数 -i terge'ūr de'ēre bū te'ūre'ūlsü ke'ējü
 車軸の付いた車を 大道の上で壊させまい、 と言って、

3－125

öljeten [nököd] 人・複数 minu ülü'ū bolu'ūjai 〈ta〉 .
 吉祥のある伴らになるのではあるまいか、 あなた方は。

卷 4

4 – 129

Jamuqa teri'ūten 〔Jadaran〕 人・複数 harban gurban qarin nōkōčejü
ジャムカを頭に持つチャダラン族が、 十三の外族を伴って、

4 – 132

Megüjin-se'ültü teri'ūten 〔Tatar〕 人・複数-i
メグデン・セウルトゥを頭に持つタタール族を、

4 – 133

Tatar 〈irgen〉 ebüges ečiges-i baragsad ösiten 〔irgen〕 人・複数 büle'ē.
タタール族は、祖父たち、父たちを害した 仇のある人衆である。

Tatar-un Megüjin-se'ültü teri'ūten 〔Tatar〕 人・複数 -i Ulja ö'ēde türjü ayiši
タタール族のメグデン・セウルトゥを頭に持つタタール族を、ウルチャ河を遡って追い上げて来ている

Jürkin-ü Sača-beki Taiču teri'ūten 〔Jürkin〕 人・複数 -e kerelejü ilerün
ヂュルキン族のサチャ・ベキ、タイチュを頭に持つヂュルキン族に言って遣るのに、

Tatar-un Megüjin-se'ültü teri'ūten 〔Tatar〕 人・複数 tende qorga bariju'üi.
タタール族のメグデン・セウルトゥを頭に持つタタール族が、そこに砦を築いていた。

münggün ölegei tataṭu 〔künjile〕 人以外・単数 inu Činggis qahān tende abula'āi.
銀の揺りかご、真珠の付いた掛物を チンギス・ハーンはそこに取った。
(取ったのは、Činggis qahān 「男」である)

4 – 135

altan e'ēmeg dōrebčitü dadz torgan buluga'ār dotorlacsan heligebčitü
金の耳輪、鼻輪を付けた、金欄、緞子の、黒貂の皮で裏打ちした胴当を付けた

üčü'ügen [kö'ügen] 人・男 -i abčiraju
小さい子供を 連れて来て、

huja'ür sayıtu [kü'ün] 人・男 -ü urug buyu-je.
出自の良さを持つ人の 一族ですよ。

4 - 136

erten-ü ösiten kišten ebüges ečiges-i bidan-u baragsad [Tatar] 人・複数 -i qamsan morilaya.
昔日の仇のある、恨みのある、祖父たち父たちを害したタタール族を併合するために出馬しよう。

4 - 137

Jebke Jürkin-ü nuntag-ača Boro'ül neretü üčügen [kö'ügen] 人・男 -i abčiraju
ジェブケは、ヂュルキン族の居営地からボロウルという名を持つ 小さい子供を連れて来て、

4 - 138

Hö'elün eke Merkid-ün nuntug-ača oldagsan Güčü neretü [kö'ügen] 人・男 -i
ホエルン母は、メルキド族の居営地から見つけられたグチュという名を持つ子供を
Taiyiči'üd-un dотора Besüd-ün nuntug-ača oldagsan Kōkōčü neretü [kö'ügen] 人・男 -i
タイチウド族の中のベスト族の居営地から見つけられたココチュという名を持つ子供を
Tatar-un nuntug-ača oldagsan Šigiken-qutug neretü [kö'ügen] 人・男 -i
タタール族の居営地から見つけられたシギケン・クトゥグという名を持つ子供を
Jürkin-ü nuntug-ača oldagsan Boro'ül neretü [kö'ügen] 人・男 -i ede dörben-i ger dотора teji'ērün
ヂュルキン族の居営地から見つけられたボロウルという名を持つ子供を、これら四人を家で養うのに、

4 - 139

helige-dür sölsütü heregei-dür hončitan a'üşigi dü'üreng jirügetü aman dü'üreng a'ürtan
肝臓に胆力を持つ、親指に命中力を持つ、肺にはいっぱいの雄心を持つ、口にはいっぱいの気概を持つ、

ere tutum erdemüdten bökös [küčüten] 人・複数 [] 人・複数 -i ilcaju ögčü
男ごとに諸才能を持つ、強い力を持つ者を選んで与え、

(sölsütü, hončitan, jirügetü, a'ürtan, erdemüdten が、すべて küčüten に係るという小沢の見解に基づいて、索引では呼応の判定を行っている。küčüten については、被限定詞に相当するのは čeri'üd

兵士たち「複数」のような語である)

a'ürtan sölsüten omogtan [jor kimes] 人・複数 tula Jürkin ke'ēgdekü yosun teyimü.
気概を持つ、胆力を持つ、誇りを持つ勇者たちのおかげで、ヂュルキン族と言われるようになった。

teyimün omogtan [irgen] 人・複数 -i Činggis qahān dorayita'ülju
このような誇りを持つ人衆を チングス・ハーンは屈服させて、
Jürkin obogutu [] 人・複数 -yin üldkebe.
ヂュルキン姓を持つ者を 殲滅した。
(被限定詞に相当するのは、irgen 人衆「複数」のような語である)

4 - 140

Barqac-un omogtan [kö'ūd] 人・複数 -tür nököčekün bolun
バルガグの誇りを持つ子供たちに 交わることになって、

4 - 141

Qadagin-u Bacu-čorogi teri'üten [Qadagin] 人・複数
カダギン族のバグ・チョロギを頭に持つカタギン族、

Salji'ūd-un Čirigidai-ba'atur teri'üten [] 人・複数
サルヂウド族のチルギダイ・バータルを頭に持つ一団、

Dörben-nü Qaji'ün-beki teri'üten [] 人・複数
ドレベン族のカヂウン・ベキを頭に持つ一団、

Tatar-un Alči Tatar-un Jalin-buqa teri'üten [] 人・複数
タタール族のアルチ、タタール族のジャリン・ブカを頭に持つ一団、

Ikires-ün Tüge-maqa teri'üten [] 人・複数
イキレス族のトゥゲ・マカを頭に持つ一団、

Gorolas-un Čonag, Čaga'an teri'üten [] 人・複数
ゴロラス族のチョナク、チャガーンを頭に持つ一団、

4 - 144

turastan [čeri'ūd] 人・複数 -iyēn jasju qadqulduya keyēn jasaju baiju'ūi.

楯を持った兵士たちを立て直して、会戦しようと言って 整え立った。

4 - 145

gagča doto'ājitu čurama [ničügün] 人以外・単数 šitüldüjü baiyiqun daiyin dotora'ün güyijü

ただ下帯を付けただけの裸姿で、 対峙している敵たちの中に走り去って、
(裸姿になっているのは、Jelme「男」である)

niken yeke büri'ētei [tarag] 人以外・単数 tergen-eče inu abu'ād ergüjü irebe.

一つの大きな器に入ったヨーグルトを 車から取り戻って来た。
(戻って来たのは、Jelme「男」である)

tarag büri'ētü [] 人以外・単数 -yi abčirād

ヨーグルトの器に入っているのを持って来て、

(持って来たの Jelme「男」である。また、被限定詞に相当するのは tarag である。büri'ētü tarag-yi (器に入ったヨーグルトを) でも同じことのように思われるが、『元朝秘史』ではこのような表現が割とよく見られるのである)

〈bi〉 人・男 tan-dur oroqu duratu büle'ē.

私はあなた方に投降する意向を持っている。
(bi は、Jelme「男」のことを指している)

4 - 146

niken hula'ān de'ēltü [eme] 人・女 kü'ūn Temüjin-je keyēn yeke dau'ū-ār

一人の 赤い デールを着た 女性が テムジンよ と 大声で

qayilan uiyilan baiyiqu-yi

泣き 叫んで いるのを、

〈bi〉 人・女 Qada'ān neretei

私は カダアンという名を持っていて、

4 - 147

nököçetü [kü'ün] 人・男 buyu. Jirgo'adai nrtetü aju'ü.

友となるべき人である。 デルゴアダイという名を持っている。

(主語に相当するのは kü'ün であるが、一文上にないので索引では主語の欄に「非明示」と記している)

巻 5

5 - 148

Taiyiçi'utai yasutu [kü'ün] 人・男 (中略) hūnesü'er keyisgen kiduba.

タイチウドの骨を持つ人を (中略) 灰のように吹き飛ばし殺戮した。

5 - 149

Targutai-kiritug hoilaju бүкүй-yi öštü [kü'ün] 人・男 büle'e keyen

タルグタイ・キリルトウグが森に逃げ入っているのを、仇のある人である、

と言って、
(kü'ün は、Targutai-kiritug 「男」のことを指している)

nidün-düri-iyen galtu ni'ür-dur-iyän geretü büle'e.

目に 火を持ち、 顔に光を持っている。

(主語に相当するのは Temüjin 「男」であるが、一文上にないので索引では主語の欄には「非明示」と記している)

gardaju iregsed ya'ün itegelten [haran] 人・複数

手にして来た者たちは、どんな信頼のおける人々なのか。

5 - 152

〈aqa〉 人・男 bidan-u üge'ü aburitu dolo'an nasutu [] 人・男 -yi Merki irgen dau'uliju odču

兄は、 貧しい性格を持ち、七歳であるのを メルキド族の人衆が略奪して行って、

(被限定詞に相当するのは、Temüjin 「男」である)

gurban nasutu [] 人・男 -yi eke selte basa dau'uliju odču

十三歳であるのを 母もろともまた略奪して行って、

(被限定詞に相当するのは、Temüjin 「男」である)

gagča soqor qali'ün moritu

ただ一頭の盲目の黒尾の黄白色の馬に乗って、

(主語に相当するのは、Ong qan「男」であるが、一文上にないので索引では主語の欄に「非明示」と記している)

5 – 154

qudal üiyileten 〔 〕 人・複数 -i jargulatucai

偽りの罪を持つ人たちを、裁断させよう、

(被限定詞に相当するのは、haran 人々「複数」のような語である)

5 – 155

nada-ča egeči Yesüi neretei 〔 〕 人・女 nada-ča de'ēre.

私よりも、姉であるイエスイという名を持つ者が、私より勝っています。

(被限定詞に相当するのは、egeči「女」である。nada-ča Yesüi neretei egeči 《私よりもイエスイという名を持つ姉が》でも、同じことのように思われる)

5 – 156

Tatar-un Yeke-čeren-ü Yesüi neretei 〔ökin〕 人・女 ögdegsen küregen kü'ün büle'ē bi.

タタール族のイエケ・チェレンのイエスイという名を持つ娘を 与えられた婿です、私は。

5 – 158

Yedi-tublug neretü 〔noyan〕 人・男 inu qara'ül yabuju

イエディ・トゥブルグという名を持つ領主は、偵察隊として行動し、

5 – 160

〈Temüjin anda〉 人・男 minu urida-ča Naiman-dur elčitu büle'ē.

テムゲン盟友は、 以前からナイマンに使者を持っていた。

5 – 164

Temüjin kö'ün-i Senggüm-ün aqa bolcaju qoyar kö'ütü bolju amusugai

テムジンという子をセンゲムの兄として、二人の子を持つことになって休みたい。

(主語に相当するのは Ong qan「男」であるが、一文上にないので索引では「非明示」と記している)

bida qoyar-i haiyidaju sūdütü [mogai] 人以外・単数 -a sūdürte'ēsü sūdürgen-dür bü oroya,
我々二人を妬んで 菌のあるへびにそそのかされても、 その挑発には乗るまい。

ara'ātu [mogai] 人以外・単数 -a adarda'āsu adarqan-i inu bü abulčaya.
牙のあるへびに 中傷されても、その中傷を取り合うまい。

5 – 166

〈Jamuqa, Altan, Qučar, Qardakidai, Ebügejin, Noyakin, Söge'etei To'öril,
ジャムカ、アルタン、クチャル、カルダキン氏、 ノヤキン氏、ソゲエン氏のトオリル、

Qači'ün-beki〉人・複数 tede bolun niken eyeten bolju

カウチン・ベキは、 ともになって一つの和を持つことになり、

<Temüjin anda>人・男 minu urida-ča Naiman-u Tayangqan-dur keletü [elči] 人・男 tu

テムジン盟友は、 ナイマンのタヤン汗の所に言葉を持つ使者を持っていた。

(keletü の被限定詞が elči であり、elčitu の主語が Temüjin anda である)

5 – 167

amatü keletü [kü'ün] 人・男 ügülen bō'ētele

口のある、舌のある人が 言っているのに、

卷 6

6 – 170

dergede'ün bükün itegelten [] 人・複数 -e kelen ki'ed

傍らに いる人に 信頼のおける者たちに 知らせて、

(被限定詞に相当するのは, haran 人々「複数」のような語である)

qaragči'ūd alagči'ūd tuctan büi <tede> 人・複数, serelten [irgen] 人・複数 büi-je.

黒白の斑の旗を持っている、彼らは。 心すべき人衆である。

čactu [nökör] 人・男 büyü.

限りのある僚友です。

e'ũ-ber uqa'asu čactu [nökör] 人・男 büyü.

これによって理解すれば、限りのある僚友です。

6 – 171

Quyildar-i unagsan yaratu [] 人・男 -yi abu'ad qariju

クイルダルが倒れて傷ついたのを、連れて帰り、

(被限定詞に相当するのは、Quyildar「男」である)

6 – 172

itegelten Bo'örču, Boroqul [qoyar] 人・複数 qočorč'ũ.

信頼のおけるボオルチュ、ボロクルの二人が遅れている。

ači'ātu [morin] 人以外・単数 ači'ā-bān kebeli'ũljü baiyiyin büküi yi

荷を積んだ馬の

荷を傾けさせて立っているのを、

6 – 174

morin unu'ātan modun nemüreten bolba <tede> 人・複数

馬の乗り物を持ち、木の蔽いを持っている、彼らは。

6 – 177

südütü [mogai] 人以外・単数 -a südürte'ēsü südürgen-dür bü oroya,

齒のあるへびに

そそのかされても、その挑発には乗るまい。

ara'ātu [mogai] 人以外・単数 -a adarda'asu adarqan-i inu bü abulčaya.

牙のあるへびに

中傷されても、その中傷を取り合うまい。

qoyar kilügütei [tergen] 人以外・単数 nökö'ē kilügü-bēn qucura'asu hūker inu jigdün yadayu.

二つの轅の付いた車は、

一方の轅が折れたら、

牛は拽くことができなくなる。

kürdütei [tergen] 人以外・単数 nökö'e kürdü-bēn qucura'āsu neü'ün yadayu.
二つの車輪の付いた車は、一方の車輪が折れたら、動くことができなくなる。

gagča soqor qali'ün moritu irebe-je <či> 人・男
たった一頭の盲目の黒たてがみ、黄尾の馬に乗って来たのだ、お前は
(či は Ong qan「男」のことを指している)

6 – 181

degeltü töregsen [kö'ün] 人・男 bi aju'-je.
服を着て生まれた子は私だったのだ。
(kö'ün は、Činggis qahān「男」のことを指している)

6 – 182

<Asan> 人・男 Sartagtai čacān teme'ētü
アサンというサルタグ族の人が、白いラクダに乗って、

6 – 183

hod qaraju urbang deretü bolju kebtēmü <bi> 人・男
星を見て草木の根の枕を持つことになり臥したのだ、私は。
(bi は、Qasar「男」のことを指している)

6 – 184

altan eme'eltü qara [agta] 人以外・単数 -yin cuyang huja'ūr sa'ūtala darbuju'ū.
金の鞍を付けた黒い去勢馬の後脚の付け根に、その馬が座ってしまうまで射った。
(射たのは、Qali'udar「男」である)

卷 7

7 – 186

Jaqa-gambu-yi imada qariyatan emčü [irge] 人・複数 ber tumda'a nökö'e kilgün bol ke'ējü
ジャカ・ガンブを彼に属する私有の人衆をもすべて、一方の轅となると言って、

7 - 187

Ongojid-kereyid-i kešigten 〔 〕 人・複数 anu boltucaï

オンゴジド・ケレイド族を、宿直を持つ者とするように、

(kešigten は、『元朝秘史』で頻出する語であり、集合名詞化している。小沢は、「宿直兵」「輪番兵」といった訳語を当てているが、本稿では訳としては不自然なのを承知の上で、この語は上のように訳しておく。索引では被限定詞の欄に「非明示」と記している。被限定詞に相当するのは、haran 人々「複数」のような語である)

čisutu 〔tonog〕 人以外・単数 abučči Jirgin ba'ātud-i jisüjü qubiyaju kürgeldün yadaba.

血の付いた頭皮を取るゲルギン族の勇士らに分けたが、行き渡らせることができなかった。

7 - 188

〈Kököčü〉 人・男 actači emetü Senggüm-lü'ē gurba'ula aju'ü.

ココチュ 馬司は妻を持ち、セングムと 三人一緒にいた。

〈eme〉 人・女 kü'ün noqai ni'ürtai.

女は、 犬の顔を持っている。

7 - 189

tenggeri de'ere naran sara 〈qoyar〉 人以外・複数 gereten gegeyēn boltucaï.

天上には、太陽と月の 二つが光を持って 明るくあれかし。

Mongcol 〈irgen〉 人・複数 hünür mau'ütan, qubçasu baratutan büle'ei

モンゴルの人衆は、 匂いの悪いのを持ち、福の汚いのを持っている。

7 - 190

Torbi-taši neretü 〔elči〕 人・男 Önggüd-ün Alaqu-šidigid-quri-da ügülejü ilerün

トルビ・ダシという名を持つ使者を、オングド族のアラク・シディド・クリに言って遣るのに、

Alaqu-šidigid-quri Yoqunan neretü 〔elči〕 人・男 -yēr-iyēn Činggis qahān-na ügülejü ilerün

アラク・シディド・クリは、ヨクナンという名を持つ使者を、チンギス・ハーンに言って遣るのに、

Naiman 〈irgen〉 人・複数 ulus yeketü irge olotu keyēn

ナイマンの人衆は、 国の大きさを持ち、人衆の多さを持っている、と言って、

7 - 191

tende kešigten 〔 〕 人・複数 ilgaju oro'ülurun

そこに宿直を持つ者に選り、入れるときに、

erdemüten 〔 〕 人・複数 beye šil sayitan 〔 〕 人・複数 ilgaju oro'ülba.

才能を持つ者、 姿の良さを持つ者を 選りで入れた。

(被限定詞に相当するのは、haran 人々「複数」のような語である)

olon üdür turcag kešigten 〔 〕 人・複数 minu boltugai

多くの日、 日直の宿直を持つ者であれ。

7 - 192

qorčın turg'üd kešigten 〔 〕 人・複数 bau'ürči e'üdenči agtači

矢筒の士、日直の宿直を持つ者、 膳夫、 門衛、 馬司は、

dalan turg'üd kešigten 〔 〕 人・複数 oro'ülju

七十の日直の宿直を持つ者に入れて、

7 - 193

bidan-u qara'ül-ača niken šigqula morin mau'ūqan eme'ēltü 〔 〕 人以外・単数 -yi

我々の斥候は、 一頭の黄白の馬の粗末な鞍を付けたのを

Naiman-u qara'ül abtaju'üi.

ナイマン族の斥候に取られたのだ。

(被限定詞に相当するのは、šigqula morin である)

amitu ele 〔kü'ün〕 人・男 tutum ere-yin tabun anggi-da gal-nu'üd tülejü

命を持つ人ごと 男の人ごと、 五か所に火を焚いて、

amitu ele 〔kü'ün〕 人・男 tutum tabun anggi-da gal-nu'üd tülejü

命を持つ人ごと、 五か所に火を焚いて、

hodun-nača olon galtan büi.

星よりも多い火を持っている。

(主語に相当するのは Monggol モンゴル族「複数」であるが、一文上にないので索引では主語の欄には「非明示」と記している)

eme'eltü šigqula [morin] 人以外・単数 ögčü
鞍の付いた 黄白の馬を与えて、

Monggol-un <čeri'ūd> 人・複数 (中略) hodun-nača olon caltan büi.
モンゴル族の兵士たちは、 (中略) 星よりも多い火を持っている。

7 - 194

hodun-nača olon caltan büi.
星よりも多い火を持っている。

(主語に相当するのは agtas 去勢馬「複数」であるが、一文上にないので索引では主語の欄には「非明示」と記している)

küčütü omocü [Küčülüg] 人・男
力のある、傲りのあるクチュルグよ、

7 - 195

dörben <noqais> 人以外・複数 širemün manglaitan, ši'üči qoši'ütan, šibüge keneten,
四匹の犬どもは、 生鉄の額を持ち、鑿の口先を持ち、錐の舌を持ち、
temür örten, üldü mina'ātan ši'üder-i idejü kei unuju yabud
鉄の心を持ち、剣の鞭を持ち、露を食らい風に乗って行くのだ。

tede jidatu [ere] 人・男 -yi ji'ūju čisutu [tonog] 人以外・単数 tonogčin,
彼らは、槍を持った男を追いかけ、 血の付いた頭皮を剥ぎとり、
üldütü [ere] 人・男 -yi hüldejü,
剣を持った男を 追いやり、

gurban alda beyetü, cunajin bodo idešitü
三尋の体を持ち、三歳の牛・馬・らくだの食物を持ち、

(主語に相当するのは eke 母「女」であるが、一文上にないので索引では主語の欄には「非明示」と記している)

qortu 〔kü'ün〕 人・男 -i qotola-yi jalgi'asu qo'olai-dur-iyān ülü tordayu.
矢筒を付けた人を、全身を飲み干しても、喉につかえないのです。

〈tere〉 人・男 Hö'elün eke-yin hilqa kö'ün Odčigin heligetü ke'egdeyü.
彼は、ホエルン母の末っ子オドチギンで、情を持っていると言われている。

7 – 197

ünen ügetü aju'ü.

真実の言葉を持っていた。

(主語に相当するのは Naya'a 「男」であるが、一文上にないので索引では主語の欄には「非明示」と記している)

巻 8

8 – 198

Merkid-ün Tocto'a-yin kō'ūd Qudu Gal Čila'ün teri'üten 〔Merkid〕 人・複数
メルキド族のトクトアの子たちクドゥ、ガル、チラウンを頭に持つメルキド族は、
Qanglin-i Kimča'ūd-i da'arin yorčiju'üi.
カンリン族、キムチャウド族の所を通って行った。

8 – 199

Sübe'etei-yi temür telegetü 〔 〕 人・男 -yi

スベエテイの、鉄の車に乗ったのを、

(被限定詞に相当するのは、Sübe'etei 「男」である)

Tocto'a-yin kō'ūd Qudu Gal Čila'ün teri'üten 〔kö'ūd〕 人・複数 -i inu neke'ülü
トクトアの子たちクドゥ、ガル、チラウンを頭に持つ子供たちを追撃させ遣わすとき、

Tocto'a-yin Qudu Gal Čila'ün teri'üten 〔kö'ūd〕 人・複数 inu odun ocjadču
トクトアのクドゥ、ガル、チラウンを頭に持つ子供たちは、逃げ去って、

ugürgatu 〔qulan〕 人以外・単数 sumutu 〔bugu〕 人以外・単数 bolju odba.
馬捕竿にかかった野馬、 矢に射られた鹿になって行った。

〈teden〉 人・複数 -i ji'ürtü bolju nisčü tenggeri-dür garu'asu
 彼らが 翼を持つようになって、 飛んで天に上がれば、
 kemten [aba] 人以外・複数 -dača angida čerig-ün kü'ün-ü eme'el-ün qudurca bū qudurcala'ül
 限りのある巻狩のほかに、兵士の鞍に鞆を付けさせるな。

teyimü ösiten [irgen] 人以外・単数 -i edö'e basa aman kelen aldaju odču'üi.
 そのような仇のある人衆を、 今また放言して去って行った。

8 – 200

mun tabun nöködtü [o'örčag] 人・男 bolju
 彼は、五人の僚友たちを持つ残賊になって、

öljeitü qutuqtu [anda] 人・男 minu büle'e.
 吉祥のある、至福のある盟友であった。

8 – 201

qadacatu [üges] 人以外・単数 ügüledüle'e.
 切実さのある言葉を 語り合った。
 (語り合っているのは、Jamuqa と anda という「複数」である)

urtu sedkiltü [anda] 人・男 -iyän ünen čirai üjen yadaju yabuba-je bi.
 寛容な心を持つ 盟友の 真実の顔を嫌って、行ったのだ、私は。

arbin emegetü büle'e 〈bi〉 人・男
 多くの老婆を持っていたのだ、私は。
 (bi は、Jamuqa 「男」のことを指している)

〈anda〉 人・男 seçen eketü törülki külüg törejü erdemüten [de'üner] 人・複数 tü
 盟友は、聡明な母を持ち、生まれながらにして優れていて、才能のある弟たちを持ち、
 (erdemüten の被限定詞が de'üner であり、de'ünertü の主語が anda である)

〈eme〉 人・女 minu domogči itegel ügei'ü nöködtü
 妻は、長舌で 信頼のない僚友を持ち、

teü'ũ-bēr tenggeri-eče jaya'ātū anda-da hūlegdebe-je.

それゆえ、天からの宿命を持つ盟友に敗れたのだ。

huja'ūr ö'ere törülkitü büle'ē 〈bi〉 人・男

出自が異なる生まれを持っていたのだ、私は。

(bi は、Jamuqa 「男」のことを指している)

hüle'ũ törülkitü 〔anda〕 人・男 -yin sülder-e darugdaba-je bi.

勝った生まれを持つ盟友の 威力に圧せられたのだ、私は。

kündü mörtü 〔kü'ün〕 人・男 búi.

重い道を持つ人である。

(kü'ün は、Jamuqa 「男」のことを指している)

8 – 202

tedüi sisgei to'ürgatu 〔ulus〕 人・複数 -i šidurgudqaju

こうしてフェルトの帳幕を持つ民人を 征服して、

yesün költü čaca'an 〔tug〕 人以外・単数 baiyi'ūlu'ād Činggis qahān-na qan nere tende ögbe.

九つの脚のある白い旗を立てて、 チンギス・ハーンに汗の名をそこに与えた。

(旗に関与しているのは、Činggis qahān 「男」である)

8 – 203

tusatān 〔 〕 人・複数 -a soyurqai ögsü.

功勞のある者たちに恩賞を与えよう。

(被限定詞に相当するのは、haran 人々「複数」のような語である)

Bo'örču Muqali teri'üten 〔noyad〕 人・複数 -i iretügei ke'ėküi-dür

ボオルチュ、ムカリを頭に持つ長官たちを、来るようにと言うとき、

ölegeitei бүкүй-еңе (中略) ö'ere ese sedkibe-je 〈bi〉 人・男

揺りかごの中にいたときから (中略) 二心はなかったのだ、私は

(bi は、Šigi-qutuqu 「男」のことを指している)

isgei tu'ūrcatan 〔 〕 人・複数 -i iriče'ūljū

フェルトの帳幕を持つ者たちを別れさせ、

qabtasun e'ūdeten 〔 〕 人・複数 -i qagača'ūljū qubilaju ög.

木板の門を持つ者たちを離れさせ、 分け与えよ。

（被限定詞に相当するのは、haran 人々「複数」のような語である）

ükü'üldekün yosutan 〔 〕 人・複数 -i ükü'ül.

死なす道理のある者たちは 死なせよ、

alda'ūldaun yosutan 〔 〕 人・複数 -i alda'ül.

罰せられる道理のある者たちは 罰せよ。

（被限定詞に相当するのは、haran 人々「複数」のような語である）

ye'ūdkekün 〈haran〉 人・複数 aldaltan boltugai.

改めさせる人々は 罪のある者たちとなるよう。

širo'ai yo'ūrgatu 〔balacasun〕 人以外・単数 -ača ögküi-yi

土の壁のある城街から 与えることを、

8 – 204

öljeitü qutuqtu 〔či〕 人・男 tusa iheyēl činu kedün ber aju'ū-je.

吉祥を持ち、至福を持つあなたは、その功労、庇護がいかに多いであろう。

（či は、Münglig 「男」 のことを指している）

8 – 207

〈nama〉 人・男 gučin emestü bolga.

私をして三十人の女たちを持たしめよ。

（厳密に言うと文の主語ではないが、nama は、Qorči 「男」 のことを指している）

8 – 208

ö'er-ün qariyatan 〔ulus〕 人・複数 -iyār-ān tumtag-a agsan aju'ū-je.

自分の所属のある人々とともに、 完全に過ごしたのだった。

卷 9

9 – 209

küčütü 人・男 -yi küjü'ün bökö-yin bögse daruju ögbe-je či.

力のある者の首を、 力士の尻を抑えつけたのだ、お前は。

(被限定詞に相当するのは、bökö「男」である)

9 – 210

Bo'örču Muqali teri'üten [noyad] 人・複数 -ta.

ボオルチュ、ムカリを頭に持つ長官たちよ

ösitü [kü'ün] 人・男 -lū'ē ö'ere ni'ür ese jübčigsen

仇のある人と 他の顔をかぶらなかった、

9 – 211

huja'ürtü öljeitü qutuqtu [Jelme] 人・男

根源を持ち、吉祥を持ち、至福を持つヂェルメよ。

9 – 214

ebüges ečige-yi baracsad ösiten kišiten Tatar [irgen] 人・複数 -i doraida'ūju

祖父たち、父を殺した仇のある、恨みのあるタタール族の人衆を屈服させて、

Tolui tabun nasutu 人・男 gadan-ača oroju irejü

トルイの五歳であるのが、外から入って来て、

(被限定詞に相当するのは、Tolui「男」である)

9 – 224

urida nayan kebte'ülsütü

以前、八十の宿直兵を持ち、

(主語に相当するのは Činggis qahān「男」であるが、一文上にないので索引では主語の欄には「非明示」

と記している)

dalan turgag kešigten 〔 〕 人・複数 -tū büle'ē

七十の日直の宿直を持つ者を持っていた。

(kešigtentū は、一文上にない主語 Činggis qahān 「男」を受ける述語である)

nadur kešigten 〔 〕 人・複数 turgag mingad-ača ilgaju oro'üludqun.

私に宿直を持つ者を、 日直の千戸、千戸から選んで当てよ。

Činggis qahān kešigten 〔 〕 人・複数 ilgaju

チンギス・ハーンは、宿直を持つ者を選び、

bidan-dur kešigten 〔 〕 人・複数 oro'ülurun

我々の所に宿直を持つ者を当てるとき、

düri-yin kü'ün-ü kö'üd ororun erdemüten šil 〔sayid〕 人・複数-i

普通の人の子供たちが当直に当たるときには、才能のある容貌のよい者たちを、

mingad-un noyad-un kö'üd-i oro'ülurun harban nöködtū niken de'ū inu daga'ülju iretügei.

千戸の長官たちの子供たちを当てるときには、十人の僚友たちを持ち、一人の弟を連れて来るよう。

ja'üd-un noyad-un kö'üd-i oro'ülurun tabun nöködtū niken de'ū inu daga'ülju iretügei.

百戸の長官たちの子供たちを当てるときには、五人の僚友たちを持ち、一人の弟を連れて来るよう。

düri-yin kü'ün-ü kö'üd-i oro'ülurun gurban nökörtū niken de'ū inu daga'ülju

普通の子供たちを当てるときには、三人の僚友を持ち、一人の弟を連れて、

(主語に相当するのは個々の兵であるが、文には明示されていないので、索引では主語の欄に「非明示」と記している)

bidan-u ene jarlic kürge'ülü'ēd sonosu'ād бүрүн dabaqun 〈haran〉 人・複数 aldaltan boltugaia.

我々のこの勅を到らしめて聞いていながら 破る人々は、 罪のある者となるよう

9 - 226

tümen kešigten 〔 〕 人・複数 bolba.

一万人の宿直を持つ者となった。

bidan-u ča'ada tümen kešigten 〔 〕 人・複数 -i bökelejü

我々の傍らに一万人の宿直を持つ者を増強して、

9 – 227

Buqa niken kešig kešigten 〔 〕 人・複数 -i medeju kešigten 〔 〕 人・複数 jasaju orotugai.

ブカは、一当番班の宿直を持つ者を統べて、宿直を持つ者を治めて入るよう。

Alčidai niken kešig kešigten 〔 〕 人・複数 -i medeju kešigten 〔 〕 人・複数 jasaju orotugai.

アルチダイは、一当番班の宿直を持つ者を統べて、宿直を持つ者を治めて入るよ。

Dodai-čerbi niken kešig kešigten 〔 〕 人・複数 -i medeju kešigten 〔 〕 人・複数 jasaju orotugai.

ドダイ侍従は、一当番班の宿直を持つ者を統べて、宿直を持つ者を治めて入るよう。

Dogolqu-čerbi niken kešig kešigten 〔 〕 人・複数 -i medeju kešigten 〔 〕 人・複数 jasaju orotugai.

ドゴルク侍従は、一当番班の宿直を持つ者を統べて、宿直を持つ者を治めて入るよう。

kešig-ün noyan ö'er-tür-iyën kešiglegsed kešigten 〔 〕 人・複数 -i бүгүдкөжү

当番の長官は、自分の当直することになった宿直を持つ者を総点検して、

kešigtü 〔kü'ün〕 人・男 kešig ho'ara'asu

宿直を持つ者が宿直を怠れば、

tere kešig o'aragsan kešigtü 〔 〕 人・男 -yi gurban beri'es süyitügei.

その当番を怠った宿直を持つ者を三叩きで懲らしめるよう。

mun kešigtü 〔 〕 人・男 basa nökö'ete kešig ho'ara'asu dolo'an beri'es süyitügei.

その宿直を持つ者が、また次の宿直を怠れば、七叩きで懲らしめるよう。

mun kešigtü 〔 〕 人・男 gurban-ta kešig ho'ara'asu gučün dolo'an beri'es süyitügei.

その宿直を持つ者が、三回宿直を怠れば、三十七叩きで懲らしめるよう。

ene jarlig kešigten 〔 〕 人・複数 -e sonosqadqun.

この勅を、宿直を持つ者に聞かせよ。

ese sonosqa'asu keši'üd-ün 〈ötögüs〉 人・複数 aldaltan boltugai.

聞かせなかったら、当番班の長老たちが罪を持つ者となるよう。

〈kešigten 〔 〕 人・複数〉 人・複数 aldaltan boltugai.

宿直を持つ者が、罪を持つ者となるよう。

(aldaltan の主語が、kešigten である)

minu kešigten 〔 人・複数 〕 -i nadača eye ügei bū hončidudqun.
私の宿直を持つ者を、 私から相談なく叱責するな。

mököri'ülkün yosutan 〔 人・複数 〕 bö'ēsü bida mököri'ülüd-je.
斬らせるべき道理のある者たちがいれば、斬らせるぞ。

nišigdaqun yosutan 〔 人・複数 〕 bö'ēsü kebte'üljü nišid-je.
打たれるべき道理のある者たちがいれば、臥させて打つぞ。

(被限定詞に相当するのは、haran 人々「複数」のような語である)

kešigten 〔 人・複数 〕 -i minu ö'er-ün gar köl kürgejü beri'ēsü
宿直を持つ者を、 自分の手足を伸ばして鞭打てば、

9 – 228

gadanadus mingad-un noyad-ača minu kešigtü 〔 人・男 〕 de'ēre büi-je.
外にいる千戸の長官たちよりも、 私の宿直を持つ者のほうが上だ。

gadanadus ja'üd-un harbad-un noyad-ača minu kešigtü 〔 人・男 〕 -yin kötöčin de'ēre büi-je.
外にいる百戸、十戸の長官たちよりも、 私の宿直を持つ者の従卒のほうが上だ。

minu kešigten 〔 人・複数 〕 -dür gadanadus mingali'üd sača'ün bolju
私の宿直を持つ者に対して、外にいる千戸の者たちが同等になり、

denggečen minu kešigtü 〔 人・男 〕 -dür kereldü'ēsü mingali'üdai kü'ün-i ere'üleye.
対等となって、私の宿直を持つ者と争えば、千戸の者たちの人を罪としよう。

9 – 229

naran galtai 〔 人以外・単数 〕 -a
太陽の日のあるうちに、

ya'āral keleten 〔 haran 〕 人・複数 söni ire'ēsü
急ぎの話のある人々が、夜来れば、

acta eme'ältü 〔 人以外・単数 〕 qadārtu 〔 人以外・単数 〕 -yi
去勢馬の鞍を付け、 馬勒を付けたのを、
(被限定詞に相当するのは、acta である)

〈Eljigedei〉人・男 itegeltü bö'etele

エルヂゲデイは、信頼がおけるが、

卷 10

10－230

e'ületei〔söni〕人以外・単数 örüge*tei*〔ger〕人以外・単数 minu e'eren kebtejü

雲のある夜、 天窓のある家を 囲み臥して

hodutai〔söni〕人以外・単数 ordo ger minu horčin kebtejü

星のある夜、 宮殿を 囲み臥して、

öljeiten〔kebte'ül〕人・複数 minu ündür oron-dur kürgebe.

吉祥のある我が宿直兵は、高い位に到らせた。

šiltesü*tei*〔ger〕人以外・単数 minu horčin

細条で編んだ家を囲み、

(Činggis qahān「男」の家である)

čing sedkilten〔kebte'ül〕人・複数 minu jiragalang oron-dur kürgebe.

誠の心を持つ我が宿直兵は、喜悦の位に到らせた。

irgetei〔ger〕人以外・単数 minu horčin

イルゲのある家を囲み、

(Činggis qahān「男」の家である)

hirmes ülü kin idqaju baiyigsad itegelt*en*〔kebte'ül〕人・複数 minu

瞬きもせず守って立っていた 信頼のおける我が宿直兵よ。

üyilsün qor ubis kiküi-dür udal ügei baiyidaltan〔kebte'ül〕人・複数 minu.

白樺の矢筒が揺れても、遅れることなく陣営を構える活発な我が宿直兵よ。

hutan qor hubis kiküi-dür qojid ese baiyigsad qurda*n* yabudaltan〔kebte'ül〕人・複数 minu.

柳の矢筒が揺れるとき、遅れて陣営を構えなかった速い行動を持つ我が宿直兵よ。

öljeiten〔kebte'ül〕人・複数 minu.

吉祥のある我が宿直兵よ。

10－231

tümen emčü kišigten 〔 〕 人・複数 -i

万の私有の宿直を持つ者を、

ede kišigten 〔 〕 人・複数 -i

これらの宿直を持つ者を、

ede tümen kišigten 〔 〕 人・複数 -i

これらの万の宿直を持つ者を、

10－233

čerig medekü 〈čerbin〉 人・複数 aldaltan boltucaı.

軍を統べる侍従たちは、罪を持つ者となるよう

teyin dabqur qagas qagas yabudaltan.

そのように二重のそれぞれの行動がある。

（主語に相当するのは kebte'ül（複数）であるが、一文上にないので索引では主語の欄には「非明示」と記している）

10－234

bürin kešigten 〔 〕 人・複数 turg'ūd-i

すべての、宿直を持つ当番兵たちを、

10－236

〈Sübe'ētej-ba'atur〉 人・男 temür telegetü

スベエテイ・バートルは鉄の車に乗って、

Merkid-ün Togto'a-yin Qutu, Čila'ün teri'üten 〔kö'ūd〕 人・複数 -i inu neken ča'ūraju

メルキド族のトクトアの クトゥ、チラウンを 頭に持つ 子供たちを 追討して、

10-239

mör sayitu (中略) 〈či〉 人・男、
道中（良いことを持ち）無事で、（中略）お前は。
（či は、Joči「男」のことを指している）

öljeitü hoi-yin [irgen] 人・複数 -i oro'ülju irebe.
吉祥のある森の人衆を投稿させて来た。

10-240

čerig-ün to'ötu [kü'ün] 人・男 jirüge yada'āsu
軍兵の数を持つ人が 臆せば、

10-243

〈Ča'adai〉 人・男 keče'ü büyü, narin aburitu büyü.
チャアダイは頑なで、狭い性格を持っている。

10-244

eke (中略) qaraūtai [terge] 人以外・単数 tei söni-de dūlin yorčiju
母は、（中略） 黒い木枠の付いた車に乗って、夜を徹して行って、
（乗っているのは、eke「女」である）

erdemtü 〈〔Temüjin〕〉 人・男 minu če'ēji erdemtü
才能のあるテムヂンは、胸の才能を持っている、
（ここでの Temüjin は、前の erdemtü の被限定詞であると同時に、後の erdemtü の主語でもある）
〈Qasar〉 人・男 minu qabu küčü erdemtü tula
カサルは、射る力の才能を持っているので、

10-245

yesün keleten [irgen] 人・複数 Teb-tenggeri-dür quriju
九つの言葉を持つ人衆が、テブ・テンゲリのもとに集まって、

Temüge-odčigin-na qariyatan〔irgen〕人・複数 Teb-tenggeri-dür odču'üi.

テムゲ・オドチギンに所属する人衆は、テブ・テンゲリのもとに行ってしまった。

Soqor neretü〔elči〕人・男 -yēn ilejü'üi.

ソコルという名を持つ使者を遣わした。

〈ta〉人・複数 jirin elčiten bolju'üi.

お前たちは使者を持つことになった。

yesün keleten〔irgen〕人・複数 Teb-tenggeri-dür či'öldaju

九つの言葉を持つ人衆が、テブ・テンゲリのもとに集められて、

nada qariyatan〔irge〕ひと・複数 -ben Teb-tenggeri-deče guyura

私に所属する人衆をテブ・テンゲリに求めに、

Soqor neretü〔elči〕人・男 -yēn ilejü'üi

ソコルという名を持つ使者を遣わした。

čactu〔nökör〕人・男 aju'ü.

限りのある僚友です。

10－246

Jamuqa, Altan, Qučar tan-u yosutan boica gdaqun büle'ei 〈ta〉人・複数

ジャムカ、アルタン、クチャルらの道理を持つ者になられるべきだったろう、お前たちは。

（被限定詞に相当するのは、haran 人々「複数」のような語である）

卷 11

11－247

gar kötölten〔〕人・複数 söni düliligejü

手に従馬を持つ者を、夜を徹して、

（被限定詞に相当するのは、haran 人々「複数」のような語である）

11-248

itegeltü [Čabčiyai] 人以外・単数 -i ber bulju abču'ui.

信頼のおける居庸関をも 奪い取った。

Činggis qa'an-a Güngjü neretü [oki] 人・女 gargaaju

チンギス・ハーンに、公主という名を持つ娘を差し出して、

Ongging-čingseng Muju, Fujü neretü [qoši'un] 人以外・単数 -a kürtele

王京丞相は、 莫州、撫州という名を持つ山嘴まで、

Činggis qa'an-i hüdejü qariba.

チンギス・ハーンを見送って帰った。

11-249

Čaga neretü [öki] 人・女 Činggis qa'an-a gargaaju ögbe.

チャガという名を持つ娘を、チンギス・ハーンに差し出した。

süldertü [beye] 人・男 činu kürčü iregedejü sülder-eče ayuba.

御稜威のある御身に到り来られて、 御稜威を畏れた。

küčü ögürün nunji nuntactan [] 人・複数 nüdügen balacastan [] 人・複数 büi-je.

力を与えるとき、 不動の居营地を持つ者、 固めた城を持つ者であるぞ。

(被限定詞に相当するのは、haran 人々「複数」のような語である)

11-250

Qitad irgen-ü Aqutai neretü Altan [qan] 人・男 -i else'üljü

キタドのアクタイという名を持つ金帝を 帰順させ、

11-251

Jubqan teri'üten olon [elčin] 人・複数 -iyen

ジェブンを頭に持つ多くの使者たちを、

11-252

altatai [har] 人以外・単数 tai [a'urasu] 人以外・単数 bari'ād

金糸のある 文様のある反物を持って、

(持っているのは、Qada(男)である。また、altatai の被限定詞が har であり、hartai の被限定詞が a'urasu である)

altatai [har] 人以外・単数 tai [a'urasu] 人以外・単数 bari'ād ögüü'ē.

金糸のある 模様のある反物を持って、 与えた。

(altatai の被限定詞が har であり、hartai の被限定詞が a'urasu である)

11-253

Tenggeri neretü [kö'ü] 人・男 -ben ja'un nöködtü [] 人・男 -yi

テンゲリという名を持つ子の、 百人の僚友を連れたのを、

(被限定詞に相当するのは、kö'ü「男」である)

11-254

Uquna teri'üten ja'un [elčin] 人・複数 -iyēn jedgüjü alagdaju

ウクナを頭に持つ百人の使者たちを 阻み殺されて、

Uquna teri'üten ja'un [elčin] 人・複数 -ü-yēn ösöl ösen

ウクナを頭に持つ百人の使者たちの恨みを 晴らし、

töregsen ele amitan [] 人・複数 -dur müngke ügei aju'ü.

生まれて生を持つ者には、 永遠はないのだ。

(被限定詞に相当するのは、haran 人々「複数」のような語である)

hodtai [tenggeri] 人以外・単数 horčiju büle'ē.

星のある天は 回っていた。

körisütei [etügen] 人以外・単数 körbejü büle'ē.

土壌のある大地は 転がっていた。

bogta 〈qadun〉^{人・女} bidan-u naran metü gegeyēn na'ūr metü delger sedkiltü büle'ē.
賢い妃は、太陽のように明るく、湖のように広大な心を持っています。

11-255

Joči-yin küčütü ^{〔 〕} ^{人・男} -yi erdem-ün qari'ū ülü ügülen.
ヂョチの力のあることを、技能の返事を言わない。
(被限定詞に相当するのは、Joči「男」である)

11-257

Jebe 〈či〉^{人・男} Jirgo'ādai neretü büle'ē.
ジェベ、お前はヂルゴアダイという名前を持っていた。

11-258

Iru Isebür teri'üten olan ^{〔balacad〕} ^{人以外・複数} bau'üdqun.
イル、イセブルをはじめとする多くの城に下営せよ。

11-262

usutan ^{〔müred〕} ^{人以外・複数} ketülün
水のある河を渡り、

11-263

Yalawači Masqud nereten ečiǵe kö'üd ^{〔qoyar〕} ^{人・複数}
ヤラワチ、マスクドという名を持つ父子二人の
Qurumši obocan ^{〔Sarta'ül〕} ^{人・複数} irejü
クルムシ姓を持つサルタウル族が来て、
Buqar, Semisgen, Ürünggeči, Udan, Qisqar, Uriyang, Güsen-daril teri'üten
ブカル、セミスゲン、ウルングチ、ウダン、キスカル、ウリヤン、グセン・ダリルをはじめとする
^{〔balacad〕} ^{人以外・複数} -i mede'ülün
城を統べさせるべく、

卷 12

12-265

Tangüd 〈irgen〉 人・複数 nödügsen balacsutan, nunji nuntuctan büi.

タングードの人衆は、築いた城塞を持ち、固定した居営地を持っている。

〈bi〉 人・男 бүрүн Alašai nuntuctu terme gertü temeyēn ači'ātu büyü.

私は、アラシャイ居営地を持ち、帳幕の家を持ち、らくだの荷を持っている。

(bi は、この引用箇所の前に現れる Ašagambu 「男」のことを指している)

altan münggün a'ūrasun tabar keregtü bö'ēsü

金、銀、絹布、財物を 必要とするならば、

(主語に相当するのは Burqan 「男」であるが、一文上にはないので索引では主語の欄に「非明示」としている)

terme gertü temeyēn ači'ātu 〈irgen〉 人・複数 -i inu hūnesü'er keyistele tala'ülba.

帳幕の家を持ち、らくだの荷を持つ人衆を、灰のように吹き飛ばすまで掠め取った。

12-266

terme gerten temeyēn ači'ātan 〔Tangūdūd〕 人・複数 -i čeri'üd ilejü onogsa'ār ülidtele tala'ülba.

帳幕の家を持ち、らくだの荷を持つタングードを、軍を遣わして予定通り完膚なきまで掠め取った。

itegelten 〔ina'ūd〕 人・複数 Mongcol-un ebüges ečiges-i baragsan

信頼のおける寵臣たちは、 モンゴル族の祖先たちを殺した

Qara-qitad jüyin irgen aju'üi-je.

カラ・キタドの虜人の人衆だったのだ。

edö'ē minu itegelten 〔ina'ūd〕 人・複数 Bo'örču Muqali ta qoyar büyü-je.

今我が信頼のおける寵臣たちは、 ボオルチュ、ムカリ、お前たち二人だ。

12-269

Ča'ādai Batu teri'üten bara'un gar-un 〔kö'ūd〕 人・複数

チャアダイ、バトゥを頭を持つ

右翼の諸王子、

Odčigin noyan Yegü Yesünge teri'üten jeü'ün gar-un [kö'üd] 人・複数

オドチギン長官、イエグ、イエスングを頭に持つ 左翼の諸王子、

Tolui teri'üten gol [kö'üd] 人・複数

トルイを頭に持つ本営の諸王子、

(中略) Ögödei qahān-ni qan ergübe.

(中略) オゴデイ・ハーンを汗に推戴した。

emčü tümen kešigten [] 人・複数 -i inu Ča'adai aqa Tolui qoyar Ögödei qahān-na tau'ulba.

私有の万の、宿直を持つ者を、チャアダイ兄とトルイは、オゴデイ・ハーンに分け与えた。

12—270

tümen kešigten [] 人・複数 -i, gol-un ulus-i, ö'er-tür-iyēn bolg'ulun baraju

万の、宿直を持つ者を、そして本営の人々を、自分ものとなし終えて、

Adil, Jayac usutan [müred] 人以外・複数 ketülün

アディル、ジャヤグといった水量のある河川を 渡り、

Meked Men-kermen Keyibe teri'üten [balacad] 人以外・複数 -tur ayalagsan.

メケド、メン・ケルメン、ケイベをはじめとする城に 遠征した。

Batu Büri Güyüg Müngge teri'üten olon [kö'üd] 人・複数 -i morila'ulba.

バトゥ、ブリ、グユク、ムンゲを頭に持つ多くの王子たちを 出陣させた。

tede 〈meses〉 人以外・複数 qurčatan.

それらの刀は、 鋭さを持っている。

Batu Büri Güyüg Müngge teri'üten [kö'üd] 人・複数 -i ayala'ulqui yosu eyimü büi-je.

バトゥ、ブリ、グユク、ムンゲを頭に持つ王子たちを遠征させる道理は、このようである。

12—272

sutu [Činggis qahān] 人・男 ečiǵe bidan-u

至福を持つチンギス・ハーンである父は、

12-273

altatai [har] 人以外・単数 tu [a'ūrasu] 人以外・単数 tabar alašas se'üses-ianu qau'ūliju
 金糸のある 模様のある反物 財物、馬匹、召使いたちを奪って、
 (altatai の被限定詞が har であり、hartai の被限定詞が a'ūrasu である)

12-274

Batu, Büri, Güyüg, Müngge teri'ūten olon [kö'ūd] 人・複数 (中略) Orusüd-i qiduju ülüdtele talaba.
 バト、ブリ、グユグ、ムンゲを頭を持つ多くの王子たちは、(中略) オルス人たちを殺し徹底的に奪った。

Asud, Sesüd, Bolar, Man-kerman, Qiwa, teri'ūten [balgad] 人以外・単数 -un irgen-i
 アスド、セセド、ボラル、マン・ケルマン、キワ をはじめとする城塞の 人衆を、
 dau'ūliju else'ūljü
 掠取して帰属させて、

12-275

saqaltan [emege] 人・複数 sača'ün bolju
 髭のある老婆たちは 同等であって、

qortan [emege] 人・複数 -i ebče'ūd anu jorgaldqya.
 矢筒を持った老婆たちを、その胸を殴りつけよう。

ba бүрүн busu heligetü bulga [irgen] 人・複数 -dür morila'ūldaju
 我々は、他の肝臓を持つ敵対する人衆に 出馬させられて、

12-277

Alčidai, Qongqortai, Janggi teri'ūten [noyad] 人・複数 duradqan öčirün
 アルチダイ、コンコルタイ、ジャンギ頭に持つ長官たちが、提言して奏上するには、
 bögsētü [kü'ün] 人・男 -ü bögsē inu ese hūledēbe.
 尻を持つ人の 尻を残さなかった。

bürin kešigten 〔 〕 人・複数 -ü yabudal tungqun du'ülgaqui jarlic tungqa'ārun

すべての、宿直を持つ者の行動を新たに宣べ論す 勅を公布したとき、

naratai 〔 〕 人以外・単数 -a kebte'ül-e jayilaju

日のあるうちに 宿直兵に譲って、

söni ya'āral keletü 〔kü'ün〕 人・男 ire'esü

夜、急ぎの話を持つ人が 来れば、

〈Eljigidei〉 人・男 itegeltü bö'ētele

エルヂグデイは信頼のおける人でありながら、

〈kebte'ül〉 人・男 itegeltü bü-je.

宿直兵は、信頼のおける人である。

acta eme'eltü 〔 〕 人以外・単数 qada'ärtu 〔 〕 人以外・単数 -yi

去勢馬の鞍の付いたのを、 轡の付いたのを、

(被限定詞に相当するのは、acta である)

kešigtü 〔kü'ün〕 人・男 kešig oroqui-dur ho'āra'āsu

宿直を持つ者が、 当直に当たるとき、怠れば、

mun kešigtü 〔kü'ün〕 人・男 basa nökö'ēte kešig ho'āra'āsu

同じ宿直を持つ者が、 また二度当直を怠れば、

basa keši'ūd-ün ötögüs kešiglegsən kešigten 〔 〕 人・複数 -i ülü bügüdken kešig ho'āra'āsu

また、当直の長老たちが当直した宿直を持つ者を点検せず、当直を怠れば、

ene jarlic kešigten 〔 〕 人・複数 -e sonsqatugai.

この勅を、宿直を持つ者に聞かせるよう。

jarlic sonosu'ād bürin kešigten 〔 〕 人・複数 kešig ho'āra'āsu jarlic-un yosu'ār ere'üleye.

勅を聞いていながら、宿直を持つ者が当直を怠れば、勅の通り罰しよう。

ene jarlic kešigten 〔 〕 人・複数 -e sonosqa'āsu

この勅を、宿直を持つ者に聞かせなかったならば、

keši'ūd-ün 〈ötögüs〉 人・複数 aldaltan boltucaı.

当直の長老たちが、罪を持つ者となるよう。

basa keši'ūd-ün ötögüs sača'un orogsad minu keşıgtü 人・男 -yi

また、当直の長老たちは同時に当直に当たった我が宿直を持つ者を、

bidan-ača eye ügei aqalagdaba ele keyēn bū onjiyucı.

我々に相談なく長にさせられたのだ。と言って、叱責しないよう。

ükü'üldekü yosutu 人・男 bö'esü bida mökörü'ülüd-je.

死なせる道理を持つ者がいれば、我々が斬らせるぞ。

kese'ēgdekü yosutu 人・男 bö'esü bida söyüd-je.

懲戒されるべき道理を持つ者がいれば、我々が教え諭すぞ。

(被限定詞に相当するのは、kü'ün のような語である)

gadanadus mingad-un noyad-ača minu keşıgten 人・複数 de'ere būi-je.

外にいる千戸の長官たちよりも、私の宿直を持つ者のほうが上だ。

gadanadus ja'ūd-un harbad-un noyad-ača minu keşıgten 人・複数 -yin kötöčin de'ere būi-je.

外にいる百戸、十戸の長官たちよりも、私の宿直を持つ者の従卒のほうが上だ。

gadanadus mingali'ūd minu keşıgten 人・複数 -dür kereldü'esü

外にいる千戸の長の者たちが、私の宿直を持つ者と 争えば、

12-279

basa aqa de'ū olon ere agta keşıgten 人・複数 či'ūlu'asu

また、兄弟、多くの軍馬、宿直を持つ者が 集まれば、

12-280

Čadai aqa Batu teri'üten bara'un gar-un 〔kö'ūd〕 人・複数 aqa-nar de'ū-ner būrin

チャアダイ兄、バトゥを頭に持つ右翼の王子たち、 兄たち、弟たちすべて、

Odčibin noyān Yegū teri'üten jeü'ün gar-un aqa-nar de'ū-ner būrin 〔kö'ūd〕 人・複数

オドチギン長官、イエグを頭に持つ左翼の 兄たち、弟たち、すべての王子たち、

oqor buci duta'ūlu'asu ör gol-iyār qagas aldaltan boltucaı.

短い首木ほどでも欠いたら、真ん中から裂いて、罪のある者になるよう。

（主語に相当するのは、「短い首木ほどでも欠いた者」ということになるが、文の主語として明示されているわけではないので、索引では主語の欄に「非明示」と記している）

qalbuğa kekesün duta'ulu qabar qacas aldaltan boltucai.

匙、車幅の一つでも欠いたら、鼻を裂いて、罪のある者になるよう。

（主語に相当するのは、「匙、車幅の一つでもでも欠いた者」ということになるが、文の主語として明示されているわけではないので、索引では主語の欄に「非明示」と記している）

12-281

tenngeri cajar-aça jaya'ātu töregsen [görö'ēsün] 人以外・単数 -i

天地からの宿命を持って 生まれた 獣を、